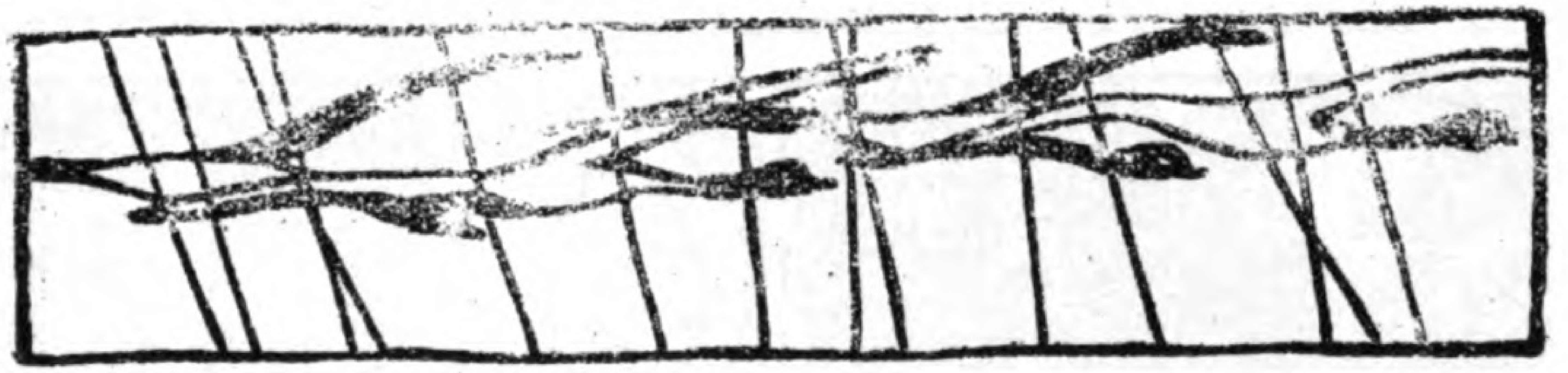


女學世界
増刊
第九巻第七号
博文館發行

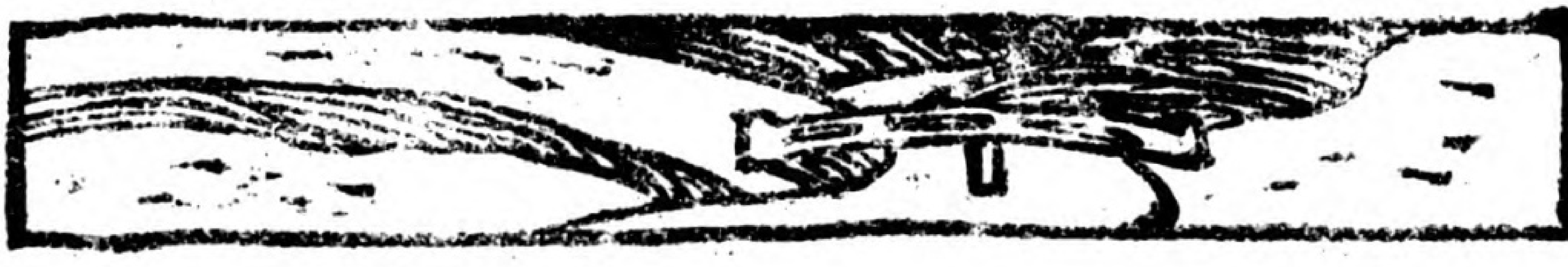


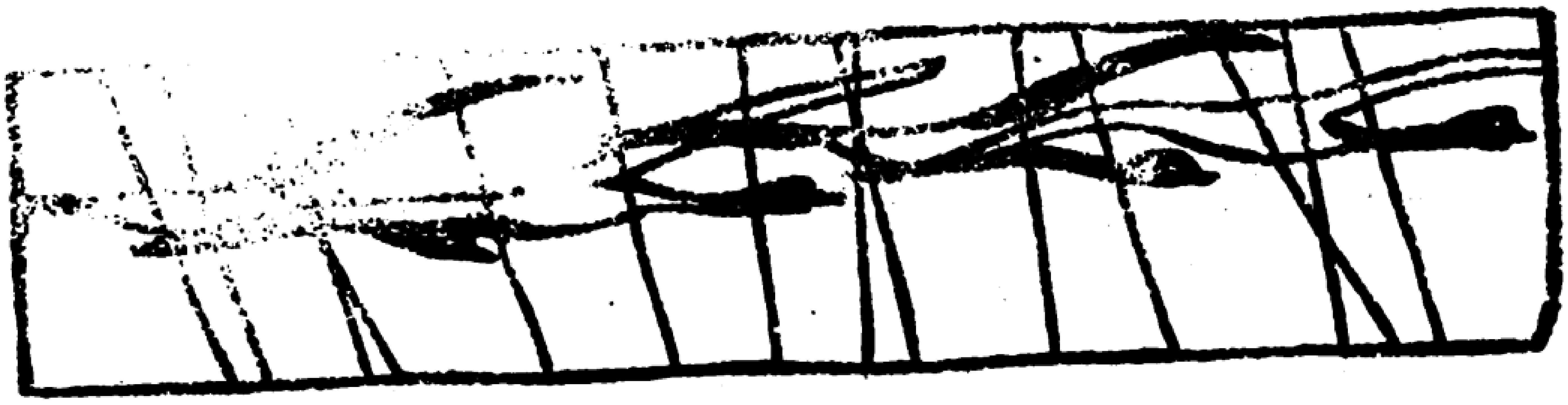
大學目藥
『小兒の眼病には小兒用大學目藥を用ひられよ
大學目藥は帝國醫科大學病院の處方に基きし貴重の製劑也世に有觸し賣藥の類に非ず
●定價金十錢（郵税二錢）
中瓶三十錢（郵税四錢）
大瓶五十錢（郵税八錢）
▲各地藥店に在
商標
登録
日本大阪北濱（ヘブリン丸元祖本家）
參天堂藥房
効能の概略
▲はやり目
▲トラホーム
▲星目
▲のぼせ目
▲かすみ目
▲たゞれ目
▲血目
▲打撲目
▲疲勞目
其外眼病一切に驚くべき奇効あり
◉又この藥は目力を強くするの確効あり故に無病の人にても毎日少し宛此藥を用れば眼病一切を豫防するを得べし



女學世界第九卷

尊き師父の教訓文（一）……しのぶ
人情學に及第せし姉より其弟への警告（六）…賤香
模範的良妻の手紙（一一）……ひさ子
雁のつばさに籠めし海山千里の消息（一四）……はるさめ女
人の缺點を拾ひあげし女の手紙（二三）……眞菰草
虚榮にあこがれし三年の夢（二九）……露子
憧がるゝ少女の手紙（三五）……内藤千代子
◎都なる友の許に（四三）……美登利
◎人の内情を聞いて呆れし手紙（四九）……はな子
◎都會生活の狀況を故郷の妹に（五一）……とも子
◎亡き友の母君に參らす文（五四）……とも子
僞らざる告白（五九）……平塚明子
結婚後の事情を舊師の許へ言ひ贈りし手紙（六四）……別役とし子
教誨師となりし女より友の許へ（六八）……破芭蕉
人生觀を籠めたる賤業婦の手紙（七三）……芳子
女塾生活の內狀を報ずる女學生の手紙（七八）……若葉
遠き國なる大姉君へ（八二）……都の小姉
◎書簡文の心得◎新舊書翰文類語
痛切なる友の警告（九四）……飯田百合子
義理に迫りて入水せし女の遺書（一〇七）…無名女





第七號目次

病の床に母を慕へる女の手紙（一〇三）……むらさき
平凡なる田舍の友より（一〇六）……しげ子
榮えし人の内情を聽いて呆れし手紙（一一〇）……うめ子
◎寄生徒よりおくれる書束（一一八）……かずゑ
◎有のまゝを昔の友へ（一二一）……五百枝
◎文學に志した婦人（一二八）……森滿人
女子書簡文案内（一三五）……塩井雨江
雅俗消息文例（一四六）……歸雁
佛國貴夫人の手紙（一五六）……蝸象子
手紙の小說（一六二）……馬場孤蝶
手紙の書き方に就て（一七二）……三宅花圃
葉ざくら（一七五）……藤井侶松
折々の手紙（一八〇）……與謝野晶子
養家にある妹へ（一八六）……金子薫園
余の手紙（一九二）……大町桂月
◎花の趣味……玉井紅蘭
◎卒業生への注文に答へまゐらす文……秋雨
口繪――△粧ひ（原色版）△北越の殘雪（大下藤次郎）△初夏（竹久夢二）△緑とり（平福百穂）△繪葉書（水野秀方）外に寫眞版八頁



粧ひ



田中製版所三色版

新刊

特價提供の期將に盡きんとす速に此好機を捕へよ!!!

簞笥長持と本書
臺處道具と本書
財布紙入と本書
邸臺住居と本書

簞笥長持は本邦古來嫁入道具の隨一なりと雖ども新世帯形成に當りて極めて實益的と言ふ可らず。藏むる所の衣裳道具と本書の內容と其何れを採る可きか文明人の一考すべき所。臺所道具は人間生活の日用品なれども之が取扱ひや處理に本書の教訓を加味せば如何に愉快と雅味とを添ふべきか。財布紙入は處世に缺くべからざる處。然れ共其內容の便途宜しからざれば亂費となる。一少部分を支出して本書を購入せば永久に收支の道を教ふべく宛も諸君が永代生活に貢献する邸臺住居を築造したると同一の効果あるべし。本書は二圓八十錢の最大價値也

實用家庭百科全書

表紙武內桂舟畵伯圖案總クロース金文字入美裝函入 裝釘堅牢 紙質精選
口繪原色版寫眞版石版アルミニーム版數十面、挿畵四百紙數一千二百餘頁

定價金參圓六拾錢

▲特價二圓八拾錢 送料金拾六錢▼

●製本出來五月廿五日は迫れり本日直ちに申込まれよ!!!

▲口繪付美裝 **見本進呈** 何時にても申込あれ!

發行所 東京小石川區久堅町一〇八 **精美堂**

電話番町九三二
振替口座二八三八
電信略號セイミ

●不朽の大作完成す●

小栗風葉氏著

終編 金色夜叉

▲▲總洋布最上製 紅葉全集同型

▲▲定價金壹圓 小包料拾貳錢

報知新聞評

金色夜叉を完成すべき最適任者は小栗風葉氏なること、衆目の見る所也。技巧絢爛の極に達せる金色夜叉の文を繼ぎ得るもの、斷じて同氏の外に見る可からず。本書は實に氏が紅葉の腹案を基礎として稿を起せるものにして、淸惋限りなきの文字、鏤刻にして而も斧鑿の痕なく、彫琢を見ずして自ら流麗なる所、紅葉の文致と同型同色、二者相分つ可からず。殊に豪快なる荒尾が飄逸の姿態最も活動し、矯々の意氣の萬斛の涙を藏して貫一を説くの邊、洵に入神の文字と云ふ可く、かくて貫一は淸かりし其昔に復へり、宮も亦遂に許されたり。金色夜叉六編、條を鳴らし花を落しゝ凄風急雨は、此終編に都べて收まり、雲霽れ日出づるを見るの思あり。貫一、宮の運命に涙を注ぎし金色夜叉の讀者は須らく就いて一讀せざる可からず。……世評皆斯くの如し……

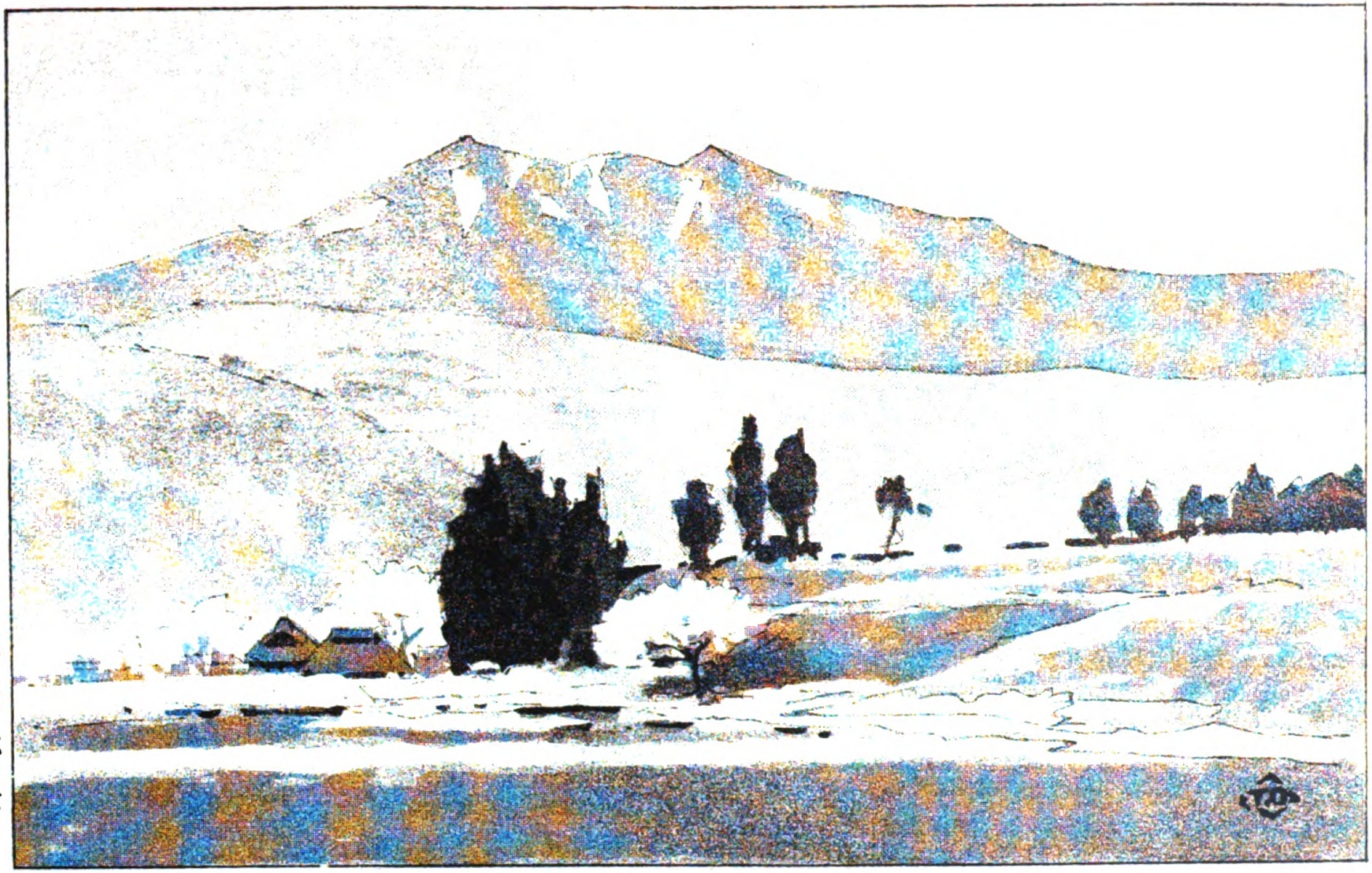
◎**賣切又賣切** 初版發行して漸く二旬既に **第四版** を公にするに至れり！

女 甲の三)

東京麴町區飯田町三丁目二十五番地 **新潮社** 電話番町二二二三 振替東京九六三九

女(甲の四)

北國の初夏



大下藤次郎筆


髪あらひ粉
嶋椿
伊豆七島より産する椿の實より製した
植物性髪洗粉なれば椿の油同様に毛髪の
肥料となりますから赤毛ちゞれ毛の長く
房々となることは不思議に非らず
袋入三回分五錢 罐入八回分拾貳錢
發賣元 東京横山町二丁目 花王白粉本舗 脇田盛眞堂
振替口座四四七-七

女(乙の一)

何人も讀んで面白き

東西冒險豪傑譚

洋裝四六倍判…………紙數百廿八頁
口繪原色版…………其他愉絶快絶
正價金拾五錢…………郵税壹錢五厘

東京本町 博文館 振替口座東京二四〇番

東京實用女學校

東京麴町區九段坂下

▼生徒募集▲本科三年○裁縫科二年○手藝科速成○虛飾迂遠の學問技藝を排斥し國情民度に應じたる實用卑近の女子教育を理想とす本科三ヶ年の教育は即ち理想的中等教育也本校獨得の教科書に依りてなす

校外生科……生徒募集

●本科三ヶ年の學科課程を一ヶ年半にて卒業せしむる通信教育にして女學校の校外生科は我國に於て嚆矢なり世上ありふれたる虛飾迂遠の教育と異なれる實用教育の味を知れ●規則入用者は切手二錢送らるべし

總長 公爵夫人 一條治子
校長 村上直次郎

毛のはへる藥

多年實驗の生毛劑にして特効驚くべき奇藥

一圓●一圓半●濃厚二圓半●三圓 送料十錢

美容散 やせる藥

●血ぶとり、あぶらぶとり、酒ぶとり、顏赤く、のぼせ症等總ての肥胖質の人用ゐて害なく身體美容となる保證藥なり

●定價(一週)七十錢(三週)二圓五週三圓廿錢送費十錢



▲僞物あり御注意▶

皮膚病專門藥

おまづ	いんきん	たむし
あか鼻	ざくろ鼻	あざ
ぜにがさ	ひぜん	わきが

本劑は獨逸國皮膚病研究所專用法劑にして特製一瓶にて全治保證又おいこむの憂なし

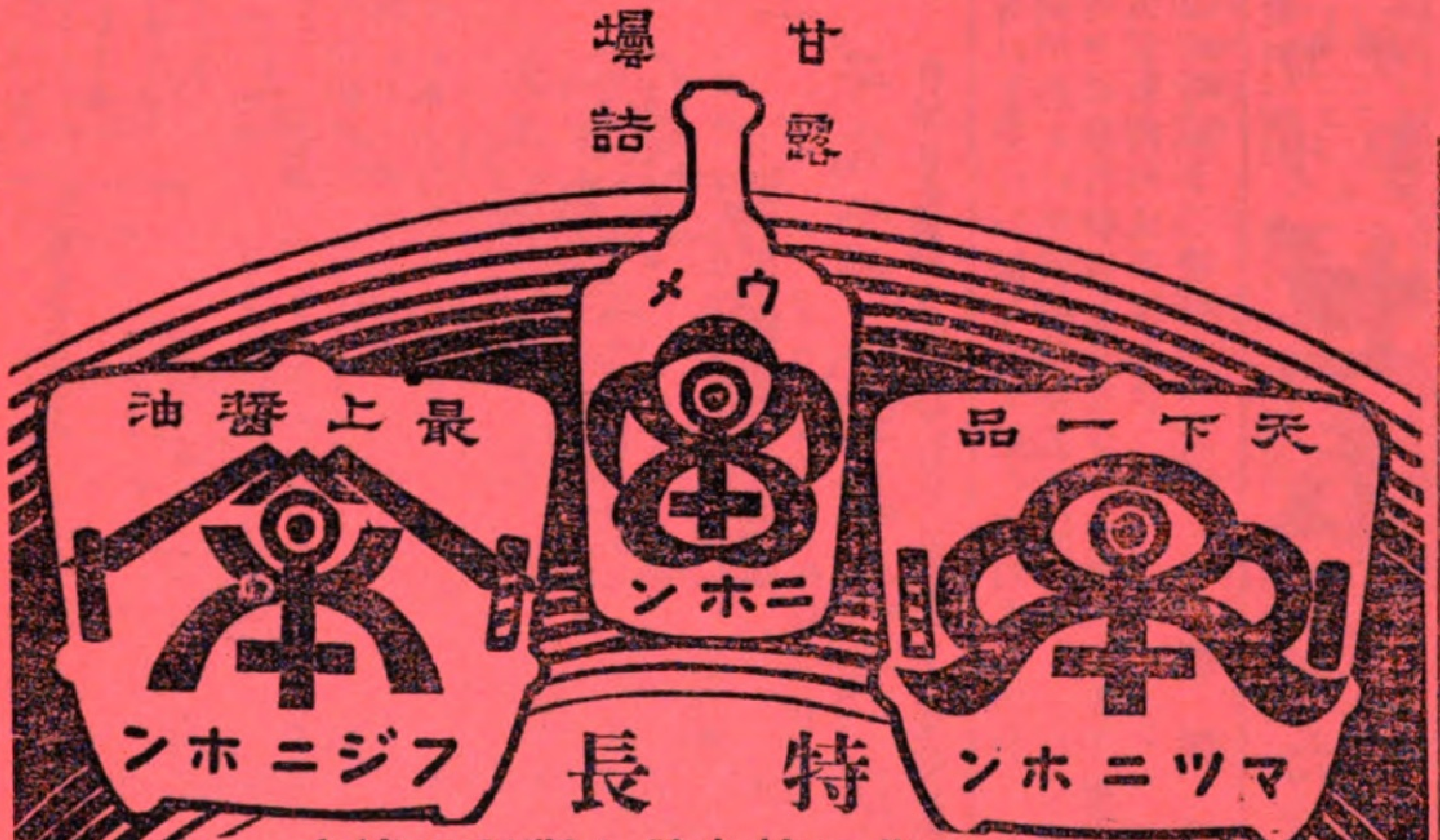
小瓶五十錢中瓶一圓大瓶一圓五十錢特製二圓送料十錢

本舗 東京本郷區本郷三丁目 振替口座一二五八四番 新宮藥館

電話下谷二二一九番

女(乙の二)

日本醤油



色澤香味共に純良最も調理に適す

●ウメニホン印甘露醤油は弊社獨特の再製品にして品質濃厚、香味佳絶**生醤油**として使用するに適し又「ソース」代用として極めて妙也

●マツニホン印は品質優秀香味佳良にして滋養分に富み普通一般の最上醤油に一頭地を拔き極めて優等の品なり

●フジニホン印は品質最良比較的價格低廉にして割の利く頗る德用向の品なり

●山サ、龜甲萬等と御使用比べの上優劣の御判定を乞ふ

(乙の四)

日本醤油釀造株式會社

京橋區本八丁堀櫻橋際
東京出張所
電話新橋長三一一四、四六六八、二三三五

大阪市南區新町橋東詰
大阪販賣所
電話東一三四五

糸とり



平福百穂筆

初夏



竹久夢二筆

最上醤油

キハク印

釀造元

茂木七郎右衛門

千葉縣野田町

電信略號ハシ又キルタ

東京支店

中野長兵衛

日本橋小網町三丁目

電話浪花七百七十七番

古來未曾有の乳いらず!!

アレンバリー小兒滋養食

THE ALLENBURYS, FOODS.



人乳なくして小兒を養育せんには母乳の成分と同一に配合せる食物を選ぶを肝要とす小兒の消化力と營養の需要は出生の時より生長に伴ひ漸次增進する故此理に適合せざる食物は其發育を妨げ又一生虚弱の者となす恐れあり愛兒養育の責任者は大に顧慮すべき事なり英國有名の「アレンバリー」小兒食は特に此點に注意し**第壹號**は生後三ヶ月間**第貳號**は四ヶ月より六ヶ月迄の小兒に適する樣成分の制合を人乳と同一になし**第參號**は六ヶ月後の兒用として麥芽を調和せる物にて從來發明の類似品中未だ如斯精良なる者なし無比の効能は御試用の上實驗あれ

定價 壹號壹鑵 貳號壹鑵 各金壹圓拾五錢 參號壹鑵 金七拾錢

東洋總代理店 横濱山下町十二 神戸磯上通一ノ四 ストローム商會

特約一手販賣店 東京日本橋區本町四丁目(電話本局二八七三)振替口座一六六三番 田邊元三郎

販賣店 大阪東區道修町三丁目(電話東六四番)振替口座一五五〇五番 田邊五兵衛

女(丙の一)

根治確證

わきが

新治療藥 ラヒヨリ

必ず全治し決して再發或は他病に變ぜず 丙價七拾錢 乙價壹圓卅錢 甲價

本劑を塗擦すれば主成分は皮膚及び肉の組織に吸收せられ其組織にある毒素を清潔に驅逐し惡臭を根底より全滅せしむる作用を有する最近發見の特種の新劑にして如何程頑固劇烈の難症も甲價特別製を用ひよ必ず速に全治して苦惱を脱せよ 定價壹圓卅錢 特別製貳圓五拾錢 送料拾五錢

毛のはへる

hair vegeness 主要成分 ベゲネス

めはへぎわうすき人●まゆ毛●口ひげ●其他頭などにはげのあるのは見苦しき者也

有力なる最新液 毛をはやしたき人早く試みられよ ●ぬけ毛落毛を止め毛髪を増す 其他の所に毛なき人用ひよ

定價壹圓卅錢 特別製貳圓 送料拾四錢 本品は原名をベゲネスと稱する現今最賞用せらるゝ

化學製品

色の白くなる

紡 ハンドコロン溶液

皮膚を漂白するを以て全身次第に白色艶美となり男女交際上最も必用の品なり

分の力 本劑を塗擦すれば皮膚は次第に新陳代謝を促し殊に愛用せらる最新流行の秘方奇劑にして主性

價A印壹圓 B印特製壹圓五拾錢 送料拾五錢 本劑は貴紳士間に大高評を博し女粹

最良 メリルピン

ヶ月以上のとまり又は血塊に特製を用ひよ速に流す本劑は効能極て烈強なる

起る血の道を全治し子宮の古血を一掃す 經に害なくたやすく下る月經不順より

メリルピンは子宮を痛めず如何ほど長き月經のとまりも必ず下る二三月位のは壹劑にて下る二三ヶ月以上のは

別製貳圓卅錢 壹劑壹圓卅錢 半劑六拾五錢 送料拾貳錢

專賣 東京神田區小川町東明館前 オリエンタル藥舗 電話下谷二五三五

女(其の二)

子のできる器及 子のできない器 懐姙避姙自在器

（▲兼用梅毒淋病豫防器及子宮病自療器）

本器は産科婦人科日東病院長醫學得業士齋藤乙吉先生の發明に係る最も簡易安全にして毫も無害なる懐姙避姙自由自在器兼用梅毒淋病豫防器及子宮病自宅治療器也即ち本器により局所へ姙孕を補助する藥劑を入れる時は人工的に**懐姙**することを得らる故に子の無き人は用て目的を達すべく又本器により局所へ姙孕素を消失する藥劑を入れる時は決て姙娠せず子澤山の婦人は夫に秘密に用て**避姙**の目的を達し得らる而も共に衛生無害なるは發明者多年實驗上確證する所なり且つ本器へ病毒豫防藥を入れ應用する時は**梅毒淋病**其他の病毒を嘗て傳染する患なし又慢性子宮内膜炎膣炎等の**子宮諸病**患者は本器へ是等治療藥液を入れ應用せば自宅にて容易に**自身治療**することを得るものなり本器は彼の不快の念なく天然の感觸を鋭敏強劇ならしむるルーデサック及子宮サックの如き不理想的嶄新發明品にて一度買へば拾數年間保存し得る世界唯一の婦人衛生上必ず携ふべき要用の具器なり。但し詳細なる説明書及使用法并に應用諸藥劑處方書は現品に添附し小包郵便密封にて送付す。（正價）ニッケル製壹圓拾五錢、純銀特別製參圓拾五錢。郵券代用貳割増し。着金即刻送品す

醫學得業士

（齋藤乙吉先生發明）

實用新案登錄特許

アシトア

atocia,

（膣内挿入小器具）

世界一手 專賣元

東京市神田區五軒町十九番地（電話番號下谷五百四十六番）

日新館藥房

東京帝國大學文科大學講師 佐佐木信綱君撰

日本歌選

上古の卷

洋裝四六判總クロース上製紙數約三百餘頁 正價八十錢 郵稅六錢

上下二千載、我が國文學の精髓として、國民が趣味好尙の中心たりし和歌は、その載籍の傳はれるもの凡そ幾千卷。その歌數に至つては無慮幾萬首。爲にこれを悉く涉獵せむこと、專門の士と雖も容易ならず。研究に志ある士をして、むなしく望洋の嘆あらしむ。佐佐木氏乃ち日本歌選の計畫あり。古來の選集家集はた諸書に散見するもの、うちより、各時代各作家を代表すべき作品を選出して、わが國歌の精髓を示さる。氏が該博の學識と、嚴密なる批評眼とは、よく傳統あり歷史ある我が二千年の和歌を縮撮し、選出し得て餘蘊なかるべし。玆に第一卷上古の卷稿成りて刊行せらる。即ち上世歌史の第一期第二期、紀元前より天武帝までの歌謠を輯錄す。而してこの兩期の作は其數少く、かつ普く諸書に涉りて探輯せるものなきを以て、本卷は特に例外として、撰擇を用ゐず、紀記を始め風土記その他の古書よりすべて輯錄せり。從つて本書は、上古歌謠を研究せむとする士にとりて最も完全なる資料たり。かつ卷末に、上世歌謠の概觀といへる論文を附し、第一に出處製作時代に就いて論じ、古來の假託の作を辨別し、第二に兩期の歌謠の性質とその變遷とを論じ、第三に祝詞壽詞誄詞に就いて論じ、第四に兩期の歌謠研究の歷史を記述せり。又附錄として、研究の參考書目、及び時代句數歌體等によりて分類せる表、時代と作者とによりて分類せる表等を添ふ。わが國文學を研究せんとする人和歌に志あり、歌學を學ばむとする人の爲に必須の書なり。

佐佐木弘綱翁遺著 佐佐木信綱君校訂

和歌 世々のあと

全一冊

洋裝四六判美本 紙數百四十六頁 正價二十八錢 郵稅四錢

和歌世々の跡は明治の歌壇に多大の功勞ありし佐佐木弘綱翁の遺著にして、國初より近世に至る凡ての歌人の代表的短歌を、時代を追うて採錄せるもの。專ら初學者の爲にとて、その選出に、或は戀歌を省き或は難解の歌を避けられたれば、和歌の小歷史として、作歌の模範として、獨習用に又高等女學校の教科書等に、最も適當なる書なり。

佐佐木信綱君著

歌學論叢

全一冊

洋裝四六判總布製 美本紙數五八〇頁 正價金壹圓 郵稅八錢

歌學論叢は、佐々木氏が、數年前より帝國大學文科大學に於て、和歌の歷史を講ぜらる、其研究の餘材として成れるものなり。或は燃犀なる眼孔を以て「和歌と時勢」「和歌の將來」「歌學の根本」「上世の和歌」「歌格の研究」等に就て論究し、或は卓拔なる見識を以て、「人麿と赤人」「貫之」「西行」「實朝」「景樹」等を論評し、或は、「仙覺以前の萬葉研究」「戶田茂睡」等精細なる考證あり。或は「萬葉集の女歌人」「建禮門院右京太夫」等趣味津々汲めども盡きざるものあり。又「六人部是香」「大隈言道」「野村望東尼」等未だ世に知られざりし歌人歌學者を紹介したるが如き、國分學史上に一新事實を提供せるもの。其他、「萬葉集私見」「近世歌人雜話」「家集のいろ〳〵」等すべて廿篇、五百八十頁にわたり、該博なる學識と清新なる文藻と相俟ちて、我國の歌學界に新生命を與へたる書と云ふべく、又上代より新世にいたる側面の日本歌學史と云ふを得べし。苟くも和歌に志あり。國文に興味を有する人々にとりて必讀の好著なり。

東京本町 博文館

(其の三)

◎當店は大方各位の御便宜を圖り四季の御贈答用として最も適當なる商品共通切手を發行す可し

◎當店は三百年來同所に於て渝りなく確實嚴肅の商業を營める老舗にして常に最も完全なる商品を廉價に提供へ誠實薄利を以て御注文に應ずべし

富士印

ヌイメナシカヤ

販賣品目

蒲團
蒲團生地
寢臺
室內裝飾品
麻布
和洋敷物
疊表
柳行李
懷中頁劑

東京日本橋

電話本局四二六・長四三六
振替口座東京六一六一

濱江屋伴傳商店

支店	本店	代理店
日本橋通一	近江國八幡	英國倫敦
日本橋通二		米國紐育
神戸御幸通		獨逸伯林
備後國柳津		加奈陀トロント

◎當店發行の御注文之栞は御送料を要せず何時にても送呈す可し又營業に關する御照會に對しては返信料を要せず即時懇切なる回答を差出す可し

◎當店に於て御購入の商品は東京市內に限り道の遠近を問はず運賃無料にて速かに送達す可し

(四の四)

名流婦人



岩崎男爵（小彌太氏）夫人孝子（島津男爵令嬢）



山口子爵（十八氏）夫人繼子（故兒玉大將養女）

初夏



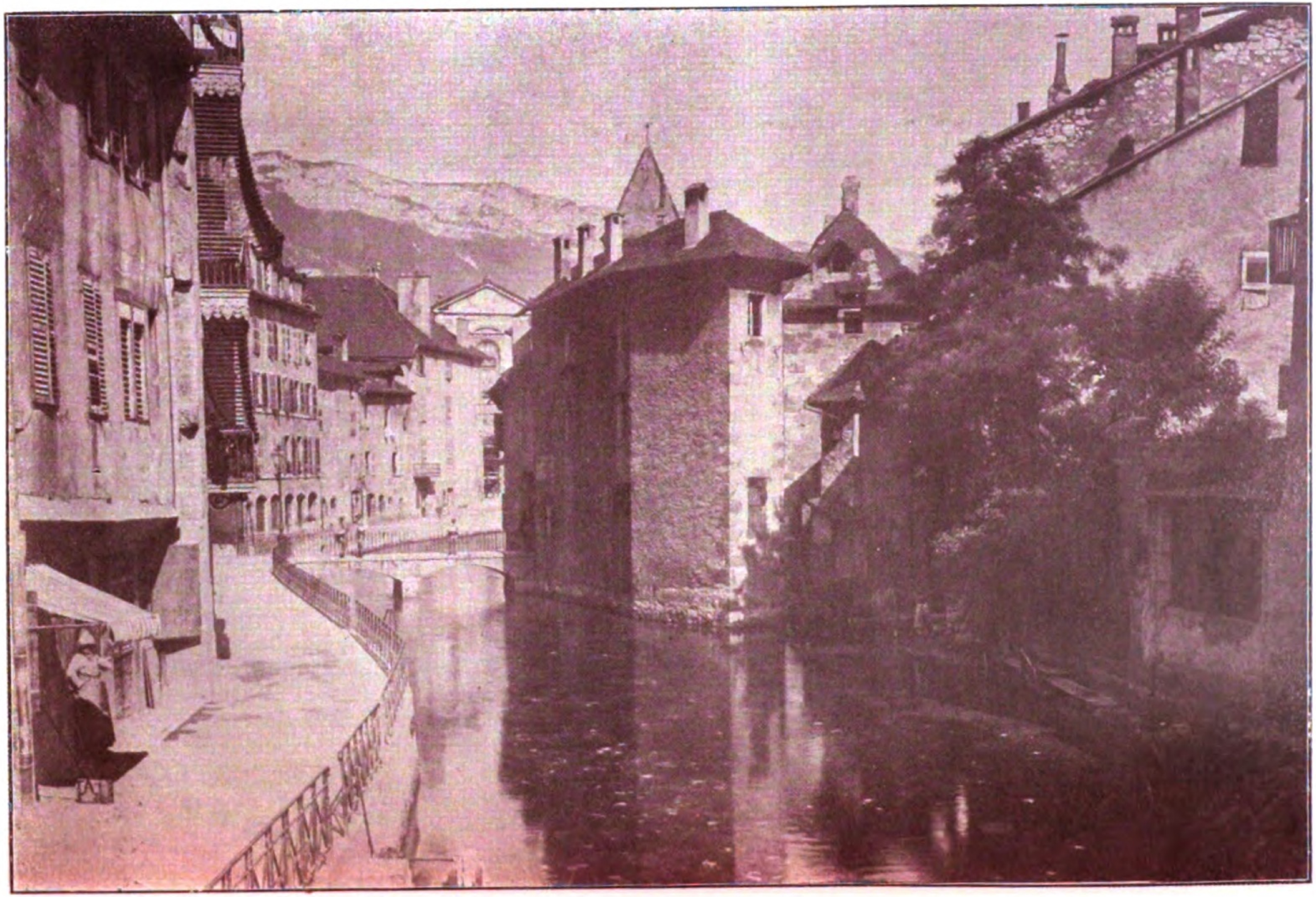
牡丹花



穂積重遠氏夫人なか子（兒玉伯令妹）

松平子爵（乘承）令嬢愛子

佛國古代の獄舍



◎毛髪を美しくする最新劑◎

如何なチヾレ毛、白毛、赤毛も必ず一劑で美人となる

如何程お化粧が美しく出來ても髪の毛が惡るくては遂にお化粧の目的は達し得られませんのです

茲に於て當研究所は多年の實地と經驗とを重ね調製したものが『高砂白毛染』で……

此液は白毛、赤毛を染むるのは勿論ドンナちゞれ毛も一劑で必ず美くしくなりお化粧本來の目的と叶つて居ります處で發賣日尚ほ淺きにも不拘化粧品界の重要品として頗る高評を博して居ります

尚又該液は在來品の如く御使用後手拭なぞを冠ぶる不便はなく極めて輕便簡單にして衛生に關しては特に警視廳の無害證明を有します

ちゞれ毛直し
白毛赤毛染　**高砂**

大壜金四十錢
小壜金二十錢
（送料大小共一個四錢）

東京神田橋本町三丁目四番地
（電話浪花千百五十二番）

東京化學化粧品研究所

女（丁の一）

通俗作文全書

全部廿四冊洋裝四六判
並製紙數三百頁
正價一册三十五錢
郵稅一册六錢宛

記事論說或は紀行叙事等の雄編大作より尺牘葉書の日用文に至るまで、齊しく是れ文なる以上は、文明社會の人は皆文を以て互に意思を通じつゝある者と謂ふべし。然るに今日の狀況を見るに、百般藝術の駸々進歩するに反し作文の技のみ獨り退歩の觀あるは洵に痛嘆の至りといふべし。是れ多數の人士が文章に重きを置かざるに由ると雖も、從來作文法を敎ふる完全なる書籍なきもの亦其一因なりといふべし。弊館之を遺憾とし、通俗作文全書を發行し聊か以て此缺點を稗補する所あらんとす。其の目次は下に列記す。

第一編 大和田建樹君著 ●文章組立法
第二編 大和田建樹君著 ●書簡文作法
第三編 田山花袋君著 ●美文作法
第四編 天城安政君著 ●商業作文法
第五編 青柳篤恒君著 ●評釋支那時文軌範
第六編 西村醉夢君著 ●紀行文作法
第七編 福田琴月君著 ●寫生文範
第八編 河村醉茗君編著 ●論說記事文範
第九編 西田敬止君著 ●女子消息文範
第十編 森田米松君著 ●書翰文範
第十一編 大和田建樹君著 ●日記文範
第十二編 石崎篁園君著 ●祝賀弔祭文範
第十三編 山川直五郎君編 ●中等學生文範
第十四編 生田孟郊君編 ●明治時代文範
第十五編 椢江秀雄君編 ●言文一致文範
第十六編 太田才次郎君編 ●古今名家尺牘文
第十七編 武田櫻桃君編 ●古今名家文選
第十八編 河井醉茗君著 ●新體詩作法
第十九編 久保天隨君編 ●新體漢文軌範
第二十編 近藤正一君著 ●古今才媛文集
第廿一編 久保天隨君著 ●美辭類語集
第廿二編 窪田空穗君著 ●短歌作法

第廿三編 ●俳句作法 內藤鳴雪君著

○總論八項 ○俳句の歷史八項 ○俳句を解すること八項 ○俳句を作る第一段階七項 ○季九項 ○俳句を作る二方法四項 ○叙寫法と文法九項 ○上達の段階四項 ○俳句の婆十一項 ○餘論二項 ○鼇頭——俳諧文抄

續刊 (24) ●小說作法 田山花袋君著

振替口座番號 東京二百四十番 東京本町 博文館 販賣用電話 本局二六二〇番

(丁の二)

◎山葉風琴

金拾八圓以上金參百五拾圓迄各種
新製第拾九號（Cスケール）定價金參百五拾圓

月賦販賣（規則進呈）

鈴木ヴァイオリン



金貳圓以上
金百貳拾圓迄 各種
弓 金七拾錢以上
金拾 圓 迄各種
箱 金壹圓五拾錢以上
金拾五圓 迄各種

新刊

北村季晴先生作譜

◉長唄樂譜第八編 吾妻八景

定價金壹圓
不要郵稅

一郵券貳錢御送付アラバ雛形入詳細目錄進呈ス
一ピアノ、オルガン調律修繕應需

賃貸應需（規則進呈）

鈴木マンドリン



壹號 金七圓
貳號 金拾圓
三號 金拾貳圓
サック 金貳圓五拾錢 金參圓五拾錢
義甲 金拾錢

◎山葉洋琴

金參百參拾圓以上金壹千參百圓迄各種
六オクテーブ、コッテージピアノ定價金貳百五拾圓

東京市京橋區竹川町十三番地 合資會社 共益商社樂器店 電話新橋五二九◎持長四八八〇 振替口座東京一五八〇番

女（丁の四）

竹柏會春季大會



日本橋倶樂部に於て

太平洋上の日本婦人



地洋丸にて渡米の途次布哇へ寄港せし日本の淑女

前列（向って右より）
高桑商店主夫人
今村本願寺輪番夫人
木重藥店主之夫人
小島精米會社々長之夫人
中島孃
赤井正金銀行支店長令孃
永澤領事館書記生夫人
齋藤總領事夫人
阿部領事館補夫人
氏田ドクター夫人
勝木ドクター夫人
石田文學士夫人
三田村ドクター夫人
相賀日布時事社長夫人

後列（向って右より）
眞下日本人學校長夫人
成田郵便局員夫人
小林旅館主之夫人
川原商店主之夫人
芝布哇新報社長夫人
袋山商店主夫人
朝比奈ドクター令孃
田代氏夫人
山本商店主之夫人
毛利岩上支店長之夫人
赤木領事館員夫人
内田ドクター夫人
眞安氏夫人

大阪割烹學校卒業生



岩つゝじ



島崎柳塢氏筆

女（戊の一）

女(戊の二)

文學士 齋藤隆三君著

近世世相史



江戸時代の三百年は我文化史上に未曾有の大發展をなしたる時代也，文物の盛極まり趣味の高上比儔なし。本書は即ち此三百年間の世相を活寫したるもの、期を分つ四、章を立つ六十六、其時々の世態人情の推移を論じ衣裝修飾の變遷を說き更に美術工藝の進歩を述べ江戸と京阪の繁昌を明かにし進では遊里を叙し演劇を說き音曲を語る。叙事總て詳密、行るに流麗の筆を以てす、實に風俗史に造詣深き著者が多年の研鑚に成れるもの前代の世相風俗を知るべき唯一絕好の書也。史に志すものは素より、今日の世の據て來る淵源を知らんと欲するものは正に几上一本を備へざるべからず。

洋裝 菊判總クロース
特製紙數千餘頁
正價貳圓貳拾錢
小包料拾貳錢

同君著

元祿世相志

元祿は、其風俗に於て最も趣味ある時代なり、復興の氣運熟し、革新の氣風吹きすさび、社會のあらゆる方面の勃興し、膨脹したる時代なり、此書は即ち、元祿の時代觀なり、時代史なり、風俗史なり、文藝史なり、社會史なり、元祿をパノラマ的に示したるものなり二百餘年前の時勢を活動寫眞的に描きたるものなり、其如何なる觀察をなしたるか、如何なる筆を以て寫したるか如何なる趣味あるや、如何なる興味あるや、本書即ち能く是れを語らん。

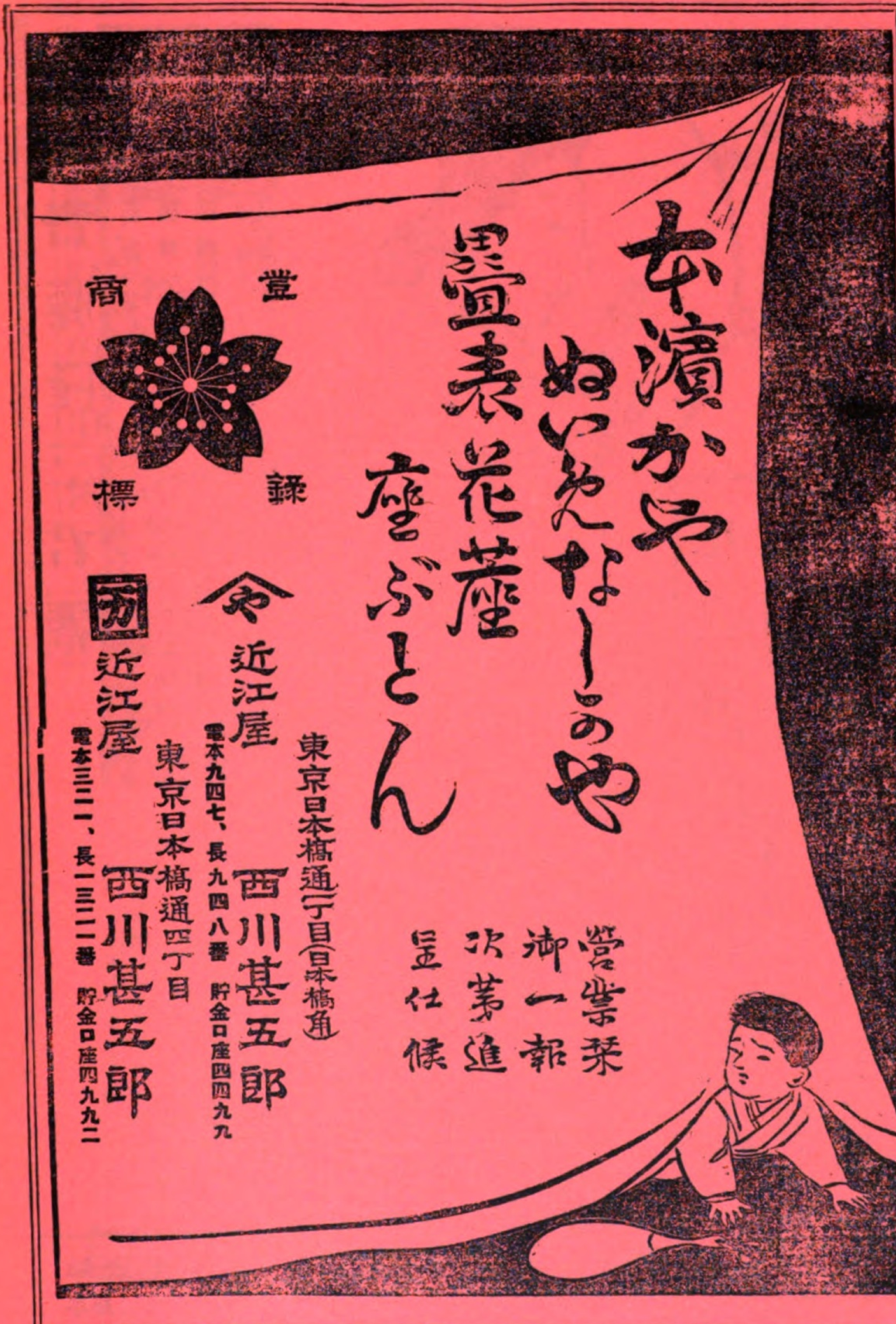
全一册洋裝大判美本
紙數三百四十八頁
正價金四拾五錢
郵稅金八錢

振替貯金口座 東京二四〇番

東京 博文館 本町

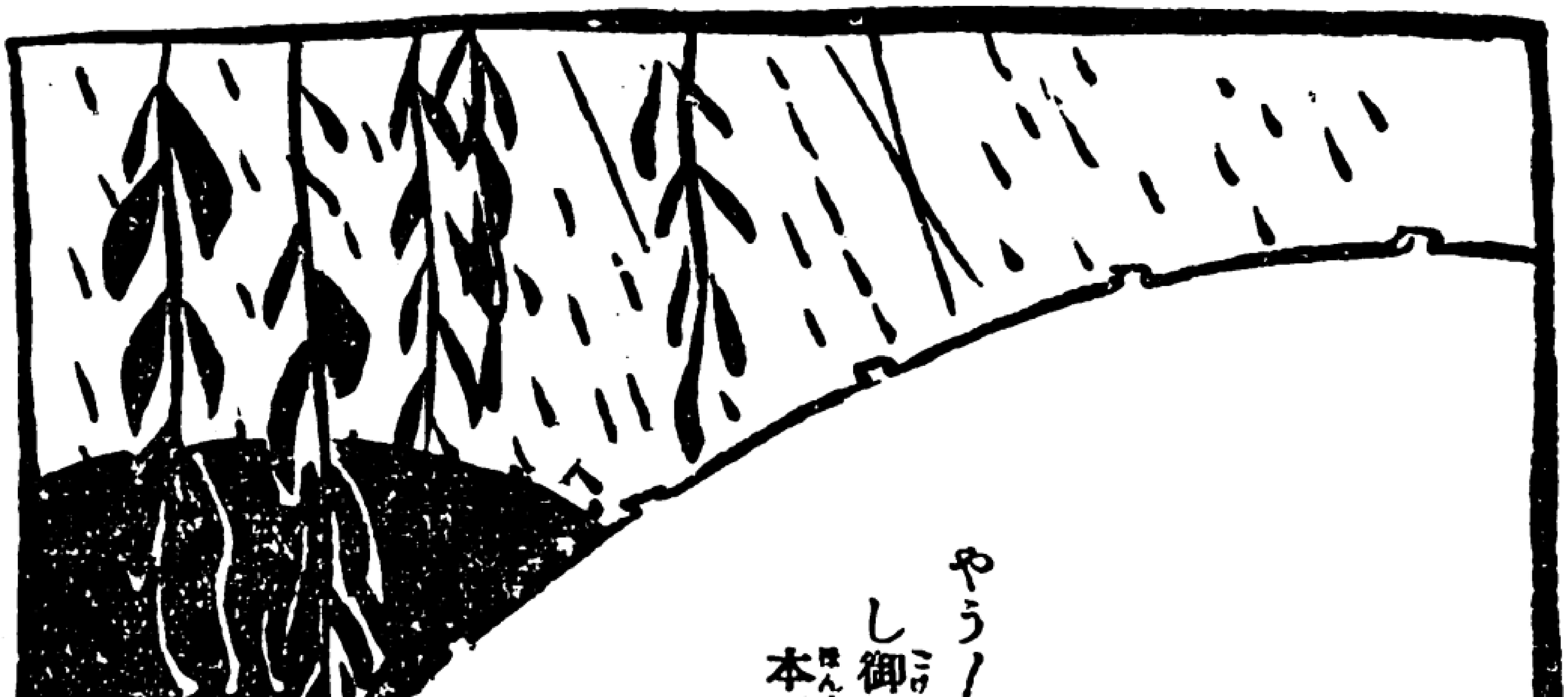
販賣用電話 本局二六二〇番

女(戊の三)



安濱かや
ぬいゑんなしのや
疊表花莚
座ぶとん
營業栞
御一報
次第進
呈仕候
東京日本橋通一丁目（日本橋角）
近江屋
西川甚五郎
電本九四七、長九四八番 貯金口座四四九九
東京日本橋通四丁目
近江屋
西川甚五郎
電本三二一、長一三二一番 貯金口座四九九二
登録商標

（女戊の四）



尊き師父の教訓文

高等女學校を卒業せる妹のもとへ

しのぶ

やう〳〵長閑に相成り候折りから、御變りも御座なく候哉、御兩親樣にも定めし御健勝の御事と御察し申上候、扨承れば御許樣にはこたび高等女學校本科の業を卒へられ、ことに多年の御勉强のしるし見え、級中の首席をしめられしとの御事、御自分の御よろこびはいはずもあれ、御兩親樣の御心のうちは如何にまたかゝるうるはしきはらからもてる私も、こよなくうれしく目出度御祝ひ申上參らせ候。

實に光陰は矢の如しとやら、私が當家に參りし頃は、まだふりわけ髪のいとしき少女にて、里開きに一夜とまり、姉樣は近々に遠方に參るよし申きかせしに、愛らしき兩の目に淚をうかべ首うちふりいやよ〳〵もう山田へなど行かず、いつまでも

うちに御出遊ばせ私のひざにつきまとひしは、つひこの頃の樣に覺えしを、早や高等女學校の業を卒へ花ならばほころび初むてふ妙齢の春を迎へられしとは、我身のふけ行くは思はで、たゞ〳〵驚かれ申候、あゝ其はづ、私も當家へ參りし頃は召つかひのものなどに、奥樣とよばるゝが何となくきまりわるく、外出しては御孃樣おやすくお供いたしましやうなど、車夫に聲かけらるゝも度々なりしが、今は早や三人の子供に母樣と呼ばるゝ身となり、里の母樣にせがみて拵へて頂きし友禪の長襦袢は薫子の被布とはかはりはてし時代なれば。

就ては卒業後の心得につき何かとの御依頼、別によき考へも御座なく候へども、蟹の甲より年の功とやら、申しおときさんより年を重ねしだけ失敗も致し、經驗も重ね候まゝ、心に思ふふし〴〵を御參考迄にいさゝか書きつゞり申候、先づ第一に何事も高等の敎育をうけし令孃たる體面をけがさぬ樣、立居振舞しとやかに、世の令孃のかゞみともなりたまはゞ、御兩親樣へは孝行となり多年敎へうけし師の君にもいかばかりよろこばせ給ふらんと存候、少々細きことを申上ぐれば、これよりは母上樣の御手助して家政の練習遊ばすこと肝要と存候、在學中は何かと學校のことにおはれ、家事のことは餘り心にとめぬものにて、また母上樣も學校のことと多忙なればと、何事もお言ひつけなきものなればこれよりはもはや諸事に注意し來賓の應接、他家の訪問、食物の調理、裁縫の練習等、心がけらるべく、ことに臺所の手傳ひは最も大事にて、何事も習ふよりなるれとか申候、ことに食物調理のことは書物にて學びたる理論と、學校の實習のみにて足れりと思ふは大なる誤にて、よく實地にあたり、幾度も失敗に失敗を重ね、始めて上達するものなれば、これよりは毎日臺所に出て、女中と共に或は大根の皮もとり給へ、或は肴も作り給へ、漬物の加減も覺えられよ、何事も左樣なれど、ことに臺所のことは淸潔と整頓てふことを忘れ給ふな、例へば玉子を一つ料理しても、からはすぐ捨つべき所へすて、お芋の皮をむきたらば、あとは直に片つくる樣、決してやりはなしはよろしからず候、御孃樣が御卒業遊

されてよりは、臺所のこと萬事間にあひ、いろ〳〵御料理も覺え、私共も幸福なり、實に教育をおうけ遊され
し御方樣は違ふものなりと、女中共のよろこぶ樣、もしそれと反對に御孃樣がいろ〳〵御手傳ひ下さるはうれ
しけれど大根の皮は流しになげすて、玉子のからは足元にころがし、ほんとに後かたづけが大變なりなど、假
にも口にすることあらば、御身の教育をうけられし値少しも御座なく、次に裁縫の道も御母上樣の御教へのま
に〳〵、よく御練習あるべく色々の事實にあたり實地經驗大切に御座候、せめて自分のものだけは人手にまた
ぬ樣におなり遊さるべくと存候、それよりおひ〳〵上達しては御兩親樣の御召物、はらからのものも縫はせて
頂き、實に御身が卒業してよりは仕立物よく間にあひてよろしと、母上樣の御滿足遊ばす樣御心掛あるべく候
また折を見ては一日中一二時間は必ず讀書の樂みを忘れ給ふな、世は日一日と進歩するものなれば、よく時世
におくれぬ樣また在學時代の教科書も少しづゝ復習せらるべく候、さりとてひまさへあれば机の前に坐し居る
はよろしからず、私の考へにては晝食後一二時間を讀書の時間と定めなばよろしかるべくと存候、なほ暇
あらば御兩親樣の御許しの限りは何にてもお習ひ遊ばすはよろしけれど、手藝に身を入れ以上のことのおろそ
かにならぬ樣、よく〳〵御注意あるべく候、最後にいま一つ申上たきは結婚の一事に御座候、御許樣も最早女
子として一通りの教育を終りしなれば、今にても良縁あらば他家に嫁るべき身なれば、一應御心得あるべき事
肝要とぞんじ候、今時の教育をうけし人たちは、兎角理想に合はぬとかまたは學者にあらざれば嫁せずとかい
ろ〳〵むづかしき事を申さるれども、私の考は固陋かは存せず候へども、やはり御兩親樣の仰せに從ふ方よ
ろしかるべと存じ候、もとより何事も盲從せよと申には御座なく、或程度までは自分も考へを申さるべく候、
されど御兩親樣は御身を最愛せられ、何事も御身のため行末幸あれかしと祈らせ給ふこと、忘れ給ふな、呉々
も人物と結婚せられよ、財產、地位、學位との結婚は離くべき惱みを見ることを御承知あるべく候、また世に

は舅姑なく兄弟なき家を望む人あれど、ゆめ〳〵左樣の心を起させ給ふな、それ舅姑は己の最も敬愛する夫の父母兄弟もまたその最愛なるはらからならずや、おもしろからぬことあるはこれわが注意の足らざる故にみづからを顧み、決して人をうらみず、ひたすらに眞心こめて舅姑につかへ、親切をつくして兄弟をいたはりなばなどて世にさる如きいまはしきことの起るべき、かゝる家庭を圓滿におさめ得ざる人は決して係累なき家なりとて圓滿におさめ得るものにあらずと存し候、それのみならず己が他日姑となりたらん時の心得ともなるべければ、却て物固き舅姑のある家にゆきて萬事の指揮を受けなば身の修養ともなりて將來幸福の基とも相成るべくと存じ候、夫婦さしむかひは却て兩方我儘いで決して思ふ樣よろしきものならず、私などは只今あるじの職務の都合上舅姑と別居いたし居り候へども、折には我にもあらぬ我儘申し後にてあゝ申譯なかりしと我と我身をせむること度々に御座候、さればこの事よく〳〵胸におさめ給ふべく候、

色々長話いたし候へども要する處淑女たるの體面を保ち人に對しては何事も親切に慈悲深く決して生いきとか高ぶるとか申されぬ樣、實にあの方に對すればいつも春の野に遊ぶが如く心長閑なりと人に申さるゝ樣あらまほしく候、女子は御兩親樣の御そばにありて御孝養申上ぐる時機は至てみじかきものにて、他家に參りてはいかに思ひても致し方なきものなれば、今のうちによく〳〵御孝行なさるべく候、

まづは御卒業の御祝ひかた〴〵右申述べ候末筆失禮ながら御兩親樣へよろしくお傳へ下され度、いつも〳〵子供にかまけ御無沙汰のみいたし候つみ御許樣よりよく〳〵おわび下され度、薫子も先日お贈り下されし紅の巾廣のリボン、毎日おさげの髮に蝶にむすび、通學致し居り候、當地海濱のながめまた一しほに御座候まゝ、御都合よろしく候はゞ少々御出は如何御母上樣に御願あるべく其折はつもる話に一夜をあかすべく候、草々、

しのぶ

四月十八日

時子樣



人情學に及第せし姉より其弟への警告

賤香

一信

玉仙山の櫻は漸くさき初め候

御歸省を母上と共に待ち居りしも、此春はその樂しみなく、淋しき心地のいたされ候。

さて、學校より送達の成績表は、たしかに落手、とり上げられし母上の御手の甚しくふるひ、太き息つき給ひしに、大方は察せられて御たづねも仕らざりし。丁度居給ひし父上の、兼て子に甘い故こんな始末だお前等が育てた者が役に立つか、馬鹿者、と御聲荒く候ひき。斯樣の言葉を、母上の傍にて直接お聞きあらば、御許はいかゞ遊ばさるゝぞや。

母上は涙して、父上にあやまり給ひし、誰が爲に候ふか。

尤も、一學期末の病氣にて、一ヶ月餘歸校遲れし故充分の成績は望まざりしも、かくまで不首尾の結果を見るとは、素より豫期いたさゞりし。

日頃、法はづれてやかましき父上に仕へ、せわしき家をひとりして立ち働らかるゝ、母上が待合風情をいとなむ家庭に、最愛の子を置くべきにあらずとて、わざ〳〵田舍の中學に御身を送られし事は、萬々御承知にて候はむ。

四年の月日を、遙かなる學窓の下に餘念なくすごされし身には、御存じなきこともあらむ、月々送る拾圓の學費には、母上の誠は云ひ得ぬ程こもり居り候。

かく云ふ姉とても、十九の春までを、寄宿舍の窓に憂きことも知らざりし身、餘裕ある中に卒業して、し

たり顔に意見がましく生意氣の樣に、思し候はむも決して／＼誤解相成らぬやう、名門大家に、良子弟の少なき理由は存じ候はず、御身や私にて相當の敎育を受けなば、必ず／＼人並よりもすぐれし者とならねばならぬ道理は、最早解し遊ばされし事と存じ候。姉は女の身、望を屬するは御許のみに候はずや。

健全なる精神は健全なる身體に宿る、過度の勉强は衞生の道にあらず、結局不健康をいたす基など、得て不勉强家は申し候よし承り候、世には、かゝるあやしき言云ふ人もあると、御忘れ下さるまじく候。



いさゝかの事に候へども、先日御許の文庫より、不如歸を見出し候ひし、明治文壇の名著のよしに候へども、かゝる書籍は御目を通し下さらぬ樣願ひ候、現代靑年の思想を測量する資料を、本箱の中にて見たりと申されても、いたし方なき事に候。

地位あり、財ある人の子弟の勉學とは異る御許、よく／＼御自覺あり度く、いつ大浪のよせくるやさへは

かられぬ境遇、殘念ながら今より御承知下され度候。意久地なし、腹切つて死ね、といつぞや仰せありし父上の御言葉は、必ず忘却あるまじくよしなき鞭撻に候、夢うらみなき樣念じ候、

小爲替一圓は私よりさし上候、玉子なりと求め下され度

御許へ苦痛をあたへ候は、母上はもとより私とても好まぬ事に候が、私より苦言申し述べ候、御自重の上御勉强の程それのみ祈り上候、先づは取急ぎあらあら。

二　信

御手紙拜見、御心の程よく相わかり申し候、いつまでも〱其決心失ひなき樣頼み上候

御許の文の趣母上に洩せしに、涙浮かべて喜ばれ候ひき。

十日前にて候ひし、御許より一つ年下の岩木樣の息六郎殿は、思はしからぬ成績に面目なしとて、金庫より二百圓持ち出して、今日迄行方不明に候、兼ねて才はぢけてをられ、其上天にも地にも一人子のことゝて御兩親の心配は一方ならず候。不孝者故海容を乞ふ、東都に上り成功の曉を以て御目にかゝる、と遺書有之候ひし由、落第の恥を恐れて姿をかくす位の勇なき人が、いかで成功の見込の候ふべき。

斯樣のことを耳に入れてはと、母上は氣遣はれ候へども、物の善惡理非は立派に氷解相成りて、感染なさるゝ樣な、薄志弱行の徒にてはなきを堅く信じて申し送り候。

芝居見物と申せば、いつも堅くるしき事のみ云ひ送る其許の姉として、相應しからぬいたりなれど、出入の藝妓等より案内され候へば、やむを得ぬ場合も候。まだ冬の頃、榮町の小屋にて血の涙と云ふを觀し時、傍の升に坐をしめし文部省直轄學校の生徒が三人御座候ひし、制帽にもはぢすしだらなき態、心ひそかに淺ましう存じ候ひき、幕間〱に放歌するを聞けば、敎育あるものゝ口にすべからざる程卑しきもあり候ひし朝夕に野卑なる俗歌をのみ耳にして過す私さへ、いや

な感じがいたしぬ。

駒場出てから拾四年今ちや
テキサス大地主秋の男鹿の
鳴く頃は黄
金浪うつ
五千町

高商出てか
ら拾四年
今ちや
満鐵取締り
秋の男鹿
のなく
頃は
賞與の金が
二萬圓

この様なるが理想とやらにて候はむも、所謂空想にて候ふなるべし、何となう一種いやなさもしい感じがいたし候。修養すべき不撓不屈の精神や、手腕は後にして、唯、美しき高嶺の花のみ夢見ては、萬一失敗の折の思はれて、空恐ろしう私は存じ候いたらぬ事に候へども心添へまでに候。



山下一家より親切に待遇され、感謝の極と御知らせありしが、其事につき一言申置き度く候

現在、血をわけし祖父、御地にて有數の資産家、將來力と頼む事の候ふやもはかり難く候へども、養ひ祖父の御恩の猶高きをゆめ、忌却あるまじく候、

父は生れて三日目より當地の祖父に育てられ、萬に近き產を授けられしは、十年前の事に候ひしよしなるも、今日の有様はそも如何に、頭に汗せねばこそ惜しき心地もせざるなるべし、支途は不明に候へども、不動產はすでに抵當物となり、御許への學費さへ心配せでは送金出來かぬる次第に候はずや。萬事母へつらく當られ、はしたなき女を家に入れて私等との同居は、幾度に候ひしか、そを何とも申されぬ母上の御心は推すにあまりあり候。唯樂しみは御許の成人のみとはよく承り居り候ひし、御身も必ず御記憶の事に候はむ去年の秋、上京の際に利口な女故家の爲に乾度なる大事にして置けと云はれしお雪を、母上は後を恐れて心配遊ばされしも、祖父と二人して暇を遣し、唯誠の一心、死ぬ覺悟して其旨父へ申し述べし時は、流石、一言も怒りの言葉を聞かざりし嬉しさ、天に謝し居りしが、そは束の間、いまわしき噂の女共の口より洩れ候。四時絶ゆる事なきは酒の香にて候。

親から五六千圓の財產を貰つたとて何が有難いか、ボケ親など暴言をはき遊ばされ候。其上、自分の實父は財產家だなど折々仰せある爲祖父の氣色大に善しからで、不孝者とそれのみ申され候。

山下家と、絶縁のことは表面のみ、現に、御許をそちらに遣しゝも、勉學に適地たる田舍なると、猶それより大なるは、制かんとしてもさく能はざる骨肉により、親しく監督して貰はむが爲に候、もし此事を祖父の聞き知りなば、立腹は甚しかるべきも、そこまでは御存じなき樣に候。御地の祖父をおろそかに思へと申すにては之なく、唯いづれが重きか、いづれが輕きかを、知りて戴き度候、恩愛に迷はず、財に迷はず、それのみ念じ候。

去夏、御地へ參りしは、强ひて來よとすゝめられしまゝ、始めての土地、遂に好奇心に驅られ、熊野村の親友の許に遊ぶと云ひつくろひしが、良心にとがめられしばしは苦しき思ひいたし候ひき、肩をさすれ、足をもめと命せられし折は、心の中にて當地の祖父にあやまり居り候ひき

先日も一寸來られて、西京詣りをする故連れて行かむとの言なりしも、久戀の地、其樂しみよりも、萬一惡感情を求むる苦しみが勝る樣にて辭退いたし候ひき其時のみは節をまげざりしことゝて、今猶心地すがすがしう御座候

長々と、一人の父の非行を書きつらねて御許にしめす姉こそ、最大不孝者に候、私の狹き心にても正しく父上の失敗の跡の樣に見え候。御許の前途は遙かに候ふぞや、曇らぬ心の鏡にさらして、肝に銘じ下され度候

他郷に在りて物學ぶ御身に、申す筈にはなき事ながら、大浪大風にふかれもまれて、逆の逆なる境を通り越せし人こそ、價値の候ふとか、御許の境遇はすでに逆境に候、たとへ無法なる人の子にても、財はなくとも、將來武官たる資格はあらぬとも、何のことかあらむ、人世到る所に靑山ありと達觀して、眞に腕ある人となるべく修養の程望ましく候

廣き世に、姉一人弟一人の同胞、頼むは御許のみに候、いつもながらくだくだしう認め候 私の心中推しあり度候、成業の程神かけて祈り候

不順の候なれば風召さぬ樣、母上より御注意遊ばされ候

模範的良妻の手紙

留守宅より遠征の良人へ贈りし書翰

ひさ子

岸うつ浪の音しづかなるこゝ古郷の海邊のすまゐにてすら此日頃は譬へがたなき御暑さに候ものを萬里遠征の空ましてや水さへ自由に得られず塵埃はげしきてふ滿洲の地如何御暮らし被遊候や御伺申上候 留宅も皆々少しの障りも御座しまさず永雄も日々に成長いたし此頃にては父樣はと申候へば小さき手もて床の間の御寫眞を指ざすやうに相成候 まゝ乍憚御安心下され度候

先月三十日及五日のゑはがき九日の御手紙は正に着なつかしく拜見いたし候私より差上候三日四日及八日出の手紙御落手被下候や御伺申上候承れば奉天大會戰よりいまだ目ざましき戰無之中隊の方々皆うでをみがき次の會戰をまち居り候趣實にたのもしき御事にて御出征以來一年有餘生死を共にし膝下に御愛撫被遊候可憐の兵士の其樣を日毎に御覽被遊候御愉快は如何斗りならんと御察し申上候內地にては既に講和委員が渡米致され候よしなるも休戰などはいつの事やら別り不申殊に暑氣烈しき折柄とて此際御病氣などに御かゝり遊ばされねばよきにと明暮神かけいのり上居候素より御出發の當時生還を期せずとは仰られ候へどそは花々しき御戰死をこそ覺悟遊ばされ候なれ病などは誰しも眞平に御座候既に今日まで數度の戰に御負傷さへもなきは我家の爲幸福の至りにて尙此上も幾久しく御武運目出度一戰にても多く御加はり被遊國家の爲御盡しあらん御事をいのり上奉り候共に御出征後近隣に留守宅を置き明暮御相談相手となりて一戰毎に新紙の號外を見世の人は某地占領などゝ祝しよろこび居り候時にも私共は次の死傷幾萬といふ文字に寸時の安堵もなりがたく御互に早く其生命を知らんと致し候事も幾十度まづ此度も無事に候ひしよと心安むるひまもなく亦次の會戰に死傷幾萬といふ始末にて終に先日市川樣にも御戰死の中に數へらるゝ御身となられ候御本人の御名譽は長く靑史にかゞやきて軍人の務を全う致され候なればさぞ御滿足に候むと存じ上げ候も同じき御勳功をたてゝなほ壯健なる方方も有之候ものをと日々御目にかゝる度毎に御遺族の御心中御察し申上げ御同情にたえず候さはれ將校は平素より事あらん時の準備いたし居り候ものなればいまだあきらめねばならず候へども義務の爲に家をすて老親を殘して御出征なされ候兵士の方々の戰病死なされ候は一層御氣の毒の極に御座候私共とても御手紙をいたゞく度にあゝもし今宵にても電報と一聲なげ入れらるれば此手紙此葉書は夫が終生の絶筆となりて生涯は淋しき寡婦の生活よと郵便の聲にても無意味には

きゝとれず候併し一旦覺悟いたし候身の萬一の時には決して女々しき振舞はいたし不申此段返す〲も御安心被遊度候此度部下の方感狀授與いたされ候趣誠に御目出度御壽ぎ申上候あはれ此まゝ休戰となりて長く愛撫せし兵士を率ゐ梅田停車場萬歲聲裡に無事御凱旋あそばすといふ日に相成候はゞ如何ばかりうれしき事に候かと私は時々空想にふけることも有之候併し今日の場合かゝることの事實となりてあらはるゝの日果して有之候にや前途中々遼遠の至りに御座候何卒國家の爲十分御自重被遊度くれ〲も念じ上候なほまた御寸暇の節には公務に差つかへぬ限り御手紙にてもゑはがきにても御送りいたゞき度鶴首して相まち申居候今はそれのみ何よりのたのしみにて如何なる高價の美品も如何に味よき珍味佳肴も御身が御筆跡になれる一葉の葉書に比しては何等の價値も候はず況して御手紙をいたゞきしうれしさは拙き筆にはつくしがたく候　第六回追送品着いたし候よし安心仕候　北滿洲の山奧に於て最早一ケ年魚を口にせずとの御仰を承り何卒して差上ぐ



る工夫はなきものかと數日考へ候結果當地にてとりたての新らしき鯛を酢づけに致させ途中にて變味せざるや否やを案じ候へど假令變味いたし候とも私のまごゝろ丈にても屆候かと差出し候以來四ヶ月間日々如何と存じ居候ひしに器も中も無事に着いたし隊長殿をはじめ從卒馬卒に至るまで一尾づゝ御分配被遊皆々様非常に御よろこび被遊候よし實にうれしく存じ候心こめにし追送品の無事着いたせし御報を承るほど愉快なる感じは候はずまた追送品を差上げるほど私共にとりてたのしき務は候はず何卒どしどし御注文いたゞき度願上候還送品昨日補充隊より轉送致され御目錄書の通り正に請取申候御安心被遊度しかし何とも知れざる一種の臭氣を放ち候には一同閉口いたし居候

先は右近況御通知かたがた御返事までかくの如くに御座候　早々

月　日　　妻より

旦那様御もとに

二伸庭に咲きいでし夕顔の花一りん封入いたし候雲井はるけき君にさゝげんと心して押花といたし候品清く潔白なる私のまごゝろとともに御覽遊ばされ度候今宵は空一點のくもりなく九天にすみ渡りし月影の御やけき戰地のそらにて如何眺めさせ給ふらん私は例の北窓の許に坐して恍惚夜の更くるもしらず候折しもいづこよりか涼風と共に傳へくる吟詩の聲ほがらかに耳かたむくれば面白く

大海波鳴月照營　誰知萬里遠征情
孤眠未結還家夢　遙聞中宵喇叭聲

と實に萬感たえがたく候これわが郷里の夏の夜の有様に御座候かしこ

雁のつばさに籠めし海山千里の消息

はるさめ女

御訣別このかた不取敢安着の御報申上候儘けふまで

絶えて道々の狀況此地の樣子など御通信不致くれ〳〵の御約束にたがひ候事思召の程も如何あらんかと明け暮れ心にかゝり候も、例の鬼角樽とお針に親しみ易き性とて筆とは至つて緣とをく遂にこの失禮をあへていたし候罪幾重にも御ゆるし玉はり度候、扨も御地に住居候十とせの間始終かわらぬ御懇情を蒙り候事、道をさかり日を經る程にいよゝ益ゝ身にしみ〴〵と嬉しさたとへん方なく候、當地着以來いまだ日淺きと春とは申せ北國の事とて今なほ御



地二月頃の時候に候へば、自然人も我もたれこめ勝にていと物さびしき折柄、家族打つどふ夕げの時の話題はいつも誰の口よりか必らず御地の噂語り出られ殆んど毎日〳〵繰返しせめてもの心やりと致し居候回顧いたし候へば數十日のあと城頭の銀杏のかげをふりかへりつゝ阿蘇が峰の煙の末の名ごり惜みて御地停車場に盡きぬ御別れいたせし頃は御地は既に梅は散りぎわ、櫻のゑまひも遠からぬけしきに候ひしかど、上り行くにつれて氣候は降り、中國邊

りへ參り候へば梅は七分がた開きて今見頃なるに、車津三原の梅林もしのばれ候て、いかで心まかせの旅ならんにはとあるじと話し候事に御座候、其夜は汽車にあかし、あくれば舞子明石の浦々はるかにかすむ淡路島など四時の絶景、いつ見ても飽かぬながめに見とれ居候内、兵庫、神戸も打すぎて大阪に着いたし叔母の許へ二泊仕り候、生憎春雨にふり込められいづこの見物もなし得られず、日ねもす火桶かい抱き、くさぐさの話に過し申候、御前樣といつも御噂申上げては、理想的よ模範家庭よと御身の上御羨み申居り候ひし松子樣の事、此度叔母より聞及び候へば昨年暮御良人樣一夜の御いたつきにて御死去被遊候よし、げにいざよひの月や人の世の中とか申せ、十歳をかしらに五人の御兒かゝへられ、いまだうらわかき御身にて此俄かのまが事に出遭ひ玉ひし松子樣の御悲嘆は言葉には盡されぬ樣なりしとは御無理もなき御事と實に〳〵御同情いたし申候、されどたよりとせらるべき御みよりなき御同家の事とて强ひて御心引き立て玉ひて内外の御きりもりも中々なると、元來淸き御性質なる松子樣には浮世の裏面にひそめるおそろしさなどつゆうたがひたまはぬを奇禍として、御良人御生前の配下たりし人の、御報恩の爲を口實として、たくみに御財政の事に立入り候を流石に怪しとさとり玉ひし頃は、旣に六日の菖蒲、數多の公債證書と共に其者はいづこにか身をかくし候由、松子樣も始めて强食弱肉現世のすがた恐ろしさつく〳〵味はひ玉ひ、つい先頃大阪の御住宅を引拂はれ同時に三人の御召使ひにも夫々暇とらせられ、お一人手にて二歲の御子は御脊に四つと六つは兩の手に、お上の二人が引ずる樣にカバン、袋など携げたまひて御郷里土佐へ御歸り遊被候由御出立は秘しあり候ひしも特に御親しくいたし候叔母、外に五六の御方停車場まで御見送り申上、いづれもまなこ濕はぬはなかりしと、語るも聞くも袖ぬらし申候さるにても憎きは其奸侫者にて、私でさへ草の根わけても尋ね出しこらさでやはと存じ候ぞ、まして御當人の御心中如何あるべきぞと實に〳〵御いたわしく存

候、御當人は自らの愚かよりと御諦め被遊居候由なれども、此まゝ泣寝入りも餘りに歯がゆしと、御知己の人々御相談の上御後々の事ども、叔母の宅にて御引受けいたし只今公然の手續中とか承り候が結局は取かへしの付かぬ災難にかゝられ候事誠に御氣の毒にたへず候誠や極端なる順境には極端なる逆境伴ふとか、こを思ひ候へば私共の如くいつもいざよひならぬ居待の月のそれのよふに世渡り候者の、むしろ安全かとも考へられ候

大阪をば午後の七時最急列車にて出發いたし候處乘客中々多く迚もくつろぎて夢結ばれず、兎角する間に夜のとばりのかゝげられし頃は興津江尻のあたりにて、朝霞模糊たる中に遙かに富士の根雲に聳え候さま得もいはれず、宛で繪の樣なる景色に此時斗りは憂き世の何物をも打忘れ歎賞の聲ほとばしり申候、兼て不風流のあるじも此景のみは別と申候きよ子も富士山てふもの始めてまのあたり見る事とて、物珍らしう窓外のみながめ居候いつしか靜岡、三島も打過ぎ、こゝ御殿場と聞きて左の窓に眼めぐらし候へば十とせ昔送られし此山、再びけふ迎へらるゝ富士の根



は白羽二重もて包まれし如く浮世の塵は露程もかゝらずいと神々しく仰がれ申候、やがて箱根も打こへ國府津藤澤邉り過る頃は、春の旭うらゝかに梅は滿開致し居候流石はあで人の御別莊散在いたし居候土地丈けありと被存候、追々都近く相成候得ば心地何となく引しまり髪かき身繕ひ、手荷物の始末など致居候間にはや新橋に着き申候處プラットホームには思ひもふけざりし竹子樣御夫婦がお可愛いゝのさへ抱へ玉ひての御出迎へ誠に嬉敷存じ申候かつて御宅樣にて御新婚當時の御寫眞拜見いたし御丸髷姿は始めてならねど兎角お十一二の時のおもかげ殘れる私の眼には赤ちやんかゝへ玉ふが不思議にて、よくも私などは腰のまがらで居るよと存候、夫より一トまづ旅宿に落ち付き、たけ子樣と十とせの御物語りは糸引くよふに候を、お疲れならんと遠慮し玉ひ、あすは幸の日曜なれば御夫婦にて所々手引せんと仰せ約し玉ひ、此日は御別れいたし暮るゝを待ちてふせり申候

あくれば今日は日本晴れの仕合せよしとあるじが要辨にとて外出の後淸子に髪結びやり、私もいそ〳〵と身ごしらへの處へ、はやお揃にて御出被下候たけ子樣にはきのふにかわる御盛裝、當時流行と聞及び候縞お召の對小袖に濃花色羽二重の小ぶき、お羽織は思ひの外の黑ちりめん、お半ゑりは思ひ切り派手なるぬひ模樣にかの御きりよふを一層引立て、おみ帶は何やらん私共は名も存ぜぬ美しき織物、おくしはけさ御あげ立ての大一番に紅ひもゆるおてから一きわ美しう御見あげ申候、けふは赤ちやんもお連れ遊ばさねば、どうして是がお阿母さんと思はれ申候ふや、八字髭美しき御良人樣と居ならび玉ふを此まゝに擬して新郎新婦と雜誌の口繪にも揭げ度樣に存じ申候、此みやびたる御姿に、ともすれば見とれ勝に漸く仕度とゝのひいざと斗り四人にて旅宿を出でまづ道順として不忍池畔より上野公園へと歩をはこび申候、此邊りは大體の規模も大差は無之候へども不忍池に架けられし石橋、博覧會跡の建物、上野の山に入りて東宮殿下御慶事紀念の美術館など、是まで都の友よりおくりこしゝ繪はがき

にてのみ見たる私共には一々まなこそゝがれ候をたけ子様御良人の御こまやかなる御説明に何もかも委敷相分り申候、山内一とめぐり致して公園前より電車に乗り是より名高き三越呉服店へと御みちびき被下候、神田日本橋あたり電車線路にそへる商店はいづれも見まがふ斗りに建築立派に落成せるあり、今八分がたなるもあれば着手始めしも御座候て、道路の改正と共に丸で見當付き不申走る電車の兩窓にまなこくばり居候内、いつしか駿河町三越呉服店前、と車掌のよぶ聲に我にかへり御夫婦の後について下車致し



候へば、折柄の雛店善美を盡して店前にかざられ候にまづ清子目をつけ店硝子に顔さしよせて見とれ居候をたけ子様ほゝゑみ玉ひて、中にはまだ〱澤山とうながされて漸く入口に到り候處、こゝには箱馬車二三臺、俥は數へもきれず居ならびて右にそびゆる三井銀行の宏大なる建築など打仰ぎつゝ店内に入り下足を預け茲に始めて三越のお客様の一人と相成申候、店内の模様は迚も拙き筆には盡され不申、實に行届きて立派なものとの語にとゞめ置候、來客は十人十色上は箱馬車のおぬしにもやと察せらるゝ貴婦人より、下

は純粋の赤毛布連に至るまで、男女を通じてあらゆる階級の人つどひ、品物購ふも求めるも、店員は平等無私丁寧に取扱はるゝにはいと心地よく感じ申候、されば御多分には洩れぬ田舎出の私共も餘り顔赤らめで二階三階と見物いたし候、陳列の雛人形にさらでも足引止められるを清子のうるさく袖ひき候に遂に財布の仲裁と相成人形は清子の手におさまり申候。かくてある内餘りに時の移り候を氣遣ひて歸途に就き候時しも夕風いとゞ身にしみて此名物のみはかわりなき、ほこり舞ひ立ち候中を新橋まで電車にて参り某洋食店にて晩餐したゝめ、是より序に理想的の劇場とも申すべき有樂座へ御案内致さんとの仰、御好意はこよなう存候へども、留守致し玉ふ赤ちやんの御上、氣にかゝり候とて御辭退致せば、お乳はミルクお世話は物なれし婆やなれば心配なしとのお言葉に、又々元の電車にて御供いたし候、此時の劇は名古屋西川連中の舞にて藝に不足のあるべき筈なく、加ふるに座の取扱ひの丁寧なる事却て恐縮いたす斗りに御座候、かの田舎にて有勝ちな荒くれ男の面倒らしき扱ひ振受け候とは雲泥の差、座方は皆妙齢の婦人にて清楚なる束髪に、白まへかけ甲斐〲敷く言葉遣ひもしとやかに働き居候、設備は東京劇場中にても最新式とか承り候が、流石完全のものに候、觀覽席平座は殆んど椅子に候故、自然外國人も澤山見へ申候、劇が劇丈けに觀客の半は花柳の婦人にて、あとは寶石貴金屬まばゆき斗り頭にも指にも胸にも處きらはずかゞやかせて晝をあざむく電燈と光を競ふ的の御夫人連かゝる御方達をや成金黨とか申なるべきかと見られ申候、其他大黒頭巾かぶりし様なる大ひさしに思ひ切つたる白薔薇かざし玉へる令嬢もあり、稀には高尚のお髷にけしき斗りの化粧し玉ひて御身のまはりもさまでけば〲しからず、御物こしもどこやら鷹揚の中に謙遜らしく何んとなふ奥ゆかしく仰がるゝ御一族もあれば私共お仲間のポット出が盲者蛇流にて押乘りしも二三見受け申候、昨年暮村田夫人が都よりのお土産話の中に羽織は殆んど色物と承り居候にけふの一日私の目に映じ候は

色物よりは黒の方遙か多く、わけても流行の中心たる花柳の人は殆んど夫なるがいぶかしく存じたけ子樣にうかゞひ候へばさなり咋年冬は黒は全滅の有樣なりしが此新年よりとみに色物おとろへ流行は黒にまひもどりぬとの御答へに始めてたけ子樣の御いで立もうなづかれ申候、實に流行の變遷車輪の如きにはあきれ申候、兎角する間に演舞も終りをつげ候間此處にてお兩人にお別れいたし旅宿に歸り候は十一時も過てあるじは旣にふせり居り候ひし故淸子を相手に、けふの愉快を繰返しつゝ臥戸に入り申候。



さて心靜かに観想めぐらし候へば三越といひ、有樂座といひ範圍廣く各種の人を網羅いたし候場所を見渡し候へば現時聲高き不景氣風は、どこ吹くかとの念起り申候概して衣服裝飾の華美お化粧の凝りたるには驚く斗りに御座候畏れ多くも戊申のみことのりはそも何故ぞと田舍氣質の私共にはうたゝ感慨にたへ不申候私共には矢張り田舍住居が適し居候と見へ、斯斗り東京〳〵と憧れ居候にも似ずまさか參りて見れば生存競爭の渦中に巻込まれし心地いたし、

一日も早く出立いたし度く存じ申候もあながちまけ惜しみには無之候、前々より懸念致し居候とは反對に服裝などに就ても案外窮しとの念起り申不候いくら力限り財布の底はたきて新調の一重着て歩き候とて都の人は見もかへらず、さりとてアット驚かす斗りのいでたちは、夫こそ蟷螂の斧、どふせ叶はぬならばむしろ此の銘仙主義が利こふと大悟徹底、自己の境遇に滿足致し申候、かく悟りて見れば何の煩悶も御座なくいつしか華胥境に遊び申候、あけの日も幸の好天氣に朝げとく濟ませ一同打つれ親戚知己の訪問にと出かけ申候、滯京僅か三日の事とて中々心せわしく候にも拘はらず、なつかしさのあまりいづれにても夫や是とお話永く相成候てあるじにせき立てられては盡きぬ御別れいたし申候、其翌日も晴天ながらお寒さ凛烈にてから風吹すさみ兎角火桶の許戀しう候も、かくてあるべきに候はねば午前の内は神田より銀座あたりへ買物に出かけ正午過よりは行李整頓、午後八時の直行にて出發可致五時頃には既に旅宿を出で途すがらたけ子様御宅へ罷出先の日の御禮幷に御別れいたし、停車場への御見送りはいづ方へもかたく辭していよ〳〵雪國の旅にのぼるべく上野を發し申候

夜行の事とて何の景も見え不申、乘客は東海道に比し大にすくなく候ひし故、寢臺等の設備なき此あたりの列車も割合に樂々と夜を明かし申候、福島あたりより四方白皚々兼て御話しに承り居候を實見いたし候處想像にもまさる壯觀に只々驚き入申候、雪國に生れ玉ひし御許様に此邊の景色申上んはくだ〳〵しければこははぶき申候、其他當地着後言葉の不明よりして仕出かし候滑稽、異様に感じ候風俗など聞こし上げ度は山々候へども、餘りに長篇と相成候間、そは追て申上ぐべく候、終りにのぞみ當今の氣候一寸申添へ候はんに、梅はいまだ莟深く着物は綿入れを重ね羽織もとられ不申候、是にて寒さの程御察し被下度しかし幸に宅一同風にも冐されず濟子は日々通學元氣よく暮し居候段乍憚御心安う思召玉はり度候

先は乍延引途中の見聞取つまみ申上げ候、末筆にて

恐入候得ども御老人様御始め御良人様へ宜敷御傳へ玉はり度御願申上候　猶時候折角御いとひ被遊様念じ上参らせ候　かしこ

四月十日　　　　　　　　　　壽子

良子様御まへに

人の缺點を拾ひあげた女の手紙

眞菰草

都の友へ、田舎寺の座敷より

い〻時候になりましたねえ。

お變りもありませんか。此間は長い御手紙を有難うございました。相變らず黄ろい顔をして、痛みもせず、肥えもせず、毎日ウヂ／＼と出勤してゐます。褪めた紫袴をはいてお寺の門を出で、褪めた蝙蝠傘をピンとかざして、トボ／＼野道を行く姿を想像して下さいよ。

學校も愈々改築のことにきまつて、十日程前から舊校舎を取りこぼつて居ます。あの場所で、敎場を今度は二階建にし、雨中體操場を新築し、昇降口も便所も新らしくするので、費用は約七千圓位――或はそれ以上だといふ噂です。竣工は來月中、評判のボロ學校もちつとは見られるやうになるだらうと思つて樂しんでゐます。

それから校長も、どうやら退くらしい樣子です。私等が敎はつた時分からでも、もう隨分永い年月ですものねえ。今頃が退き時でせう。後釜はまだきまつてはないけれど、例の△△さんね。それあもう一方ならぬ野心があるのよ。尤も主席だから無理もないやうなものゝ、唯一人同情を寄せてる者はないんすからねえ。村長も、他人は知らぬ事、この私の眼玉の黒い内は、あんなものは校長にはさゝないと言つてるさうですし、學校でも□□さんなどは、あんな奴の下になる位なら首縊つて死んで了ふとか言つて、大分奔走してゐ

ます。もう校長を除くの外は皆一致して、極力△△さん排斥に腐心してゐるのよ。毎日、うはべではニコニコしてゐても、腹ん中ぢやお互に、今に見ろと思つてるんだから、考へて見れば可笑しいわねえ。だからこんな田舍小學校の校長の椅子一つでも、この位の軋轢や暗鬪があるんだから、政界や實業界の事などは思ひやられるわ。實は校長の退くのも、△△さんの壓迫に堪へられないからだといふ事です。さう言へば此頃メツキリ校長氣取よ。男なんてつまらない者ね。こゝ暫くは面白い所なの。

　花子さんの事に就いて、大分御心配の樣子ですね。御無理もありません。貴女のお妹さんを、かう言つちや何ですけれど、私はどう考へて見ても花子さんは強情だと思ひます。女としては、餘り強情に過ぎる。貴女だつてさうお思ひでせう？東京にゐらつしやる間も、あの強情の爲に、あゝした迫害にお會ひなすつたのです。花子さんの御手紙や何かで想像すると、朋輩の何とかいふ女など、ねそ〳〵した、うつかりものらしいのですが、それでもお氣に入つてゐるのですから、眞更先方ばかりが惡いとも言へますまい。少なくとも私には思へません。先方の奥樣といふのも、私は一寸知つてますが、隨分強情な女です。ものがよく分つてゐて、それで強情なのです。つまり強情と強情とが衝突したので、無事に收まりさうな筈もなく、主從だから花子さんの方が負けるにきまつてゐます。ねえ、さうぢやありませんか。

　けれども、貴女のお母さんも、僅に教育の法を誤つて居られます。こんな事をいふと、片端から貴女の肉身をけなすやうですが、今日だけは堪忍して下さい。そして言ふだけの事を言はして下さい。貴女との仲なればこそ、こんな失禮な事も平氣で書けるのです。私だとて、漫然人の親兄弟をけなすやうな人間でもないつもりです。どうかさう思つてね、讀むだけは讀んで下さいね。一體貴女のお父樣が、貴女も知つて居る通り、お坊ちやん育ちの我儘な方でせう。それで溫か味といふものがちつとも無い所へ持つて來て、お母さ

んが、御自分の若い時の事は忘れてしまつて、花子さんを一人前の、一家を經營していくに充分な人のやうに思つてしまつて、何か過ちがあると、すぐ厭味を言つたり皮肉を言つたりして溫情以て之を導くといつたやうな風が少しもありません。花子さんが強情になつたり自棄を起したりするのも、あながち無理ではなからうと思ひます。出來る事なら私の傍に置いて、いろ〳〵と靜に敎へて上げたいと思ひますがなか〳〵思ひもよらぬ相談です。



まだ少さいけれど、藤子さんだつて、葉子さんだつて、いんまに花子さんのやうな人になつてしまひますよ。お母さんが直ぐ厭味を言つたり皮肉を言つたり、なさるものだから、子達みんなが、親を有難いとは思はないやうになつてしまうのです。厭味を言つたり皮肉を言つたりするのは、決して人を心服させる道ではありません。

あの此間の事に就ても、花子さんは泣いて厭がつたのです。これも尤もな話です。誰しも厭でせうし、まして若い女の事です。猶更厭がるのは分つてゐます。それをお母さんは「親のいふ事を聞かない」とか何とかで。私は「それはちと貴女の方が御無理ぢやないかと思はれます。失禮ながらあれだけ厭がつて居られるのを、親の威光で押しつける――といつたやうな風は甚だ宜しくありません。どうしてもあれを花子さんにさせなければならないのでしたら、諫言を以て、半分は頼むやうにお諭しなさらなくちやいけません」と申上げて置きました。どうせお氣には入らなかつたでせうけれど、如何にしても見て居られなかつたのですもの。

聞けば、貴女の方へ奉公口はないかといふ御手紙が來たとの事、貴女の御意見の通り、決してそんなものを探すには及びません。今そんな事をするやうでは、益々自分の强情を披露してゐるやうなものです。どんな事があつても、あたりまへでは私が出しませんから、其點は慥に引受けました。

私も月に二度位、貴女のお家へ參りますが、實はその二度もあまり行きたくはないのです。ちつとも面白くないからなので、皆さんが、お父さんにはガミ〱言はれ、お母さんには厭味を言はれて居らつしやるのを見てゐるのがつらいのです。

いつかは一度、お母さんに――お母さんを通じてお父さんにも充分私の思ふ所を申上げたいとは思ひますが、さて、これぞといふいゝ時機もないのです。下手な事をして、徒らに心持を惡くさせてはなりませんからぢつと見てゐるのです。また一方、こんな若い者が、子供の五人も六人も生んで、あらゆる辛酸を嘗めて來られた人に對して、忠告がましい事をいふのは、實際失禮にも當りますし、さういふ人程、そんな風の事を言はれると、餘計氣を惡くするものです。だから、もう何も言はない方が宜からうか、と思つてゐます。あんな風で此後も同じ事なら、お妹達は益々强情になるばかりです。それを思ふと、もう立つても居ても

居られないやうな氣がします。どうしたらいゝでせうねえ。

私の生徒は私を非常にこわがつてゐます。笑つてゐる時に聞いて見ますと、私の一喝は何物にもたとへられない程こはいさうです。併しまた非常になついてゐて、朝一寸遲刻して出勤すると、大變に嬉しがる。頭が痛むと言つて歸つてゐますと、すぐ大勢で家へ來て、どうか明日は休んで呉れな、頭が痛むつて言はれると、明日は又休みなさりはせんかと思つて心配しますつてねえ。そんな事をいふのですよ。私は小學校に居る内から師範を卒業するまで、隨分長い年月であり、いろ〳〵な先生にも世話になりましたが、これ程まで師を思ふた事に、一日もありませんでした。お互に××先生は大好きでした。いくら叱られても直ぐ好きになりましたが、それとてかうまではどうしても思ひませんでした。

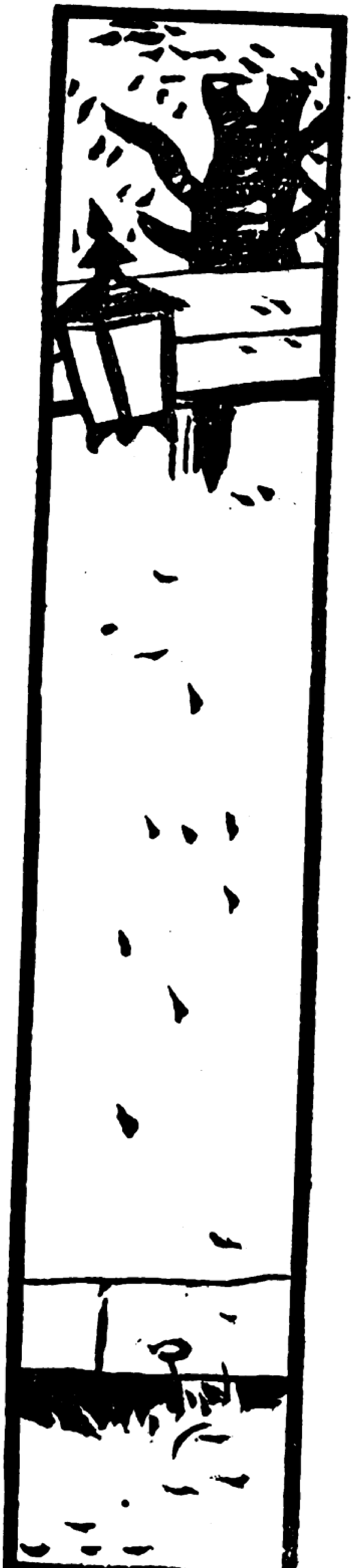
いろ〳〵と下らん事を並べて、済みませんでした。貴女の心配の増すばかりだとは思はないでもなかつたのですけれど、もう



今日といふ今日は胸の中にたまつたあるだけの物を、すつかり出して了はなくちや、どうあつても堪えられないやうな氣がして、夢中で筆をとりましたので、どうぞ惡く思つて下さいますな。これは一ケ月程前の事ですが、弟からハガキが來てね。今度の土曜には歸つて來なつて言つて來ましたの。なぜだらうとは思ひましたが、私の家も貴女のお家に劣らない、暗い家ですからねえ、まあよかつた位で居た事がありましたが、あとで聞いてみたら、父が、私が薄給の中から書物や雜誌を澤山買ふのを怪しからんと言つて大に怒つて、酒ばかり飲んでゐるから、そんな所へヒヨロリと歸つて來ては益々工合がわるからうと思つたからだといふのでした。

私はもう心配事があつて〳〵一日として愉快に暮した事はありません。馬鹿騒ぎや遊山は嫌ひ、と言つて酒を飲む事も出來ない。せめては書物にでも縋つて、はかない慰藉を得やうとするのです。それでついつまらないものでも買ふ事がありますが、私から書物を取り上げられてしまつたら、どうして生きて居られませう。

もうこれで止めます。頭がチカ〳〵痛んで來ました。この手紙をポストへ入れに行つて、歸ると直ぐ寢床へはいつて、寢ながら生徒の作文を見るのです。それで一寸一日のムシヤクシヤを忘れますの。ではさようなら。



虚榮にあこがれし三年の夢

都會に遊學せし女學生が誘惑に陷りし懺悔の自白

露　子

静さま、お久し振りの御手紙うれしく拜見いたしました。西を向いても東を見ても、世の人は皆私をあざけりのろふ樣に思はれて此頃では一間の中に籠つたまゝありし身の罪をせめて、悔悟の涙にくれて居ますの。

あらゆる知己からは墮落者よと後指さゝれ幼なじみの友からは交はりを斷たれ、あまつさへ國許の父母にまで、親でない子とも思はぬと捨てられました私をよくまあ友と云つて下さいましたわね、ありし日の事は夢とすてゝ今はもう再び元の清い心に歸つた此身お優しい御心づくしの御注告は決して忘れは致しませんどうぞ静樣、御安心なすつて頂戴！

せめてもの罪ほろぼしに今までの次第何も彼も包まず申上げてしまひますからお聞き苦しくともどうぞ暫く御許し下さいまし思へば最早四とせの昔、小學校を卒へた時から私も村でお針の稽古にでも通つて居ましたならば今の樣な恥しいめにも遇はず却つて幸福に暮せたかも知れないのでしたが、なまじつかお美しいの、お聲が好いの、ヤレ級長樣で候などゝ寄つてたかつて持ち上げられたばつかりに、虚榮の芽萠えそめた少女心がどうしていつ迄、平ですみませう、私ほどの身で有り乍ら草深い片山里に朽ち果てるには忍びない、いでや花の都に打出でゝ華々しい生活がして見たいなどゝ、とんでもない自惚心から、止められると知りつつも兩親の前に東都遊學の希望を述べますとまあ其の返事が實に案外、三年間は暇を遣る、その代り村の素封家の娘として恥ぢない程の修業して歸る樣にと美事に

許して下されたので御座います、さア其時の私の喜びどうぞお察し下さいまし、落ち付く先は芝のしるべ虎の門の女學館に選び初めたのは丁度其の年の九月からで御座いました、鳥なき里の蝙蝠とやら、故郷でこそ村一番と人に謳はれ自らも許して居た天晴ハイカラ氣取の私も都大路をゆきかふ女學生達の美しい派手な服裝だの思ひ切つてしやれた髮の結び振りだのに比べてはそれこそさながらの月とすつぽん、迚もお話になつたものでは御座いませんの、鳥の巣よろしくのポヤポヤの大廂にブンブルデンの海老茶袴、踵のへつたポタン靴で犬でも猫でも蹴散らかして歩く様なのが東京の女學生だと思つて居る村人達にこのなよ〳〵した美しいスタイルを見せたらまあ何と云つて驚くだろうと自分が其の美しい人達と一緒に交つて物まなびするのがいかにもえらい事かの様に心ひそかにほこつて居たので御座いました、殊に女學館ではみなりや持物に美を競ふことは思ひの外で一寸した例がふだん着の羽織裏にも羽二重だの鹽瀬をつけるとか學校通ひのカヲンルでもヤレ空色の、とき色の、ねひとりが流行る縮りでなくてはといふ様な有様ですから自信力の無い虚榮心にとらはれた私も忽ちにして此のうづの中に巻込まれてしまつたのでした、まして頭を押へる人もないので見様見眞似の贅澤三昧スツカリ江戸ツ子に成りすました氣で其の頃流行つたマーガレツトにドロンオークの巾廣リボン、朝な夕なに抱へて通ふ書物包の中はそつちのけで心も空に浮かれ歩いて居りましたのです。運動會や音樂會は一度ものがした事はなく芝居の味を覺えそめたのも其頃から、某實業家の催された園遊會の餘興にとて乞はるゝまゝに自ら小督局の活人畫を演じたことさへ御座いました。

その翌年の秋頃から私がお成門から電車に乘ります時、丁度朝な〳〵同じ處から同じ電車で運ばれて行く高等商業の制服制帽つけた眉目淸秀の學生が御座いました。月日が重なるつれて私は何となく朝毎の登校が待たれる様に思はれて、一日でも其の人の姿の見えない時は終日學課も手に付かない位になりましたので御

座います。

かくて秋も終りの或る夕の事、門口に佇むで沈む夕日の淋しさに故郷のことなど想ひ出して涙ぐむで居りますと袋入のヴアキオリン片手に通りかゝつたのが忘られぬ彼の人、ハッと思つてうつむきますと先方から帽子をとつて「ヤ、毎朝失禮いたします、お宅はこちらでゐらしつたのですか、僕も直き近くですからどうぞお遊びにおいで下さい。」となれ／＼しく聲かけて女持の樣な金ぶちの名刺



まで渡されましたので後悔する日の有りとも知らず私も遂名乘つてしまつたので御座いました。

そしてきやしやな後影が夕暗に消え去るまでおかず見送りて居た我は我に返つてその小形の名刺をみますと名まで優しい松原峯雄、つい近くの清水館といふ下宿に居るのだといふ事がわかりましたの、其の夜は何だか夢の樣にあけて翌朝も矢張りお成門で一緒になりましたがもふ百年の知己でもある如くに樣々の言葉を交したのでした、そして私一人が内幸町で外濠線に乘り替へるのが何となく只何となくつらい樣に思はれたので御座いました

こんな事が重なります間にいつとなく學業の方はお留

守になつてたゞ新しい衣服を着てみたり美しい花をかざしたり果ては學校の歸途美顔術に日參してまで、ただから美しく見てもらい度いばかりに頭を痛め、おまけに品川の妙華園で作らせた大きな花束に一壜五圓もする香水を雨と注いで送つたことさへ一再ならず御座いました、(尤もその頃はもうお互に往來が始まつて居りましたのです。)されど金のなる木を植ゑては居まいし元來月に三十圓と極めてある學資だけで限りない贅澤や慾望が充たせるものでは御座いませんのでよんどころなく國許へは佛語を習ひはじめたとかピアノの稽古に通ふとか心にもない僞りを云つて平均五十圓位づつ送つて貰ふ樣になりましたので母も不安に思つたので御座いませう月每の費途を細かく記してよこす樣にと手紙の末にかいてないことは御座いませんほどでした。

腰辨街道の並木のかげをテク／＼通つた揚句の果に漸く僅かの月給にありついてホツと息つく官員さんもある世の中に何ぼ家には資產が有つてもたかゞ女ひとりで五十圓からの金を湯水の如く使ひつくすとは質朴な村人達にはきつと事實とは思はれませんでせう。

惡事(？)千里を走るとやら私達の噂がいつとなく世間の口端に上されて、私は本郷座の棧敷でみかけた、私は暗夜の芝公園でなどゝ友のさゝやき合ふこゑが私の耳にまで入る樣になりました頃には一方では學校宛で注告狀が盛んに達するので何程放任主義の學校でもまさかに左樣なことも御座るかとばかりでもすまされず、保證人(止宿して居た家の主人)を呼出して細かにたゞしたのださうで御座いました、學校の手前だけでもぼろの出ない樣に取り繕ふて置いてくれゝば私だつて生涯恩にきましたでせうに、其の家でも若い學生を引入れたり夜更けて出歩く私の亂行にはホト／＼持てあまして居た折柄なので尾にひれ添へてさらけ出されたから全く以て此の身の立つ瀨は御座いませず、遂に學校からは停學といふ有りがたい辭令が下つたのでした。さあ斯うなればもうやけです、前にも增して亂行は募る、とう／＼その家にも居憎いので移りましたの

が今の此の煙草屋の二階で御座いますのその中に國許で、事の次第が洩れたので餘程驚いたものと見え父と分家の伯父とが顔色變へて迎のために上京いたしたので御座います。

　戀は盲目とやら申します通り甘い歡樂の夢路を辿つて居た私はゆくてのみちに暗黒な深い〱谷のあるとも知らず老の眼に涙うかべての父のいさめも馬に念佛、今から思へば恥しい言葉のかずかずで漢語まぢりに毒づきましたので流石の父も愛想をつかし、さらば父とは呼んでくれるな、墮落した娘に未練は殘さぬと唯一言を置土產にそれでもどこやらすご〱と歸鄕したので御座いました、けれど此の方が氣樂でよいとどんなに喜びましたらう、かくて惡魔にみせられた



私は一歩一歩と墮落の淵ぶかく沈んで參りますうちに忘れもいたしませぬことし彌生の晦日の夜、いつもに似やらぬ蒼白いかほいろして松原が訪ねて來たぢや御座いませんか、何だか胸がドッキリいたしましたので仔細を尋ねますと實は鄕里の父親が危篤との電報がきたから直ぐにも出立しなければならないが生憎月末で手許に殘りがいくらも無い、一週間もすれば必ず歸京つて來るからどうか三十圓程立て替へてくれまいかとまあ斯うなんで御座いませう私だつてもう國許からの送金は絕えましたので其の頃では宵暗にまぎれて質屋ののれんくゞつてやり繰りつけ

て居たのですもの、迚も三十とまとまつた金の出來る當などは御座いません、さりとてこれを調達へなければ機嫌を損じるは知れた事、えゝまゝよといふ氣になつてこればかりはと常々秘藏の懷中時計を鎖ながらに渡してしまつたので御座います。

其後十日あまり經ちましてもそよとの音信も梨のつぶて、安否の程も氣づかはれて淸水館を訪ねますといつも松原がふく提灯と綽名して居るおかみさんが殊更とがつた腹立ちごゑで松原さんなら三月もたまつた宿料ふみ倒して晦日の晩から姿を隱しちやつたんですよ高商の方もきゝ合せたけど似よりの者もありやしないとさも〱私の知つた事かの如くどなりつけられてしまひました。さては此の身も欺かれたかと無念の涙こみ上げるのを强いて奥歯にかみしめて其の場はとにかく繕ろひましたものゝ家に歸つて机の前にもたれますと張りつめた氣が一時にゆるんで、あゝ泣かずには居られませんでした、悔悟の涙、追恨の涙、口惜しなみだの止度なく涙の泉のかるゝまでもと其夜すがらを泣きあかしたので御座いました。そして惡夢からさめた冷やかな頭腦で考へて見ますと今までは何から何まで信じ切つて居たその人の言行がどうやら辻褄の合はぬ事ばかり、はじめて此の身のおろかさがしみ〴〵と思はれたので御座いました。これも自ら招いた罪、誰を恨まう樣も御座いませんがせめて父と一緒に歸國して居りましたらかくまでの辱しめをうけずにすんだのかも知れなかつたと今更ながら親の有りがたさを思ひ知つたので御座います。

それにつけても地方で育つた正直な少女達は殊に誘惑され安いものですから虛榮心にかられて上京するのも考へ物で御座いませう、あの時都にのぼる私が羨しいとてお泣きになつた靜樣を今は私がお羨み申して居りますのですわ。

あなた此の節でも矢張り折々は妹をたづねてやつて下さいますの？　父や母はどんなに案じて居りますでせう？　もしやおついでも御座いましたら露も今は悔い改めて不孝のおわびをして居りますと唯それだけど

うぞお傳へ遊ばして下さいまし、私も少し心にちかつたことも御座いますからこの後暫くはおたよりいたさないかもしれませんがそれは健かで居る證據とどうぞ御案じ下さいますな、さらば靜樣御身御大切に……。

四月十五日　露より

靜さまにまゐらす

憧がるゝ少女の手紙

内藤千代子

柳田さんへ（其一）

早速御返事有がたう。

まあ柳田さんは怖い方にお成りなすつたわね。私頭から叱り附けられてばかし、讀み終つて情なく思ひました。恐れ入りましてよ。モウ一言も御座いません。併し柳田さん、ちと酷でせう。新ダイヤを光らすやうな浮薄なヴアニチーに胸を惡くして、頭痛を催すべければ——とは。どうせ女は虛榮のばけ物だわ。なればこそ乳姉妹の君江の樣な人さへあるぢやありませんかまたなまなか脫俗でもされて、坊主臭くなられても堪らないですからね。何うして何うしてこの胸板三寸の中に疊まれた……婦人胸中の秘と云ふものは、なかなか殿方の考へて被居しやるやうなものぢや御座いません。ほゝゝこれや一寸雜誌の受け賣？　ですがね柳田さん、女學生が何うしたのかうであつたのつて何事です、こは餘りよ。頭さへあればそれで十分ぢやありませんかつて頭とは何の事だか知らないわ、私は女ですもの。感じやすく泣きやすい弱い女ですもの。よく新聞や雜誌などに何々女學校優等卒業生なんて同じ年紀の人の寫眞なぞ出て居るのを見てさへ、胸の血を吸はれるやうに感じます。今日も海岸通りで美しい令孃方に二三組も遇ひましたが、みんなマガレツトだのお下げに結つて紋羽二重のお被布やお召の半コート、鹽瀬のお袴かなんかでぞろり〳〵と步いて居られる。ああ及ばぬ空想と返らぬ昔の榮華の夢を戀ゆるのは、垣間見た天使の影を追ふやうなもの。が、何うしても斷

念られません。柳田さん、一日でもいゝからあんな境遇に成つてあんな服裝して、本郷通りでも濶歩して見たいの。遂に度すべからざるヴァニチーの結晶だと云はれても仕方がない。否もう止しませう。頭が痛くなつて來た。柳田さんもまたこれを讀んで頭痛を催されるといよ〳〵濟ません。

花輪さんは今興津に被在やるんですつてね。お手紙が參りますか。お閑遊ばしたでせう清見潟の夕ぐれを。實に詩的な事ばつかり有仰るわねエ。三保の松原清見寺、美姫富士姫のお膝元で美しい詩想練り給ふ――ああお作が拜見致したいこと。柳田さんから願つて頂戴な。ね、私が何か申上げると、一生のお願ひなどゝ申されましても實際僕は困るんです、なんて憎らしいのよ。そして柳田さんは私の事を吩咐けてお仕舞ひなすつたのね。それこそいろ〳〵冷かされて私が困るぢやありませんか。ほんとに餘計な言有仰る。

おゝそよ〳〵とよい春の夜風、あゝ今夜は何て好い美しい夜頃でせう、新嫁様が嬌羞の色のやうな春の月、薄絹につゝまれて、朧に空に浮いて居る。丸窓の障子に寫る影法師、玉を戛つ蛙の聲、柳田さんはこんな宵がお好き？　私も。併し秋の夜も捨てられないわ、私はむしろ秋を喜ぶものよ。たゞ花は何うしても櫻ですわね。櫻は吉野、武士は乃木。我家のも蕾がふくらみきつて居ます。モウ二三日すると咲きさうよ。あゝこの花また白雲とみだれて居た時分には……今夜はこれで失禮致します。御免遊ばせ。

卯の花月三日　　千代より

松村さんへ（其二）

松村さん餘りではありませんか。其後何う遊ばしたのそんなに御勉强でお忙がしいんですか。御病氣でもして被居しやるんですか。それとも一本條の女學生にお友達でもお增に成つて、ほほゝゝまさかねえ、でもほんとに少しはお恨み申して居てよ。第一お手紙も下さらず、春期休暇に何して被居しやる。私があれ程お願ひ申したのに、何うしても當地へは來て下さいませんのね。從姉さんと一緒だからつて一緒ぢや何故不可

ないの。何も私がその方と喧嘩でもしはせまいし、が今更何と言つたつて仕方がない――夏休みにはまたお故郷へお歸り遊ばすんでせう。だから日曜に是非一度來て頂戴よ。此頃は對江館へ澤山學生さんがお出に成るわ。私もウ大學の方のお通りなさるのを見るともし松村さんもあの中にと思つて幾度胸を轟ろかすか知れません。昨夜も金色夜叉を讀みましたらふつと去年のお正月の事が思ひ出されてなりませんでした。あゝカルタ會……



あの翌日お別れしたつきりですわね。早一年半。嘸お變りなすつてゞせうねエ此度角帽がよくお似合なさるわ。あの時はまだ二本條の帽子をかぶつて居らしたし私も無心の乙女でした。毎晩あの霜冴ゆる夜道を、マントの中で手を握り合ひ乍ら家まで送つて來て戴いて途中でよく口喧嘩を初めたのね。私高髷になんか結はせられて居ましてもほんとにお轉婆でしたから。ほらあの淺野さんをあんなに立腹して了つて……。あの方ね、また東屋に來ていらつしやるのよ。二三度見受け

たけれど先方ではもう見忘れてお仕舞ひなすつたやうだわ。

上野の花もいま盛りでせうね、あゝ毎日あの山をぬけてお通ひなさるオーバコートにインキ提げたお姿が目に見えてよ。東京へ行きたいわねえ。

あれ花がちら〳〵降つて來る。我家のは八重櫻、楊貴妃と云ふの。色の濃い大輪で見とれる程艶な……一たい當地は濱風があてるから櫻はめづらしいので、道行く人がみな振りかへつて行きます。わけて深い穏やかな夢のやうな夜、清く澄んだのではいけないけれど薄すり霞むだ月が花たわふなる枝にかゝる時など、實にかけねなしの一刻千金……私はいつも兩袖を胸に抱いて小松の中を散歩するのよ。考へるのは乾度松村さんのこと、東京のこと、そしてこんな時何だか松村さんはミルクホールへでも入つて被居しやるやうな氣がしてならないの。妙なものね。

あゝ昨日由美子さんからお手紙が來てよ。貴方が事を何うなすつてつて聞いて居らしたわ。あの方いま上野の音樂學校に在學しやるの。もしかお遇ひに成つたらよろしくと有仰つて頂戴な。和さんも東京へ越してから本郷の學校にお入りになつたと云ふし、お京さんも裁縫學校へ行つてお了ひなすつたし、あの晩の團欒の中で相變らぬのは私ばかり。でも母がね、此頃もウ肩揚を下せ〳〵つて困りますの。厭だわ、私まだ十七ですもの。

松村さん、お從妹さんて何んな方？　お茶の水きつての何だつて——あら私だつて知つてますわ。ちやんと人から承たまはつたわ。けれどお手簡頂戴ねえ。この一月と云ふものはもウ朝起るから今日こそと樂しみ暮れゝば必ず明日こそと望をかけて、毎日〳〵人知れずどれ程待焦れて居ましたが。とう〳〵今日は何うしても我慢が出來なく成りました。これ御覧遊ばしたら直ぐ御返事ね。煩さがられても好いわ。あんなに固く有仰つた事、當座の花をお持せなすつたのか知らぬけれど、田舍乙女の心利かず私はまだ一圖に信じて居りますものを。

得鳥初月八日

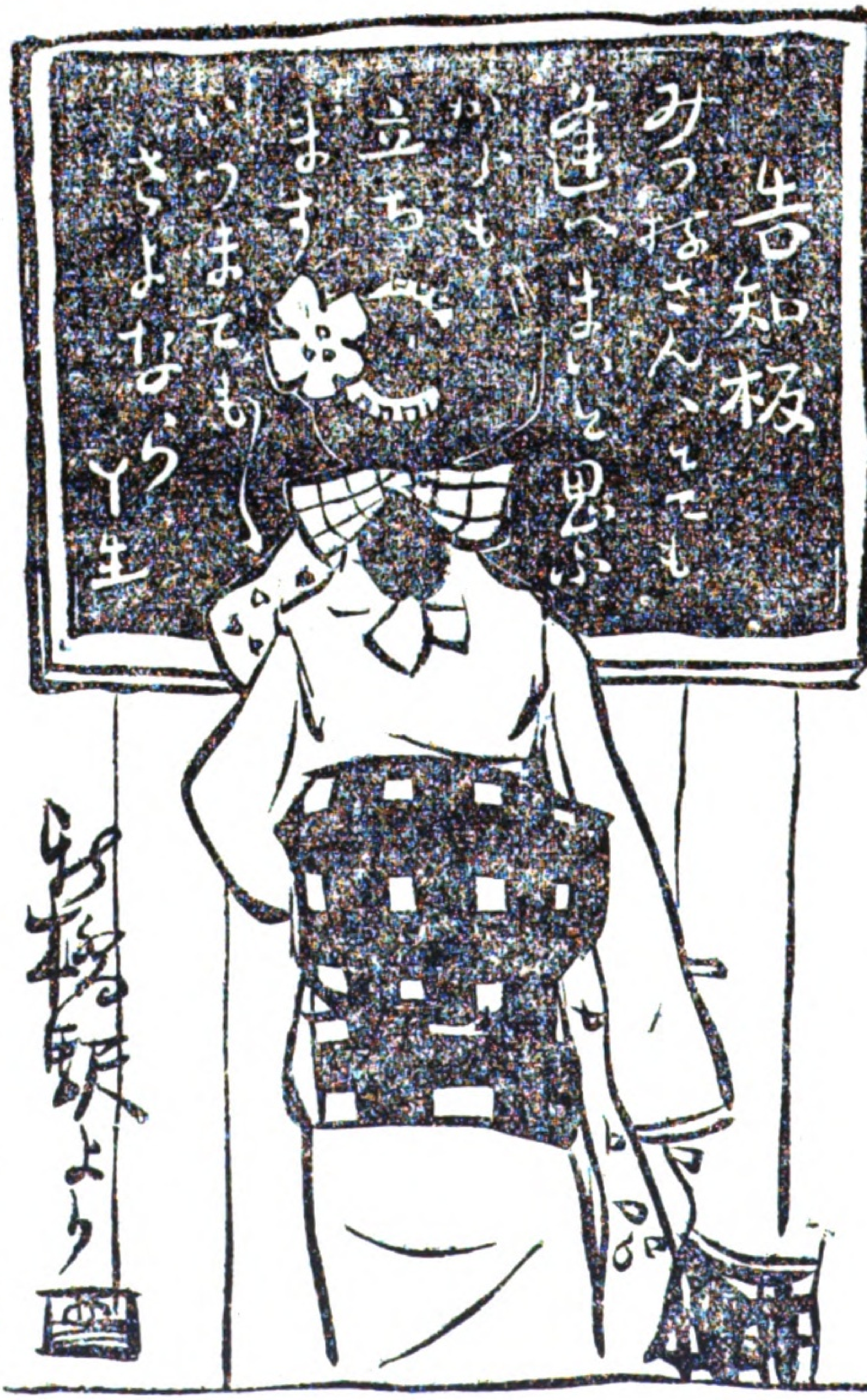
千代より

なつかしい
秀人様へ

柳田さんへ

（其二）

懐しいお手紙今朝拝見致しました。またお出掛け遊ばすの。花の吉野から京めぐりですつてお羨しいこと。御機嫌好く行つてらつしやいまし。面白い事があつたらお知らせしますつて有がたいけれど、もう先日の様な言有仰るのなら澤山よ。私いまだに耳が痛いの、随分な方ね。



人は見かけによらぬもの、それとも私等の見そくなひか、柳田さんばかりはあんな方ぢやないと思つて居ましてよ。それに何うなすつたの、此節のお手紙つたら些とも和らかいあたゝかい美しいところなんかなくなつて仕舞つて、まるで先生のお言葉でも承たまはつて居るやうですわ。あのまア「此月今夜江の島の酒楼をも照すであらう、片瀬の川にも宿るであらう……」とか、「今なほ夢中に鵠沼のまのあたりあること一再に止まらず、只さめて初めて身は南紀の村にあ

るを覺ゆるのみ」なんて、嘘にもせよ優しい事有仰つたのとは、本當に別人のやう、それだけお齡おとり成すつたからだと私は申しますよ。もう私の申す事なんか馬鹿らしくつて、面倒臭いと云ふ御樣子が見える。間違つてて。ほほゝゝゝ御免なさいよ。

二三日前思ひ掛けなく花輪さんにお目に掛つてよ、私嬉しかつたわ、がほんの三時間ばかしで本意ないお別れを致しました。話しは柳田さんのお噂で持切りさぞクシャミを遊ばしたでせう。何しろお訪ねして見たら對江館の二階……曾て柳田さんの被居た室よ、私はこればかりでも堪へがたい懷舊の情に胸を痛くしました。共に欄に凭つて仰いだは去年仲秋の名月、いま一人筆執る窓を照すのは今宵この朧月、誰の涙で暈つたか、花羞かしさに暈かざしたか……あゝ二百里の海山隔てた南の國で柳田さんのお眺めなさるのも矢つ張同じこのお月樣なのねエ。過ぎた昔が戀しいわ、去つた以前が懷かしいわ。柳田さんまた鵠沼へもお出下さいね。『想起湘南三月晚、芙蓉夕陽共君看』の一句、まことお心から出たのならば。私ははかなくも待つて居りますから。

もう學問も入らないの、名もいらない。花に泣き月に悲しみ、遠く別れた君を慕ふて所詮……所詮此地の土となるべき運命なんでせう私は。けれど……また叱るなら叱られてもいゝわ。あまり精神的な生涯に傾かぬやう、何事も母の意見に從順なれと案じて下さるのは身にしみて嬉しいですけれど、私泣かずには居られません。年毎に春は逝く、花は散る、殘されるのは私等母子、かくて我が世の春もいつか過ぎて仕舞のかと思つて――。でも斷念めますわ、どうせ私のやうに氣の弱い者は、烈しい東京などへ參りましたらとても生きては居られないでせう。決して行きたいの出たいのとは申しませんから、またお手紙下さいよ。京都からも早く歸つて來て頂戴ね。

卯月十一日　　千代より

松村さんへ　（其二）

まあ丁度二月ぶりよ、絕へて久しい御文を今日……。

けれどやつぱり以前の松村さんだつたわ。私はもう嬉しくて安心して、思はず十餘頁の跡を四月二十日の日記に殘しました。あれは朝の便ね九時過ぎ……私は團子をこしらへて居りましたの。あら笑つちやアいや。これでも此頃はよく母のお手傳ひ致すんですもの。そしたら「郵便ッ」と怒鳴られて駈け出るはづみに丼を覆くら返しながら、夢中に粉だらけの手でお手紙取り上げたまゝ室へ走り込んで了ひました。封じこめられた菫の花？　あゝ松村さん、貴方はんとにお墓まゐりして居て下さるの、嬉しいわ、私嬉しくつて泣いてよ。近くに居る親類の者さへよう詣つてはくれぬのに、松村さんが父のお墓へまゐつて下すつたつて……夢の樣だわ。もう私等はこんな僻地に引込んで了つて三年も上京ませんのですから



それぱかり氣になつて居たのよ。その臺石に咲いて居た菫ですつて。可愛いのねエ、私叮嚀にお佛壇へ捧げました。あゝ立のぼる線香の烟りさへ行方は都の方だのに何うして私が……松村さんあんまり察しのない事有仰る。花なき里に住みやならへるつて春霞立つを見捨て行く雁ならこんな思ひは致しませんけれど、思ひ入つて捨てた浮世ではなし云はれなくとも＊

＊東京は戀しい。まして我が初聲あげた故郷ですもの。たゞ私には母がある……あの母が……あゝまだ眉刷毛とつて白粉をぬ

つてくれたり、千代には袴が縫へるつて他愛なく喜こんで居る母を見ましては、私氣が弱いのよ、ついに一度口にした事も色に出した事もありません。さりとて何うしても思切れず青春十七、いたづらに高鳴る胸を………。

けれど松村さん、辛いつて口惜しいつてまだ〳〵此様事申して居られる中が私には花なのよ。人並越へて延びた脊丈をまで母はもつと〳〵引のばし度い程に思つて居ます。末を考へると情ない……の。

もウ何んな櫻もすつかり散つて仕舞ましたねえ。今朝庭掃いたら薄紅の雪がちり取りに五六杯。その代り八重山吹が目の覺るやう。七重八重花は咲けども、と云はれたこれが羨ましいわ。花も知られで實になるのは厭。お從妹さんや和さんや由美子さんはいま咲き出した花なのね。松村さん、あんなに女學生の事惡く有仰るもんぢやなくつてよ。私だつて女學生が理想だわ。たが其様にまあ廂がお嫌ひ？　母と同じやうなこと有仰るのね。私はねえ桃割に結つてるの。あんな重い物年中頭へ載せて居られるものですか。あれはお正月ばかりなのよ。さう云へばこの前の日曜に海岸で横濱〇〇會社の大運動會があつてね、それはなか〳〵振つたものだつたの。私もそつと覗きに行つて見ましたらね、近所の娘さん達がみんな模擬店の給仕女に出て居りました。その時松村さんも御存じの——ほら評判のお優ちやんね、蠑螺の壺燒屋でしたが、艶な高島田に羽二重の帶なんか締めて、お揃の赤い太い襷で長い袂を二の腕までかゝげ、潮風に飜へる赤前だれ、こぼるゝ長襦袢。女でも見とれるやうでしたものを妬かつたわ私。それにつけても何だかいよいよ松村さんにお目に掛り度くつてしようがないのよ夏になつたら乾度行くつて少しあやしいものだわね。けどまあ好いわ。あ、ついお禮申後れました。リボンを有がたう。嬉しいわ、巾が廣くつて。あれ五吋巾でせう。私あんな大きなのまだ手に取つた事もないんですもの。あの今度あれを掛けてねお下げに結つて一ツ寫眞とつてお送り申し上げませう。でも弄かつてはいやよ。お從妹さんへよろしく。さよなら

四月二十日　千代より

秀人様



都なる友に

美登利

待し櫻もいつしかうつろひ若葉のかげ
なつかしく、山不如婦の初音またるゝ
頃と相成申候。御地は龜井戸四ッ目
あたり定めて賑はひ候事と存候。
田舍は見るものも行くかたも無く、
天氣よき日曜日は、家内中にて
手製の御籠たづさへ野遊びなど
いたし候、里川の清き流にそひたる、
松山のみどりの中に、ところ〳〵
櫻花もほの見え、菜の花が茂るあせ道
づたひ春風の穗波をわたる
麥畑に雲雀の歌を聞き候など。
春は田園生活もすてがたく候。
貴女樣は替りもなふ旦那樣にも
御機嫌よう御出勤被遊ちかく
御昇進の御噂も承り蔭ながら御喜び
申居候、こなた何れも無事、海岸に
引移り候甲斐あつて、主も近來めつきり
丈夫に相成、體量も相增し、子供も
皆眞黑にくり〳〵と肥り、幸に醫師の
藥禮も少なく相成申候。
達雄樣はすこやかに、御成人どちらに
お似被遊てもお人形の樣に御愛らしく
と御噂申居候、今年はお初節句

賑々敷御いはひ被遊候御事何ぞ
御祝ひの品御目に懸度と存じ候へど、田舍
は田舍らしきが反つておかしく候半と
欲張り老爺に申付候處、わしの幟も
花のお江戸の風にあたるのかと、
大喜びにて念入に張りましたよと、今朝
持參いたし候、縮緬の吹流しの
中にまぢり候はゞ、お召縮緬と手織じま
の樣に候半が、お笑ひ草に心ばかりを
只今小包にて差出し申候。
お一方にても皆樣のお手をとゞめ候由
宅等五人にて、日曜日は喧嘩する
泣く叱る丁度戰場の樣裁判に
聲を嗄らし申候昨日など珍らしう
大人しく候まゝ御褒美に御菓子にても
と後園を見廻り候處お友達四五人
呼び入れ雨後の水たまりへ、物置より
大小の盥三つばかり取り出し張板
をならべ軍艦のまねとて棹竹にて
ぬかるみをこねまわし、着物よりあたり
一面の泥だらけ、嬉ゝとして跳
まわり居候、惡戲もこゝまで相成候ては
小言の申樣も無く候。
雨天の日は二枚にて濟み候へば上ゝあまだれ
落る軒下に飛白の四五枚行列
いたす事も珍らしからず候。
先日上坂の節欣子樣御尋ね申候、
あのふくよかにおはせし前髮、おしげ
もなふ引つめて櫛卷の世話女房
振り、金鎖かけ賜ひしお頸に紫の
色あせたる財布の紐かけられ、ダイヤ
輝きしお手に見本の包持ちたまひ、
まあよく來て下さつてねえ今歸つた
處よと、いそ〳〵と手を取つてのお喜び
昔ながらの御友情少しも替りたまは
ぬが嬉しう、お話は都の友のおうへ、

はた其後のことども承り申候。旦那樣重ね〲の御失敗當時はなか〲御困難の御樣子、あの御氣性ゆへ定めて口惜しう覺させ候事もおはし候半が、例のいき〲したる御顔もちにて、之も定まつた運命ねえつて、少しだも愚痴らしき事仰せられず候。これなればこそ旦那樣も百萬の味方より氣づようおぼされ候事とぞんじ候。時世とは申ながら、數多の召使ひにかしづかれ候御身が朝夕の水仕業、注文取まで被遊候は隨分おつらき御事と御同情に不堪何卒御成功を蔭ながら祈り申候。

妹など日本一のお幸福と毎度御噂申候緞子樣、この程お兄樣會社用にて御來坂のおついでとて宅へ御立寄り相成候折のお話に何に傍で見る樣でも無いでせう、隨分苦勞も多い樣で生家へ來ては愚痴斗りこぼして居升よ、夫に近來別してやつれました僕等の目からは貴女の方が餘程幸福だと思ふと、ちと御世辭に候半がいと眞面目に仰せられ候、貫一を捨てたるお宮と同じ境遇におはすと思へばお氣の毒に存じ候。

あまりの暖かさと覺し候程に、いつしか降り出で申候、綠りしたゝる青葉の雨にくれゆく春もいとゞ惜まれ申候、今を盛りの藤の花、色あせずやと見いたす庭つゞき、母家の妹のかなづる琴のしらべも春の曲、「すきがてにのみ人の見るらむ」折にあひたるもおかしう存じ候。

絕て久しき小學校同窓の愛子樣この頃熊本に住居候姉の夫と同僚の、杉江中佐の奥樣にも時々御出のよし松林樣は閨秀畫家とて過日生家の

父がある書繪會にて御同席いたしたとか
津下樣の其後御存じにや、十年程以前
日吉町のとある小路に三筋のいとも
なまめく工一格子の内に御見うけ申候。
同じ學びの庭に培かひられし
なでしこも色さまぐ〵に匂ふものと
怪しうおぼえ申候。
御羨ましきは楠緒子樣、同じ趣味の
旦那樣の御傍に好ませたまふ道の
御研究に餘念なう、お子樣も數多
おはし、入ては圓滿なる家庭のクイン、
出ては閨秀作家の白眉、うるはしき
御容姿に艶麗なる御筆のあと、
及ばぬ事ながらせめて半ばだに
まねび候はゞ嬉しからむと存し候。
田舍へ移り候てよりはや五とせ、都の手ぶり
も頓とわすれはて、それに追々家事も
しげく文よむことも稀に相成お友達

より お文頂き候ても、御名歌御名文の
御返事に差支へ、つひ〳〵どなた樣にも
御不沙汰がち、御會ひに候はゞよろしく
ねがひあげ候、東京は日増に華美
に相成候よし今後上京いたし候はゞ、
田舍ものは目をまはし可申近くに
大坂に候へど何と申ても保守主義、
流行も一年おくれる樣に御座候。
御同然に家内一同すこやかに、事無う
候へば何よりと喜び居候へども、交際社會
の華とうたはれバザーに夜會に
花やかにもてなしたまふゆかり樣など
御閑遊し候はゞ、まあ家庭の人
なんてくすぶつてるのは厭ねえと、お笑ひ
被成候半が夫に仕へ子を育て平凡な
暮しに候へど「樂又在其中」と滿足いたし居候
三郎乳の時間とて鼻をならし守の
背にあばれ居候まゝ暫し筆とめ申候。

しばしと思ひ候ほどに來客もありて
夕飯の仕度やら子供の入浴にて再び
筆とり候は燈火のもとに相成申候。
此あたりまだ宵ながら靜にて苗代
小田にすだく蛙の聲、打よする
浪の音、世ばなれたる心地いたし候。
今頃は旦那樣の熊野とあなた
樣の鼓のおしらべ嘸な行かふ人を
とゞめ候事と東の空をながめつゝ
おもひやり參せ候。
今少し申上度候へど、明日は主事奈良の
新緑さぐらむとて、友人二三と自轉車
の遠乘を約し候まゝ寫眞機
とりそろへ候などいさゝか準備いたすべく
之にておしき筆とめ申候逹雄樣
お晝寢のおいとまも候はゞ都の近況
御聞かせ下被度末ながら
旦那樣へよろしく



あなかしこ



人の内情を聞いて呆れし手紙

花子

鄙より都の小間使せんとする友の許に

み吉野の音に聞えし櫻花、今は爛漫と咲きみだれ京は圓山嵐山さては祇園の夜櫻に、人の心もそわ〳〵と、浮き立ちがちなる今日此頃、御許樣には華やかなる浪華の春にあこがれ給ひ、都に小間使お望の由。雲にそびゆる建築の日本一てふ梅田驛、人車の往來織るが如く、道頓堀の賑ひ、十合や三越高島やの呉服花の美しさ、などいかに鄙人の目に美しううつりけるよ、されど美しき所にこそ魔はひそみ候。只見れば綠の波のゆら〳〵と穩かなる海の面も深き底には恐ろしき鰐鮫などもひそみ居候、只見ればいと美しき富豪こそ海の樣にもさも似たるかな、あな恐ろしきものに御座候。

上品なる切下髮の御隱居樣、さては可愛ゆき孃樣の御通學の送り迎ひ、茶の湯活花お琴の稽古のお供に從ふ小間使の、黑襦子の半襟に薄化粧ほどこしたる白き襟足のはえて、高島田に白丈長キリヽと結び、帶はやさしき立やの字、紫のお包持ちたる優にやさしきお供の姿には心なき人すら思はず足を止めて恍惚と致すべく候、されど此美しき小間使の少さき胸にもいかなる秘密や包まるべし、左の手紙、ある豪家に奉公せし友より來りしもの、御參考までにお目にかけ申候



御親切なる御忠告を捨て、當家へ御奉公致してより早や一月あまりも過し候今日此頃、今更御許樣の御言葉の一々思ひ當り、今は恐ろしさ口惜しさ悲しさに日を送り居候。お目見得の夜、朋輩より、お前さんは美しいから旦那樣のお氣に入るよと云はれし時、奥樣はお身體お弱き爲名のみの奥樣にて旦那樣は毎夜時計の淋しく報ずる頃お歸りと聞きし時、思はず胸を痛めしは案じ過しにてなかりしこそ恨みに御座候。

二十日餘は事もなく過せし或夜、旦那樣は珍らしくお出掛けもなく、御座敷にて御酒召し上るに、不束なる私不調法致してはと避くるを無理に御酌にと出され申候。馴れぬ事とてハラハラと恐る〳〵お酌する手つきの無器用さ、ハッと思ひば手さきふるへてドッと御酒は杯に溢れてハッと疊へこぼるゝ不調法お咎めも遊さず、物云ふ度にキラ〳〵と金歯のもるゝ口元に薄氣味惡き笑を浮べて、血走つたるお眼に睨々見らるる氣味惡さ、ゾッと五體のすくむを覺え申候。次第に御酒のまわるにつれては聞くもいまわしき御言葉、臆面もなく仰せ給ふ腹立たしさ、漸く其場を逃れ出で、其夜は事なく濟せ候もあゝ恐ろしさ情なさ、心の苦痛に身も世もあらぬ思ひに苦

しみ居候明後日より御養生との御名のもとに奥様は、女中二人を召し連れて有馬の温泉へとお越し遊ばすとの事なれば、あとは旦那様に私に下女一人のみ、私の身はいよゝ危く相成申候

されど歸らんにも、なさぬ中の母君に無斷にて出でし身の今更のめ〳〵歸らるべき、たよらん人もあら波の、寄邊渚の捨小舟、いづこの岸へ漕ぎ寄せん、只々清き心堅き信仰を楫として、浮世の荒波に漕ぎ出でん覺悟にて候。此家は明日にも逃れ出づべき心に候。不孝の娘なれども御心配下さるゝ父まで此事こそ、何卒御面倒には候へ共、お傳へ下され度候。

此手紙受取しは早や四年の昔と相成申候、其後の友の身の上こそ、あはれに淺ましものにて候。さすがかくまで決心せし友いかなる惡魔やみいりけん、いかなる事情に餘儀なくされけん、今はさる高町通りに竹垣のある家に庶子とやら云ふを儲うけて我子に小夜やと呼ばれ、坊っちやんと册づきたられ候、時々主家の定紋打つたる俥の止りたるを見受け申候。私は此友の事思ひ出る毎に、胸のつまるを覺え候。恐ろしきものに候はずや、富豪の家庭、潔白なりし少女も遂に魔の淵に沈み申候。

私の御奉公致し候家は嚴格なる家庭との噂に、母はこれなればとて見習にと出され申候。されど聞くと見るとは大違ひにて御座候。こゝにも裏は御座候。あるむし暑き寝苦しき夏の夜にて



候、私と美しきお波どんより外人氣なき蚊帳中にふと聞ゆ話聲ハッと驚き飛び起きたる耳元に、「なんでもないよお休み」とたしかに旦那様のお聲、當時十四歳なりし私の罪のなさ、やがてすや〳〵寝入り候ひしが、今となりては思ひあたり候、又或る夜下男部屋の障子に意氣なお清どんの寝卷姿うつすりとうつり居候事も御座候。主人とは壓制なるものにて又無責任なものにて候。兎に角美しき御許様、田舎にてくち給はんは惜しき事ながら都會の塵に汚れ給ふより、靜かなる田舎に清き生活を續け給ふ方勝り申候。

今は奥様にも學校出の奥様多く、優にやさしき大和言葉などは片言なりとて排斥遊ばされ、殿様とて發育悪ければとてお食事中もお足投げ出したるまゝ、暑ければおせもや出來んと姫御前のあられもない眞裸體に遊ばすやうの方多ければ、昔と違ひ行儀見習などに上りては、飛んだ行儀を見習ひ申すべく。されば奉公人とて此節は意地悪き世帶くずしか、給金目當のすれからしなど多く候へば美しくやさしき御許様など殊に危險多く候はん、惡き事は申すまじく候。今一度思ひかへして、姉上なき後は御身をば杖とも柱とも賴み給へる只一人の母君の、御安心遊ばすやう、亡き父君の定め給ひし彼の君と樂しき家庭造り給ひてはいかに。可愛らしき孫君など出來なば母君の、いかに喜び給ふらん、草葉の蔭に父君も御安心遊ばさるべく候。

御利發なる御許樣に、過言の無禮これも頃日親しさのあまりと何卒お免し下され度候。されど〳〵御奉公は切にお止まり遊ばされて、美しき家庭によき主婦とおなり遊ばされん事くれ〳〵も願ひ上げ候。此次私の御邸をとはん時御母上樣の嬉しき御顔拜見致したきものにこそ。時候不順の折から御身大切に遊ばさるべく、御母上樣へ宜しくお傳へ下され度候。いつもながらの亂筆お免し下され度候。先は思ひのたけ書き綴り申候。かしこ。

都會生活の狀況を故鄕の妹に

友子

年の間の螢雪の御いそしみあらはれ、めで度御進級、春の休みを得て長閑に御暮しの由、誠に嬉敷存じ上〳〵、私事も相變らずことなく、しかし去年ともちがひ、衣がへの節とて冬着の洗濯にいそがわしく候。學校にても松本、中野兩先生此度御轉職被遊候との事、松本先生等は私共の主任にも在し、隨分御馴染深き方に候ひしを、誠に殘念に存じ申候、かくて知らず〳〵母校とも遠ざかるのかとまた悲しうも存ぜられ申候、實に御早きものにて、私が丁度十六、光さんのやうに呑氣に遊び暮し居り候ひしも、昨日今日のやうの心地も致し候を、はや三度の春



はめぐり來て、其の節一年生の御許樣は四年の御姉樣、私などとつくに卒業、しかももう古株になり申候、出でゝ後に悔なからんやうに精々御勉强かつ御遊びなされ度候、殊に友垣の離被折にふれてはうたゝこひしく、實に過ぎし日の思出らるゝものに候まゝ、今より皆樣と親しく仲よく御暮しなさるべく候。私がよく誘ひつこして通學致し居り候ひし梅野樣、御卒業後間もなく良緣ありて御嫁ぎなされ候折の同窓生の評判また中々に候ひしを、先日ある人より同氏には、どうやら御實家に御引きとりのよし承り候が、學校にては別に何のうわさも無之く候や、如何なる御事情なりしならん、誠に御いたましく存じ居り申候離婚と申さばかの私も光樣も大好きの藤井環女史、たゝあの御美しい殊に御聲のいゝときゝてあくがれ居り候ひしかの女史も御離婚とやら何とやら當地では一寸評判に候。さて私事近頃は大分あたりの模樣にも馴れ候て、平氣で夕方御肴買ひにでも何でも出かけ申候、さすがに都だけありて何でも切賣り致し候へば、私どものやうな小人數の家にてはまことに便利と存じ居り候、最初はどうしても御湯屋に行くのがはづかしくて笑はれ申候へども、只今はもう何ともなくなり申候、昨日ははじめて御すもじこしらへ申候、國にある時分御母樣の御手傳ひこそ致したれ、まだ一人にては中々とハラ〳〵思ひ候ひしも、わりに仕損じもなくて武雄樣本氣にてほめて被下し時は、何ともいへず

嬉しく候ひし、御近くならば御重につめて御あんばい見て頂くべきにと存し申候。しかし私事つく〴〵と感じ申候、學問は申すに及ばず、御裁縫はもとより大事に候へども、殊にかう家持ちになりて一等必要なるは實に御料理に候、その中にても殊更御惣菜の必要は大なるものに候。私等も何故もすこし氣つけなかつたかと悔み居り候、何卒御許様にも今より御心がけなされ毎日の御菜の御手傳ひは申すに及ばず、おひ〳〵はお漬物のこしらへ方御飯の焚き方などよく〳〵御注意御習ひなさるべく候假令女中の一人や二人使ふ身分にても、是等の事は心得て得る處多きものに候、私事も卒業致して直ぐ女中は御暇し被下勝手許から御洗濯、何くれと御敎へ被下し母上のその節は、あまりにきびしと少しは御恨みも申上たれ、今となりては恨みどころか實に有り難く、勿體なく存ぜられ候まゝ、その御母様の御膝元なる御許様に、私が入らぬ御せつかいと御思ひなされ候はんも近頃切に感じ候ものから、御參考までに申上おき候まゝ今より心がけ折角御つとめなさるべく候、椿ははや散り過ぎてゆすら、杏、等時を得がほに美しうとの御たより、まことに目に見るやうに明かに、あの長閑な庭の模樣思ひ出られ申候それと同時に例の畑は御父様御役所より歸りましての。御手入れの甲斐もしるく、ふだん草、京菜ののびも早う早やわけぎは中ば引きとり給ひしやなど、家持らしい事の切に思はれ申候、せり、土筆、など八百屋にこそ澤山見受け候へ、手づから摘みとりしを膳に上す等の風流はとても叶はず凡て何でもなかりし事がまことにこひしく存ぜられ申候、御許様は他に何處に御嫁きなさるや知らず候へども、若し私の樣に故郷とほく離れ給ふ折あらば、きつと今の私の繰り言もうなづかるゝ事と存し申候、篠田の伯母様の御家皆々様御變りもなく候や此度御伺ひの節よろしく御傳へ被下度私は始終氣にはしながら御無沙汰にのみ打すぎたり候、淸ちやん日ましに御成人の事と存じ候、やつぱし先のやうに絶えず遊びに御出での事と推し上候、先日色の白くて鼻の格好よき丁度年頃も同じ位の子にあひ、覺えず淸ちやんと口走り申候、その子も眞白の胸掛した上品な人に候ひき毎度恐れ入り候へども、その中例のかまぼこ御送り被下候やう母上によく〳〵御願被下まじく候や、改めて私より御願は申上ぐべく候へども、あまり度々にて少しははづかしうも候まゝお許様より一應それとなく御願ひおき被下度候、どうもいろ〳〵の事御願致し毎度ながら御ゆるし被下度候、そのかわりとはあまり失禮なれど、いさゝか御進級の祝ひの心にて別に小包として雪駄御送り申上候、も少し上等のものをとは存じ候へども何かと事多くて心に任さず、御ふだん用ひになりとなし被下度候別にかの父様御上京の折御土產に頂きし帶側少しばでのやうにて氣にとがめ候まゝ御許様に御ゆづり申すべく共に御送り



申候まゝ母上に申上て友禪なりとゝ腹合せて頂き御用ひなさるべく候、一體に當地の人は誠にはでにて家のお隣りの奥樣など五ッ位の御子樣御ありにもかゝはらず、銘仙の矢絣御許樣の御被布位のを着てなられ申候、とても私等氣がとがめてあるかれず候、その故か、誰でも私を年より二ッか三ッ位老けて見られ候二十歳になりましたと申上候、はじめてまア失禮をと申さるゝ事間々これあり候、御地公園の櫻はまだ御早く候や例のやうに御兩親と共に御花見遊ばさる御事とその御まとゐのいかにも羨しう存ぜられ申候、何卒御うわさなりともらし玉はんことをひとへに願上候、當地はいつもより早く、何處もこの二三日が眞盛りなるべしとのこと、丁度十一日の日曜日は御休みに候まゝ是非一日を遊び暮さんと存じをり候、その節は見まゝ聞まゝ委しく御知らせ申上ぐべく候、今日は幸ひ美しき日和に候へども低氣壓がどうとかかうとか新聞等に見え申候まゝ、十一日の御天氣が氣がかりに候、その節こそ信ずるテル／＼坊主澤山うらへ置かん覺悟に候。

今月の女學世界はや御讀み終り玉ひしや、私事は夜分をすつかり讀書の時間に致し居り候まゝ、一二日にて大てい目とほし申候、殊に「花散里」樣の某伯爵家の三令孃何だかすきで二度三度よみかへし申候、また「美登利」樣の春の家庭あんな風私大好きに候、婦人世界婦人畫報早やよみあき居り候まゝ何なら御送



り申上てもよろしく候、すゝさう「小さな誇り」とやら丁度私の同級の愛子樣のやうなと、ふとほゝゑまれ申候、來る五月十五日は增刊として「驚く手紙文とやらの發行に相成り候よし、すぎし日の心の日記のやうに、また色美しき樣々の筆のあと如何にやさしく、勝れたらんものあらんかと、今よりたのしみに致し居り候、御許樣は如何に候や私はやはり例のやうにたのしみを澤山數へておき申候、第一、十一日の御花見、近き中御送り被下べき御許樣の御うつしゑ、さては今の定期增刊、日々の御料理考ふるも一ッのたのしみ、また庭の木の芽の一日々々と目に見えて色まさり行くもなか／＼に興多きものに候、この手紙かきはじめて早や二時をすぎしと見え、三時を聞き候まゝ張り物のしかけもこれあり、かつ今日は少し時間のかゝる御料理致すつもりに候まゝ、是位にて筆とめ申べく猶かきもらしたる事どもは御花見の御報と共に聞え上ぐべく候、今日は別に御母樣に御たより申上ず候まゝ、よろしく／＼おつたへ被下度猶皆々樣御身御大事に希ひ奉り候。かしこ

四月八日　　姉より

親愛なるみつ子樣
御許に

亡き友の母君に參らす書

とも子

しめやかなる春雨の夕なつかしきかなしき御玉章、くりかへし拜しまゐらせ候、

いかにとりみだしたりとは申しながら御とりこみの中、殊に御かなしみもひとしほなるべきみぎりあまりに不躾なる御願事致せしものかなと今更ながら淺間しく御恥かしく御しかりもやと存し居り候ひしを、さはなくてかくもやさしくかつ御願事恐く叶へさせられ、小枝子樣御臨終の樣はもとより近き中に紀念の品及御病床にての最後の御うつしゑまでも御送り被下候との御事御心の程しみ〴〵とうれしく、さながら亡き君の御聲に接するやうにて涙の種とはぞんじながら、そも幾度拜し參らせ候ひけんこの病の常とは申しながら、御臨終まで少しもみ心變らせられず御家族の御事かつ海山隔てたる私の身をひとしに御氣づかひ被下候ひしとやら、あゝその御目その御口ありし日のゆたけさはなくも限りなき御情にいかに美しうしうるほひけんと遙察申上まゐらせ候

かの小說は蘆花樣の不如歸ひもとき候節、例の浪子臨終のくだりをかしき迄に咽ば候ひしが見も知らぬ他人の上にさへ、か



ばかりに候ひしなましてや年毎日毎姉君と呼び妹よとよばれ候その中にてのやるせなき、誠に身も世もあられぬ思ひ致し候

春はきさらぎの末つかたきえのころ淡雪のそれならで、はかなうも、消え行きし父を送り候てまだ涙の袖も乾かぬ程をまたも母のいたつき半年も經ぬに父のあとおはれ候折のはかなき心細き亂心地の中に噂にのみ聞きし田舍の伯母の許に寄寓の身となりたゞ世なうき物とかこち暮し居り候節、やさしき御手あたゝかき御言葉もて姉とも母ともいたはり、なぐさめ被下候ひしは吁實に小枝子樣にて在しまし候ひし、かくて日かげに泣きし水草の身は和かき春の光りの嬉しき月日、夢のごと四年の春秋をすごし候て、かねての志なり相たづさへて東都に物學ぶ身となり候ひし時私のよろこびはもとより、小枝子樣にもいかにうれしとのたまひ被遊候ひしを、それよりぞ一ツの喜びを二人にて樂しみ、一人のうれひは二ツの胸を痛め知らぬ人は對のリボン對の簪見て直ぐ同胞と合點するもをかしき樣に候ひき

さるを去年の夏の休み四十日の暇をえて小枝子樣は御一人にて御歸鄕なされ候折蟲の知らせとやら申すものにや、その御別れは殊更に悲しう覺え申候、かくなるものと知れば時分無理にも御引留め申せしものをと、かへらぬ愚痴もこぼれ候

昨夜はあたりのけはひ一際靜かにてそれよりそれと思ひ續け候上やつと今後の方針、私の覺悟も成り申候、そは外にも候はず、私事學成り候あかつきには、小枝子樣の御志はやがて私の理想に候ひき――に從ひて飽までも兒童の敎育に身をゆだぬべしとの決心いよゝ堅う致し候にて候、この荒びに荒びし私の迚も家庭の人として幸多かるべしとも覺えず候まゝ、私の身のすべての力を全く世の幼子の上につくして、かつは小枝子樣の御素志にも從はんものと堅く誓ひ申候、人は世に希望たのしみなくては存へ難しとやら、小枝子樣御死去のみぎりは、啻だ憂と、悲みとに包まれとても甲斐なき身よと我身をのろひも致し候ひしもかく思ひ定め候てより、少しは慰も得申候、さりながら去るものは日にうとしとやらの世の諺とはことなり居り候、日を經るまゝに一時は忘れたる、此の事彼の事次第に明かに思ひ出され候て誠に消えも入り度き心地致し候、幸か不幸か小枝子樣世におはせし折とりかはしたる玉章のお情こもりしもの、さては思ひ出多きもの一つと損さず文箱の底深う秘めおき候ひしが近頃とり出しては、いつも泣かされ居り申候

時にしも、いつぞや火桶かこひての物語りの末話はつひ花えらみに移り候て、小枝子樣には白梅を此上なきものと仰せられ私はまた白百合の純潔を賞づると申し爭ひはいつはつべくも覺えず、それにても二人とも白をといへず、そのまゝ引きわけと相成り候ひしを思ひ出で雨の中を町まで出かけ白梅は一重咲きの香ことに勝れたるをよりて一枝求めて參り、お位牌ならで御うつしゑの許に挿し申候、さ候へども草葉のかげよりはいかにか御うつしゑの主はキりゝと結び給ひし御口許に例の御ゑくぼも見えず、啻だいさゝか御目のあたりに限りなき御情のほの見ゆる位の事にて實に本意なう存ぜられ申し候



今更らにあまりに女々しとは存じ乍らも此の文、小枝子さまの御死ひたすら悲みませる御母君の御許に參るものと思へば御慰めこそ致すべきに、却りて涙の種ともなり候やうのかかるくり言、年若き人のあまりにはしたなしと、御叱り受けんもつらく候へども御前樣ならではこの胸くみとり給ふ人もなくと、このしどろもどろの見苦しきを御めに入れ申候、猶御母上樣にも何卒〳〵御身おいとひ被遊度伏して念じ上候、御送附被下候べき小包も一日も早くと御待ち申上居り申し候

先はこれにてくだ〳〵しき筆とめ申べく候

かしこ

四月一日　　とも子

御母君樣

御膝下



僞らざる告白

私が半生の努力に依つて得たる人生觀

平塚明子

御依賴に背きますのもと思ひましてともかくも筆を執つて頭の中をよぎる想は何でも紙の上に落してゆくことにいたしましたものゝ近頃は丸で頭が働きませんから何を申すか覺束ない次第です。

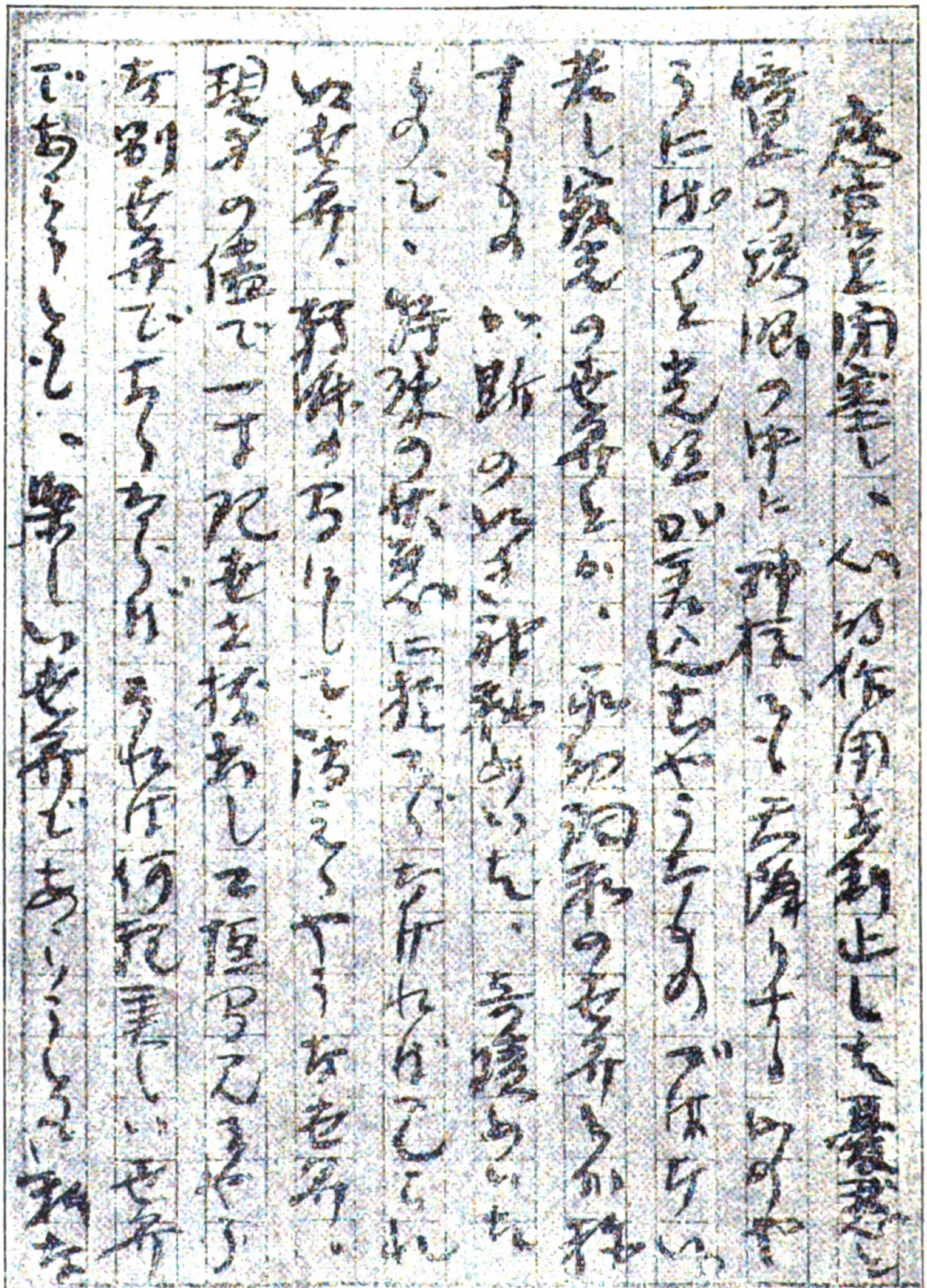
成る可く世態の眞相をうがちたるものなどとの御注文のやうですが、私には到底出來ぬ。世態の眞相はさておき假相も知りません。私自身の戰鬪史以外全く何も知りませんのですから井中の蛙同樣です。それに死んでも頭を下げる藝當の出來ぬ性分なので、獨りでお山の大將ばかりして參つたやうな譯ですから口を開けば自分の事を申すより致方ない次第です。御容赦を願ひます。

私はストイックが所好です。堅忍にして情に動せざる底のものでなければ人間は駄目だと思ひます。女々しいと云ふことをあらゆる意味に於て憎みます。男は勿論ですが、女でも平生から生死得脱の工夫はして置くべきです。從容として死につくだけの覺悟は何人でも日頃いたして置くべきだと思ひます。

修養の或階段に於て人は是非とも禁欲主義でゆかねばならぬと私は信ずる。無論思想上にてこれが人生に於ける最上の主義では決してない。修養の極致は心の欲する所に從つて矩を踰えずと云ふ至妙の境でなくてはならぬ。併し精神鍛錬が不十分な爲に私などは遺憾ながら時として頭腦と身體とが一つに出ない。誠に恥づべきことであるが今日の私の境界に於ては仕方がない。それで實行上に於ては禁欲主義でゆかねばならぬ。この階段を通過せぬことには一歩も先に出ることが出來ぬのである。止むを得ぬと云ふより外にありませぬ。

今日の小説に描出されてある人生を僞らぬ人生だとか、眞の人生だとか云ふのは許すまじきことである。眞

明子の筆蹟



意識を閉塞し、心的作用を制止した無意
識の境涯の中に神様を云ひ降りするやう
うに迷つて来たところへ迄込むやうなものではない
若し発見の世界とか、又は知覚の世界とか称
するものか斯のいきな神秘めいた、言語めいた
もので、特殊の状態に於て与へられてこれ
い世界、特殊なもので泊るやうな世界
現実の儘で一寸見ても探れして恒常見るやう
な別世界であるならば、その何処美しい世界
であらうとも、寧しい世界でもありうる。私は

の人生は向上せむとする努力奮闘でなくてはならぬ。眞の自然境、大自在の解脱境に到達せむとする向上の道程でなくてはならぬ。一切の欲望を制服し、一切の誘惑と闘つて徹底せる自我を發輝するところに人生はあるのである。私が小説を讀まぬのも小説中の人物に同情同感する譯に參らぬのもこれが爲である。自意識が强いからと云ふやうなこともなくはあるまい。併しそんな事ではない。同情するだけの價値がないと認めるからせぬので、同情がないと云ふのとは譯合が違ふのである。「煤烟」中の朋子のごとき者に對してはまだ同情する譯には行かぬ。あれでは弱い。要吉の如き人物にも同情することは出來ぬ。私は寧ろ隅江を愛する。今一つ私が小説に興味のもてぬのは私の頭がどちらかと云へば科學的に出來て居るからである。何を見ても聞いてもすぐ抽象化する癖があるのです。骨ばかりしか見ぬ癖があるのです。具體の世界にばかり住んで居ることが出來ないのです。世界間の出來事や、日常の生活のことに興味の有てぬのも此故でせう。

近頃色々の方々から煤烟のことに就いて御質問を受けます。無論私と煤烟とは關係がある。少くとも朋子と私とは關係がある。併し煤烟が既に藝術品である以上は藝術の堂に參じたことのない私などは一歩半歩も立入ることは出來ませぬ。たとひ事實と相違な點があらうとも作者の想像は自由なのでせう。その邊の事を私が彼是と申しますのは潔しとせざるところですから御返辭は致しませぬ。

只私が禪と云ふことに多少關係がありました爲に私の行爲によつて、又あの煤烟によつて禪と云ふものが變なことに曲解されて禪とはよろしくないものだ。危險なものだ。人を誤るものだなど〻早合點をなさる方が若しあるとすればそれは大きに相違ゐなのでして、私の行爲が原因となつてそんな誤解を來したとすれば誠に申譯なく思ひます。斯道の前に立つて罪を謝せずには居られませぬ。就ては私の口から申せますだけのことを及ばずながら申して置く義務があるかとも思ひますので、私などとても云ふだけの資格はないのですけれど少し

云はせて頂きます。具眼の士の一笑にも値せぬでせう。

一體見性と云ふことは睡眠狀態や夢幻狀態や、特殊な病的狀態の中に於て實驗されるやうなものでは決してないのです。精神並に生理的狀態の最も健全な時なので、無論覺醒狀態なのですが、普通かうして居る時の覺醒狀態即意識狀態とは違つて更に覺醒し、更に意識して居るとでも申しませうか、意識が最高頂に達して遂に意識を超越した時なので、半意識(夢幻狀態)や、無意識(熟睡狀態)の狀態とは全然別なのです。

感官を閉塞し、心的作用を制止した憂愁と暗黑の頭腦の中に神樣でも天降りするかのやうにぱつと光明が射込むやうなものではない。若し寂光の世界とか、永劫調和の世界とか稱するものが斯の如き神秘めいた、奇蹟めいたもので、特殊の狀態に於てゞなければ見られぬ世界、轉瞬の間にして消えるやうな世界、現身の儘で一寸現世を拔出して垣間見るやうな別世界であるならばそれは何程美しい世界であらうとも、樂しい世界であらうとも私などには無關係なものです。淺草公園の活動寫眞を一寸覗いて來たのと大差ありますまい。ところがさうではなくて何人も通常の狀態に於て日夜見て居る此世界であるからうれしいのである。娑婆即寂光土であるからよいのである。決して瞬間に於て見得る特殊な世ではない。

催眠術にでもかゝつて居るやうな、不可抗の狀態に陷つて居るやうな呑氣なことでは千億萬年たつても見性などは出來ますまい。坐禪でもして居ますと如何にも外見は呑氣相に、さも眠てゞも居るやうに見えるかも知れぬが實はきつゝはつゝの大戰鬪です。苦戰奮鬪の眞最中なのです。どんな戰爭かと申せば、少し理窟つぽい事を申しますが、假想の我を絕滅させる戰爭である。我々が平生「我」がと思つて居るもの、エゴーと稱して居るものは實は眞の我ではない。決して實在して居るものではない。假の我である。小我である。假想假感に過ぎぬ。千變萬化して起きては滅ぶ幻影に過ぎぬ。この假想の我を打破し盡した時に眞類の我が本體を見ることが出來るのです。これを本來の面目と云つても、徹底せる自我と云つても、神と云つても、佛と云つても、何と云つても差支ありますまい。これが所謂即身成佛なので、靈と肉とが一枚になつた所です。身心が所謂生死解脫の境涯です。決して耳目を閉ぢて外界と絕緣して死人のやうになつて居る狀態ではないのです。色相即無色相なので、何も

わざ〳〵色相界を遠ざかる必要などはないのです。山川草木人畜何でも一切の物を有儘に見てそれで少しも邪氣にならぬのである。丁度眞空の中に居ると同樣なのである。大虚堂の中に坐つて居ると同樣なのである。水晶宮裡に居ると云ふか、萬里の氷河原の只中に坐つて居ると云ふかとにかく云ひ知れぬ涼味を感ずるものです。古人も水を飮んで冷暖自知すると云はれた通りでとても申しやうはありませぬ。

禪は身を以て努するものである。内なる一切の欲望、外なる一切の誘惑に克つて眞の自我を發輝するところにあるのである。更に端的に云へば禪は心のことである。決して碧巖錄や、從容錄の中になど大人しく隱居して居る譯のものではありませぬ。禪學などゝ云つて學問かなんぞのやうに思はれては少々違ひます。禪をいたしましても何一つ知識を煩すものではありませぬ。のみならず今迄一大事のやうに論じあつて居た抽象的の空理空論などはするりと消えて仕舞います。自己其ものが忘れて他人の學說を追ひ求めて動いて居たことの如何に愚かであつたかと云ふことが呑込めます。

私の日頃の修養上の實際を申して見ますが、精神鍛錬だとか意力の養成だとか何とか難かしく云いませんでも、何はさておき二六時中自分の姿勢を正しく保つて居ることが一番だと思います。姿勢と云ふことは精神的生活の上に至大の關係のあるものです。大變問題を詰らぬことに片付けて仕舞ふやうですが、姿勢といふことは全く怖しい程道德的生活の上に重大な關係があります。私はさう信じて居ます。確信して居ます。精神鍛錬であるとか何とか云はないでもまづ二六時中姿勢を正しく保つて居るのが一番だと思ひます。これが出來ないやうな者は――これが出來ないやうになつては人間はもう駄目です。一切の欲望を制御し、一切の誘惑に克つて眞の生活をしやうと思ふならばまづ姿勢を整へることから始めねばなりませぬ。姿勢が眞に正しくなれば血液の循環、呼吸狀態、其他の生理的狀態がちやんと整つて來ます。生理的狀態がちやんと整つて來れば決して欲情などは起るものぢやありません。起さうと云つても起つて來るものではありません。起ないのが當然なのです。此境界にあつては意力を以て己れを抑制すると云ふやうなことも不必要です。私は意志の弱いと云ふことは姿勢を整へて居ることの出來ぬと云ふことであると信じて居ます。私は生來虚弱な體質です。併し自分の姿

勢を正しきに置き生理狀態を自分から整ることに努めました結果は普通以上の健康を得ることが出來ました。又意力を養ふことも出來ました。私は生來の神經過敏です、併しこれによつて感覺の爲に煩はされることが少ないやうになりました。然らばこの修養法は人の感受性を鈍らし、無神經なものにするのかと云へば決してさうではありません。刺戟を受けることは同じやうに受けて居るのですが、只受けたゞけで終ふことが出來るやうになるのです。反對的なことをすぐにして仕舞ふといふやうなことがなくなるのです。何も感じない、無神經だと云ふものとは外見は同じでも其間に大變相違があります。

詳く申すやうですが姿勢を整へると云ふことは生理的狀態を整へることで、生理的狀態を整へると云ふことは外來の刺戟に對する抵抗力を增さしめることである。欲情を制御せしめむが爲のことである。更に進めば制御の必要もなき境に到らしめむが爲のことである。こゝが修養の極致で、解脫の境とか、至善の境とか、理想の境とか何とか云ふやうな色々面倒な言葉は要するにこゝを指したものでせう。この境が不斷に繼續すれば、二六時中この境界に遊ぶことが出來るやうになれば其人は聖人である。達人である。大悟の士である。眞人である。自然の人である。(自然に從ふと云ふことはこの境に於て云はれる言葉です。)然るに私共になると繼續すると云ふことが出來ぬ。それ故或時は自由な境に居るが、或時は不自由な境に落ちる。今日なほ禁欲主義の如き不自然な一階段を超越し得ぬものもこれが爲である。鍛鍊が不十分な爲に動搖するからである。恥ぢざるを得ぬ。私は過去の半生涯に於て何一つとしてしなかつた。何一つの仕事もしなかつた。この努力だけが私の唯一の事業なのである。私の生命なのである。誇りなのである。これを拔去つた時私は零なのです。この力の盡きた時は私の死です。努力は價値を產む。私が身を以てなしたる努力は私にとつては無上の價値あるものである。何物にもかへられぬ。この前にはあらゆるものを犧牲にしても惜しからじとまで思ふのである。勿論

修養の極致に於て自殺などの成立しやう筈のないは當然である。併し若し不幸にして半途にして奮鬪力が盡きるかも知れぬ。其時己れに克たむと思へば己れを殺すより外に道はない。自殺によつて勝利を得るより外に道がない。斯くして一代の戰鬪史を一貫させるより外に致方がない。遺憾である。併し止むるを得ぬのである。この死は死の勝利ではない。勝利の死である。勇者の死である。權威ある死である。世を厭ふが爲ではない。厭世などゝ云ふことは許すまじき横着なことゝ私は思つて居る。人間はそんな受身なことでは駄目である。人格の力は自然力を制服し得るものである。人生は無量弱から無量强に達する過程ではないか。

佛敎がショッペンハウエルの厭世主義のごときものであつて、私が其影響をうけて厭世的な考でも有つて居るかのやうに御察し下され御敎示下さつた方もあつたが。併し私は信ずる、佛敎は決してそんなものでない。涅槃寂滅とは死ではない。未來的のものではない。よし又佛敎がそんなものであつたにせよ、私は人の思念の爲に死ぬ譯には行かぬ。生命は佛敎よりも高價なものである。私は私の半生の勞力の價値を高價なる生命よりも更に高しと思ひ、更に尊しと思へばこそ死しても遺憾なしと思つたのである。又思ふのである。今後よりよく活きむが爲に或は佛敎を使ふかも知れぬ。併し佛敎の爲に使はれる譯には參らぬのです。

世には頭腦と身體とを全然別なものゝ如く考へて居るものがある。頭でだけ色々な事を考へる。そして身體は全く別な處に置いて居るものがある。知的生活と感情的生活とを二つのものゝやうに思つて居るものがある思想と實行とが沒交渉になつて居るものがある。しかもそれを當然のことゝ思つて手前勝手な二元論などを唱へるものがある。斯の如き人に人格の力の發して來ないのもあやしむに足らぬ。全く人格を以て考へると云ふことを知らぬからである。それ故に感情が伴つて居ない。從つて意志が伸びない。何等の信念もない。こんな不徹底な境に自分を置いて甘じて居られるのは未だ自分自身の心を鍛つたことがないと云ふ證據です。精神鍛錬

の實驗が少しもないと云ふ證據です。努力奮闘の生活の味を知らぬ證據です。人格の力は自然力に打勝つことの出來ると云ふ實驗を少しも有つて居ない證據です。他人の學說の中にばかり生きて自己を徹底して居ない證據です。どうして本來の自己を泥土の中に埋沒して墮落、虛僞を眞なるものとして居るのであらうか、自己其ものを曖昧の中に葬つて許して居られるものであらうか私は不思議でならぬ。以上。



結婚後の實情を舊師の許へ言ひ贈りし手紙

別役とし子

春もやうやうふけゆき候昨今、先生にはいかゞ御過し遊ばされ候や、定めて御身すこやかに御通勤の御事と存上候。私共別に變りたる事もなくと申候内二月よりはすみと申女の子生れ候て、遂に二人の子供の母と相成候。一人の内は兎も角、二人となりては人手少なき新世帶の事とて、毎日〳〵一寸の暇もなき有様、且は只さへ筆不精の私、此頃の御無沙汰は申譯も無御座候。

今朝は珍らしくもすみ子のおとなしく眠り居候まま三才になる武夫を連れて通りに出で候處、春の木市にと（此處には木市とて舊三月植木草花のわかちなく町の兩側に市を立つる習慣にて候）かつぎゆく海棠の花に出あいそゞろに昔なつかしく存候、かの忘れもやらぬ作法室の前、咲き亂れたる海棠の下にて、日の暮るるも知らで泣きつくしつつ先生と御別れを惜しみ候ひしもはや一昔、げに七年の春秋を過し候、昨日とすぎ今日と暮しつ、人の子の母と呼ばれて俄かに何者にかおそはるる如く長き年月むだに過せし我身に心づき候ては、我れながら我身の餘りになさけなく、且つは師の君逹に對し奉りても申譯なき次第、今更に口惜しき限りにて候。

結婚の當時は人の妻といふ重き責任、さてはかたき覺悟忘るるとには候はねど、初めて新生涯に入りし珍らしさにゑひてとも申べきか、只夢心地にて初て良人より俸給を渡されし時など、何となくきまりあしく、恥かしき心持ちにかられて、いざこれよりぞといふ氣もつかず、一月二月とたつ間にそれこそ煙の如くつかひ盡し候。されど月々の支拂には不都合致す事もなく又日々の家計簿を怠りし事もなく候き、只在學の時は先生より家を出づる時は父より母よりかたく〳〵さとされし貯金といふ事はとても今はかたき事と、よいか

げんの理由を付けて打ちすて居り候。良人の當地に轉任致し候も此頃の事にて候。其中早くも私の初産と申事に相成初めて驚きて人にきき、書にて調べ候處初産には是非共百圓の用意はといはれようやく今迄の不心得に氣つき候。されど最早後のまつり第一回にはいひがひなくも大分國元よりの助けを受け候、常日頃私を信じくれ候舅姑に對してはすまぬすまぬ心持致し、あの嫁ならばといはれし親類の者には恥かしく、師の君さては實家の父母につけては何とも申わけなき事とつくづく思入り候。此時はじめてお金といふ事を頭に深く深く刻みつけ候、親を安心さするも金、親類の信用を得るにも金、又故里遠く離れ居ては祖母をいたはるにも兄弟をよろこばすにも皆お金の力と存候成程貯金はすべきものと確に心づき候。されどなかなか出來ぬものにて候。私は着物一枚はおろか、半襟一掛も求めし事なく、讀みたき書籍も心には任かせぬ程に致し居り候得共、子供二人と相成候ては下女も小さき者にては間に合はず、家もはじめの家にては事足



らず、家の大きくなるにつけては、諸種のかゝりものも多く相成、諸入費も嵩高くまた奥様方のはでな交際も今迄の習慣なればなま若き身の一人すねる程の意地も出され申さず、物置を見れば薪の少なくなりしに心をいため、又意外の費用かさみし月末などごめんなしつし（これは土地の方言にて魚屋、八百屋の言葉にて候）の聲にも胸とゞろかす事もこれあり候。あはれとも御笑ひ下され度候。海老茶の袴胸高に、テニスよダンスよとさわぎし私、今は昔の影もなく、泣く子をせにすかしつゝ、野菜買にも參り候へば、牛肉屋へのお使もいたし候。買物もなかなか上手に相成候。およそ人に迷惑をかけぬ限り、人のものをぬすむでもなければ、正しき道をふむ以上、如何なる勞働も決して恥かしきことにはあらずと覺悟致し候ては、何となく心も清々しく、庭の掃除も洗濯も、女中と共に立ち働き居候。妻子のために一日を役所に勤めて歸り來る夫を、二人の子供と共にゑがほにむかへて、笑の中に終る夕食は、またなか〳〵の樂しみにて、珍らしき夕食の料など手に入り候時は、昔よき歌一つよみしよりも嬉しく存候、されどまた二人の子供に泣きたてられそれがため良人のきげん迄損じ候時など、つくづくいやになりて、共に泣きたく成り候へど、子なき妾の日記など讀みては、泣くもいかるも家庭の幸福より來る事と思ひ直して、双方のきげんをとる事に候。

私も女の身にて候へば、寶石入りの指輪、ハイカラのブローチなど、買つて見たいとの心も満更起らぬにも無之候へども、さりとて又さほど羨ましくおもひ不申候。有つて出來る人がよき風をなし、又出來る人が出來る樣にするはその人々の働きなれば私は左樣に目ざましくよそおふ人をむしろ感心と存じ居候。これも或は一種のすまし方かも存し申さず候。

されど只一つ羨ましきは無邪氣なる學生時代その時代に今一度なりて日課に試驗よとさわぎつつ先生の御叱言を受けて見たくいま一度ほめて戴きたき思ひの致され候。

忘れもせぬ三十六年三月廿四日これぞ最後の授業ぞ

と申す時先生のみ情こもれる御さとしの數々いかでいかで忘れ申べき。この七年の間に思ひ當る事のある度に先生の御なさけしみじみと身にしみてただ有がたくとのみ存候。その中の御言葉にも有りし如く學校を去りて後は雑誌と新聞とを友とせよとの仰せ二三年はさほどとも氣附かで過し候が、此程になりては日に月に時勢に後るるを感じ二三の雑誌と新聞とは必ず机の上にそなふる事に致し候。こは只自分の智識を得る斗りにては候はず、よその奥様と御交際申上候時など只の世間話にてはつい種つきて人のうはさや悪口などの出でやすきものに候故、これらをふせぐ上にも亦双方の智識の交換の上にも最もよろしき事と存じ心へだてぬ奥様方とはなるべく異りたる雑誌を取る事に致居候。それさへおちおちとよむ暇もなき時などはすみ子に乳を與へながらよみ申候、時には乳含ませながら針仕事を致し候



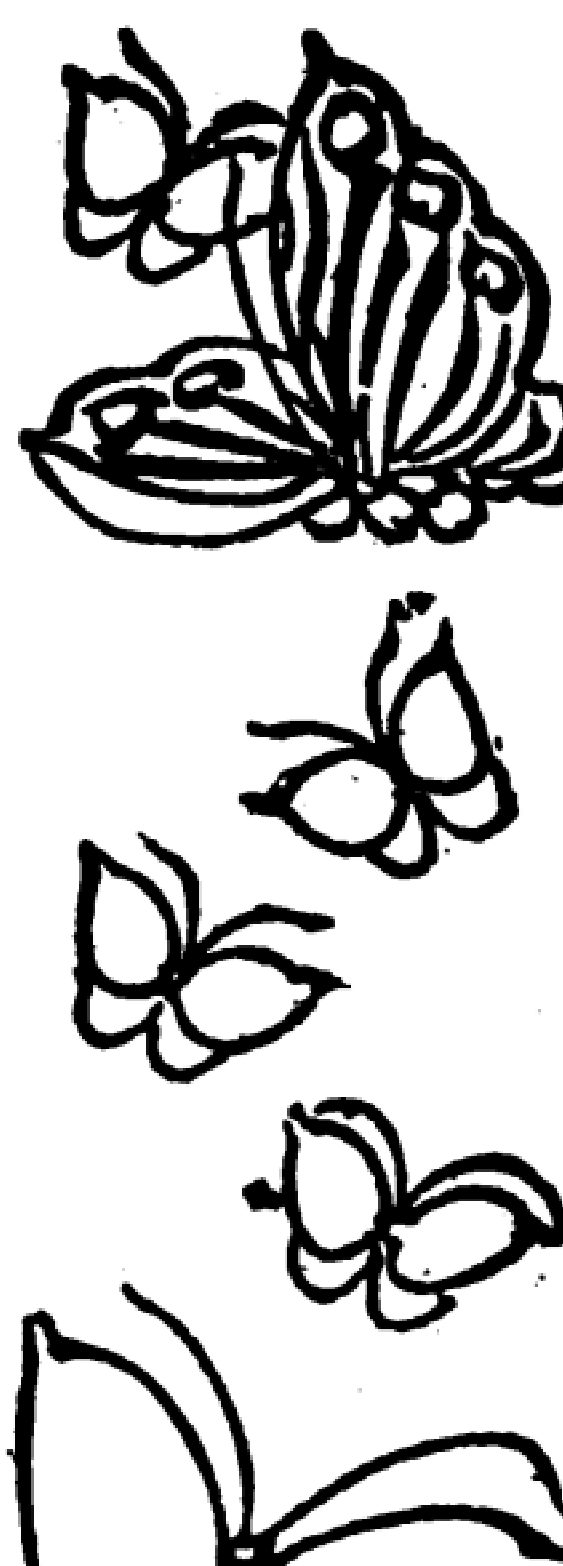
この様に働きては昔の私の身體にてはいかゞと御きづかひあそばすかも存じ申さず候へども、日曜はなるべく夫や子供の相手に遊び暮しまた來客も多く候へば存外に心身を休むる間もこれあり候て至極壯健に候。女學世界にある嘉悦孝子女史の精力主義ほとほと感心仕候。かたく決心はいたしながら、かく實行はいたしながら、さて色々とさわり多く良人に十分の満足を與ふる事も出來申さず、愛しき子供をも十分よろこばす事も出來ず、眞

にいひがひがき我身よとあやしく心亂れ候てはつい昔の心弱き私と相成りあらぬ方に迄思ひさせて枕をぬらし候事も度々に候、されどかかる時、かかる私に對してさのみ不平らしき顔も見せず、安らかにねむれる夫のかほさては右と左に無心に眠れるいとし兒の顔をながめ候ては、又も末たのもしさに心をとり直して力のつくる迄とつとめ居候。

今朝の海棠にて昔なつかしく師の君こひしくとりとめもなき事を子供のひるねの暇をぬすみて書き亂し候隨分遊びずきの殊にテニスに熱せし昔の私を思ひ浮べ給ひ、今此の手紙御らん遊ばされ候てはいかが御感じ遊ばし候はん、又此手紙御らん遊ばされ候ていま在學の若き妹達の參考となるべきふし有之候はば御聞かせ下され候てもさしつかへこれなく候。只今私は羽仁もと子の家計簿を用ゐ居候比較的完全なるものと存じ候がいかがに候や、御意見伺ひ上候。

春とは申ながら何分氣候不順の此頃十分御身御大切に愛らしき妹どもの御薫陶願上候。

かしこ。



教誨師となりし女より友の許へ

破芭蕉

おなつかしいく＼喜美子さま。

兎角御無沙汰にのみ打ち過ぎ申譯も御座いません。櫻の花も眞盛りに好き時節になりました。良人樣御始め御姑樣にも三輪子樣にも殊て敬愛なる喜美子樣には御變りはあらせられませんか。三輪子さん嘸かし御成人遊ばした御事と存じます。最早お次ぎのお子樣、御誕生有つても好き時分、近頃お便りなきはもしや其ための御病氣等にてはなど一人御推しいたして居ります私は變りなく益々壯健で山崎牧師御夫妻を師とも親と

も頼み、浮世離れた此別天地に力の限り盡して居りますから御安心下さいませ。

近頃はもうすつかり馴れまして、生徒もよくなついで來ましたから此分ではどうやら成功いたしさうに思はれます。

何れも親に捨てられ世間に容れられないもてあまし者の事とて少しも氣が許されず其精神を勞する事は想像の外ですよ。

無邪氣なるべき年齡の兒童なのに陰險で嫉妬猜疑の心が強く愛すれば狎れ叱れば恨むの氣は實に彼等に甚だしいのです。而して不規律な生活



に馴れて居るものですから監内の秩序正しい生活が厭で度々逃亡を企てますの。

彼等の中には先天的に惡事を働くのも有りますが多くは後天性のものです。

近い頃放火犯で入監した兒は母がまゝで虐待するのに實の父まで愛が無いので兩親を恨むのあまり自身の家で有るにも係らず兩親を困らせて遣らうとして祝融の災を招いたのださうです。中流の生活をして居たさうで紺絣の着物に學生帽を冠つたスタイルには品格が有つて立派なものですよ。私の様に

兩親も兄弟もなくて孤獨に泣くものも有るのに、親はありながら其愛を受ける事が出來ないなんて世は樣々ですわね。

當校に入監してる兒童の中には愛情に渴えて横道へ曲つたのでどうも人を敵視する樣なのが多う御ないますから私は一生懸命優しい情を以て彼等を導く事に苦心して居ります。いくら訓戒してもじきだめに無つて熟々いやに成る事も有りますが一念岩をも通すと申しましたからたゞ何處迄も堅忍不拔の意志を以て勤める積りです。彼等とて矢張り同じ人間で少しの場合で此樣所へ來るやうに成つただけ、私の誠心が屆いたら正しい人間に成つてくれない事も無からうと存じます。現今私の唯一の希望及び理想は彼等が皆人の道を正しく踐み行ふて行ける樣に成つて欲しい事です。此職業の爲には何物でも犧牲に供する事を厭ひませぬ先日七回の廻文千草の花手元へとゞきました筆に任せて愚にもつかぬ事を長々と書きたてゝ發送いたしました。多分來々月中旬頃御落掌遊ばす都合になりませう。

あゝ四年の星霜過ぎて見れば早きもの。たゞ過去を省みると夢の樣です。前回は未だ元の姓を名乘つて居られる方も八九人は御座いましたが今回は最早私と秋田樣と小野樣と三人丈に成りました。秋田樣目白臺の研究科を御卒業遊ばされ近日解纜英文學研究の目的を以て御渡英なさるゝよし多年の御志望いよ〳〵遂せられ御得意の御心中誌面に活躍眞にお羨しさの限りです

思へばなつかしき學生時代よ！　授業時間の合間々々共に手を取り語り合ひし夢の樣な空想も順境に有る彼の君には現實となりヤット女學校を卒へた計りでいろ〳〵な災に見舞れた私は思ひも掛けぬ斯樣な處に敎への鞭を取るべくやむなくさられたのも奇しき運命の神の仕業でせうか。

其れはさうと昨日はお珍らしい方の御訪問を受け下手な敎授ぶりを參觀して頂くの光榮を辱ういたしました。それは元の立見さん今の法學士未來の總理大臣夫人を以て任じ居給ふ岸川田鶴子夫人の御來校御存じでせうが同夫人の伯母君は本縣知事夫人で非常に權力

のある方。その知事御夫妻のお見込で配下に嫁がれ伯父君の御威光を笠に來て彼處の婦人會此處の何會と遺憾なく虚榮心を滿足させて被居いますの。いつか一度は御訪問して昔語りを仕様かと思つては居たものですがあんまり羽振りがいゝので、みすぼらしい私が舊友とあつては御身分に關するかとさし控へて居りました處圖らず昨日御來駕の榮を得た次第、母校を出てから去年茲へ落ち付く迄は諸方流浪して一度も同窓會へ出席しなかつた私、同夫人とは四年振りの御面會、同窓に別離後始めての面會と云へば飛び付いて握手の禮位してもよいもの、況してや私と田鶴子様は學生時代は近所に住んで登校歸宅を共にした仲なのに遠くの方からよそ〳〵しく丁寧にお首を下げられたので面喰はない譯には參りませんでしたの。



御身裝の御立派さ輝く計り袷の重ねに首かけなんかぶら下げてお衿のブローチもお手のダイヤもきら〳〵しう。流石悟りえた筈の私も七ツ下りの筒袖に必要のために止むなく携帯する時計の銀鎖が破れ袴の紐へからみついてる樣聊か恥しくなりますでした。こんな事では矢張り未だ信者には成れませんネ。

失意の境遇に在る友を訪るのに――私自身は決して失意ではないが榮耀に輝く彼の君のお目にはたしかにさう移つてる――この御服裝はひどいでせう。尤も惡いお召などで外出遊ばすのは御身分にさわるかも知れない。私のとこへ駕を枉げさせられたのは私がどんな汚い風をして居るか見てやれの好奇心と御自分の御服裝を見せ付けて遣りたい虚榮心からなのでせう。其證據には品格を落すまいとして一寸も打ち解けては下さらなかつたのですもの。昔のコムパニなんか云ひ出してもオホヽヽと氣取つてお笑ひなさる計りお菓子やおせんべいの買喰ひは誰がしたかと云ふ樣子でした。讀方一時間見て下さいましたがパクリとか何んとか云ふ掏兒で入監した兒童がお手に光る指輪やお時計にばかり目をそゝいで居たのには閉口いたしました。「それでもお樂しくも御座いませうネ」なんて夫れではおひどいわネ。私の今の境遇を生き甲斐もなく思召してゝせうけれど私は新御夫婦さし向ひで誰に氣を兼ねる事もなく思ひのまゝに振舞つて被居る彼の君を決して羨望しませぬどこまでも今の境遇に滿足し、この尊い職業に多大の敬意を拂つて獻身的に勤務して居ります。

田鶴子さんなんか御子樣がないから未だあんなで通るですネ御子樣でも出來れば又着實になられるでせうが。

石田樣から御便りはありますの、先達坊ちやんのお寫眞頂戴しました三輪子樣のもゝう下さつてもいゝでせう毎日待つてますのよ。

石田さんと云へば過日一寸用事で停車場附近まで行きましたら華子さんの昔の戀人で有つた坂上賢一樣を見かけましたあんまり不思議ですから人違ではないか

とよく見ましたが正眞正銘の賢一さんでしたよ。臺灣に御勤務とか噂にきいて居ますが何しにこんな方へ來られたのですかネ。先方では氣がつかなかつたから幸ひと言葉かけませんでしたの。

五年前私と君とで兩君の間をいろ〳〵斡旋した事が偲ばれますネ、あの時分の事を思へばお見掛け申しながら默つて通るのも惡いけれど先は危きに近らずだと君子を氣取つて避けました。

華子さんは御子様までも有るのに賢一さんはキッと未だ御獨身ですよ。意志の強いあの人の事だからあの時の言葉通り生涯淋しい獨身生活をなさるかも分りません。

お互に飽きもあかれもせぬのに頑固な御父様のために引き離されたあの時の悲劇は隨分でしたネ。華子さんの圓滿なホームを作つて被居るのに比して賢一さんが實に御氣の毒、男子は情が薄いと申しますがたまにはあんな人も有りますのネ。華子さんに賢一様の話は禁じられて有りますからたゞ君にのみ。

遂下らぬ事計りで長くなりました。何卒御返事下さい。

御身御大切に　　旦那様へよろしく〳〵

四月十五日夜　　孤燈の下にて

君戀ふ友より

親愛なる

喜美子様

御前に

人生觀を籠めたる賤業婦の手紙

芳子

藝妓になつた友達から

芳子様！　昨日の同窓會大變盛大であつたと、云ふではありませんか。例年の通り校門のアーチが振つたものでしたとか、裝飾係は、幹事でゐらつしやる柳

田樣でございますもの、室内の裝飾も嘸立派でございましたでせう。池田先生の御話、まあ、どんなにか面白うおきゝでしたらう。あの、お莞爾やかな御風貌玉を轉がす樣な御美音、思ひきつた皮肉や、きはどい諷刺、いつも〳〵胸の透く樣な御話振、それに會員の方ではあの獨唱の旨い松本さん、今度もきつと何かなすつたと思へば、もう〳〵耐らなくなります、同じクラスの方では花子さんの仕舞やら金子さんの隱し藝、思ひ出した斗りで、をかしうなります、それに皆樣嘸お揃ひで御立派でゐらつしやいましたことでございませう。

あゝなぜ私ばかりこんな身になつたのでございませう、學校に行つて見たいと思つたつて行ける身分ではございませんもの、お友達にも御逢ひしたいと思つたつて、只思ふばつかり、私だつて時には先生にもお逢ひしたうございますわ、お友達とも逢つて見たうございますわ、先達も春若屋の門口であの私の好きな三好さん、ちらと、見かけてあぶなく聲を掛ける處を、はつと口をつぐみました、こちらはどうせこんな身ですもの何と見られたつて構ひませんが、お向ふの方がどんなに極りの惡い事でゐらつしやるだらうと思ふのです。

又一昨日は座敷に呼ばれて行く途中、吉田先生の御引卒になつた在校三年生の遠足歸りに行逢ふて、それは〳〵ひどい目に逢ひました。六十有餘のお目で、じろ〳〵見られて、それに、才次！　才次！　卒業生！　橘！　醜業！　なんて云ふお聲が耳に入るのですもの全く耐りませんでしたわ。

藝者！　そんなに賤しい者でせうか、私なんかそんなに惡るい者でせうか、人を欺くことも致しませんに人を苦めることもありませんのに、でも矢張り賤しい業に違ひますまい。

そして、人樣から御覧に成つたら隨分暢氣な仕事の樣に御見えになるかもしれませんが、又私等の仲間は私等の仲間で、不文の制裁があるやら、面倒な藝閥があるやらで、それに、全體が比較的教育の低い寄合な

ものですから仕惡い事もあつてそれは〳〵辛ひ、悲しい事も、ちつとや、そつとではございません。そして又私なんかほんの腕なしで、人の爲るのを見た儘にして行く斗りですもの。間違つたことをしたり、爲ねばならぬことを爲なかつたり、何が何やら、さつぱり分りません。

教場での机の上、彼あせよ、斯うせよと、手を取つて敎へられるのとは違ひます、知つてゐたつて、知らぬ貌をしてゐて、聞いたつて敎へて呉れる人はありません、とんだ處で昔の先生が有難くなつて一人で泣きます。



朋輩だつてどんな人が在りませう、それは、中には分つた人もございませうけれども、今私の仲間の者なんて、お話になるものじやございませぬ。人のお金を取ることを、人に僞云ふこと位心得てゐる人斗りなのでございます、それですけれども又、それが惡意があるのではございません、つまり自身の安全を計るので官吏の方が上官の方などに取入つて身の榮進をお計りになるのと、同じ様に思つてゐるのでございませう。

ですが世は業のみで行かぬと見えます、それならば私達三味を彈いて、お酌でも

して居ればいゝのですけれども、其間人の機を捉へる術を知らねばなりません仲間の方なんか、こんな處に行きますればそれは隨分渋い腕をお持です、勿論私等の生命とするのは、藝ですけれども、それは殿方の大學とか何とかでお修めなすつた智識と同じ者です、美貌と云ふ、殿方のお腕に相當するものがなかつたならば、私どものすることはさつぱりつまりませぬ、それに、鋭い観察眼を持つてゐなければなりませぬ、つまり處世の法は何を爲ますに就てもあまり異らぬものと見えます。

是れから考へて見ますならば世の奥さんとなる人、又未來に於てならねばならぬ令孃方今少しこんな方面に就いて修養が必要ではおあんなさいますまいか、一日の勞苦に身も心も疲れてお歸りになります旦那樣に文藝話も詰りますまい、誰かの仰つた、「是からは藝者と世の婦人との競爭だ」と私なんかそんな氣はございませんが或は一種の卓見かも知れません、どうです芳子樣一つあなたと陣を張つて一競爭致しましては、實際女學校位卒業して發音の怪しい英語なんか操つて、いゝ氣になつてゐる時代ではございますまい、芳子樣なんかそんな方でもゐらつしやいませんが尚此上にも御修養なすつて、天晴健全な方におなりなすつて下さいませ、何だか拙い私から教訓がましい云ひ草ですが私が思つた其儘を只此處に申し上ぐる迄でございます。

乞食も三日爲ると止められませぬとやら、こんなつまらない職業でも、それは又面白い事もございますよ、不景氣だなんて云つたつて私どもには一向影響しません、世は永久に春です、思ひきつたなりをして春雨の降る四疊半向ふ座敷の三下りなんか一人聞いてゐる時は隨分暢氣でございますよ。

又呼んで下さるお客樣で面白い事もあれば厭な事もございます、概してこんな處にお遊びになる樣な方はお腕のありさうな方が多くゐらつしやいますから、お仰る ことも面白くてついこんな方に連合つてゐらつてやる奥樣は又、どんなに如才のないいゝお方でゐら

つしやいますと伺へば、急に澁いお顔をなすつて、駄目〳〵とお首をお振りになります。

數あるお方の中では、それは〳〵御風采なりお物ごしなり何一つ缺けた事のない立派なお方お情緒も細く趣味もお深くお座す方も入らつしやいます、私等の樣な者どうせ、眞面目には相手になつて下さいますまいと世の女の方が妬くなる時もございます。

又すばらしいお手前でぱつぱとお遣ひなさるお寛大さ、どんなお方かと思つてゐる矢前、官金消費で檢事局送りだなんて聞いて開いた口が塞がらぬ時がございます。



種々な方にお接しするに就いて其方々を通じてお家庭の樣も伺はれます、世間では隨分巾のきくお家からとんだ襤褸が出ますやら、お金の有りさうでなかつたり、お堅さうな御家庭が亂れて居たり賤業者風情と大變お賤しみになるお奥樣が、私等にもできない眞似をなさるやら、お孃樣が學校からやつと覺えてお歸りなさる、修身法、片端からお毀しなさるお父樣があるなど世は矢張り樣々でございます。

こんな事、自分斗り偉さうなこと云つたつて矢張賤業婦に違ひはありますまい、そのかはり、まのあたり是非負はなければならないと云ふ責任はなし、盡さねばならぬと云ふ義務はなし、氣が向けば勉めもしようが、厭だつたら構はぬといふ我儘も出て、又人の感情をいゝ加減に弄んで行く間には、自分の信も漸時に滅びて行く樣で、果てはどんなになりますことやらと、不安の思ひに心が暗うなることもございます。どうせ世の敗殘者！　運命に敗れた弱い者！　どうぞ芳子樣憐れんで下さいませ。

女塾生活の内狀を報ずる女學生の手紙

若葉

東京へ出てからもう二月、今日の樣なお天氣のいゝ日曜には、故鄕の女學校の寄宿舍で、木綿の着物きて短かい袴はいて素足に麻裏草履の質素なりで先生につれられて、御一緒に郊外運動に出た時が思出されます。

あなたこの頃どんなにしていらつして若竹の齊い丸まどの處へ机おいて、晶子さんの毒草擴げて、歌考へていらつして。

妾は、今この手紙かいてる處は、窓ぎわにづらりと四脚ならんだ机の末席、八疊の間の隅つこよ、今日は日曜でお天氣がいゝから、同室の方はみんな朝からおめかしゝて外出、私丈は遊びに行く親類もない、一緒に散歩するお友達もまだ出來ないから、のこつて戀しい故鄕への手紙をかかうと思つて、獨り机にむかつてるの。

お隣の室の方もみんな外出と見えて、お聲自慢の百合子さんの微吟も聞えません。あまりしづかだから天井の鼠ががた〳〵とさわいで妾淋しいわ。

獨りジツトあたりを見まわすと、御主人なしの皆さんのお机の上には、紅皿や、鏡や、お白粉や、ピンや、古いリボンがごちや〳〵になつて居て、隨分殺風景。

でも其の前でお化粧して出かけた皆さんの風姿は、隆としたものでしたよ。○○伯の令孃、○○男の令妹なんて御一緒に見た雑誌の口繪にあつた様なハイカラ式の束髪にビロード製の造花一輪、白い肉づきのいゝお顔へ薄化粧ほんのりと致された口もとから「行つて參ります」とよそ行き聲で挨拶して立ち上がられるお召の袖長う、もみ裏の八ツ口から時色縮緬の襦袢のお袖がこぼれ出る様に見た時は、私の様な田舎ものは、アングリ口のしまりを忘れて見とれるかと思へば、高貴の姫様が突然顯れ給ふたかに氣がついた様にどきまぎ顔をさげますの。

　でもみんな立派なお身ですわね、あたりかまはず夕御飯のお肴の切り身の大小を論じられる時や舌づゝみ打つておさつ召し上る時には姫御前の身のこれはと驚く事があるにしろ、今に立派な令夫人となられる方ばかりだと云ひますもの。



　令夫人といへば、昨日奇麗な奥様がお見えになつてよ。この四月までこの塾に居て此塾の先生のお世話で子爵の御次男とかにお片づき遊ばした方ですつて。小紋縮緬の二枚袷せに、クリーム色に金糸のはいつた丸帯しめて、品のいゝ刺繍模様の半衿から乳の様に白い

衿あしをあらはし、頭のヘヤピンやお指のリングに寶石まばゆきお姿、こんな立派な方が疊も壁もきたない此處に居られたかと思へば、勿體ない樣な氣がしたわ食堂でお土産のお菓子の御披露があつて、塾生一同お茶頂きながら、あちらからも、こちらからも、大澤さん〳〵つておもて、お歸りの後も、昨日一ぱい塾中大澤さんの噂でもちきりよ。

見かえるほど美くしくなられたと感心して居る人があれば、妾だつて華族樣の奧樣になつて、一生懸命みがき立てゝ、いゝ着物きればあれ位に見えるわと戯言らしう人のほめられるのを口惜しがる人も居る。

華族樣じやないわ。御次男だもの、妾どもゝ同じ事よ。それで居て、位の高いいゝ處へいつたつもりで居られるからをかしいとけなす人があるかと思へば、次男だからまだいゝわ。妾なら華族の長男なんか大きらい。家令だの家扶だのいろんなものが居て、小さくなつて居なきやならないのですもの、腕一本でこれから世にたつ有爲の人物と結婚してすき自由に自分の新家庭を作り上げて見たい。さうでなければ心に貯へて居る理想を實現するわけにゆかないと大氣焔もあつたの

「それじや間島さんのやうな、洋行歸りのハイカラ紳士と結婚してヘヘーだのスヰートだのいつてるのがすき？。」

オ、いやだ。およしなさいあんな處、持參金もつて行かなくつちやカスの竈も客間のピヤノもかへなくつてよ。」

「心配しなくつて大丈夫エンゲージメント御有福でいらつしやるから」

「それじや御結婚後も塾へ尋れてこられるわれ。古田さんの樣に小學教師して見すぼらしいなりする樣になつたら、此塾へなんぞ尋れてくるものじやないわ。第一、先生の待遇が違ふんですもの。妾なんぞ此處を出たら馬車にのる身分になるまで尋れてこないんだわ。」

「隨分見え切れ、金紋の馬車かりて、舞の紳士と同乘して、見せびらかしにきて、先生の歡待を受けるといゝわ」

なんて明日の豫習いらぬ土曜日の夜中大さわぎ。

妾びつくりしてよどうせ戯談半分ですけれど笑や無駄口のなかに却つて本心があらはれてるんだらうと思つて。

妾故國に居て、雜誌や新聞で先生のお說や塾の有り樣なんかの記事見て居た時は、此處に居る人は、先生

の様に人に秀でた學問して、德行を修めて、女子敎育の大家になる事を理想として居るだらうと思つたら、大ちがひ。彌陀も手にとれば光がないつてこの事でせうか。

コツ〳〵勉强して袴はいて、何々女史なんて冷評的賛辭を頂くより、いゝ着物きて、馬車にのつて、〇〇夫人となつて賢婦人の名を恣にする方がいゝなんて昨夜もいつてる人がありました、實は驚ろいて仕舞ひました。

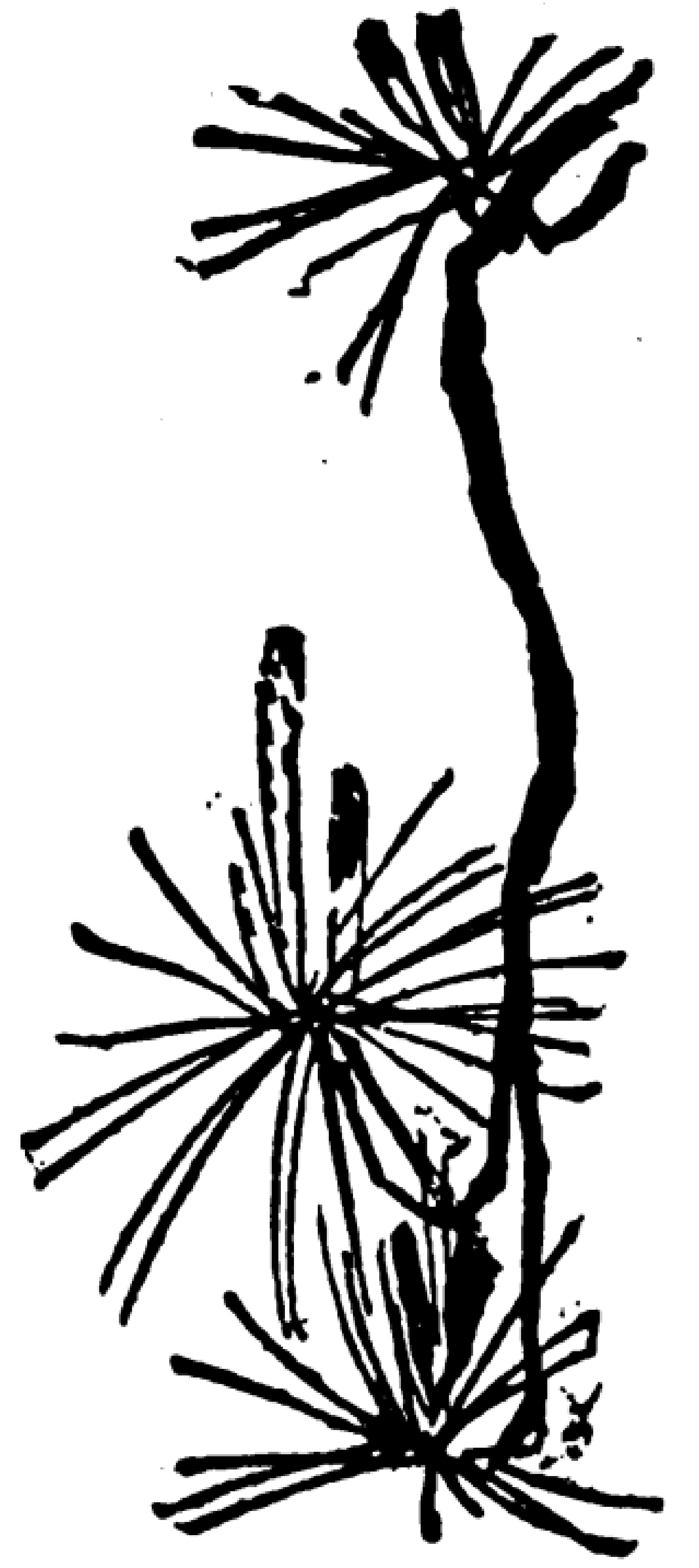
私そんなことはしらないから、この間室長さんから故國の事やなにか聞かれた時に、私は金滿家の娘でないから、勉强させてもらつたら、あとは自活するお嫁入りの仕度なんぞしてもらはなくともいゝ約束で東京へ出してもらつたつて話したら、それは大間違だ。敎育費は商賣の資本でない。敎育は人間を作る丈なんだから、月給とる、自活するなんていふ事は期待しない方がいゝ、此の塾に居る人は、學校卒業したら、親から立派な仕度してもらつていゝ處へお嫁にゆくんだみんないゝ家の孃さんだから、あなたは家がよくないなんていふと馬鹿にしられるから、そんなこと云はない方がいゝつて聞かしてくださいましたよ。私ね「ぢやあ敎育はお嫁入り仕度ですかつて聞かうかと思つたけれど、新入生がそんな生意氣いふと憎まれるから、だまつて聞いて居ましたの。

私東京へなんか、いつそこなきやよかつたと思つてよ。だつて今更歸るのもいやだしどこか他の塾へかはりたいと思ふけれど……。

私は朱に交はつて赤くならぬ様にと、今は願つて居りますけれど、今に朱を朱と思はぬ様になるでせう。

潔いやさしい故國のおたよりを時々きかせて濁流に染んでゆく心を洗つて下さい。





遠き國なる大姉君へ

都の小姉

一昨日大磯より立かへり申候一ヶ月の潮風は母上をも私をも末子をも眞黒に染め申候、皆はよき色と申し候へ共私のみは鏡の前なさけなく、お留守番なりし千代のかたがはるかに美しくみえ申候。

さて今日はまことに〳〵にかなしきおはなし御耳に入れ申候、實は私は申上ぬ方がと申したるに候へ共、末子は是非〳〵大姉様にかいてあげてとたのみ候まゝいたしかたなく筆とり申候。

末子は今六疊の室に縁の方を枕にして氷嚢をあてゝ臥し居り申候、そして時々思ひ出てはしく〳〵とすゝりなく聲のきこえ申候、大姉様に申しあげたらきつと御泣きになるだらうから、と申し候にあはれなポチのなきがらの上にちッとでも澤山の涙をそゝぎたいと云ひ居り候がむげにいなみがたく候まゝ、幾百里を隔て候姉上に益なき御なげきの種をまゐらする苦しさをしのびつゝ、ありし日の有様かざらずしもにしたゝめ候事にいたし候一昨日の晩方人顔わかぬ頃になりて新橋よりわれら三人は車を列ねて立かへり申候、末子が途中汽車の上にて、丈夫でせうか、淋しがッて居るでせう、と案じ續け居り候小犬「ポチ」はいちはやく車の前にかけいでゝ私共をむかへ申候、末子はオー〳〵ポチチヤンかオー〳〵と叫びつゝかきいだきて庭木戸のかたより入りて縁に腰かけて手下げの中のビスケットなどつまみ出してはなげやり候に、ポチはちぎれむばかり尾をふりて嬉しさに堪へぬさまにて候ひき。

あけて昨日の朝に候、末子は目さむるすなはち床の中よりポチヤ〳〵とよびながら朝日まばゆげにたちいで候にいとゞ〳〵ポチは踏石の上に後足たてゝ、小る

なるからだをありつたけのばして雨手を縁の上にかけつゝ、ぐん／＼と申し居り候、おまちよ／＼と云ひつつ妹は自分の分なる牛乳瓶を臺所よりもち來て、ポチの皿につぎかけ候ひしが、其の土よどれに氣付きて舌うちしつゝ机の上の端書の反古を折りまげて當座の皿を作りて一合の乳をつぎてはのませつぎてはのませ空



しくなりし瓶を見せてもうおしまひよと云ひきかせ候に、ポチはおとなしうきゝわきたりげに末子が膝に小さなるかしらをもたげてさも甘へたるそぶりいたし居り候、末子はそれを、なでおろしつつ弟などに物いふ様に。

「ポチチヤンはすこしやせやしないの、」

「私の留守にどんな御馳走をたべた

の？」

「おぷうに何時入れてもらつたの？」など居らぬ程の心がゝりの數々云ひ盡して今一度そが顏に頰ずりしてさて、かほあらひに立つとて始めて心付きて、「オヤ頸輪が無いッ」と大きな聲にて叫び申候驚かされて母樣まで立出でゝ御覽なされ候、今までしらずに居たるを不思議がりつゝ御香のもの切る手を止めて飛んでまゐりたる女中の千代にどうしたのと尋ね候に「さう／＼昨晩申しあげませうと存じながらすッかり忘れて居りました、じつは昨日の朝御飯をやります時頸輪がないので近所をさがしてみましたが見つかりませんでした申上おくれて相すみません」とわび入りたるさまに妹も氣の毒になりてそれでは御飯がすんだらすぐ交番へ屆けて來て頂戴よ、と云ひつけて朝飯のまも氣づかはしげに庭をのみ眺め居り候ひしが、今朝は琴の先生へ行くとて東の緣先に出で候てリボンなど結びやり候ほどに、今日はなにの御馳走してあげませうなど、小犬相手に物云ひ居り候こそ今思へばあはれに候、やがて長き袂に爪箱ころ／＼と音させつゝ、立いづるとてポチがついて來るとよその犬にいぢめられるから呼んで頂だいよ、それから頸輪の事をね、と念推して下駄音せぬやうにこそ／＼と出で行き候ひしを、ポチは早くもきゝつけて門口ににげ出で候、妹は塀の小かげに身をひそめてやりすごし候ひしを小犬はしらいで、つゝとかけぬけて十間許りさきの角をまがりて小さきあるじのあとしたひ行き候、末子はまた其のあと追ひてポチヤ／＼と見えぬかげをよび候、トタンに、キヤーンキヤーンと二聲の悲鳴、アッポチダッと氣づき候末子は夢中に角をまがりて黑暗坂までかけつけ候、されど／＼遲く候ひき、あゝあゝあはれなる樺色の小さなるむくろは犬殺しが太き／＼棒の下に橫はり居り候、にくらしいの一念に何事をも打わすれて犬殺しを捕へて坂下の交番に訴へ行きたるに候、されど頸輪！　頸輪なき犬は野良の捨犬もおなじ事に御座候、犬殺しはにくさげなる目にあざけりの笑を浮べて血走りたる少女が顏を見下したる事なるべく候。

はるかに聞えし悲鳴をいぶかしみつゝ私も門の外まで立出候處へ、顔色あほざめて小走りに立かへり候妹はいきなりにかけよりて私の手にすがりて初めてワーッと泣きふし候、驚きて母様も千代も家中總出にてともかくも家の中にだき入れ候ひしが、茶のまの縁にひれふして、しばしの程は手のつけやうもなくなき居り候、やう〳〵母上になだめられて起きあがり候時は、破れむばかりに頭痛すとて床に臥し候、熱はいたくあがり昨夜はよッぴて眠り得ず候。

ポチは毛色がよくなくて藝も下手だつたからうち中の人があんまり可愛がらなかつた、」

「生れたばかりのを去年乳屋が持つて來てくれてから僅か一年足らずしかうちの御飯をたべなかつた、」

「私の病氣がなほつたら立派なおともらひを出してやる、」

などの事を涙のひまには云ひつゞけ居り候、すや〳〵と寢入り候とみれば

「ポチヤ、オマチー」

熱の高きが故に候。

只今日曜學校の先生にねがひて來ていたゞくやう御むかへ出し候ところに候、八歳の時の腦病再發せねばよいがと母上の御心配一方ならず候再び飼物はせぬといふには昨夜妹が枕邊に家の掟といたし候。

兩三日の後には定めていたいけなるともらひが小さなる喪主によりて送り出さるゝ事と存じ候。かしこ





村の茶屋

書翰文の心得

△書簡文は應接の言辭に代ふるものなれば其對する人に隨ひて、丁寧にもうや／＼しくも親しくも、さま／＼の區別生ずべきなり、殊に貴人尊屬等に對しては最も丁寧恭敬なるべし、さればとてむかしの女用文のごとくくだ／＼しき敬語や煩はしきまゐらせ言葉を多く用ふるは厭ふべし。

△すべて文體はうや／＼しくして簡潔なるべし、くだ／＼しくなるべからず、冒頭收結など長々しく書きつゞりたるは最もうるさく見ゆるものなり冒頭に叙する寒暄起居、さては久濶を謝するなどの事は省くも書かぬも同じ事なるよし。

△又手紙を書くには平常其人に對して應對する詞よりも一層尊敬して書く事と知るべし、これ書簡は親しく面會して語るよりも何程か親しみを缺く情味あるものなればなり。

△一般普通の手紙文は文體用語ともに平易にして誰にも讀み易く解しやすく一讀して明かに其意を知り得らるゝやうに書くべし。

△女子より男子へ贈る手紙は愼みて詞數多からず、凛々しくして和らかに書くべし、艶めかしき言葉づかひ、又戯れ言などはつとめてこれを避くべし。



△すべて女子の手紙は假字多くまじへ、さら／＼と優しく滑らかに書きたるをよしとす、漢字がちに墨くろく、筆つゞかず、ぼつぼつと書きたるは其人柄のほどもおもひ落されて片腹いたきものなりすべて手紙はその書きぶり及び手跡等によりておのづから其人柄も思ひやらるゝものなる内に殊に女子の書簡の見苦しきは疎ましきものなれば文體手跡ともに拙からず優美に書きたきものなり。

△文字のあまりに大なるは不敬なり、さればとて又あまりに小なるも不體裁なるものなり唯女文は大小の文字を程よく書まぜすら／＼とやすらかに書きたるこそよけれ大なるは五六分小なるは三分位を度とすべし。

△人を招待する文又は集會案內狀その外何事に依らず約束する日時は、何日午後何時何分と必らず確と其時刻を示し又は晴雨に依らずとか又は雨天順延とかいふ事を記すべし。

△招待文には丁寧に先方の人の來るを希望する意を表はすべし、されど高貴の人に對して是非とも御光來被下度など、強ふるはよろしからず。又法事に人を招く文などは人を饗應するが本意ならざれば強ふるはよろしからず。

△見舞文は病人を慰め、はげますを旨とするものなり、さればかすり字又は四字を書くべからず、又病氣の善惡分らざるときは墨を薄く書くが例なり、火事見舞又は水害見舞等は罹災者をして落膽せしめざる樣勇氣をつけるを主とすべし、火事見舞

には猶々、返す〴〵重ねて又、等の文字を書くべからず。

△祝賀文など婚禮の歡びには返る去る、移る等の文字を忌み、新宅には火の字を忌む而していづれも濃き墨にて書き且つ前文を略するが例なり。

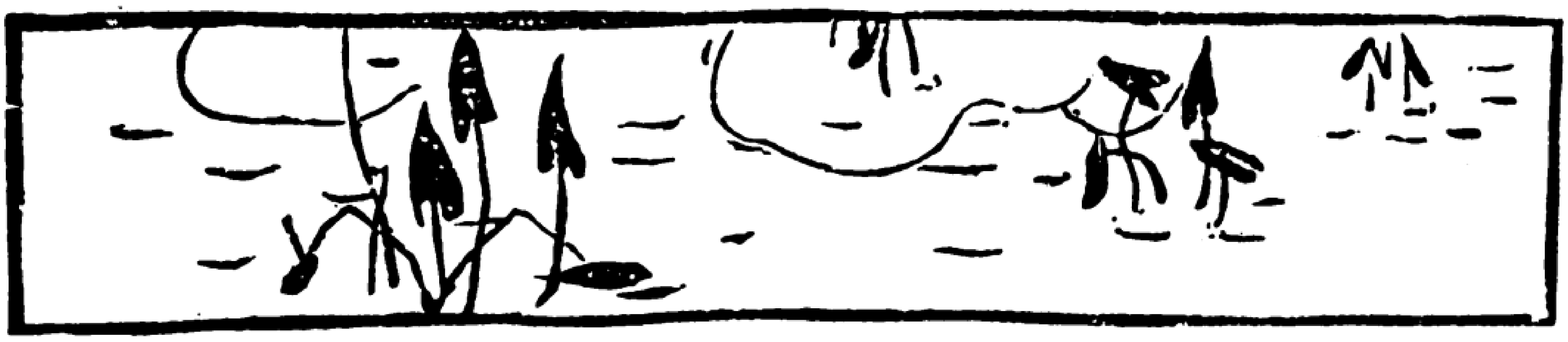
△照會文は先方にて回答するに都合よき樣なるべく要事を列記すべし且つ面倒ながら、恐入候へ共等の語を用ふべし。

△先方より招待をうけ又は會合などの報知を受け差支ある時これを斷わりおくるを斷り狀といふこの類はなるべく其由を明かに記し、いかにも殘念なれどもよんどころなくとの意を表はすべし、然らざれば先方に於て何か立腹せし爲にはあらざるか等の心配することあるものなり。

△何事によらず人の助力を請ふものを依賴文といふ依賴文はなるべく丁寧に賴むがよし、かりにも命令の語を含むべからずされど場合により餘り丁寧に賴むに及ばざる事あり、それ等はよく其場合を考へ合すべし。

△人の盡力又は配慮等を受けたる時これを謝するを謝禮狀といふ禮狀は別に注意する事もなけれど只あまり丁寧に言ひ過る時はへつらひに類して先方の機嫌を害ふ事あるものなればよく其ほどを守るべし。

△弔み狀は最もまじめに悔み、遺族を慰むるを旨とし かりにも戯れたる語など含むべからず、弔み狀には他の用事を書添ふべからず、又前文を省きて直ちに誰樣御逝去云々と書き墨は淡きを法とす。



△謝罪文は誠意を以て丁寧に我非を改むべき事を述ぶべし、されば ふざけたる語など含むときは却つて先方の立腹を招くことあれば注意すべし。

△事の行違又は誤謬などすべて事の言ひ開きをなすものを辯解狀といふこの類はいかにも丁寧に委しく其行違の廉又は、あやまりの點を書きつゞり其原因を說き先分をして十分に了解せしむる樣認むべく、其文體はいかにも和らかに懇欵なるべく理窟めき議論がましく書きつゞるべからず。

△前にも申せし通り書簡文はその場合と、先方の身分とを考へ適當に書くべし、急の場合と緩やかの場合とはその語自から異なるべし、貴人にやると賤しき人にやると長者におくると幼者におくると、又打解けたる兄弟朋友などにおくるとは、そのことば又同じからず、貴人長者に對しては丁寧にして尊敬の意を表はして書くべし又打解けたる人にはまゝ滑稽の言葉を交ふる事もあるべく普通の敬意を表はすべきに、あまり四角張り儀式張りては表面の交際らしくて受取る人も迷惑に思ふことあるべし、すべて手紙は其場合と人とをよく考へて禮法にそれ〴〵の人に對する如く、貴賤幼長の別あることを忘るべからず。

新舊書翰文類語

一月

○新年の御よろこび
○あらたまりたる年の
○門の松竹吹く風も
○千代のしらべに聞なされ
○新年の御有様いかゞゆかしく存上候
○一兩日は空の景色ものどやかに
○まだきに春の心地いたし候
○凌ぎかね候寒さの折柄
○硯の水も凍るばかりの寒さ
○肌裂くばかりの風
○物靜かに降りつもるこの雪のけしき
○雪もよひの空一しほ凌ぎかね

二月

○今年は例より寒さつよく
○未だ寒さ眞盛りとも申すべき
○朝夕は殊に凌ぎがたく候
○池の氷もとけがたく
○梅の蕾なほかたうて
○殘る寒さ凌ぎかね
○春たちしは名のみにて
○霜の名殘殊更に凌ぎがたく
○空打しぐれ風荒く寒さ一しほ
○つくばねおろしいとさむう

三月

○日増に長閑の時候になり
○追々春色催ほし
○兩三日俄かに暖かに覺え候
○梢ふく風も寒からぬ時節になり
○梅が香送る春風もいつしか
○桃もやう〳〵ふくらむ頃となり
○殘雪いまだ消えず候
○のきの紅梅ほころびそめ
○園生の梅やう〳〵さきいで候
○まだうぐひすの初音は聞かず候
○今朝めづらしくはつねもらし候
○花鳥の色音ゆかしき空の景色
○花は笑ひ鳥は歌ふ昨日けふ

四月

○うらゝかなる空
○のどかなる時候に相成候
○花さかばとひたまふべく
○花見にとの御ふみおほせこと
○空吹く風も何となく心のどかに
○百千鳥心も空にうき立つ時節
○花の宴をひらきたきこのころ
○園生の花見所は候はねども
○散りも始めぬ折りから
○花くもりの空なほゝしく
○兎角雨がちの時候に候
○青葉のいろすゞしく
○花もやう〳〵散がたの空となり

五月

○若葉のかげなつかしげに
○時鳥のこゑうとからぬ
○今年もまたれておかし
○次第に夏景色催し候
○青葉の梢風おもしろき時節
○雲と見し花もいつしか雪と散り
○青葉の木隙風なつかしき時せつ

○鶯の聲やう〳〵衰ふりゆき時鳥の音づるゝ

この頃

○花の木蔭のあともなく若葉生ひしげり
○若竹の風こゝちよく

六　月

○やう〳〵暑さつよく
○日にそひ暑氣增り候
○入梅のしるし空しからず
○時節柄とは申しながら
○さても心ながく降つゞき候
○日々の梅雨さても鬱陶しく
○梅雨中には珍らしき天氣
○降つゞきたる昨日今日

七　月

○あつさたへがたき折柄
○凌ぎかね候此頃のあつさ
○雨もよひの雲はれて一際あつさたへがたく
○此ほどのあつさ如何に御くらし
○御見舞のしるしばかりに
○後園になりたる果物
○到來の品失禮には候へども
○遠來の國産に候へば
○兩三日の暑さは近年に覺えぬ樣に存じ候
○雲の嶺空しく崩れて一しほ凌ぎわび候

八　月

○秋のあつさ殊に凌ぎわび候
○日に〳〵暑さいやます心地いたし候
○夕暮はさすがに何となく秋げしき催ほし
○山水の景色見がてら溫泉に
○秋風の立つ頃歸京いたし候
○萩の上風蟲の聲や、秋のさまとなり
○さすがに夜は何となく秋めき候

九　月

○風の音雲の色もやう〳〵秋のさまとなり候
○空澄みわたり心地よき時候となり候
○秋女郎花の露分けて蟲の音ふむころ
○殘暑さりかね候へども
○朝夕は餘ほど凌ぎよくなり候
○軒端の萩のさわぐ夕ぐれ
○風の音は秋めき候へども
○御前栽の萩すゝき

十　月

○やう〳〵風はだ寒くなり增り候
○昨夜ははげしき野分
○千草の花うつろひて菊さく頃となり
○秋の色もやう〳〵深くなりまさり
○昨日けふ秋のあはれいと深く
○紅葉のいろづく時節
○山里の人とぞ
○こよひ月見がてら管絃をもよほし
○野邊のにしき
○露しげき道を
○菊紅葉の時節となり候

十一月

○次第に冷かになり增り候
○紅葉にこゝろを染むる頃となり
○庭の一木の秋のいろに野山の錦思ひやらるゝ時節
○燈の影なつかしき時節
○日に添ひ寒さいやまさり
○吹く風も身に沁みて寒く
○しぐれふりしきり、木枯もの凄う吹まき候夕ぐれ

十二月

○ことしも早く年の暮となり候
○歳末の御いとなみ何かと御多忙
○歳の暮とて何かとあわたゞしう
○残る日数も僅かになり
○やう／＼歳暮に近づき
○雪の景色おもしろければ
○御歳暮のめづらしさに
○野山のさまいかならんと
○得も言はれぬ今朝のけしき
○やう／＼火桶のみしたしまれて
○年末にせまりさぞ／＼
○いたづらに月こそすくし
○何やと御多事にわらせられ
○めでたく御越年遊ばさるべく候

範例

むつき

○としたち返るあしたの空の景色
○としの改りては何事も浮き立つ心地に
○人の心ものどかにぞ
○あけ行く日脚のうらゝかに
○千歳の春をかけたる祝ひ言葉に
○門の松竹にかけても猶あかず
○若菜小松も今一ときは、
○鶯の初音のめづらしう、梅もほころびそめ、
雪間の草わかやかに
○いつしかと景色立つ霞に
○見所多き春
○年の初めの栄えにも
○池の氷のうちとけて
○春の霞のへだてなく
○けふは子の日とて小松を引きに
○野辺さへをかしう萌え
○若菜摘まんとしめし野も猶雪の深くて
○ほの／＼とあけて艶なる空
○暮はてなば、雪ふりしき又冬めきていと寒
げに
○梅の初花見はやすべき人もがなと

きさらぎ

○春ともいはず降る雪も
○峰の空もかきくらし
○きさらぎの名もしらるゝさへ帰りぬる空
○のどかなるべき春とはさへに
○更に衣かさぬべし
○やう／＼春もうらゝになりて
○たれこめがちにて今日もくらし
○よべははげしう明けぬる風のけしきに
○初午詣のつとにとや
○春の澤邊にぬれ／＼もすみにし根ぜり
○春のならひよかすみたる月に

やよひ

○桃の日のよろこびとて
○桃のすかづきとり／＼に
○柳さくらをこきまぜて
○花のいろ／＼いたく霞こめたる袷のをかしき
に、
○ひな遊びのをかしきに
○長き日のつれ／＼を
○青柳のいとまあるさま
○ちかきわたりの山の花も
○此頃の長閑なるには物思ふ人もなくて
○いづこも／＼花ざかり
○もえでるわらびのをり／＼に

○井出のかわづと諸ともに
○まつとはしろき漣波の心ながし
○いざけふは春の山邊にまじりなん
○蛙なくあかたの井戸の山吹の花
○けふは彼岸とて佛のわざして
○もゝ鳥の聲もこひしき
○梅もれびうぐひすも老ゆ
○しめやかに物語して
○柳のいろのより〳〵に
○春の澤邊にぬれ〳〵も
○そぼふる雨に出がたく
○花まつ頃の心いられ
○なりを忘れぬ初わらび
○梅が香をたよりの風や明つらん
○春めづらしく君が來ませる
○深山には松の雪だに消なくに
○都は野邊の若菜摘みけり
○白たへの袖ふりはへて人のゆくらん

うづき

○ひとへに惜しき春もすぎ
○わかれにし春の心を又るらに
○春におくれて殘れる花
○いつまでに心ながくさく藤
○山の木立の事しげく
○ほとゝぎすいとめづらかに
○卯の花にまがへる月のおぼめきて
○山の青葉の目に立ち
○橘のやどはながれて
○木のしたやみのをぐらくも
○雲間の月にほのめきて
○木々の葉のしげくも
○春におくれて獨りさきけり

さつき

○あやめのかほりなつかしう
○あさましうをやまぬ雨
○あやめにぬれたくも
○さみだれにつれ〳〵なるこそ
○さみだれにかきくらし
○たゝくひなのおとづれもたえ
○しめやかなる物がたり
○ほたるのおもひにも
○空かきくらし降る

みなつき

○くもりなく照かゞやく月影の
○夕立こゝろよげなる
○夕立の名殘涼しうて
○雨のあしはやくより
○雲のけしきのおとろ〳〵しう
○夏山の木立のしゞに
○なるかみの音にきゝこし
○前栽の草木に水そゝがせしなどして
○蟬のもろ聲かしましう
○扇の風もたのもしくて

ふみつき

○たなばたの契かわらで
○秋といふより初風すゞしう吹出て
○星あいの空たのめ
○秋の七くさいろ〳〵
○花すゝきほのかにだに
○いままで蟬の音の
○露のしづくに
○なき人のくる夜とて

はづき

○望月のくまなき物がたり
○月影おかしき夕暮
○いざよふ月のかげにもたゆたふ
○稲葉にそよとおとづるゝ
○野あけの風のすさまじう
○雁の玉づさ。雁のおとづれ
○朝端の晴間なう夕露のへだて
○軒の尾花のほのめく。
○きりぐ〜すの聲しるほど

ながつき

○君が世の長月としも
○まがきの菊のなりから
○秋の雨しめやかに
○もみぢ葉のあかぬながめ
○秋の野山のなつかしう
○草むらの蟲のより所なう
○夜のきぬたのうちつけ
○鹿の音のかすかなる

かみなづき

○けふぞ冬になりぬるもしるゝ
○もみぢの落葉がき
○時雨うちして物あはれ
○木がらしの吹くにつけても
○冬枯のけしきこそ
○木葉さそう夕風
○庭の落葉のかされぐ〜
○あかつきかけておく霜に

しもつき

○今朝しろふおきわたしたる霜
○かきくらしふる雪
○友千鳥のいとなつかしう
○今朝の初雪如何見たまふらん
○朝霜のあさはかならぬ
○身はならはしとかゝる霜夜に
○今朝とくさめて驚かるゝ雪な

しはす

○冬ごもりぬる柴の戸を
○埋火しろく灰がちになるも
○長き夜すがら御物がたり
○雪の中の梅も春まちがほなるに
○としのいそぎは都もひなも物さわがしく
○ほゝゑむ梅に雪のふりかゝりて
○春もとなり近くなりて
○とり物のかずぐ〜家毎にいはふもちひ
○つごもりの夜は人の心もそらに

品物を表はす數量の言葉

△蜜柑	一箱	△林檎	一籠
△酒	一樽	△茶	一罐
△菓物	一重	△煎餅	一袋
△花瓶	一對	△屏風	一雙
△額	一面	△香水	一瓶
△香	一包	△菓子	一折
△紙	一束	△線	一把
△硯	一面	△汁物	一壺
△魚	一尾	△鳥	一羽
△鳥	一番	△炭	一俵
△蝋	一連	△盆栽	一鉢
△帶	一筋	△机	一脚
△碁盤	一局	△刀劍	一口
△箪笥	一棹	△車	一輛
△馬	一頭	△犬	一匹
△松	一株	△書籍	一帙
△蚊帳	一乘	△下駄	一足



痛切なる友の警告

結婚する友の許へ

飯田百合子

春も漸く酣に四方に、平和の瑞祥あふるゝ、此頃花の都は一しほのながめならんと偲ばれ申候、扨かね〴〵御話承り居り候、御結婚式いよ〳〵、來る五日御擧行の趣にて御招待にあづかり有りがたく存候、まことに御家長久の御基ゐめでたき限りと萬代かけて御壽ぎ申上候、これまでまちに待わび玉ひし御兩親樣の御喜びはさこそと蔭ながら御噂のみ致居候、そも御許と私とは女學校以來水魚も啻ならざる御交り殊にはお互に兄弟もなき淋しき境遇の萬づお談もよく合て妹とゆるされ姉と慕ひ參らする仲、此度はまた更に一人の兄樣を得るのかと人事ならず嬉くお招きなくとも飛んでも行きたくいろ〳〵御手傳も致すべき筈のところ、公務ある身は意に任せず「わざ〴〵土曜日にしました」との御心づかひは心にしみて嬉く拜し候へども、其日は折あしく卒業生の修學旅行として宮津舞づる地方へ、遠足の企あり受持生徒の事とて如何ともいたしがたく、實に〳〵殘り惜しく候へども缺禮致候、何卒惡しからず御酌取下され度、みな樣へは御許樣よりよしなに御取なしのほど願上候、しかしながら身は遠くへだつとも、靈は祈りを以て、御前に列りせめてもの慰と致すべく候、たゞ私が御祈り申上候要は千代かけて夫婦の契りを結び玉ふ上は互に心を合せ力を協へ、眞正のホーム此世のパラダイスを



御造りなされ御兩親様の御安堵遊され候やうなさるべく、お互にかけ替のなき獨娘は兎にも角にも一家の大黒柱たる重任を忘れず、失敗なき様つとむるが何よりの孝行と存候、今の世の通弊とも申べきは、初め交る時や情交尤も濃かにして末薄くなるが習ひに候が人は終始變らざる事こそ肝要ならめと存候。何事にまれすべて物ははじめが大切にて其覺悟の如何によりてよきも惡きも早其時に定まり申候、然るに世間多くは例の三世相とやらにある如く「始めよし後わるし」の哀れに陷り終りを全ふするを得ざるは全く其得意の時に於ける油斷に基くものと存候、わけて男女の仲らひほど熱し易くさめ易きものあらじとか、青春のもゆる思に他の缺點の見えざる間こそ圓滿なる美しき愛もあれ、一朝花は散り葉落るの秋となり互に慣るゝにつれての油斷より不用意なる言葉は出で不遜の行爲のあらはれて是迄かくれし短所のみ見ゆるに至りては先きの熱愛は遂に氷よりもつめたきものとなり終ること、これ當初の覺悟のにぶきと眞心の足らざるより起るものと存候、「勝ちて甲の緒をしめよ」人間得意の時即ち人世の高潮時代は特に注意を要することに御座候、御許様には今が丁度其時ならんか此時に當りて非常のお覺悟なくてはかなふまじく候、古人の言の葉に「人と契らば薄く契りて末遂げよ紅葉を見よ薄きはおそく濃きはとく散るものぞかし」と兎角斯くなり易きものに候間返す〲も變りなき御契りこそ願はしく候、萬づ御心懸けよき御許様のこと、私などの申事は必ず〱杞憂に屬するものには候へども、猶一言申添置候、全體獨娘と申ものは幾人かに分たるべき親の愛を只一人占領して成長したる者なれば自分はそれに慣れて心づかず候へども他より見れば實に眼にあまる事のみ多きよし、殊に其特質として著しきは、何時迄も稚氣の



失せぬと依賴心の强さとにて、一にも父二にも母と、何事もこれに賴り來りし習慣は、やがて夫をむかへし曉にもすべてを父母に依るの風は去らず、知らず／＼も半身たる夫を後にするとゝなり、遂には世評に洩れぬ養子娘となつてそしりを受くるに至るにて候、いつかも或人が「うちの家內はあまり兩親が可愛がりすぎるものだから、いくら僕が渾身の愛を傾け盡してもまだ不足を感じて居る樣だ、これだから獨娘には困る」と申されしを聞きて一理ある言と感じ申候、夫婦の愛の如何は知らず燒野のきゞす夜の鶴我を忘るゝ親の愛に比すべきものはなかるべく、されば自然この弊に陷るも人情の極か？兎に角よほど考ふべき所かと存候、もはや此上多くは申まじく、啻「二つにはあらず一體なり、神の合せ玉ふもの人これを離す能はず」の聖旨をよく／＼玩味して新生涯を開拓なされ候はゞ必ずや敎育ある新夫人としてはたゆく手を危ぶむ養子娘のガイドとしての責任を全せらるべく、御兩親樣の御滿足はもとより、背の君にもきつと首肯遊さるべくと存候、抑もホームは、夫婦たる者に神が與へ玉ひし城廓なればこれに據りて一致協力惡魔と戰ひ、誘惑にかち、內家庭を潔め、外社交に光りをはなち、神の榮光をいやましに顯はし玉はん事こそ望ましく候、女として何一つ價値なき私社會に出でては猶更のこと、ことに愛のアの字も解し得ぬ身を以てなにも彼も御承知の姉上に——ホヽ、僭上の沙汰——しかしおか目八目とやら申事も候ものを出過ぎものよとお叱りなく、これもまた後日の議論の種と御ゆるし下され度候返す／＼も理想の首途につき玉ふお二方の上に、神の祝福常にあらんことを祈りつゝ爰に筆とめ申候、かしこ

再伸何か心ばかりの御祝ひなとあれこれ母とも相談いたし候へども田舍のこととて思ひに任せずまことにお恥かしき



品に候へども眞綿一箱小包便にてさし立て申候友白髮の幾久數變らぬ色と御納め下され度候
新らしき御うつしゑかならず〳〵御待ち申居候

四月二日

百合子

英子様

義理に迫りて入水せし女の遺書

無名女

一筆かきのこし候。

私なくなり候あとは、便りなき御前様、明日よりは何してと、それのみ心にかゝり候へ共お美代様にくれ〴〵もお頼み申上候手紙、此文と一所にお目にかけなされ候へば、あしき様には御はからひ下さるまじく、お露様のおやど様とても、幾分のお力はおそへ下さる筈。

お情ふかきお美代様、姉上様とおすがり申し、私とも、兄上様ともおぼしめし、お言葉にそむかぬよう、おつかへの程念じ上げ候。

お露様は女ごひとりの御兄弟とうけたまはり居り候、親御様の御心配、御いつくしみもさこそと存じまゐらせ候。

何卒〳〵一日も早くおゆくゑ(行衞)御たづねなされ、別の封にいたし候文、御目にかけ下され候て、此事ばかりはいかように無理いふてなりとも、お露様にもお願ひ申し、せめて御前様は、兄上様のお手許にて、人らしき人となられ度、いまはのきわに神かけて祈りつゝ念



じ上げ候。

姉らしきつとめは一日もはたさず、さぞ〳〵ふがひ(腑甲斐)なき姉と御さげすみも候はんなれど、父の顔は知らず、只一人のお母さんにも、御前樣にはおわきまへなき程、いんが(因果)にそだちし私たちに候へば、私のゆき屆かぬ所は御前樣御ふうん(不運)と御あきらめ下され度し、お恨みなされ候とも決してお恨み申すまじく候。

私なくなり候のちは、お美代樣を姉上樣とお賴み申し、何卒して兄上樣御ゆくゑおたづねなされ、お露樣をば私ともお母さんとも思し、かげひなだなくおつかへなされ度く、さ候へばお露樣も御前樣をば私にも增して、ひとしほ御いつくしみ下さる可く候。

兄上樣とお露樣とは、過世よりの御緣に候べし、始めてお遊びにお出で下され候折、お目にかゝり候てより、心も空に只何となく――其時の私が心、よも神樣も御存知はあるまじく兄上樣、お露樣も、ゆめ御存知はあるまじく候。

貝合せをいたし候時、兄上樣地貝と、お露樣出貝とが、御前樣の手に合さつた時、たはむれごとなどゝ思ふ心はなく、唯御前樣は結ぶの神お二人は此儘に何日までもと、心のうちに思ひ候は、口にも言へずまはらぬ筆にはなほさら――たゞ過世の御緣と御前樣もおぼしめしなさる可く候。

左樣に思ひ居り候私心のうち、お二人ともおさつしなく、兄上樣にはお心强くも私へぎりだてなされ候お心、うれしく、ありがたくは存じ候へ共、いまは中々に御恨めしく存じ上げ候。



さやうのお心に候へば、過世の御縁もあり話にきゝし事もなき、まひるに星さへ出で、御縁を結び候ても、なほ私をば御はゞかりなされ、ゆくゑ知れずなられ候其お心にては、私此世にある中は決してお心とけまじく候により、のぞみも願ひもなき此身一つをなき物にいたしお二人を天下はれたる御夫婦といたし候私心のうちお察し下されたく兄上様お露様へのふみの中にもしため置き候へ共、この事よく〳〵御傳へ下されたく候。





死するいまはのきわ迄も、おふたりの御じゆめうばん〲ざい、兄上様お露様、おたがひにお見捨なく、かぎりなき春秋をおむかへあそばし候よう念じ居り候と、これも御傳へ下されたく候。

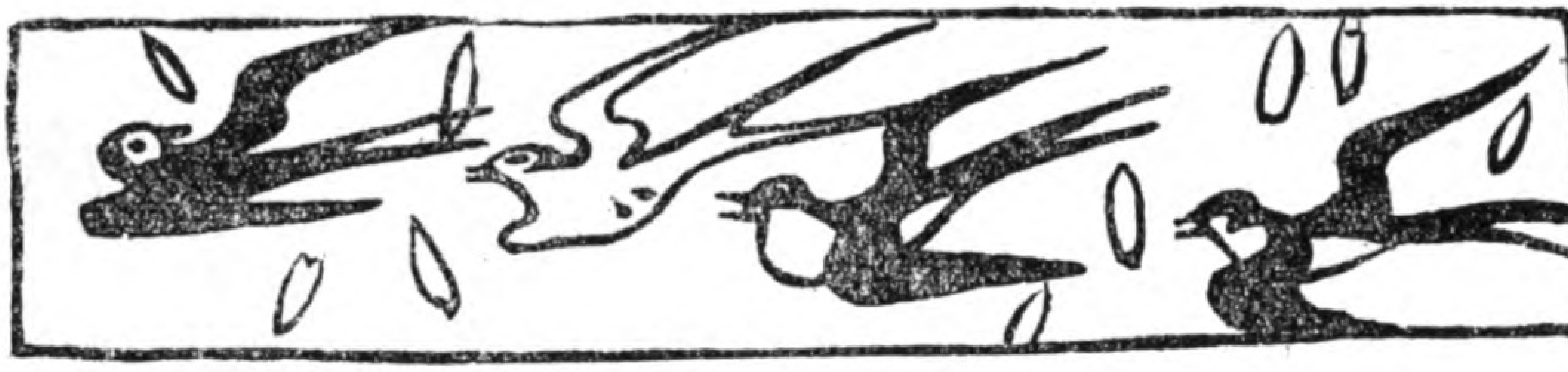
兄上様にもお露様にも、私おろかなる心よりお二人の御縁結ばりしをお恨み居り候ようにおぼしめされ候は、かへす〲も口惜しく候へ共、何事も私のいたらぬ故、兄上様お露様にも世間をせまくし、お露様をやご様、お美代様御前様にまで御心配かけ候私心のくるしさ御察し下されたく候。

兄上様と私とは御前様も御承知のとほりもとよりせいとうの結婚いたし候にては之れなく唯私よりはお救ひ下され候御恩に感じ遂に心あまりて、お露様の夫れよりも戀ひ慕ひ候を兄上様も憎からず思召し下され、この一年がほど私のようなものにても、妻とおよび下され候より、旦那様とは申上げ居り候へしが、何日かはよき奥様をと、おろかなる心にも考へ居り申候。

お露様は顔かたちなど申すまでもなく、才識とやらも人並すぐれ何一つとして御わきまへなきはなく、誠に〲兄上様とは二なき御つりあひに御座候。

まはらぬ乍ら此文したゝめ候も、御前様が御讀みなされ候も、皆兄上様深き御恩に候へば決して〲お忘れなさるまじく候。

私なくなり候てのち、御前様人中に立つようにおなりなされ候て、父もなく母も知らずとにては、どこの馬の骨と人に笑はれんも口惜しく候へば、さに書き留め申候。



夜もふけさむさに手さきふるへ、目もつかれ候により、われながら字ともゑ(繪)ともつかぬなすり書き、よめぬ字のみおほく候へ共此ふみしたゝめ候私心におなりなされ、御はんじよみ下され度く候。

父なる人は京都の名ある能役者にて、姓を長岡と申し、ひとゝせ故郷金澤にて能の催しありし時招待して母の家を宿とせしが縁に候へしよし、母は其地の鼓打ち若杉の末娘にて横笛の名人に御座候、とより外は私も知り申さず、父の墓は石山に御座候へば、長岡の墓とお尋ねなされ候へば敎へくれ申可候。

私なきがらみつかり候はゞ、髮の毛一すぢなりとも誓願寺のお母さんのお墓へ一所になし下され度くお願ひに候。

兄上樣御ゆくゑは東しづ岡より西は京都の間とは思はれ候へ共、お露樣と御一所に候へば何處ともはかりがたく、よく／＼親御樣とも御相談なされ、心當りの場所おさがしなされ、一日も早く私心のうちお傳へ下され候樣念じ上げかげながら御ありかのわかるよう御力ぞへいたすべく候。

此地は兄上樣と始めて御目にかゝり候懷かしき土地にて、山の高さ、海の深さ、島の大きさも氣に入りのところ故、此處の海にて、兄上樣、お露樣、お美代樣、御前樣、皆々樣の御ことぶき申し永き眠りに入り申候あら／＼かしこ。

蒲ごをりにて　胡蝶

二月六日

若杉幸治樣

病苦の中に母を慕へる女の手紙

むらさき

御手紙下され難有拜見いたしました、ほんとに嘸々御心配下さいましたでせう、永々御無沙汰いたしました實は私病氣して居たのです、良人から差し上げました手紙に、壯健とも無事とも書いてないので、益々御きづかひ被下し御樣子、良人が申すには、御前が病氣で居るのに、まさか皆々壯健とも申し上げられないからとて、わざと安否につきては何とも申さなかつたのださうです、然し私もよくなりましたので、久しぶりに今日筆を持ちました、御安心下さいませ、母上樣に手紙を差し上げましたのは先々月の十五日でしたが、あの翌日ねびえでも致したかの樣で、熱もあり胸部に痛みもございましたので、朝食後R病院に參りまして、院長樣に診察して頂きますと、熱が三十九度五分ロクマクエンです、早く御歸りなさつて靜かに御やすみなさい、毎日往診して上げますから、御歩きになつてはいけませぬ、と申され私もロクマクなる語に一方ならず驚きました、夕刻良人歸宅此事を申しますとそは容易ならぬ大病なり、大に養生せよと……一週日を經るも熱は下らず、二週を經るも熱更に下らず、胸の痛みは増すのみにて、呼吸苦しく、三週の中頃には胸水、乳房の上までと相なり、院長樣も頭を傾け給ひ、なるべく、水を服藥にて取る積りなりしも、斯く日々に水ましては御苦しからん、も二三日見合せて何も服藥効なき樣ならば、器械にて水を取るべしと申され候、毎日毎日仰向けに寢て天井裏のみながめ居れば、思ひは夫から夫と故鄕にのみ走りて、母上樣が戀しくて〳〵たまらず、心の内にて母上樣……オカあ樣と叫びし事幾度なるを知らず、ア、陸續きならば、汽車ならば、如何にもして歸らんものを、身は怒濤逆捲く大海を隔てたる異鄕にあり、歸らん術もなければ、來らして頂く事も叶ふまじ、病は重るばかり……死ぬのか知ら、二

十三や四で死ぬのは……何あつても死にたくない〳〵もし危篤の報でも行かうものなら、母上がどんな御驚き遊ばすか知れない、可愛坊やも居るのですもの……死んで成るものですか、例令息はきれても死には仕ないなど、下らぬ事を思ひうと〳〵と眠れば夢……或時は懐しい〳〵故郷に歸りて我家の門に走り入り、只今歸りましたと張りさける斗の嬉しさを忍んで玄關に上れば、慕はしき母上はおは



さで奥より出しは言語風俗を異にせる外國人、母上はと尋ぬれど分らず、手まねすれど分らず、我家は何時の間にかゝる人の住み家とはなりしぞ、母上はいづこに行き給ひし餘りの悲しさにワッと泣き伏せばオイ〳〵といふ者あり何を泣くのだ夢だ〳〵と良人に起され、何な夢見たかと聞かれても暫時は言葉も出ず、涙のみ潸然……また或時は母上の御顔が目のあたり見

え、アヽお母様と云へば、オヽお前は心地よく眠つて居たに、目が覺たかと仰有る、此處は何處ですと申せば歸つたのだよ實家だよと仰有る、見廻せば床の掛軸にも見覺えあり、茶簞笥の傍には碁盤雙六盤等ありてまがふかたなき我家の御座敷、如何にして歸つたのか知ら、御船に乘し覺なし不思議で堪らず、或は夢かとも存じ、腕を三度もつねりしに、確に痛みあり、現なり現なりと思て嬉き事限りなく、母上様、私はどんなにして歸つたのでせうと伺へば、御言葉は無くて只頷きたまふのみ、其内に御姿も消えければ、アラ〳〵お母様と申し上ぐる時またも夢だ夢だと起され申候、かくの如き事幾度も有之、現の時は世の中に果して人玉の飛ぶ者ならば果して、幽靈の出づる者ならば、妾の此心此思ひ必ずや故郷の空にさまよひて、夜な〳〵我家の邊に怪しき影の出づるならん等と、取り止も無く違瀬無き思ひ致し候、何事も思ふな考へるな、無念無想を心掛けよと進められても、何して〳〵故郷の事だけは思はずには居られなかつたのです、三週日の終り即ち床に着きてより二十一日目の事、始めて熱度三十八度に下り、醫師は御自分の事かの樣に御喜び下されて、大丈夫です器械で水を取るには及びません、熱さへ下れば水も減りますと、翌日には三十七度五分に、翌々日には三十七度にとずん〳〵熱下りて、四週日の終りには全く無熱と相成り、水も減り胸の苦しみも大に宜敷、其後は新聞を讀む事を許され、又クヨ〳〵思はぬ爲めにとて、某奥様より滑稽ものとヒザクリゲとを御貸し下されて、この本を御讀みなされば、キッと御氣晴しに成りますと、眞に御言葉の如く、讀む内に悲しき心も薄らぎて、書中餘まりの滑稽さに、聲を上げて笑ひ、御腹の皮をより申候、幾ら面白いからとて、强て讀むと疲れますよ、との御注意も有之、二冊を一週間かゝりて讀み、六週間目よりは、室内を歩みてもよしとのことに、始めて鏡臺の前に坐して、坊やを膝に載せ、下女に頭髮とかせ申候、何心無く被ひ除けば、鏡に寫りし妾の顔……ハッと胸塞がり申候、如何に病とはいへ五週や六週の間に目は凹み、色靑ざめて頬

脊高く、一目見たる斗にて鏡臺をかなたに押しやり、下女を顧て私生きてるのと聞き申候、下女も奇異なる問ひに對して變に思ひしも直ぐ夫と察してほんとに御窶れ遊ばしましたと彼も泣き出し暫時が程は二人とも涙にくれ申候、私はどうも涙もろき方にて、こんなだから病氣も致すのだと存じ、もう〳〵泣きますまい、此後は大に樂天に成りませう、滋養をどつさり食いて、早く恢復致しませうと心を取り直し、養生致し候處、一日〳〵と血色もよく成り、此頃にては餘程肉附き申候、未だ服藥は致して居ますが、病氣の方はすツかり快癒致し居り候由にて、只今の藥は强壯劑です、六日程前より運動の爲め毎日十四五町づゝ郊外を散歩してゐます、母上樣に病氣の事を申し上げても、徒に御心配を懸くるのみなればとて、今日まで秘し置き候段、罪深う候へども、何卒御許し下さいませ尤も危篤にでも陷る樣でしたら、御報知致すのでしたが、夫程迄に至らないで、此樣に快くなりました、誠に嬉しう御座います、一昨日は散歩の序に寫眞館に立ち寄り家族一同撮影致し、特別にと急ぎ置候處、只今出來上りました、一葉送りますから良人や坊やの壯健なる事は此寫眞にて御承知下さいませ、私は寫眞よりか今が二日分だけ肥えてる譯なのですよ、病中は良人に一方ならざる御世話に成りました、御存じの通り至つて同情深き人ゆゑ、夫は〳〵行き屆きたる養生をさせて頂きました、坊やを抱つこして居るのが下女です、よく看護して與れましたよ、親身も及ばぬ程、某樣某樣も大變御親切にして下さいました、御醫者樣も大層御親切でした、皆樣の御親切なる御蔭にて助けて頂きました、御喜び下さいませ、坊がだいぶ利巧になりましてね、此間も御湯上りに獨で衣服に手を通して居ました、病氣中に彼が愛らしき顏を見ては人知れず愁歎致せし事のをかしく……母上樣私には精神の修養が出來て居ない事を此度切に感じました。まあ是しきの病氣にすら三週目頃の煩悶の仕方は何でせう、母上樣にですからこそ腹臓なく申上げたのですが、誠に〳〵御恥かしき次第、以後は宗教に心を寄せ、尊き御敎へ

を受けて安心立命致し如何なる場合にも煩悶せぬ樣相なりたきものと存じ候。

內地は氣候不順との御事末ながら、何卒御身御大切に遊ばし候樣祈り上げ候、タキ(下女)によろしく御傳へ下さいませ、ブチ(犬)はすこやかですか。

これからは御無沙汰致さない樣に、時々手紙にて御伺ひ致しますよ此度は主に自分の事ばかり書きましたが、次便には良人や坊の事を精しく申し上げます、そして土地に變つた事でもありましたら夫も御しらせ致します(疲れの內に筆止め)

さよなら

月　日　　むらさき　より

母上樣御許に

平凡なる田舍の友より

しげ子

美しき繪はがき有難く拜見いたし候、都は花盛りの由、仰にて思ひ出し候。いつぞやの試驗休みに我々二人と素子樣をも入れて三人、上野へお花見に出かけ候時急雨に逢ひ、雨宿りかた〴〵かけ込み候博物館の門際にて思ひもかけぬ吉山先生に危く鉢合しかけ候時のをかしさ、今更でもなく都の空を懷ふたんびに必ずそれが浮び候て、さるにても片田舍の花もなき生活わびしく思はれ候、時にちと御不快の由、時候の變り目にてあてられ給へる樣の御事にや、それとも——もしやまたおめでたいのでは御座なく候や、初枝樣はたしかお三つと存候、丁度もう其時分故それにてもや、何は然れ御加養が專一に候。あゝ懷かしきは都、羨ましきは御前樣が御身に候。と申さば餘り唐突に候へど、近頃妙に物思ふ事を覺え候て往年の元氣はさつぱり跡を絕ち申候、と云つて別段是といふ動機のあつてゞは御座なく候。兩親も健全なり妹もやさしく、戀をしたでもなければ病つたでもなく、相變らず水入らずの家庭に何不足のあるべき理由も候はねど、どういふものかうか〳〵とそんな心持になつて了ひたるにて候。

尤も昨日今日の事ではなく、とうより何か物足らぬ、寂しき様な感じが心の底に潜み居りは居り候へしが、それ程明かに自覺せざりしものと存候。いつか〱とあこがれし卒業の月桂冠を戴いて、香ばしき煙か何ぞに捲かれしやうに、こゝそは〱と歸郷いたし時は、小ぢれつたき田舎車の柳行李の重きも思はず、煤に黒みし我家の畳を花の褥とばかり居心のよかりしはほんの二三日。物珍らしげに訪ひ來る人々の追従も鼻についてはうるさくなり、又それに乘つての父母が自慢も淺ましく



て、いとゞ都の空懐かしく、授業の神聖、お友達の快活、日曜日の市中、もう〱それはかり思はれ候て噂さしたくも相手はなし、理想や希望は逃げて了ふ、錦を飾る卒業後の歸郷が、まさか是程の失望を買はうとは思ひもかけず候へしものを——しかしよくしたものにて、だん〱田舎の空氣を吸ひ込むにつけそんな不平や煩悶はいつ何處へ消え去りしか、其後折々の御消息に誰様かれ様の御噂、校風の變遷など承り候ても實際文字以外には別に何の感じも起らず、至つて順良に平凡に

暮し居りしものが又此頃に候、つひ此頃に候。切に切に都會生活を憧ふの念燃え出し候て殆ど矢も楯も堪らぬ時が御座候。是は田舍の、萬事單調なるに飽き候ものか、それとも所謂年のせいにても候事か。ほんに年と申せば私の方が一つ上にて候へしよ。年下の御前様は既に家庭の御主婦、初枝様の御母様、「何といふ事もなしに追はれてばかり」との御くり言がしみ〴〵御羨しく存候。と申て何も今、立派な夫を持てはでに暮したいとではさら〳〵御座なく候へど只、今少し意味ある生活の方法はなきものに候や。花やかなる學生時代は過去の歴史として是には申候ふまじ、現在の境遇に今少し何とか——幽かなりとも光明を見出す工夫は候ふまじくや。

時好にも疎き片田舍に在ては只いつまでも學生時代の姿を其儘、廂髪に絣の羽織、年には後れし華美づくりして、妹ッ子より餘程若いと云はれる小さき誇の閃きを、一生涯の中に打算して見ても何の！　九牛の一毛にも足らぬわざ。孃様々々と呼ばるゝをいゝ氣になつてうか〳〵する間に、もう廿臺も半になりなんといたし候、あゝいつ迄かくて續き候事ぞ！。

長くて短きは田舍の月日に候。一日の長い事は〳〵都會の倍でもきゝ候ふまじ、それが月と年と積つてさて振り返つて見れば何の思出もなく印象もなく夢見るよはもつと漠々たるものに候。

せめて兄弟喧嘩でもして見たく候へど、妹はぢれつたい程おとなしき性質にて、なりも量見もずつと私よりは老け居り候ゆゑ喧嘩の相手などには、頼んでも成つてはくれ申さず候。妹は實に幸福と存候。一頃はやはり東京へ留學の望みも多少ありつる樣に候へしがさう二人ながら遠方へ出しては家が寂しいから、と兩親の意見を素直に聞分けて、針仕事や立働のあひ間あひ間に趣味と申ては古流の花をいぢくるぐらゐ、それは〳〵じみな女にて、田舍の御新造樣には打つてつけに御座候。

承知して居ればこそ年だけにも見え候へ、東京へでも持て參らば誰しも三十位には屹然踏み申すべく候。

いつぞやも申上たるが如何忘れ候へど是もやつぱり婿取り娘に候、母の實家の名跡を續で戸主の籍になり居り、姉の私が當家の相續人、さう思ふともう〳〵うんざりいたし候。幸ひ破談にはなり候へども先達も養子問題にて、さらでも衰へ行く頭脳をさん〴〵惱されれ候。役場の――まあ書記の樣な者では候らずや、餘り情なく相成候。谷戸の伯父が口入にて何分斷り難き義理合、ほと〳〵窮し候てふと妙案を生み出し、妹の方へ廻してはと申出候處、母は成程それもと微笑み候へしが、父がい



つかなき〵申さず、姉を越て妹が先へ身を固める事は道が違ふとか何とか、もう其問題では珍らしく一家が眉をひそめ申候。が幸に成立たで纔に急場を逃れ申候、何でも十六七の時家の女中に手をつけて、大きな子供があるとか申すが理由にて候。あゝ〳〵若き血の走るにまかせて築き上候空想の山は、恐ろしき現實の浪に到底敵し難きを知らざりし昔が花に候。畢竟親達は可愛い娘の心裡を解さず、見當ちがひの至愛に「お前の身さへ極まれば何にも思ひ殘す事はないのだが――」、と聲

うるまされ候度ごとに堪へられぬ壓迫を感じ候て、夕月夜のあはれなる時などふら〳〵と畑道まであこがれ出て、青草の冷き香ひにふと頭腦を醒されては、また云ひしらぬ悔恨の涙に我心を喰ひちぎりたい樣な心地いたし候。

度々申上候通り當地には、精々中學程度ぐらゐの者が關の山に候。

あたら青春の熱き血を戀にそゝぐあてもなく、かくして例の長き其日〳〵に深ふ苦痛はさても候ひなん、昔かた氣の父が主義として、おとなしき妹に迄オールドミスのお相伴させるは如何にも〳〵忍び申さず……御前樣ならどう遊され候や。

同じ煩悶するなら事そ一思ひに家出でもして、家庭敎師なり事務員なり、看護婦でも何でも構ひ申さず、都會の眞中で奮闘して――と其くらゐに思ふ時も御座候「つまり我儘から」との御叱りも有之べく候へど又何とか慰安の法も御座候はゞ何分にも御敎示の程願ひ上候。

御主人樣にもよろしく、お里樣へも御序の節よろしく、また素子樣や皆さんに自然御あひの折御座候ともこんな事はどうぞ御内々に願上候。

田舍の春と申て御想像程風流なものでは御座なく候草が延びたり鳥が啼たり、いつも同じ事に候、どういたしまして詩も五もすつかり忘れて了ひ申候。折角おからだお大事に、かしこ。

榮えし人の内情を聽いて呆れし手紙

名に憧れて亂れし家庭の人となりし花嫁より

うめ子

窓を明けると庭の櫻は一面に咲き滿ちてゐます。それを見るにつけても忘れられないのは故郷の△△山、ほんに彼時位樂しかつた事はありませんね。手製の海

苔蓉館を折一ぱいに詰めて、綿服の無雑作は汚れ様と汚さうと何の心配もなく、二人手を取合つて胡蝶の様に花より花へ憧れて、あの綺麗な芝山に一日を遊びましたつけが。——あの時は全く何の苦もない處女でした。

月日の經つのゝ早いには驚きますわ、又來む年もとお約束した折は、其又の日は程遠い様な氣がして待遠しかつたのに、何時の間にか花は又咲く様になりました。きつと彼の山の櫻も今を盛でせう、あゝ待ちに待つたお約束の節は早くも來て、花も去年に變らず咲き誇つてゐるのに、身はもう其お約束を實行する事も出來なくなつたのです。彼様に片時も離れまいと願つた仲は、斯う輕々と運命の手に支配せられて、西と東に御別をしやうとは夢にも思ひませんでした。あゝも一度彼様な樂しい日に逢ひ度う御座います事。

此家へ嫁ります少し前でしたね、彼の實家の奥座敷で心許りの御別離に親しい方々をお招き致しました時珍田様を眞先に、溫和しい藤代様までがしかつめらしく御祝を被仰るので、私は上氣せてしまう様でした。でも、田舍に育つた身が思ひ懸けずも世間から謳はれてゐる家に嫁ぐやうになつたと思ふと、お恥しいが心の底の底には幾分の誇りがなかつたでもありません。そして、皆様が御歸宅の後、强てお宿めした貴女と二人枕並べて語り明した折「私は心から此度の御結婚をお喜びしてよ、何卒御幸福にお暮し遊ばせ。と被仰つて下すつた時は、未だ見ぬ家庭の恐しい様でもあり床しいやうでもありして、遂知らぬ希望に滿ちた胸には何時ものお優しさが染々と嬉しく感じたのでした。今でも其折の御言葉を思ひ出すと、お懐しいお姿までが目に浮びます。ほんに、麗かな此頃を如何してゐらつしやいますの。

お懐しさに走る筆は書いても書いても盡きません。此尋にも餘る手紙を御覧遊ばしたら、結婚早々よく此様な暇がある、隨分呑氣に暮して居るらしいとお思ひでせうけれど、今日といふ今日只一日が、私には初めての安息日なので御座います。只斯う許り申たつてお

わかりにはなりますまいが、今日は本郷座に慈善演劇とやらがあります相で、其發起人の姑母は元より、妹達から召使の多くまで皆見物に參りました。私にも是非交際の見習かた〴〵行けといふ事でしたけれど、例によつて星學の研究に熱中して昨夜から天文臺に行つ切りの夫の留守を口實に、餓えてゐる孤獨の心安さを得たいと强て殘つたのです。

珍らしく一人ぽつちになつて見ますと、何といふ心の疲でせう、日頃張つめてゐた氣が弛むと共にがつかりして、居間の机に凭つたまゝ只譯もなく庭を眺めました。あゝ淺はかな過去の誇、人の世はさう處女の胸に描くやうなものではありません。今日此頃の私の身は、美しい褥に寢てゐながら絶えず苦しい夢に襲はれてゐるやうなので御座います。靜子樣！　此弱い妹が得難い安息の一日を泣きながら書いた手紙を、何卒心からお讀み下すつて、小い胸に餘る苦しみをお分け下さいましな。

今更らしく申すのではありませんが、岳父は實業界に名うての人、夫は成績も勝れた若い理學士、斯う云ふ家の人となつて、家居調度の華美を盡した木深い邸宅の奥に、多くのものから若奥樣と侍かれる私は果して幸福な身で御座いませうか。

でつぷり肥えて何處迄も大腹なそして何處か情深い舅父とは反對に、姑母はすらりとして打ち見には三十そこ〳〵にしか見えぬ美しい人です。眞の年はもう四十ださうですけれど、未だまだみづ〳〵しく、髮でも着物でも流行を追うて、何時もきちんと一糸亂さぬ嗜みは少しの隙もありません。只眉の邊にほの見えるきかぬ氣の稍ともすると動き勝なのには、氣の弱い私は如何しても馴つかれないので御座います。妹達は何れ劣らぬ花杜若、血色といひ體格といひ當世風のモデルを見る樣で、身の廻りは愚か手道具の果迄も凡てハイカラとやらの新しい好み、衣類などの派手やかさは實に目まぐるしい許りです。其上お金のあるに任せて香水の半襟のと遣ひ放題の贅澤を見ては、自分の娘時代に比べて餘りに甚しい差に何時か云ふに云はれぬ不安

の念がきざして參るのです。

此間に立つ私、——申上る迄もなく其比較がお見えになりませう。賑りがましい生活こそはしませんでしたけれど、何不足もなく兩親の慈愛の許に育てられたのですから、萬事に折入らぬふしも多いで御座いませうが、まだ家風にも馴れない上、姉とは申せ大した違ひはない年頃です。まして舅父さへ大目に見て下さるものを、姉妹同士の足らぬ處は何かと心付けて與れてもよいではありますまいか。それを丁度私と同じ十九を上に三人の妹のさかしさ、古くから居ります小間使や仲働き迄が一所になつて、事あれかしと待つてゐ樣とは、其六つの鋭い目は箸の上げ下しに迄囁き合ひ、うつかり口をきかうものならすぐ揚足をとる、當擦る、陰口や皮肉は來た日から聞かされました。然しそれも私の足らぬからで致し方もありませんけれど、其人達の日頃のさま！　都の手ぶり



と云ふのかは存じませんが、同じ家に住むさへ嫌な心地がするのです。まして自分も其中に立ち交つて知らぬ間にさう染りゆくかと思ふと、もう〳〵涙がこぼれます。

結婚の披露を當宅で開いた時などでも、客は夫のお友達を重とて皆若い方ばかりですのに、其振舞は如何でしたらう。お杯の數も漸く廻つて藝人の踊りや何ぞと大騷ぎの中を、思ひきり派手やかに着飾つた妹達は何の恥らひもなく客の斡旋に務めるのです。それも臆せぬ交際の手腕と申すのでせうけれど、お酌の手ぶり身のこなし、何處に處女の美しい影が見えませう、まさか學校の禮式に敎はつた譯でもありますまいに、何時稽古して覺えたのかと思へば驚くとよりはほと〳〵感じて仕舞ひました。席を立つ客の姿を見ればすぐ馳け寄つて、もうお歸り？　まだ早いわ。と座に戻し、醉ひしれた人の肩を叩いては、ちつともいらつしやらなかつてねえ。と馴々しく握手をする。曾てかゝる樣を夢にも見た事のない私は、只驚きの目を見張つて其度隱れたい思がしました。

然しこれとて強ち妹達ばかりを責むべきでは御座いません。田舍にゐては誰人も羨む都の風潮は皆斯うなのです。裾短かな袴を靴で蹴つて、肩にズックの畫板を懸け、寫生にと誘ひ來る令孃や、自轉車で玄關まで乘付ける訪問の姫御前も度々見受けます。男の友の他より多いのを誇りとして、今日は上野、明日は日比谷と打ち連れ立つのを誰一人怪しむものもありません。たま〳〵家に居ります時は、レターの交換とかに浮身をやつし、戀は神聖よと恥づかしげもなく……。そしてともすれば哲學の音樂のと得意になつて、臆面もない大家の月旦、話には三分の外國語をまぜて何もかも心得顔の口の輕さ、私などは元より一言の答も出來ず只拜聽するばかりで御座います。ですから此間も妹に、「義姉さんは學校で何をお習ひになつて？　貴女のお話は全く十九世紀式よ。」と云はれてつく〴〵さう思ひました。御同樣に曾て敎へられた女の嗜、內輪であれ、智を誇るなといふ戒は、都ではもう捨てられた

敎へ嘲られた主義です。それよりも、學を衒へ、身を高くしてものを卑めと我も人も競ふを見ては、日本といふ國の姿が日に日に消えてゆくやうな氣がして、いひしらぬ戰きが胸に湧くのです。そして此間に立つて其捨てられ嘲られた敎育に廿年を過して來た身が、如何して調和致しませう。

けれどもそれは若い心の一筋に、只よいと思ふからの淺果な風潮で、直さばなほらぬ病ではありますまいが……、私はそれよりも口惜しい慨しい家庭の墮落を見たのです。けれどもあゝ申上るに忍びぬ恥なのを如何しませう。私は此儘筆を擱いて、折角書いた手紙を引裂かうかとさへ思ひ



ました。が靜子様！私はあなたの御心を信用して、此遣瀬ない胸の苦しさを逃れたいばかりに何もかも申上てしまひませう。

常々舅父は大層藝人贔屓だ相ですが、只今は關西地方へ旅行の留守中にも係らず、生優しい青年俳優とかや御機嫌伺ひといつて屢〻出入するのです。昔は河原乞食とまで賤められたものも、時世の進歩につれて尊い藝術家の名に呼ばれ上流社會に大びらで出入する樣になつた今日ですから、それも怪むには足りません、只其訪問の時毎、姑母は元より妹達まで、一つ團居の夜の目も寢ず花合とやらの勝負に時を過すとは……。

これも去し朧の宵でした。月に憧れて木深い庭を只一人、濁江に立ち交る身の汚れを淸め樣と築山近く行きますと、離亭の戸はまだ締めてない許りか灯の光も艶なのです。おやと思ふ間もなく目に映る淡い人影はあゝ確に姑母なのではありませんか、何の御用あつてと思ふに當るふしもないではありません。私は恐いものを見た樣に急いで居間に引きかへしましたが、あのきちんとした姑母樣がと思へば胸の動機は鎭め樣としても鎭まらなかつたので御座います。あゝ靜子樣、この上私は何を申されませう！

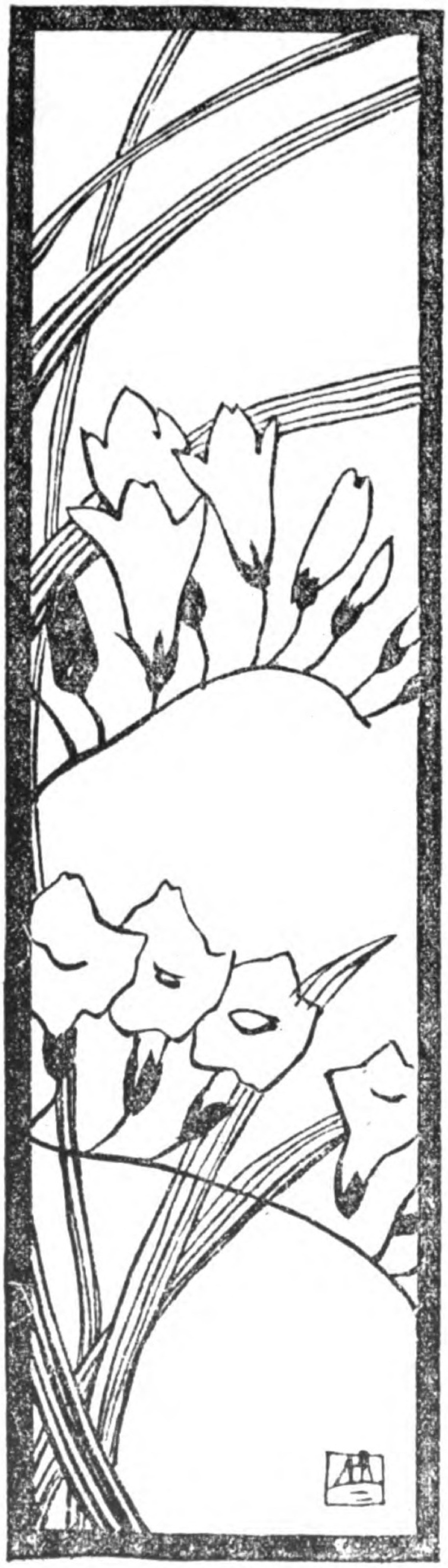
　靜子樣、私は今斯ういふ周圍の中に居るので御座います、これでも私は幸福でせうか、誇るべき身のおさまりでせうか、田舍にこそ育てられましたけれど物堅い士族の敎育をうけて、此二十年近い今日まで何一つ後暗い所もなければ心に一點の汚れもありません。其淸い身をさゝげて來た家、これからの一生を送るべき家の有樣が斯うと知つては、慨しいよりも只情ないのです。あゝ見ぬ日の夢！　曾て懷いた誇も希望も、今は只儚ない幻となりました。

　さりながら、斯う申したからとて私は彼の夜の貴女の御言葉に背いて、自分の結婚を咀ふほど弱くは御座いません。强い心の敎育を受けた甲斐には、まだ行手に希望の光を持つて居ります。人の力で止め難い時といふものさへめぐらば、世のさまは如何あらうと私は乾度淸い家庭を作らうと思つて居るのです。そして此希望を助ける賴母しい力、今の身にとつての唯一の慰安と、此境遇の中に見出だせないではありません。それはまだ何も申上げなかつた夫の上で、私は今其人の事を申上げて、此いまはしい手紙の終を淸く致しませう。

　昨日でしたか珍しく茶の間に落合つた時、二番目の妹が夫を評して兄樣は何たつて彼樣なにかまはないんでせう、學問にばかり凝固まつて石地藏見たいだわ、僅も融通の利かないつたらありやしない、朴殼つてほんに彼の人の事よ、私は兄樣見たいな人大嫌い！と申したのはよく當つて居ります。眞に夫は只學問には

かり熱中してゐる人で、打ち見には何處までも冷靜な學問肌、偶笑顔を見せるのは夜晝望遠鏡で覗く星ばかりでせう。ですから蜜のやうな結婚の空想に耽つた事もある身には、其當時いくらかもの足らぬ思を懷かぬでもございませんでした。然し此冷な性質も、幼い中に慈母に別れて暖い慈愛の光に浴しなかつた氣の毒な結果と聞いては、もう少しの不足も感じないのみか其胸の底にかくしてある愛の心も酌まれるのです。ああ繼母の冷い手！　教育ある人なればこそ其淋しさを學問に丈導いたのではありますまいか。斯う思ひますと寧ろ其心懸けが嬉しくも尊いので、殊に此汚れた家庭の中にゐながら只一人清い夫の心を見ては、私は何よりも賴母しく心强う御座います。いでこれからは及ぶかぎり便ない人の慰藉者とも相談對手ともなつて、其痛しい心の重傷を和げ、行く〳〵共に潔く樂しい家庭を作るに務めませう。

筆さし擱くと、池の汀も東屋も、かつちる花に眞白に見えます。あゝ尋に餘る此手紙！　他ならぬ貴女にばかり申上る有の儘を、何卒賴ない妹の眞の心とお讀み下すつて、行末の幸をお祈り下さい。さらば！



舊生徒よりおくれる書柬

平尾かずゑ

其一

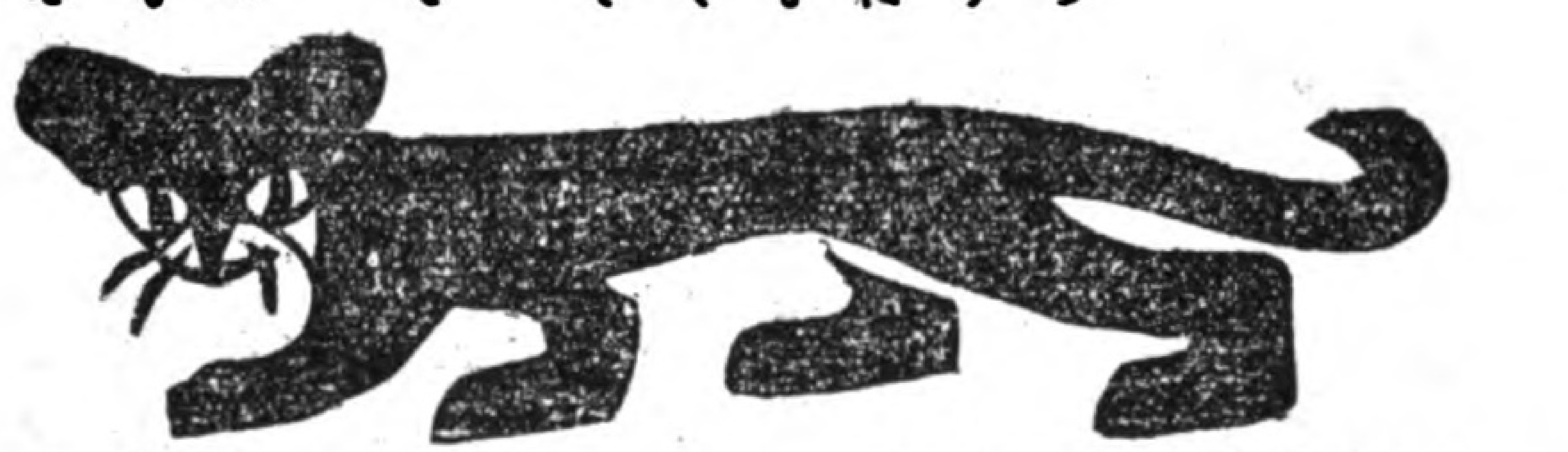
先生に

かれてお知らせしておきました通り、私も遂々昨宵から新らしい家の人となりました。妙に氣がソハ〳〵して宛で夢のやうで、何だか薩張分りません、他人から見れば屹度新らしく飼はれた鳩が籠の中を怖々と歩きまわつてゐるやうだらうとおもひます。別にこれといつて仕事もありませんから手持無沙汰でゐますと、直ぐ里家のことが眼に浮んできますの――それもその筈、昨宵のことですものねえ。

昨宵は春雨がシト〳〵と降つてゐました、藤の花も首垂れて悲しげに見えました。

自由な身體でわが家の閾を跨ぐのもこれが最後かとおもへば、その春雨も、藤の花も云ふにいはれぬ悲しさを添へました。

父は御承知の通り、昔氣質の頑固な性ですから、昨日も私を呼びつけて色々と言ひますの――お前も武士の娘ぢや、一度人の家に嫁いだ以上は、假令槍が降らうとも歸つてくることはならんつて、叱るやうに言ひました、私は唯默つて叩頭いてゐました。



夕方お湯を使つてゐますと、妹が來て背を流してくれましたそして繰り返し繰り返し、姉さんのお背を流すのも最うこれつきりねつて言ひます、さう言ひ乍ら考へこんで同じところ許り擦つてゐましたの、少時してからそれに氣がついてあら、姉さん、御免なさいよ。といつて寂しく笑ひました。常なら笑ひ轉げるところですが昨宵は唯寂しく笑つたばかりでした。私は急に胸が塞つてお湯も匆々に上りましたわ、姉妹の身の上が可哀想で、二歳の時からの繼母育ちですもの。

媒酌夫婦が來ましたのは黄昏時でした。大層急されて皆さんにお辭儀も匆々、直ぐ俥に乘りました。雨のため幌をかけさせましたから路傍の人はよく見えませんでしたが何でも大騒ぎをしてゐました、氣の故か常よりも俥が遲いやうにおもはれました村盡頭まで來ると最うふりかへつても我家は見えません、それに黄昏時です、けれども何だか後髮ひかるゝ思ひで幌の間からツイ振りむきました、すると急に胸が一杯になつて思はず涙が流れました、オヤ白粉がと思つて直ぐハンケチで涙を拭ひました。

先生、お笑ひなすつては嫌ですよ、全くなんですもの。

軈て向ふの家につく、案内せられて座につく、式がはじまる――これからのことは恰で何だか分りませんでした。

新生涯！私は何だか大きい石を背負はされたやうな氣が

します、曠野に手放されたやうな氣もします、寂しくて、寂しくてたまりません、加之昨宵からの雨ですもの。

詰らぬことを長々と書きました、字の亂暴なのは心の亂れてゐます故ですから御判讀なすつて下さい。

故郷にて　みさ子より

其二

田舍に居りましては何やら世事にも疎くなりゆく如く思はれて遣る瀬なく候まゝ又しても東都の人と相成り候。

先生には益々御壯健御勤務の御事と存じ候、私は上京後直に麹町なる文藝學校の專科に入學致し候、擔任教師は皆當代一流の人々、流石に其該博なる學才と卓越せる見識にはおどろかされ候、殊に××學士の文學概論などは胸をとゞろかせて聽講に出かけ候、又××講師は奇拔の論をするために校中評判の由に候が過日もふとしたことより女子を解放すべき必要を論ぜられ、終りに「宗教改革があつて靈的革命になつた、佛國の大革命のあつたために政治的革命も成功した、この次に來るべきものは女性的革命でなければならぬ、今迄の女は皆に囚へられてゐるのだ」などゝ申され候。過激の論の如く候へ共眞理ある言と存じ候。

殊に私は常に女子の獨立といふことを考へをり候ことゝて一層の興味を覺え候。



友の手紙によればみさ子様も遂に御結婚の由、あの家は私にもかつて話のありたるを斷りたるにて候、みさ子様の御心は解しかね候へ共恐らく○○のためには非ずやと存じ候、現に友の手紙にも其意味が仄かに相見え候。

何に致せ、二十や二十一で人の妻となるなどは餘り意氣地がないとおもひ候、現に私共の學校に出勤せる英國婦人などは四十近くの年齡をして尚ほミスと申し居るに候はずや。

此頃社會上婦人の位置といふことに就て論文——否感想のやうなものを綴り候、女學界の記者に兄の知人有之候故次號にその掲載を賴みおき候。御一覽下されたく候。草々

東都牛込の宿にて　春子

其三

俗務に追はれて久しくお手紙も差しあげませんでした、お許し下さいまし。

良人も十日程前から島へ參り、近頃は別に忙しくもありません、今日は雨で洗濯も出來ず、淋しさの餘りツイ筆をとる氣になりました、筆のゆくまゝに思ひ付いたことを申し上げます。

私も先月で早や三人の兒の親となりました、嘸お驚きなさるでせう、又私の身體の弱いのを御心配下さるでせう、けれども私は至つて達者でゐます、子供も健に育つてゐます、何卒御安心下さいまし。子供もまだ一人のうちはさ程に面倒と思ひませ

す、却つて少し位の苦痛も子故と思つて家庭の圓滿をはかることもありますが、それが二人となり三人となつては貧しい家計には手も足も出ません、それに年々と續きましては蝶よ花など呑氣なことをいつては居られません、いえ、先生、全くですよ。「背の兒は泣く、飯焦げる」なんて、よくお友達と笑つたものですが今では決してこんな事は珍らしくありません、夕方など三人の兒が一緒に泣きだして、下女と二人が途方にくれてゐますと、そこへ良人が社から歸つてきて口も利かずに少時玄關に立つて居ることもよくあります、その澁い顏をみるのが私は何より苦しう御座います、何だか急に老いこんで了ふやうにおもはれます。

學校に通つてゐます頃は、立派な丸髷の奧さんが玩具など携へてかへるのがありますと、何だか嫌な氣が致しましたが今ではその玩具を買つてやりたいと許りおもひます、携へるのが恥しいなんて、そんな贅澤などがよくも考へられたものと一人で可笑しくなります。

餘所からかへる良人の袂にお菓子の一包もないと何だか失望するやら情ないやうになりました、湯屋や寄席で子供の泣くのを腹だゝしく思つた私は其母親の心をくむ樣になりました。

門の前で子供が泣けば直ぐ一郎ではないかと思ひ、裏の道を馬車が通ればもしや芳男が出てはゐないかと心を配ります、君



子がよち〳〵歩き出しますと、直ぐ池や井戸の周圍にも竹垣を作らせました。

朝母におこされましては「お前は盜賊が忍んでも目のさめぬ娘だ」と叱言をいはれました私が、子供の囈言にも目をさますやうになりました、子供のためなら肉を割いても厭はないとおもひます。

いつか先生の仰言いました西洋人の「婦人はよわし然れ共母は强し」とかいふ格言が犇々と胸にしみます。

小間物店の前に步調を緩めた時、踵の細い靴の欲しかつた頃ヴアイオリンや時計の欲しかつた頃――おもふと、あの頃は若う御座いました。

妻となり、母となつて靴が何になりませう、ヴアイオリンがあつても米屋は支拂を待つてくれません、理想だとか、希望だとか申してゐます頃は未だ〳〵お若いと此頃深く感じました。

寄宿舍の窓からみた世の中は、實際とは酷くかはつてたものですれえ。

矢張花より團子だとおもひます、人間は先つ生きればなりません、衣食足つて……何とか申しますのも全くです、若い人達が戀愛だの、趣味だのと熱しますのは抑も贅澤だとおもひます……オヤ思はず理窟ッぽいことを申上げました、御免遊ばせ。

でも可愛いものは矢張子供ですれ、こんなせち辛い生活の中

にも子供が無事でゐるかとおもへば左程苦しくもありません、桂月さんが「家庭に子供のあるは庭園に草花のあるが如し」と仰言いましたのは全くですれえ。

げに子を持つてしろ親の恩、私は今始めて親の愛が解りました、夫婦の間が解りました、いえ、世の中といふものがわかりました。おもふとあの學校の庭の海棠の下で私共が先生をとりまいて泣いた時が戀しくてなりません。

四月とは申せ、まだお寒う御座います、御いとひなさいまし。

さよなら、

草深き里にて　ますこ

二白　私の同窓の松本直子樣は肺を病んで白濱の海濱院で療養中でしたが先月の七日に遂に亡くなられました、三つになる坊ちやんがあります。

又吉田きよ子樣は遂々離縁されたさうです、何だか寂しう御座いますことねえ。

有の儘を昔の友へ

五百枝

御なつかしき關子の君、御わかれ申上候てより早や五とせの春を送り迎へ候。とらへに眺め暮せし加茂川のほとりの



寮舎の柳、さくら相變らず都の錦を織りなす頃と存候ては昔なつかしさいやまさり候。けふさる處にて女子大學校友會誌、花紅葉ひもとき、ふとお前樣のものさせ給ひし「遠き友を懐ふ」を拜見仕り、思ひがけなくも、私の上なるに、打ち駭き、われしらず胸の動悸の高まりて、血汐の涙たちさわぎ、急に戀しくなり、筆とり申候。

雁のゆきかひ打ちたえてすでに幾年をか經ぬらむ。お前樣にはいつも健かに、いよ〳〵學びの奥ふかく御たどり遊ばされお羨しう存じ上候。私、當家へ參り候てよりの事、いつかは申述度とは存居候も、あまりと云へばあまりの有樣に、つひ今日まで打すておき候段、慮外致したる譯にはさら〳〵無之候まゝあしからず御許し下され度候。

「遠き友を懐ふ」の御文章のみ情けの厚きにほだされて、なつかしのお前樣に其後のありの儘告白致し、み敎へもうけ、または今後の御相談にも御心添いたゞき度、恥かしさも顧みず委細したゝめ申候。

私、とつぎ候宅の家内は兩親と良人と弟の四人に私、父の妾も同樣致居候。はじめ人の噂には十萬にあまるときゝ及び候資産家の長子に、私風情のつり合はぬはいふ迄もなく、ましてこみ入りたる家庭に、何の素養もなき身の勤まるべき筈は御座なく候へ共、仲に立ちし人には少かならず恩うけ居候間柄ゆゑ心

づかひ一方ならずと察しつゝも嫁し申候。まこと最初より親戚はじめ私にも望み薄かりし家に御座候ひき。

まゝならぬが浮世の常と承知いたし居候上は、かつての秋の夜の月に互ひの理想語りあひ候樣には參らずとも、せめては似よりたる程にと祈り居候、さるを案外のかけ離れたる緣に候まゝ、ふたゝびも三たびもいなみ候へ共、私ごときを、いづこお思召にかなひ候ふしのおはしてか、義理を楯にしての御申込み、親のとしてすゝめもならぬ御心中、みあげ候ふ私の苦しさお察し下され度候、二十とせあまりの長き年月、なみ〳〵ならぬ御いつくしみ、身にあまりたる業さへおさめ得させ給ひし御惠み、思へば深く高きものに御座候。私さへ心定め候はゞ、この慈愛ふかき御兩親の御苦しさも、のがれさせまゐらさるべくと存じ、何事も前の御さだめとあきらめ、うけがひ申候ちぬの浦なみ立ちさわぐその中にのり出で候てよりは、捨小舟あはれみて風も浪も靜かに事なかれとのみ祈り居候も、水の泡にて候ひき。外見と內質のさて相違のはなはだしさ、勿體なき事ながら、妻妾同樣させ候にても父なる人の品性は察せらるべく候、餘はおしはからせたまへ。

母上はおんむづかしと申さば申せ、何事も仰せられぬは、むしろ不思議なる程に候、されどよろづかまはせられぬ性にや、只お若かりし折の一點張にて、お眼のうちには時勢もなにも御



四

座なく候。時運にかなひてとは申せ、一代にてこれまで作り上げられ候、お力はとても〳〵思ひ及ばぬ事と羨ましさ限りなく候。しかしその資産を與ふべき二兒の敎育には、兩親ともあまりに冷やかに、無責任なるものにて御座候。敎育に要する經費、別に惜しみたまはぬは尤もに存じ候へ共、學ぶと學ばざるは、子の心のまゝなれば、親はその成績の如何に責なしとは、常につれに口にさせ給ふ言葉に御座候。されば富豪の子弟にあるならひに洩れで、修養は到りてうすきものに候。父を其まゝなる高慢、幼なきより冷靜なる母の手に人となりし良人には情といふもの露ばかりも御座なく候。召使ひのものは申迄もなく、近きあたりの人々まで、母上とはまゝしき御仲に違はじなど物語り居候を耳にいたし候ひき。箔を數ふる資本もて、われより望みて致しかけ候事業も、私參り候てよりは投けやりの姿にて、秋の空以上のうつり氣には只だ〳〵驚くの外なく候。

ふた昔にも相なるべき年月同じ住居に暮し居候妾は、流石に幼よりその道に成長せしものとて取り入る事の此上なさ。かてて人皆なの性質さへ見ぬき居候へば、家事一切は確にそが手に料理され居候。父なる人も親しきたれ彼れに嫁は兎も角、妾のあらては此家もてぬよし物語いたされ候。されば兩親との中は水の濁りたる樣にて、折々穴あらば入り度き程の事さへ御座候私は嫁といふ身の恥かしく、たゞ名のみなるが口惜しく右にも

左にも、人の悪しきのみをさがし居候目の多きにはまことに閉口いたし居候。しかし此上に思ひもよらざりしは私は良人二度目の妻にて候ひき。なきならひにても無之候まゝ、あきらめは致候へ共、あきらめがたきはよそにかくし妻ありし事にて候。その去られ給ひしか去り給ひしにか知るよすがなく候へ共、しばし問とは云へ、くるしき世をすごさせ給ひし事とそゞろに偲ばれ候。

右はいまの有様に候へ共、なほ姉妹にも増したる御前様にさへ秘めたる一事の御座候。過にし永の年月小さき胸一つに收めおき候事の苦しさ、人に知られんには憂くつらく、物かげに袖かみしめ候事もあまたゝび。お察し下され度候。

よき序と申候ては如何ながら、けふは何事も聞え上げて、悲しかりし過去の紀念と致し候。今も語り草の種と致候お前樣とひろの暑さを須磨の浦わの松かげに避けつゝ、そゞろあるきしてかへさ忘れ候砌、同窓の方々の御噂さ語りあひしを緒として、ゆくりなくも良人の撰擇に及び候を、御紀念遊ばされ候や。その節申上候人こそ、慕ひまゐらする君にて候ひし。さ申候へば、さぞ〳〵古き記憶を追はせ給ひて、馬鹿らしとや御腹立たせたまふべく候はんも、神かけて惡氣より申上候にては御座なく候っかのをり包まで申上げんと致候にあやにく迎への者にさへぎられて、その機を失ひ過し候。



わが心に秘むる君のみ名は阿部敏之とよび十一を滿たざるに父母の君に先だゝれ給ひ、復は或人のなさけのもとにさる大學のわざ終ふる迄にならせ給ひ候。初めてまみえまつりしは夫れよ、その春、花たけなはの嵐山に、父に伴はれ、櫻狩りに參り候節、兄と同行せさせ給ひしがそも〳〵に候。御人品と申し、さては御言の葉のはし〴〵にも御性質も窺はれて、別れまつりて後も、時なり兄のたよりに御噂承るに、おんなつかしさもまさりて、いつとしもなく戀しとなん思ひそめ候、神や告げたまひけめ、御歸東の後兄を介しての御懇なる仰せ、飛び立つばかり嬉しく、一年ばかりたのしく、はた嬉しく文のたより致候へ共、まがつみ多き世は、美しと信じ居候初戀も破りすて申候。そはかの君の義理ある家には、かくれなき美はしの人の候ひて、君が亡き父君とは御云ひかはしさへおはし候なりき。其のおんたより頂き候なりのかなしさ、此のまゝに命もたえよともなりてよと、細々仰せ給ひしみ文は、ありし世のかたみとし泣きくらし候。夫婦といふ名はつかずとも、せめて兄とも妹とて手箱の底ぶかく、私生涯のつらき悲しき思ひ出の種と相成居候。

この事ありてより間なう私、今の身になり申候。君は東に、われは西に、いづれかはらぬ義理のしがらみに、流れもあへず、うつゝ世を過し候事の、限りなく悲しく口惜しう御座候。

榮ありし去にし昔はよろづ思ひ出づべくもあらで、今はなつかしき師の君、さては御兩親の御敎を身にしめて、妻といふなる、固くるしき字にたがふ事なくつとむる覺悟に候へ共、風吼ゆる夜半眠やぶれては、怪しう胸の亂れ候事多く、われながらあさましき限りにて候。

戀しくなつかしきお前樣なれば、御參考のかたはしにもと、いつはりなき、有の儘を聞え上げ候。たゞあはれの樣御心にのみとゞめさせ給ひて、此文直ちに御火中願ひ上候。乍末御身御大切に祈り上奉り候

あら〳〵かしこ

四月二十七日夕づく紫に輝く頃

あや子

關子樣みもとへ

寄宿に起きふしゝてむつみし頃のさげ髮のお前樣と、今の關子女史と、いかにか變らせ給ふやとおしはかられ候。花のお江戸の目白の森風に、みがゝれたまひて、さぞや一としほの氣だかさ添へさせ給ひし御事と存上候。

御近詠やら御近きあたりの御姿やら、拜見仰せつけ下され候はゞ、うれしく、それもこれもなつかしき昔しのぶよすがとも相成申べく候。まづは亂筆御免下されたく候かしこ。



▲花蹊女史の賀筵

桃李言はず花おのづから蹊を成すの言、よくこの老刀自の面目にかなへり、こゝに老刀自古稀の齡をかされたまひしにより、今夜く刀自の薰陶に浴せし名ある貴婦人たち發起となりて、今月九日の吉日を卜し一大賀筵を日本橋俱樂部に開きぬ、會するもの朝野の名紳、淑女無慮一千人に及びぬ、其式の嚴そかにして且つ晴れやかなりし事、會衆の溢るごとき同情もて老刀自の壽を祝ひるその設備の整頓して且つ賑はしかりし事、又餘興の面白くして觀者の滿足を買へる、馳走の限なくとのへる、さては高貴の姬宮樣を始め花のごとき令孃のいづれも盛裝をこらして今日の賀筵につらなりしを見てはさすがに老刀自の人となりの非凡なりし樣の知られて、いと目出度かりき。

▲義理に迫りて入水せし女の遺書　壹等（貳拾圓）　無名女

▲憧がるゝ少女の手紙　貳等（拾五圓）　内藤千代子

▲人生觀を籠めたる賤業婦の手紙　貳等（拾五圓）　芳子

▲尊き師父の教訓文　參等（拾圓）　しのぶ

▲榮えし人の内情を聽いて呆れし手紙　參等（拾圓）　うめ子

▲人の缺點を拾あげし女の手紙　參等（拾圓）　眞菰草

入賞次第

▲人情學に及第せし姉より其弟への警告（賤香）▲虚榮にあこがれし三年の夢（露子）▲平凡なる田舍の友より（しげ子）▲遠き國なる大姉君へ（都の小姉）▲雁のつばさに籠めし山海千里の消息（はるさめ）以上四等＝七圓宛

▲痛切なる友の警告（飯田百合子）▲都會生活の狀況を故鄕の妹へ（とも子）▲結婚後の事情を舊師の許へ（別役とし子）▲女塾の內狀を報ずる手紙（若紫）▲教誨師となりし女より友の許へ（破芭蕉）▲病床に母を慕へる手紙（むらさき）▲模範的良妻の手紙（ひさ子）▲都なる友の許に（美登利）▲人の內情を聽いて呆れし手紙（きぬ子）▲舊生徒よりの書束（かずえ）（以上五等＝五圓宛）

下の諸氏の現住所を至急報知あれ△無名女△ひさ子

◀驚く手紙を讀みて感じたるまゝを

擔當者

◎「憧がるゝ少女の手紙」

この手紙を讀んで書面の通り正直に解釋すると、一人の小娘が、二人の男をうまくあやなして居る事になる、當年取つて僅かに十七、まだ肩揚も取れぬ小娘が親の目を盜んでこんな大それた事をして居るものと見ると、これは容易ならぬ風敎問題である、引裂いて屑籠に投り込んだ方が安全だ、併しそれは敎育上の話、これは秘密を保護されて居る手紙だから自から譯が違ふ、さてこれを手紙として見ると其の文章は實に獨創で何人にも眞似のならぬ妙所がある讀んで見るとくだらない樣であつて其實中々うまい事をいふてゐるその清新の氣人に迫るといふべきところ、大概な硬骨男子も降參して仕舞ひさうだ、語を寄す天下の女學生諸君、こんな手紙を無暗に書き出して角帽なんか釣つてはイケナイヨ。

◎「入水した女の遺書」

さアこれは本物だらうか、偽物だらうか一寸判斷に迷はざるを得ないが、まづ眞實の物として見ると、流石に臨終のきわに書いたもの丈あつて魂がこもつてゐる。どうも其女の姿が目の前にちらついてゐるやうだこの遺書を一本の枝として見ると裏面にこの事件を成立せてゐる一大事實の樹木の全體を窺ふ事が出來る、この女の敎育の程度は知れたものだが、何樣よく人生を達觀してゐる、嗚呼死なくとも別に何とか工夫のありさうなものだのにとは惜しまれて言ふ世間の人の同情である。

◎併しこの文に對してくだらない理窟をいふのは間違つてゐる、これは文章でなくして一篇の無韵詩である純粹なる日本婦人の血を享けた一個貞烈なる女がその美はしき胸より迸ばしる心の波に光輝を放ちて、我々の前に立つてゐるのである。實に何ともいへない美妙な感想を興させる、其の人心に及ぼす感化は非常なも

のである、撰者は前後十三回復讀していよ〳〵其神品なるに驚歎した、一等に撰する所以である。

◎次は「賤業婦の手紙」だ

近頃教育を受けた婦人がちらほら賤業仲間に這入るやうであるが、據ない事情とは言ひながら心得違もあらう、どうかそんな仲間に這入らぬ樣お賴み申す、文の痛快なのはいくらか薄倖の身を果敢なんで世を憤るところからでもあらう、只いさゝか賤業仲間を誇つて我物顏に言ふのはチト小憎らしい、むしろ一切沈默して居た方がまだ人格があるではないか。

◎次は「人の缺點を拾ふ女の手紙」である。

矢張り痛快式、淋漓式の文だ、これも薄倖の身を塞なんで世を憤つた、その餘憤がちよい〳〵洩れてゐるやうである。がその痛快の程度は賤業婦と比べてまだ身を棄てぬだけそれ丈けどこにか露をも厭ふ風情が見える。

◎次は「人情學に及第した姉」である。

賤業家の娘さんが高等敎育を受けたゝけに事毎に家庭の紊亂が目に餘つて仕方がない、せめても我が弟だけは人並な物にしたいといふ苦心、實に天晴感心な心掛である。

◎次は「遠き國なる大姉君へ」

愛犬の不幸なる死を報ずる文だ、何たる名文であらう。犬嫌いの私もこれを讀んで淚を溢した。

◎最後に感謝すべきは、

「尊き師父の敎訓文」と「痛切なる友への警告」である當今の女學生はまだこれ等の敎訓文、警告文を讀んで修養し反省する餘地があらうとおもふ。

次に六號活字で出された方に一言致したい、六號活字は元來五號よりは趣味的に出來て居るので編輯上雜誌の體裁を作る爲めに必要である、けれども、こんな場合には動もすれば有難迷惑を感ずる方もあるやうだけれど六號は決して其作物を輕易した譯でない事は賢明なる諸君の夙に熟知し玉ふ事とはおもへど、又誤解もあらんかとこゝに一言致して置きます。

平凡な生活に飽きて文學に志した婦人の手紙

蘇滿人

断つて置くまでもなく「友の妻より」とあるから私は男である。その男の私に女の或人から手紙が來た、私の家にではない、私の役所宛にして……●

猶ほ断つて置く、このことは全然事實で、次に示す手紙は原文を其の儘そつくり寫したもの、決して猥りに一字たりとも改めてはないのであるから、どうか其のつもりで御覽を願ひたい。

その女と云ふのは實は私の友人の妻君で、東京の某高等女學校を卒業された方である。手紙には斯う書いてある。前の處は略して肝要な處だけ、

昨日にひきかへて今日の寒さはどうでせう、いかにあなたが寒さ好きでも、これには少々驚かれ給ひしことと小氣味よく、天が私の代りに君をいぢめてくれたのだらうと感謝します。あなたは寒い腰掛だし、私は炬燵の中ですもの。私の方が今日の寒さにはあなたよりは樂な譯です。然しかうしてペンを持つて字を書いてると指の先が凍るやうですもの、お役所のあなたは嘸ぞと思つて、惡口は云ふやうなものゝ、ほんとにお察し申しますわ。「君が手の冷たき戀をたどりけり」なんて何がありますが、厭やですね、冷たいのでは。オヤ失禮、御免ください、あなたのやうに氣取つて居ませう。あなたは默つてるからぼろが出ないで羨ましいわ。

後は略する。私は正直に白狀する、私は比較的新らしくない教育を受けたもので、殊に小さい時から女の友達と云ふものは一人も無かつたからでもあらうけれど、斯う思ふ存分に書いた女の手紙に接したことがない、私は驚いた、無論冗談半分に筆を走らしたものであらうが、私は少なからず驚かされたのであつた。

尤もこの前に、次のやうな手紙を貰つたことがある、と云ふと、度々その人から手紙が來るやうであるが、今日までの處では僅か四通である。今示したのはその第三通目、次のはその最初のもの、

これは特にその末に、

●●●●●●●●●●●●●●●●

この手紙御覽の上は御燒き捨て下さい

としてあつた。けれども私は少し思ふ處があつたので存つて置い

た。それを讀むとその人の境遇や現在思つて居ることがあり〳〵と分る。即ち斯う書いてある。

一昨日は參上、殊に長居仕り、さぞ〳〵御迷惑遊ばされ候ことゝ存じ候、よくシャベル女だ！なんて乾度呆れて御出でのことゝ推し候、それにあなた樣の方が餘りにおとなしくいらせられ候まゝ、つひ座が白ける苦しまぎれに、私の方で出たら目ばかり申し候、油紙に火がついたやうだなどゝ、惡口仰せられてはあんまりに候。

扨て其の折御願ひ申上げ候儀いかゞに候や、〇〇樣といふ方は、髯の生えた、眼鏡の光つた、鳥渡見ると何だかさも嚴格らしい、よく叱りさうな方に見られ候まゝ、私のやうな惡戯者なんか弟子にはしないと仰せらるゝかも知れずと心配いたし居り候。こんな無學の者が小説を書き度いなどゝ申すは、無論生意氣には候へども、實は私もこんな呑氣のやうでも苦勞はたえないのにて、學校に居た頃は、今日は何の講義、明日は何の研究などゝ云つて、毎日一つ宛でも何かに怜悧になつて行くのが嬉しくて、樂しく暮し居り候ひしを、嫁してからといふものはまるで希望もなければ、名譽を思ふでもなく、御飯を喰べたり、御掃除したり、寢ころんだり、縫物したりして一日を暮してしまひ、試驗のやうな苦しみもないが、卒業のやうな樂しさもなくて、平々凡々、たゞ欠伸ばかりして、毎日おなじことを繰り返して居るばかりゆゑ、だん〳〵馬鹿になつて行くので、これで一生を送つてしまうのかと思ふと、何ともいへない情けない涙がこぼれて、どうしても滿足が出來ず、寂しくて寂しくて堪らないので、心がさびしいゆゑ、つひいろ〳〵とくだらないことなどを考へて見ては、泣いたり歎いたりもいたし候まゝ、何か一つの目的が欲しくと存じ、かくは申上げ候ひしにて候。

勿論こんなことを申すは間違ひにて、女の天職を解さない馬鹿女とも御蔑み遊ばされ候とは存じ候へども致し方も御座なく候。それに兼々も御話申上げ候通り、私の兄弟たちは、みんな私を馬鹿だ〳〵と申して、お

金の威光のみを聞かされ、隨分悔しく候まゝ、私はまた物質以外の文學とか美術とかで、何か一つ見込みをつけてやつてみたく、馬車に乘れなくつたつていゝんです。私は私で慰藉がありますよなんて鼻を高くしてやつたら、どんなに嬉しからうなどゝも思ひ申し候へども、何しろ女のことゆゑ無學無識で、英語の本を逆さに立てゝ居つたやうな者なれば、或は駄目かも知れませんが、駄目でもやつて居れば、希望があれば滿足に存じ候。あなたは一體どう思召して？。



今日は雨が降るので戸があけられず、家の中は薄暗く散歩も出來ず、私のやうな虚弱な體には、こんな日は一層いけません頭は痛む、涙は出る、欠伸が出る、本を見るのも厭やにて、聞くのもいやで、とう〳〵出鱈目をこんなに長く書きました。讀んでくだされば嬉しい。

それでは〇〇先生の御返事御分りに候はゞ、鳥渡お手紙にてもよろしく候まゝ御聞かせくだされたく願上候。たど〳〵しき筆の跡、御笑ひくださるまじく候。

さようなら

文はこれで終つて、次の日附の處には、六月の末の日、いつだか知りませんが雨のビシヨ〳〵と降る日としてあり、その下に名前、宛名には私の雅號を標附にして書いてあつた。その次に……御覧の上は御燒き捨て下さいの斷り書。

文面にも見える通り、私はこの妻君に頼まれて、私の知つて居る小説家〇〇先生に紹介しやうとしたので、何時例へば面會が出來るか、それを聞いて貰いたいと云ふのがこの手紙の趣意ではあるが、併せて自分が小説家になりたいと思ひ立つた次第を詳しく述べたものである。

私は此の手紙を讀んだ時は非常に動かされた。と云ふのは、私も體が弱くつて、貧乏暮しをして居て、それに少しは文學趣味も持つて居る男であるからでもあらう。

兎も角この婦人は、斯樣いふ境遇で、斯樣いふことを思つて居る方である。體が弱い處へ、金持の親類からいろ〳〵の形式で壓迫されるので、多少病的になつた處もあらう。それでこんなことを思ふやうになつたものであらう。子供でもあつたなら……と、私は大いに同情したのであつた。

けれども、最初に示した第三通の手紙に接するに至つて、私は少しくその婦人の性格を疑ひ出したのであつたが、それも私が古い頭腦で見るからのこと、現今の女學校出の妻君は、皆な斯樣いふ風なのだらうと思ひ直した。けれども私には、何處か解らぬ處があつてならなかつた。

第二通目の手紙は、惜しいことには何處かへ仕舞ひ失くして了つたが、これは又た頗る美文で書いてあつた。去年の秋のことで、私がお月見には屹度參りますよと約束をして置きながら行かなかつたので、それを恨んでの手紙であつた。白萩の花が封じ込んであつた。身に染むやうな句が添えてあつた。私がこの手紙を讀んだ時は、どうしても他人の妻君からのやうに思はれず、若々しい血の漲り燃える美人から來た、熱情を籠めた手紙のやうに思はれてならなかつた。實際私の血も躍つた。

それが三度目には彼の手紙だ、冷たい戀……と來ては驚かざるを得んではないか。

いや、それもこれも病氣の所爲であつた。妻君は久しい以前から婦人病の爲に苦しんで居られると云ふことを、迂濶な話ではあるが、私は此頃になつて初めて知つた。それも妻君の口から直接に聞いて知つたのである。

その第四通目、即ち極く最近に受取つた手紙には斯う書いてあつた。

随分久しくあなたには手紙を上げない氣がします。扨て例の病院のこと暫時中止になりました。中止ちやないのですがね、診て貰つたら大變の手遅れになつて居

りまして、豫想外の重患なので、直ぐと手術をする譯には參らず、手術をするまでには二三ヶ月を要すと云ふので、二三ヶ月間毎日駿河臺の醫師の許まで通はねばならず、それから入院といふ始末になるのです厭やになつちまふぢやありませんか、診て貰ふには隨分厭やな思ひをするのですよ、泣きたいやうです、つく〴〵死んでしまひたく思ひます。そして病氣の爲め勉強をすることが出來ないのです。あんまり神經をつかつちやいけないと止められて居ますので筆を執るのも暫らく中止、ほんとうに情けない、毎日泣いてばかり居ます。せめて芝居でも見てやらうと思つて、先日〇〇の慈善演劇會へ行つて見ました。あんなくだらない、狂言なんか見たかないのですが、あの私の崇拜して居る美人、そらあなたも御存知の△△さんのお孃さん、あの方と一緒でしたから行つたのです。それはほんとうに美しかつたので、



あの日ばかりは生れて初めて戀人と一緒にあるいたやうな氣がしました。ホヽヽ、嘘ですよ、私の戀人とするのは顔ばかりぢやありませんから大丈夫！そんなことは兎も角、一緒にあるいて嬉しいやうな氣がしました。併しまた愛想がつきたこともあるの、それはね、あの人のお母さんも一緒に行つたのですよ、そのお母さんといふのに驚いてしまつたのです、實に實に下等の人で、その云ふことつたらないのよ、こんなお茶漬芝居なんか見たかないよなんて云ふんですもの、まるで待合の女將ともいひたいやうな人なのです、私は今まで聞いたこともない新らしい言葉を隨分覺え、ましたよ。いくら美人で、いくら綺羅を飾つてお孃樣お孃樣と呼ばれても、かういふ人のお腹から出て、かういふ人に育てられ、かういふ人を母と呼ぶのかしらと思つたら愛想がつきました。全く錦の裏は穢いものですね。

ほかにも大勢、紳士錄にものつてる人達の家族が來て居ましたが、何れもその品格の下劣なのには驚きました。ねえ◎◎さん、いくら私達が貧乏で育つても、手鍋さげる生活でも、こんな下等な眞似はしないと、少し鼻を高くしたほどでしたよ。私なんか隨分定規以外の動作をしますが、これでも心まで腐つて居はしませんよ、ホヽヽヽヽ、大變な自讃ね、あなたの前ばかりですから喋つてはいけませんよ。

先日或る人とあなたの噂をさんざんいたしました。ほんとうに御性格の變らぬ方と憎らしく、私のこの薄い掌で、頬ぺたを打つて上げたいやうな氣がする、全く左樣しなければ飽き足らないのです。あんまり圖に乘つて書くと常識を失して失禮のことになりますからもう止しませう、止しませう。

と、一氣呵成に書きなぐつてある。私は息も續かずに讀み終つたのであつた。これには自分の署名はせず、日附も書かず、單に私の姓だけ樣附にして書いてあつた。

用紙は原稿紙、餘白が盡きたのでそれで止めたらしくも想像される。それから欄外に、少しく細字で次のやうなことが書き足してある。

あなたは熱し安く、また褪め安い人だと聞きました。

おゝ厭やなこと、左様いふ方には好かれたくない、好かなくもいゝから、どうぞいつまでも御見捨なく……

これではまるで私から戀文でもつけて彈じかれたやうな體裁。いやはや汗顔の至りだ。

病氣の所爲でもあらうけれど、これが友人の妻君からの手紙だから驚くぢやないか、それも小さい時から遊び友達だとか何とか云ふのなら格別會つて話をしたことだつて數へるほど、而も横坐りもしない位の眞面目さであるのに、この手紙だ。私は何と返事していゝやら分らないから、一度も返書を出したことがない。

最初の手紙を貰つた時には、私は滿腔の同情をそゝいで、長い〳〵返書を認めかけたのであつたが、あひては友人の妻君、どんな行き違ひで、どんな間違ひが起らんとも限らないと氣がついたから、書きかけた返事の手紙を滅茶々々に引裂いてしまつて、とうどう出さずじまひになつてしまつた。

私の妻は昔風の、普通の型の女房振りであるから、猶ほのこと此の妻君の明けつ放しの振舞ひには驚かされる、全く私は眼を見張つたのであつた。

今後どんな手紙が舞ひ込むか知れないが、もう之れ以上に出るとはあるまい、出てはそれこそ大變である。私だからいゝやうなものゝ、世間には堅く見えても存外浮氣な人があるから、滅多な人にこんな手紙は上げない方がいゝ、私は古風の頭腦の上に、取越し苦勞をする性質だから、心配で〳〵堪らない。兎に角少し自重した方がよからうやうに思ふ。

とは云ふものゝ、こんな心配をするのは私の方が馬鹿なのかも知れぬ。現今の女學生、乃至女學校出の妻君は皆な斯様なものかも知れぬ、現今の時勢にはこれでいゝのかも知れぬ。私の考へが時代遅れなのかも知れぬと思ひ返しもした。

これが當世なのかも知れぬと、思ひ返しもしたけれど、私はやつぱり、女は何處までも謹しみ深い、おとなしい、ざつくばらんなこんな手紙などを書かない方が奥幽しくつて好きだ—

終りに臨んで私は淸子夫人（この妻君の名）の健康を祝する。そして御夫婦の御中、未來永劫、幾千代かけて睦まじくあらせんことを祈る。



女子書簡文案内

鹽井雨江



書簡文にも、いろ／＼の場合がある。その一つ／＼についての案内を、こゝに述ぶる事は、容易の業ではないが、唯だ總てにわたりての心得を、おはなしするのである。

一、書簡文の用語

書簡文の用語は成るべく平易に分かり易いのを擇ばねばならぬ。書簡文は、直接に吾人の意思の交換に用ふるものなれば、其の一言一句の意味が、讀むと共に直ちに明かに了解せられて行くやうでなければならぬ辭書にたづねて、其の詞の意味を初めて知り、再三首をひねりて其の意味をやうやく悟るといふやうにては甚だ不便であつて、書簡文の道に反いて居る。不便ばかりでは無い。先方の人に其の意味の明かに判からぬ詞などがあつては、書簡文の役に立たないことゝなるではないか。されば努めて平易なる、判り易い詞を遣ふ事は大切なる注意である。ある知名の婦人の新年の手紙に、

○ふる年中は淺からぬ御配神を蒙り、せまき袖には包みあまれる嬉れしさ、筆にも言葉にも盡くし難く存じ上げ候。

ふる年中は御配神を蒙りなどの文句は、ちと普通のもので無い。舊年中とか去年中とか、御配慮にあづかりとか、お心そへをたまはりとか、御懇情にあづかりとかいふ方が、普通であつて、平易に判り易いではないか、またある婦人の手紙に、

○方々へも宜しく御傳禮下されたく願ひ上げ候

御傳禮なども、難かしい無理な文句である。宜しくおん禮お傳へ下されたくといふのが、あたりまへである、またある婦人の手紙に、

○此の頃の玉什、何にか御洩らし下されたく願ひ上げ候。

此の玉什なども、難かしい。元來これまでの所謂書簡文には、其の語義は明かに知らざれど、何んでも此樣な處に遣ふものであるといふやうな考へで用ひて居る。此の種の慣用語が澤山あるが、總べて廢するが宜いと思ふのである。書簡文の用語とても、普通に吾人の會話や文章に用ひて居る詞でよい。何にも特種な詞を書簡文に限つて用ふる必要は無い。從來の書簡文にのみ用ひ來たれるやうな、特種な拙劣なる和漢混合の詞は、すべて廢すべきである。

二、會話體の書簡文

近頃、女學生や年幼い婦人の間には、會話語を遣うて、會話のやうに書いた書簡文が流行するが、これは場合によつては、心せねばならぬやうに思ふ事がある會話語は吾人が日常の生活の間に、親しく遣つて居るものである故に、何處となく親しげな、懇ろげな、なつかしげな親愛の情が、自から籠つて、面白い處もあるが、その代りに、場合によつては、餘りになれ〳〵しげにも聞こえたり、または餘りにあまつたれたやうに思はるゝ恐れがある。されば先方と自分との間柄によりまた其の場合によりては、注意せねばならぬ。ある女學校を卒業した生徒から其の師の許によこした手紙に、

○先生お變はりはありませぬか、故鄕へ歸へりましたきり、ふつつり、お手紙をもさし上げませぬでやつぱり當世の輕薄者よと、キッと先生御立腹遊ばされてゞしやう。ホンとにすみませぬが先生どうぞお容赦を、でも私し心の中には常に先生の事を片時お忘れ申した事は無いのです。私し決して詐は申しませぬ。昨夜も先生が御持病の頭痛を、しかめ顏(御免下さい、正直に申すのですから)に

お詠へ遊ばしながら心細に御講義下さる御様子を夢に見て、私し何んだか悲しくなつて、悲しくなつて今まで泣いて居りました。先生お變はりはありませぬか。急に何んだか心配になつてなりませぬ……。

といふやうな文體で長々と書いてあつた。親しげななつかしげな情は籠つて一方にはやさしい心は聞ゆるが、どうも少しく先生に對するものとしては餘りになれ／＼しくて、なめげにも聞ゆる氣がするし、またあまつたるげにて其の人格も下つて思はるゝふしもあるでは無からうか從來の「一筆」的の慣用語で、情愛の籠らない、申しわけばかりのホンの義理ばかりの、輕薄げな書簡には、遙に優つては居るが、さて少しでもなめげとか下品とかいふやうになつては、なほ申し分があると評せねばならぬ。上乘の書簡文とは言はれない。かゝる場合に、會話體を用ふるならば、よく其の詞づかひを斟酌して、會話體のなめげらしく聞ゆるかど／＼は避けて、文を工夫する事が必要である。

會話體の手紙は、同輩の間や、極めて親しい間柄には差し支へないが、長上の者や、またあらたまつたる場合には、どうも適當で無いやうに思はるゝ故に、其の場合によつて、斟酌が肝心である。

三、女らしくない書簡文

難かしい詞や、強げな詞づかひをして、女らしいやさしげで無い手紙も面白くない。ある婦人の手紙に、

〇春暖の候に候處貴院愈々御清榮　奉賀候……

〇不日參堂、拜顔、萬縷可申上候……

といふやうな文句を見た事があるが、これでは何んだか小倉の袴を穿いて、ステッキを振つて歩行いて居る人柄が聯想せられて、どうも女の手紙とは思はれないでは無からうか、溫順は我が國の婦人の美德である行ひにも言葉にも何事にも、其處は缺けてはならぬ。かういふやうな手紙を常に書くとあつては、とにかく其の言葉には、此の美德を缺いた人であつて、ゆかしく無い。

四、場合に應ぜぬ書簡文

場合に應ぜぬとは、急の場合に長い前置きを述べたり、すべて其の手紙を送る場合に似合はぬ書き方をするのである。これも誠に面白くない。知人の家の子どもが死んだ時ある女生よりの弔ひの文に、

○春とは申し候へど、寒さはなほ冬のやうおぼえ候を、おん障りもあらせられず候や、さてとや今朝の新聞紙の廣告欄にて承り候へば、御令息さまには急病にておなくなり遊ばされ候よし誠に〳〵驚き入り申し候、御愁嘆さこそとよそならずお察し申し上げ候………。

かういふのが、場合に應ぜぬ一例である。新聞の廣告にて駭いて、急いで弔ふ場合である。さるに「春とは申し候へど……おん障りもあらせられず候や」などと、普通の場合のやうな時候の挨拶などの前置きをするのは、其の暢氣さ加減、誠に〳〵驚き入り申し候と言ひたいでは無いか。かういふ場合には、その樣な前置きは要らぬ。事がらも意外である、場合も其の意外の變に驚いて急ぎ弔ふのである。今朝の新聞紙にて承れば直ちにぶつつけて書き出すべきである。それでこそ其の意外の變事に驚いて急ぎ弔ふ心情も、誠に見ゆるのである。總べて手紙を遣るには、場合と趣旨とがある。其の場合と趣旨とは、さま〴〵である。其のさま〴〵の場合趣旨に從うて手紙の書き方は自然にそれに叶うて出でねばならぬ。

同じ種類の手紙でも其の場合はいろ〳〵ある。例へば同じ見舞ひの手紙でも普通の寒暑の見舞ひ場合もある。病氣の見舞ひの場合もある。其の病氣の場合でもまた此の頃よりの病氣もあるし久しく成りたる病氣もある。輕い病氣、重い病氣、急病、年來の持病、病氣の種類、工合からも、さま〴〵ある。

また故山に病臥せる場合、病院に呻吟して居る場合其病人の境遇から考へても、さま〴〵の場合がある。かう言ふやうな工合で、同じ見舞ひでも實にいろ〳〵の場合がある。其の場合に從うて其の手紙に言ふ事や

また書き方は自から異るべきである。場合に應ずることれ實に書簡文の上に大切なる事である。

五　趣旨に應ぜぬ書簡文

手紙を人の許に送るには、必ず送る趣旨がある。用事を言ふてやる、安否を問うてやる、病氣を見舞うてやる、不幸を慰藉してやる、なつかしさを言ふてやる總べてこれを送るには送る趣旨がある。其の趣旨を中心として、其の趣旨にはづれぬやうに書かねばならぬものである。いかなる事をいふとも、いかに長くいふとも其の趣旨が其の手紙全體の中心となつて居らねばならない。それを其の趣旨を外にして、餘事の筆を多く遣つたりする時は、何の爲めに送る手紙であるか其の趣意が亂れて來る。これを趣旨に應ぜぬ手紙といふのである。例へば

○窓の梅一輪、雪間に笑がほを見せ候は、まだ昨日のやうにおぼえ候を、いつしか春のけしきは深く四方には霞のうら〱と立ちこめ、菫、蒲公英、野べは毛氈を布きたる如く咲きも殘らず散りもそめぬ木ずゑは處々に錦の雲をかけたるやう、見わたす畑には、麥のあを〱と吹くなよ風に綠の波のそよぐが如く、空には雲雀の歌の妙へに心地よく遠近手籠さげてさまよふ少女子の摘草姿などはさながら天つ少女の春遊びするかとおぼえ候、例のものうき心も何んとなうそゝのかされ候て昨日は、一日を上野向島とうかれあるきて候が、うき立つは同じ春の人心、上野などは人の山となりて見え向島あたりは人の堤を築きたるやうに候ひしさても御病氣其の後はいかゞにおはしまし候や少しはお快よき方にむかはせられ候てか、日々心もとなく存じ暮らし居り候、御不自由は絶えておはさぬおん身とは存じ候へど、都を百里の御郷里と承はり候へば、自然よき醫師などはと、心にかゝり申し候、其の後の詳しきところ、何にとぞおしらせたまはりたく待ちこがれ申し候。

これはある女生が病んで郷里にかへれる友人の病氣

見舞ひに書いた手紙である。後半の文句を見れば正しく病氣を氣づかうて、とひやる文であるが、前半の文句にては、どうしてもさうは思はれないでは無いか。前半の文句を見て來ると都の春色を報らせてやる手紙のやうである。春色の報らせと病氣見舞ひとの、二つの趣旨があるやうである。病氣を見舞うてやるのが此の場合の此の手紙の趣旨であるのに、春色の事を長長と書きつけた故に、一篇の趣旨が斯く分らなくなつたのである。かゝる場合に春色の事を添へるならば極めて簡單に書くべきである。さすれば、ホンの時候の挨拶となるから、宜しい。また少しは長く書くにしても其の病氣見舞ひの趣旨に關係をつけて言ふやうにすればよいのである。例へば「かういふ時にも君の共に居ないのが悲しい」といふ心が「共に去年は袖をつらねた野べ山べの變はらぬ春色、君の事が思ひ偲ばれて、はやく御病氣の全快してまた一緒に遊ぶやうになりたい」とかいふ心を以て兎も角其の友を慕ひ其の病ひを氣づかふ心情に離れぬやうに其の春色を書くのである。どんなにいろ／＼の事を言ふて長く書くとも必ず一篇の趣旨の上に其の言ふ事がらは立つて居らねばならぬ。離れ／＼になつてはまとまりの無い文となる。また一つ手紙の中に、別々のいろ／＼な事を一處に言ふてやるにしても、其の一事／＼は必ず順序を立てゝ、別々にキチン／＼とまとめて行かねばならないさすれば趣旨は幾つありとても、皆一つ／＼にまとまつて居る故に、差し支へは無い。

六　間柄に應ぜぬ書簡文

間柄とは自分と先方の人との身分の關係を言ふのである。手紙の文はよく其の間柄に從うて、言ふ事をも詞をも詞つかひをも擇んで行かなければならぬ。その注意を怠る時は失禮とか不遜とか、馬鹿丁寧とか威張つて居るとか、受け取る人は淸少納言でなくとも必ずにくき物の中に數へて笑はねば居られぬ手紙となる。

○私事なが／＼御奉公相成され、いろ／＼御世話さまに相成られ、誠に有り難く候、午前十時の上野

汽車に乘り込み致し途中無事にて只今安着相成り候。兩親樣をはじめ家内一同悦び下され候。先づは歸宅のおしらせまでにあら〳〵かしこ。

これはさる人の許に奉公したる女の、暇を乞ふて鄕里へ歸へれる時の手紙であるが、隨分滑稽では無いか「御奉公相成され」「お世話さまに相成られ」「御兩親樣悅び下され候」などゝ自分の方の事に敬語を用ひて、主人の方に向つては「有り難く候」と粗略なる詞をつかつて居る。これでは草履を頭に冠を足につけたやうなもので、笑はずには居られないであらう。

されどこれは學問もない下女の書いた物、さまで笑ふにも足りないが書簡文の作法を敎へた書物の作例に

○一筆申し上げ候。扨ては雛に手向けばやとて家内うちより草餠拵へ候まゝ、至つて不味におはしまし候へども時には、かゝる物も面白からめとて一重御目にかけ申し候。文の外は、何れ御めもじの上申しのぶべく候。

と書いたのを見た。自分の拵へた物を送るに不味におはしまし候へども」とは、をかしいでは無いか。おはしますの敬語を遣ふとはをかしいでは無いか。そして其の癖「かゝる物も面白からめ」と、先方の事には粗略な詞を遣つて居る。「至つて不味には候へども、時にはかゝるものも面白くおはしまさめとでもいふが、至當では無からうか。こんな滑稽な手紙を附けて貰つたら草餠は不味よりも、をかしくてとても口には入るまいと思ふ。

同じ事を言ふてやるにしても、其の間柄によつて、言ひ方は考へなければならぬ。ある女生が、歌よみの許に

○誠に申しかね候へども、此の歌は明後日の同窓會の唱歌にとて作り候ものにて、至急を要する事に候まゝ、明日早朝までに御添削の程、一重に願ひ上げ候。

と書いて添削を頼んで來た事がある。其の歌よみは頼まれた通りに、明日早朝までに添削してやつたさうであるが。隨分あつかましい失禮な手紙では無からう

か、自分ならば添削の代りに、叱り飛ばしてやらうと思ふ「誠に申しかね候へども」とか「一重に願ひ上げ候」とか多少丁寧げな語はつかつて居るけれども、これでは誠に失禮な頼み方である。自分が雇つて居る人に向つて頼むやうでは無いか。

○誠に申しかね候へども、此の歌何にとぞ御添削たまはりたく御覽に入れ申し候、實は明後日の同窓會の唱歌にとて作りたるものに候て取り急ぎ候まま殊に見苦しく整はぬふしも多からむと存じ候。御多忙の中を、何にともあつかましき限りには候へど今宵若しもお寢覺めの折りも候はゞ、御一讀たまはり置かるゝやうには願はれまじう候や、折り入りておん願ひに及び申し候。

かういふやうに書けば、そんなにあつかましくも聞えぬやうになる。「至急を要する事に候まゝ明日早朝までに」と言ひたるが、あつかましく成つた本である。至急を要するといふ事は、「取り急ぎ候まゝ殊に見苦しきふしも多からむと存じ候」と、自分の作歌の上にて聞かせ、「御一讀たまはり置かるゝやうに願はれまじう候や」と、其の都合を問ふやうに言へば、すべて婉曲になりて同じ急ぎの頼みもあつかましく聞えぬやうになる同じ事でも斯く間柄によつて言ひ方がある。其處の注意が大切である。

七　くだ〱しい書簡文

こゝに、くだ〱しいといふのは、要らぬ文句の多いのを言ふのである。例へば

○一筆申し上げまゐらせ候、此の頃の空のならひとは言へ、降りみ降らずみ鬱陶しき限りに候を、皆皆樣おん障りもあらせられず、おん悦び申し上げ候、次に、私方も一同幸に無事に暮らし居り候まゝ御安心下されたく候……。

よく、かういふ文を見るが、「一筆申し上げまゐらせ候」も「次に」も、不用では無いか。一筆申し上ぐると斷らずとも、手紙の事は判然して居る。「次に」などゝ接續詞を遣はないでも其の次に言ふ事は、判つて居るで

は無いか。言はないでも判つて居る事は、言ふには及ばぬ。徒らに時間つぶし紙つぶし筆まらせである。其の上、出來上がつた文は、拙くなるのである。また

○取り急ぎお見舞ひ申し上げ候。承り候へば此の頃の降りつゞく雨に例の河水溢れて御地は大洪水のよしお住居のあたりはやゝ高地に候へば、さまでの御別條はと存じ候へど、まのあたりならねばなほとやかくに氣づかはれ申して候、詳しき御様子承はらまほしく候いづれは後便に讓りて、先づは取りあへず一筆お見舞ひまでに斯くの如くに候あら／＼かしこ。

こんな工合の手紙を、よく見かける。これも冒頭の「取り急ぎお見舞ひ申し上げ候」は、不用である。結末の「取りあへず一筆お見舞ひまでに」の一言で、澤山では無いか。急がしき場合の手紙故、成るべく簡單に書くのがよい。「に讓りて」も略して、「いづれは後便」で、直ちに「先づは云々」と續くる方が、輕妙である。「斯くの如くに候」も「あら／＼かしこ」も、不用である。女子の手紙には「あら／＼かしこ」の結びは規則のやうにして居るが、どうもをかしい。殊に隨分と長く書いた手紙の末にまで、「あら／＼かしこ」と書く人があるが理窟が更に判らぬ。

要らない詞は一個も無い、要る詞は一個も缺けて居らぬといふやうに書かなければ、しまつた手紙は出來ない。

八、情の籠らない書簡文

見舞ひの文や慰藉の文などは、情がよく籠つて居るやうでなくてはならぬ。情の無い手紙では見舞ひを言はれても、慰問せられても、何んの嬉しくは無い。嬉しくないのみならず、却つて腹が立つ事がある。

さういふ場合の手紙は、充分に其の人に同情を寄せて、其の同情を寄せた心の底から書くやうにするが、肝心である。さすれば詞は拙くとも、言ひ方は拙くとも情の籠つた文章は出來るものである。それをさまで同情も寄せないで義理一片の心で書く故に、情の無い

輕薄の文と成るのである。同情が動かないならば、さういふ場合の手紙は廢めた方がよいやうなものである
今一つ情の籠らない手紙の原因はありふれた詞や書簡文慣用の詞をつかつて紋切り方の筆を並べるからである。例へば

○追ひ〳〵寒氣相增し候を、先づ以て御一同樣いよいよ御恙もなくいらせられ、大慶に存じ候。私方もお蔭さまにて無事に暮し居り候まゝ憚りながら御安心下されたく候。

○かへす〴〵おん身をおいとひ遊ばされ候。

○時候も不順に候間、折角御大事に御養生遊ばされたく願ひ上げ候。

○承はり候へば何々樣には御逝去遊ばされ候よし。驚き入り申し候。御愁傷如何ばかりとお察し申し上げ候。

こんな工合の、ありふれた詞や、慣用の詞をつかつて、總べて形式的の筆にばかり出る故に、其の心情がうつらぬのである。自分が物を言つて居るので無くして、形式が物を言つて居るのである。されば其の形式ばかりで其の自分の心情が籠らないのである。總べて形式的の詞づかひを廢めて、何んでも其の場合の自分の眞情より書く事が、大切である。

九、目ざわりになる文字の書簡文

從來の書簡文には、一種奇妙な慣用の文字がある。例へば、

候得共　　乍憚御休神被下度奉願上候
御障りもなく被爲入候御事御悦申上候
御機嫌克御重歲被遊　　疲勞甚敷
宜敷御禮申し上げ候。　　恙も無之候
誠に難有奉存候。
目出度申納候　　少しも存寄不申
決して御心配被下間敷候
近日罷出萬事可申述候

圏點を附けたやうな文字である。斯くの如きはどうも目ざはりである。候へども、甚しく、宜しく、御機嫌よく、めでたく、まじく、といふやうに、假名にした

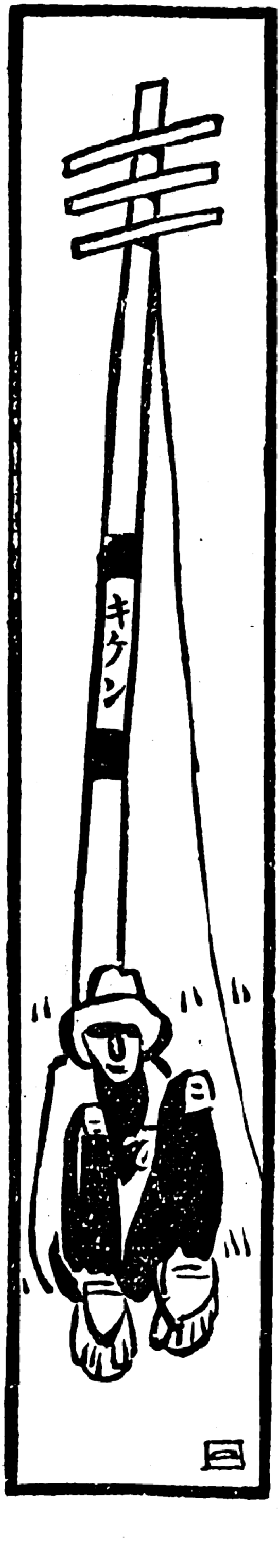
方がよい。また、憚りながら、下されたく、願ひ上げ候
入らせられ候、有り難く存じ奉り候、存じより申さず
御心配下さるまじく、近日まかり出で萬事申し述ぶべ
く候といふやうに書き流しにする方が、國文としては
穩當であらう。送り假名なども、申し納め候といふや
うに皆其の語尾を送る方が、讀み易いであらう。今の
世にまだ斯くの如き見苦しき習慣的の文字を用ひて居
る人があるが、どうも氣が知れぬ。

十、讀み難い文字の書簡文

文字の拙くて讀みにくいのもあるが、こゝで戒むる
のはそれでは無い。文字が洒落れすぎて居つて、讀み
にくいのを言ふのである。女子は少さい時から草書や
くづした文字を多く習ふやうである。其の弊でもあら
うか文字が洒落れて書き流しすぎて、讀みにくい事が
往々ある。書家として習ふたのでは無い故に、洒落れ
て書き流す中に、其の文字のくづし方が、どうも書法
にチヤンと合つて居らぬ事がある。曖昧な無理なくづ
し方をする。其處で、往々讀みにくい事になるのであ
る。

草體にくづして、やさしげに綺麗に書くのは、女ら
しくて誠によいが、其のくづし方、書きつゞけ方を、
注意してほしい。

まだ澤山言ひたい事はあるが、十ケ條の數もよい故
こゝでやめて置く。



雁のゆきかひ

雅俗消息文例

年賀狀

年のはじめの御壽千代もかはらぬためしにてまだ霞まぬ空ながら昨日には引かへて、けふは何となく長閑におぼえ候まゝ御一家樣御揃ひ御よはひかされさせられ候御めでたく存じまゐらせ候手前こともさはりなく加年いたし候へば御心安く思召下され度候此品珍しからぬ物ながら御祝言のしるしまで進じ申候いつも〳〵同じ趣向にて御笑ぐさとは思ひながらまゐらせ候

寒中見舞ひの文

寒とは申ながら殊の外寒さきびしく候處御さはりも入らせられず候や、伺上候蜜柑一かごいかにも少々ばかりには候へども國許より到來候まゝ御子樣方の御なぐさみまでに御福分ち〳〵かしこ

右返事

御文ありがたく拜しまゐらせ候、おほせの如く寒氣ことにつよくおはし候處、御すこやかに渡らせ候由まづ〳〵御うれしう存上候當方皆々無事くらしなり候まゝ御安心下され度候さてとや唯今は殊に御國許より御到來の御品わざ〳〵御福分下され候御志いつもながら御親切のほどありがたく御禮申上候子供達歸り候はゞ早速よろこばせ申すべくとぞんじ候やがて梅の頃にも相成候はゞ御散歩かた〴〵御立寄被下度御待申上候かしこ



梅見の誘引

この二三日は餘ほどお暖に相成大に凌ぎよく候さやう候へば彼の名高き八幡宮の梅など漸く咲そめ候よし幸ひ明日天氣もよろしく候はゞ出かけたくと宅にても樂しみ居候まゝ御さそひ申上候もし御同道叶ひ候はゞ猶々おもしろき事とうれしく存上候歸りに上野樣の御別莊をも御尋ね申度と存じ候このよしあなた樣より御主人樣によろしく御取なし御すゝめの程願上まゐらせ候尤も御二方御揃ひの程を御待申居候まづはあら〳〵かしこ

右返事

お手紙拜見梅見のおん催しおはしまし候由おさそひ下され御しん切の程あつく御禮申上候明日は都合よく手透きのよし

二人共参じ候やう話合候まゝよろしく御供願上候よりて八時までに御宅へおさそひ申上候まゝ左様御承知被下度まづは御返事まで

春雨の日友の許に

春雨しめやかにふりくらしいとつれ〴〵にこそ御前様いかがわたらせられ候やさしたる御用事もおはさずば今なん雨の晴間に候へば御出成され琴のしらべをなし給はゞいかにも楽しからんとむかへ人さし上候、かゝる時おのが糸竹の道にうときをいとくちをしう存じ候へども今更いかゞせんあなかしこ

右返事

御文うれしく仰のごとく木傳ふ鶯のこゑに琴を和するはいと〳〵ゆかしうは存候へどもあやにく今日客人ありて隙間なければ口惜しながら参上いたし兼候を失禮のものとや思召すらん、されど鶯は私のえまゐり候はぬをいと嬉しう思ふべしつたなき琴にしらべ遊へる聲を出し候はゞやがて興さめてよその梢に移りぬべくこそまづは御返事まで

雛を贈る

やう〳〵御暖に相成候ところますます御きげんよくめで



度存上候。さてとや明日はお嬢様御初節句とてわざ〳〵御招にあづかり有難く御禮申上候此雛おはづかしくは候へども御歡びのしるしまでさし上度又庭の桃此ごろ開きそめ候まゝ二枝折らせて御笑草にもとさし添へ申候

右返事

御れんごろの御文拜しまゐらせさてとやまづ初雛の御祝として見事の御品ならびに御庭の花下されありがたくいたゞき申候芳江にも早速拜見いたさせ候ところ大よろこびの様子にてにこ〳〵と手を出しなどいたし居候いづれ御目もじの折よく〳〵御禮申上べく候、明日はかならず〳〵御早々と御出のほどくれ〴〵も御待申上候

汐干狩に誘ふ

明日は古き暦にては桃の御節句にあたり候ところ、手前方は近年雛まつりも廢し何かとさびしく候まゝ母妹などゝ汐干狩にとおもひたち候御なぐさみに御同道も候はゞ御供いたし度場所は佃島へわたり貝どもあさりつゝ洲崎の邊までゆかんと存じ候御都合如何御伺ひまでかしこ

右返事

汐干狩にことよき連の思附もなくかた〲見合居候折からにて一入嬉しく存じ上候場所も思召の邊いと〲よろしからんと存候明日は朝早くよりさぶらひてよろづの事は申上べしかしこ

花見の案内

お天氣つゞきにて御互に心もはれ〲といたし申候さやう候へば私庭の花恰度まさかりに候ところ、今夜にも一雨まゐり候はゞいかゞならんと存候まゝ夕方御あそびがてら御こし候様御待申上候手製の料理もさし上たく御主人様御同道下され候はゞ猶更御うれしく存上候かしこ

右返事

御文拝見仰のごとく御天氣つゞきにておんうれしく候さてとや御花見の御もよほしにて夕方より參じ候やう仰せ下されありがたく御禮申上候、就ては同道まかり出度と存じ候へども、あやにく主人事二三日旅行いたし宅も人少にて出兼候ままあしからず御推し下され度、折角の思召にそむき候罪ありがたく存じまゐらせ候この獨活いかゞと存じ候へども田舍より到來の品少々御らんに入まゐらせ候

新茶を贈る



日増に御暑く相成候折から皆々様おすこやかに渡らせられ御目出度存上候私庭の茶この頃、はじめて宅にて手製にこしらへ試候まゝ一袋さし上まゐらせ候ずゐぶん運動にも相成長き日のたのしみには中々におはしまし候へばちと〲御女中御召つれ茶摘中間に御はいり遊ばされ候ては如何一番は早すみ候へ共まだ二番も三番も摘まれ候まゝ思召候はゞ其分だけ摘みのこし置申すべく候

右返事

御文拝見いたし候處御庭の御茶今年はじめて御こしらへ成され候よしにて御おくり下されありがたくいたゞき申候、これほどまでに成され候には一通りの御骨折にてはおはしますまじくまたおなぐさみも定めて少からざる御事と御羨ましく存上まゐらせ候是より二番三番御つみなされ候由にて私にも御仲間入致し候樣御親切に仰下され御うれしく御禮申上候

初幟を祝ふ

今日の御祝申納候、當年は若子様御初のぼりに入らせられ候へば定めて御にぎ〲しく御かざり遊ばされ候御事と御祝申上候此籠の內まことにさし上にくゝは候へども唯御しろしまでに御らん下され候やう念じ上候兎角子持のならひとて、此

身こゝろにまかせず候まゝ文して御よろこび申上候、無禮の罪おんゆるし下され度候かしこ

右返事

わざ〳〵の御使御祝被下殊に見事の御人形ならびに御肴まで御めぐみ下されありがたく御受納申上候、なほちか〴〵の内参じ候上にて御禮申上べくと存し候かしこ

梅雨見舞

年々のならひとは申ながら此頃の空はいつ晴るゝやらと唯待遠にのみ存候さだめて御嬢様方御出入に御こまりの御事と御さつし申上候田舎には晴間なきため田植さへ出來ぬところもござ候由、其人どもの難澁さこそと思ひやり候このいちご少々ばかりには候へどもお嬢様方の御慰みにもと御目にかけ申候あまり御ぶさたに相成候故一寸御もやう伺度一筆しめしまゐらせ候かしこ

暑中見舞

此頃の御あつさは格別に候ところどなた樣にも御勇ましく入らせられ候御事御いはひ申上まゐらせ候次に私方皆々すこやかに暮し居候まゝ御安心下され候やう願上候此瓜少しば



かりには候へ共御見舞のしるしまでに御目にかけまゐらせ候猶申上度事は山々おはし候へども其内参じ候てと書きのこし候かしこ

右返事

仰のごとく格別の御あつさに候處、御健やかに遊ばされ候御事何よりの御仕合と御祝申上候こゝもと母子ともいろくろぐろと働き居候まゝ御氣づかひ下さるまじく候さてとや見事なる白瓜ことに澤山いたゞき毎度ありがたく御禮申上候さだめて御畑に出來候ものと唯々御手入の届きたるを感心いたし候のみ、私共の及ばぬ事ながら御地所の御廣々となされ候ないつも御羨ましく御噂いたし居候寒晒一袋御うつりまでに御使にさし上まゐらせ候かしこ

海水浴をすゝむ

私事一昨日當所にまゐり一家を借り入れ朝夕海につかりて潮あび居候まゝ御安心下され度候別段珍らしき景色とてもこれなく候へ共日々波と遊び戯れ貝拾ひ引網など打ながめ樂しみは盡き不申候、あなた樣には思召立たせられず候や、日頃御丈夫にも入らせられざる方なれば、必ず御ためによろしからんと存上まゐらせ候御主人樣御同道ならば猶更のこと御一人

にても御ゆるしさへ出候はゞ御還臨はおはすまじく私宿へあて御出下されだくまづ十日か二週間も御逗留の御つもりに候はゞきつと効能はあらはれ候御事と存まゐらせま候づは御しらせかたく〳〵御養生御すゝめ申上度、御機嫌御伺まゐらせ候かしこ

納涼に招く

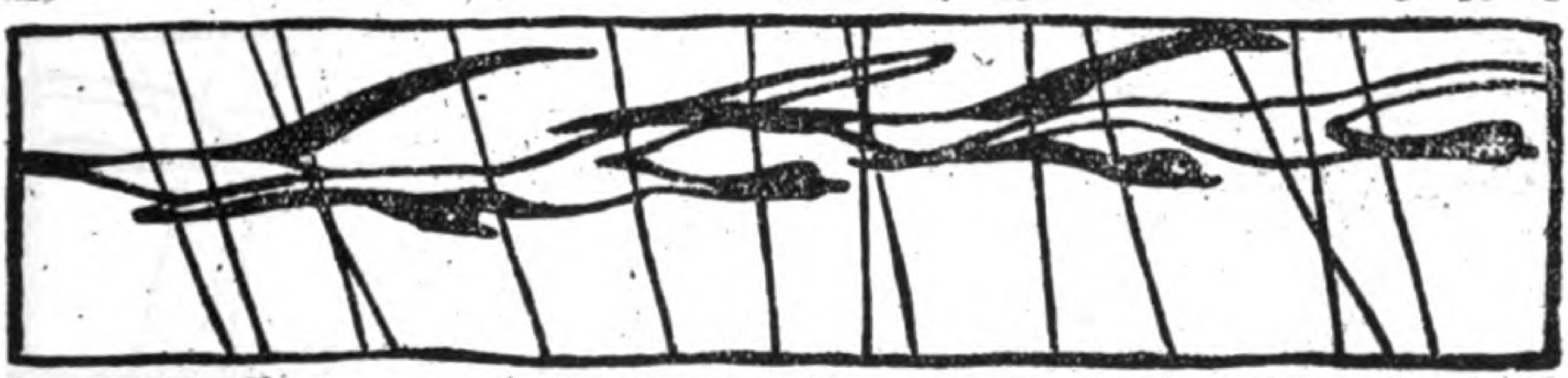
一寸申上候唯今私方に女客二三人まゐりあはせすゞみがてらの御茶にても立度と申居られ候まゝあなた樣にも御手透に入らせられ候はゞ御出下さるまじくや別に御心置の人々にては候はず私が昔の學校友だちに候へば御心やすく願上まゐらせ候庭の蓮も少しづゝ咲きかけ申候かしこ

右返事

御使ありがたく存上候お茶は誠に不得手にてさる御席に列ならんは御恥かしく候へども、蓮のにほひに引かされて必らず御座をけがし候ふべし女禮式になれざる山里の女の事に候へば其足らざるところは幾重にも御敎下され度願上候かしこ

草花を人に送る

萩の上風蟲の聲などいつしか秋げしきを覺え候、私方野邊近



く家居せしかひありて兼て移しうゑ候七草の花どもやゝいろめきて時得がほなるこちに藤袴のことに懷しげなるも來て見る人もなく唯一人もてはやさんもおしきにと、一枝づゝ手折まゐらせ候一兩日のうち御手すき見合せられ御出下され候はゞ秋の夕べの哀なるむかしの事ども物語り野中の松にやどる月をも見給はゞ園の花もことく〳〵く匂ひをまし候はんと存候まゝ、ひたすら待入候かしこ

右返事

御文拜見いたし候仰のごとく暑さはいつしかさりて朝夕は涼しさを覺え候近き野邊のとて、くさ〴〵の花をあまた折らせて惠み下され嬉しく存じ候早速瓶にさし打眺め候處御志の色ひとしほ香しく覺え候近きほどに參上いたし秋の夜の長物語きこゆべくあらく〳〵かしこ

盂蘭盆に物を贈る

御祖母樣の御初盆も近より何かと御忙がしく御さつし申上候切籠とうろ一つ蓮華一瓶御佛前へさゝげ候かれて御信じ遊ばされ候名號と御戒名とを浮出しにいたし候まゝ御一らん下されたく願上候今更申さずともの事ながら流るゝ水よりも早きは月日にてきのふけふと思ひし内にはや御初盆もめぐり

来り候事ゆめの心地のみいたしなほ明日は御燒香に參じ候つもりに候へば昔がたりは其時にと留め置き申候かしこ

右返事

祖母初盆の御手向にとて見事なる御燈籠御花御おくり下され草葉の蔭にて如何ばかり歡び候はんと私までも淚にむせび御うれしく存まゐらせ候殊に御心をつくされ平生歸依せし六字の名號當人の戒名まで御つけ下されかされ〱の御志の程深く御禮申上まゐらせ候仰のごとく月日の流はやくして遠く思ひし初盆も早まゐり候事さながら夢とほか存ぜられ申さず殘る子孫の爲御さつし下され度候なほ明日は御ゆるりと御こし下され度御待申上候かしこ

月見の案内

俄かに涼しく相成候ところ御父上樣御持病は如何おはしまし候や時候の變り目は殊に御大切に遊ばされ候やう陰ながら祈上候さやう候へば今晩は舊の十五夜に當り候故私方新築の二階にて御ひろめを兼月見の催をいたし度やう申居候まゝ御差支も入らせられず候はゞ暮頃より御主人樣御同道にて御出下されまじく候や何もさし上るものは御座なく候へ共圓かなる月を御馳走にいたし度候かしこ



右返事

父事容態御たづね下されありがたくお陰樣にて漸く快く相成近所へ參り候樣の元氣いで申候まゝ御安心被下度候さて今夜は御招にあづかり何よりの御うれしさ必々二人としまかり出御禮申上べく御新建の御二階もまだ拜見いたさず候へばよき折なりと話合たのしみまゐらせ候かしこ

暴風見舞

昨夜の嵐は中々烈しく御座候御宅樣には御いたみ所などあらせられず候や私方にては柿の木二三本倒れ屋根板など吹きまくられなど一方ならぬあれかたにて途方に暮れ候まゝあなた樣の御事心にかゝり御伺申上まゐらせ候御無人にて嘸かし御困りと存上候まゝ一人さしいだし申候御心おきなく御つかひ下されたく植木屋の事に候へば御庭の御つくろひなど御申付下され候にもよろしきかと存じまづは御見舞のみかしく

右返事

此方よりと存じ候處に御使下され御れんごろの御文ことに御人まで御心づかひ下され何とも御禮の申やうも無御座御うれしく存上まゐらせ候丁度女の手ばかりにて困り居候ところゆゑ

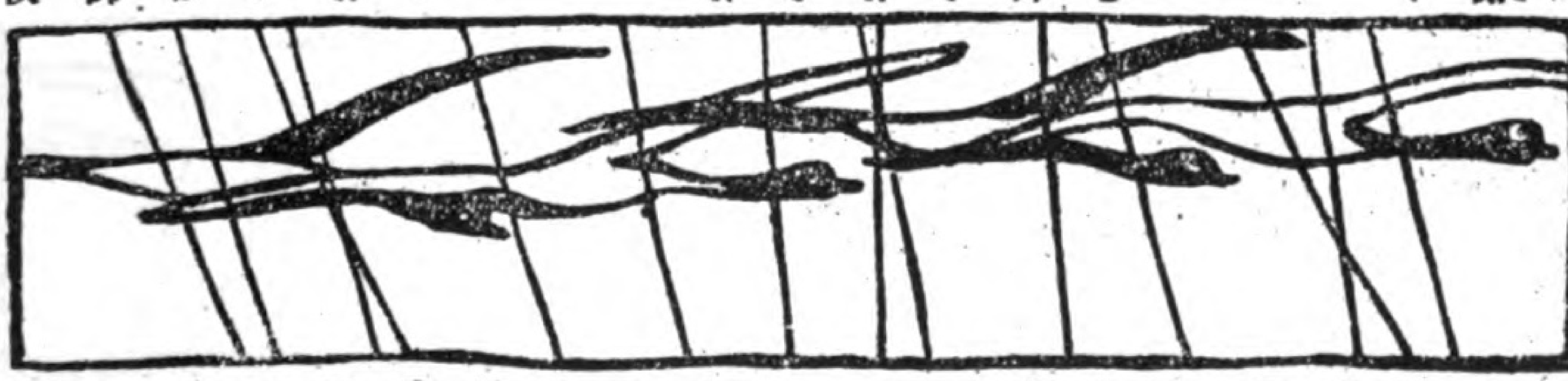
御詞にあまえ早速何かと御願申上御かげにて大にかたづきかへすぐ〲も深き御なさけの程ありがたく御禮申上〱 御宅樣にて御いたみおはし候處にかくまでの思召おそれ入候外なく言葉に盡しかれ申候まづは御禮まで

祭に招く

かれて申上置候 明日は村の祭禮にて神輿の渡御など賑々しく候よし何もさし上候もの御座なく候へ共 晝後より皆々樣御こしのほど待上〱 猶お孃樣には御なじみの御友達もたくさんに候へば御さびしくは入らせらるまじと存上〱間 御かまひなく候へば唯今より 御つかはし下されまじきやよりて車さしあげ候まゝ御都合よろしくば御めし被下度 まづは御案内まで申上候

右返事

明日は御祭の由にて家内まかり出候やう御さた下され皆々ありがたく何よりのたのしみに致居〱 子供唯今より仰のままにさし出し申すべく候へ共 姉事あやにく裁縫の稽古よりいまだ歸申さず候まゝ後ほどこちらよりさしあげ申すべく何から何まで萬事御世話の燒ける事と存候へども 御詞にまかせ御心やすだてにいたし〱 尙明日私共參じ候節御禮申上べく候



茸狩に誘ふ

此頃田舍の親戚の者の噂には近きわたりの山に松茸が澤山でるよしにてことのしらせに去年の茸狩のおもしろさ今に忘れ申さず候間明日は子供なども連れ親族の者の案内にてかの山にゆかんと存じ候間御さそひ申上候 割籠などは親族より用意いたし候故 御さしつかへもなくばわたくし方まで御出かけ待上候

右返事

御親族よりの御案内にて明日は茸狩に御出なされ候とて御誘ひいたゞきいと嬉しく候わたくし事好みの事にて毎年近邊の山にゆき候へども松茸はなく雜茸などとり候のみにさへもおもしろきに松茸出居候はいかばかり嬉しく候らんと想ひやり候御親族より割籠の御用意下され候よしかされ〲嬉しく御禮申上候猶明日は早朝より御伺候間よろしく願上候 御返事までかしこ

紅葉見誘ひ

高尾の紅葉よろしきよしにて明日見にまゐりたくと主人申居候ところ思召いかゞに候や御さそひ申上〱御同意下され

候はゞ御両所様　御同道にて午前九時までに私宅まで御出むき遊ばされたく御辨當などの事はすべて手まへにて用意いたし候まゝ御心配下さるまじく候　御返事此使へ御申聞下されたく待入まいらせ候

右返事

わざ〳〵御さそひ下されありがたく両人とも仰の御刻限までに御うかゞひ申すべく候まゝ　何事も御世話さまよろしく願上まいらせ候　殊に私事は久しぶりのなぐさみにて今より大樂しみ御かげ様にて一年中の保養をいたし候　御事まことに〳〵御うれしくあつく御禮申上まいらせ候まづは御請までめでたくかしこ

歳暮に物を贈る

いよ〳〵押つまり彼是と御多忙に入らせられ候御事と存まいらせ候　此折まことに粗末には候へども御歳暮の御祝として御目にかけまいらせ候皆々様折角御いとひ目出度御年とり遊ばし候やう念じ上まいらせ候かしこ

添へて申上候お嫁様御不たんぎの御頭巾あまり不束には候へ共此程稽古のため編試候まゝさし上候

右返事



仰の通りいよ〳〵おしつまり御もと様にも嘸かし御多用に入らせられ候御事と察上まいらせ候　扨とや年の暮の御いはひとして玉子折御心に懸けさせられ御目出度戴きまいらせ候　こちらよりこそと存候ところに恐入候次第いづれ夕方まかり出御禮申上べく候かしく

出産の祝

なほ〳〵子供へまで存じもよらざる御品いたゞき大よろこびにて早かぶり居申候おかげ様にて松の内の晴着といたし申べくかへす〴〵も御うれしく御禮申上候

承候へば今朝御めでたく入らせられ候よし御母上様はじめ御一門様の御よろこびさこそと推しあげまいらせ候　此品お粗末の至にて御はづかしく候へども御よろこびの御印までにさしだしまいらせ候御二方とも御勇ましく何よりの御事と幾久しく御祝申納候めでたくかしく

婚禮のよろこび

一筆申上候明日は御日柄もよろしく御婚禮御むすび遊ばし候との御事、幾千代かけてかぎりなう鶴龜の末のすゑまでも御間がら御むつまし様の御ことゝ山々御めでたく存上まいらせ候　さては御綿一臺　御肴一折　わざと祝ひのしるしまでに御めにかけ

よし〳〵

新築を祝ふ文

かれて御新築に相成候御殿づくり思ひしよりも早くなり候て明日は御わたましのよしめで度存じ上候まことに御場所柄殊に四方の眺望もいと晴やかにてさぞかしと御察し申上候これは粗品に候へども岸駒の虎の畫軸一幅進上仕候猶近きほど御うかゞひ御新造の御殿拜見いたしたく其節萬づ御物語御上ぐべく候

右返事

新築なり候につき早速御文いたゞき結構の畫幅御惠み下されたがたく直に新座敷の床にかけ候へばいとよく似合長く子孫に傳へて御惠の御厚志忘れまじくとよろこび申候明日は内祝ひとして麁酒壹献さし上度候間御老人樣と御同道にて午後第三時頃より御入下され度・いつもの如く何のまうけもなく候へどもゆる〳〵御話承り度と御出のほど待上候かしこ

病氣見舞

先日より御母樣御病氣のよし存ぜぬ事とて御たづねもいたさず御ゆるし下され度候御容態いかゞさぞ〳〵御心配のほど



察し上候就ては直樣御伺申べきの處よんどころなき用事出來只今より其方へ出向き候まゝ本意なきも御文もて御見舞申上候此菓子御見舞のしるしまでさし上候いづれ近き内に御樣子御伺かた〴〵御見舞に參じ申べく候尙時候不順に候間其上とも御自愛祈上候かしく

留守見舞

此頃は御兩親とも御旅行のよし御わびしき事と存じ上候、御出立後今に何の御便りもあらせられず候や折々御たづね申上べき處私し方もこゝ四五日前より下女親元へ歸り無人に暮し申居候には御無沙汰に打過候此品手製にて何の風味も御座なく候へども御笑ぐさまでに呈しまゐらせ候猶御留守中身にかなひ候事は何なりと仰付らるべく候まづは御見舞まで

弔状

御祖母樣事ひさ〳〵御病氣のところ遂に御丹精のかひもなく御かくれ遊ばし候おもむき驚入り〳〵御愁傷御力おとしの程さぞかしと御さつし申上袂をぬらし申候是非とも今夜は御通夜に參り度候へども子供事二三日熱氣ありてよわり居候まゝ事によりては御不沙汰いたし候哉もはかりがたく御葬送の節は必らず御見送いたしたく候へば御口上にて此ものに御出棺

時刻御申聞のほど願上候　御香典一つゝみ御花一對わざと御佛前へ御そなへ申たく御用まで一筆しめし候

餞別の文

明日は旅立のよし定めて御心せわしく入らせられ候はんと存上まいらせ　わざと御見立申上べき筈に候へども主人のるす中にて出兼候まゝ御無沙汰候段御ゆるし下され度　此品如何とは存じながら御せんべつの御印までに御めにかけまいらせ道中折角御ぶじに渡らせられ候やう神かけて祈上候

近火見舞

今朝がたはどのやうに御おどろき成され候　御事と察しあげ候但し幸に風向よろしく御大難をのがれ候御事まつたく御運のつよき故と御祝申上候さても御方角と承候より直ちに下男一人さしいだし候へども混雑の際さし止められ候とかにてすごく〱歸りまゐり本意ならずおはしまし候、御酒一樽御よろこびまでに御らんに入候おはづかしく候へども御手つだひのかたく〱に御わかち下され候數にもとてめでたくかしく

水見舞

御地方大水のよし新聞にて拜見いたしおどろき入候御宅は如何おはしまし候や一同御噂いたし御案じ申上候　何をがな御見舞にと存候へども外に思付も出で不申候漬物なりとも取あへず二樽だけさしいだし申候　御もやう御ついでの折に御まかせ下され度まづは取急ぎ候まゝ御伺まで



◎夏の雨

田ぐさとりのゆきかへる笠に手をかけ、黒くやけたる顔あらはに雨をといのる賤が夫が今日も野らへのたちばなし、寒暖計は九十度をこえたりげにいふまじと思へども、處せきあつさかな。

ひるすこし下りて雨ぐもは音羽山の頂あたりにあらはれぬ、人皆生きたるこゝちしていそ〱と干物入るゝ目さきに、キラリとあはてゝとび入る程もなく耳をつんざくなるかみの音、續いて落くる雨の音、軒より瀧なす物すごさ心弱きは蚊帳うちかつぎて線香すゑねぶつとなふるとぞ。

のきのつりしのぶ切れて落ち、勢つよく內めがけてつき入る雨に、さわと戸をたつる程と、鳴神の音は間遠なりて、緣の木の間に虹の御橋の現はれて、名殘はとゞろく谷川に、

佛國貴夫人の手紙

蝸　象　子

ダ、セヴィヰエ夫人は、佛蘭西の手紙文學者として却々有名なものである。紀元千六百二十六年に巴里に生れた人で、渠が逝いてからは既う三百年に垂んとしてゐるけれ共、其の一生中に書いた手紙は、厖然たる大册になつて、今でも手紙文の模範と仰がれて、彼國の婦人間には非常に愛翫されてゐるのである。夫人はどうして斯う澤山の手紙を書いたのであるか。之れに答ふるには少しく其の經歷に就て述べる必要がある夫人は誕生後間もなく父を失ひ又六歳の時に母を失ふた爲に、大きくなる迄伯父の牧師に引取られて育てられた婦人である。それ故教育を受けるには餘程便宜な境遇であつた。そして十八歳の春に嫁してダ、セヴィヰエ侯爵の夫人となつたが、其の夫なる人は餘程身の修らぬ人で、常に遊蕩三昧に日を暮すので、夫婦の間柄は餘り面白くなかつた樣である、當時人は此の兩人の間柄を形容して「夫人は夫を愛して敬はず、夫は夫人を敬つて愛せず」と言つて居たとか云ふが、之を今日の言葉で言へば或は所謂趣味が一致しなかつたのであるかも知れない。從つて夫人の愛は擧げて其の子に向つて注がれた。さうしてゐると一千六百五十一年に夫は決鬪を行つて殺されて了つたから夫人は爾來其の子の一男一女を養育して、其の立身を唯一の樂みとして日を送つて居たが、其の娘は遂に宮廷に奉仕する迄に立派な婦人となつた。然るに此の娘は、一千六百六十九年にダ、グリヤアン伯爵に嫁ぎ、結婚後三年目には夫の伯爵が地方の知事になり、それに從ひて巴里を去つた爲に、ダ、セヴィヰエ夫人は甚だ淋しい身の上となつた。前に言つた大册の手紙文と云ふのは、即ち渠が娘に別れてより二十五年の間、娘と手紙を往復して僅に自ら慰めて居た其の手紙が大部分を占めてゐるのである。之を讀むと夫人の生活の有樣や心情、氣質などが却々面白く現はれてゐる原文は非常に名文だから到底眞似は能きないが、一寸斯う言つた風である。無論之れは直譯的の極めて拙い所を御目にかけるのだと云ふ事を御承知願ひたい。其の娘が自分の身上の事を申送つた手紙に對する返事の一節に斯う云ふ事を言つて居る。

お前の自分の事に就ての考は大分間違つてゐるやうです。お前は、人は初めは自分を愛して呉れるけれども、さて自分を知つてくると段々遠かつて了つて、誰れも愛して呉れる者がない、と言ふけれども、實際はそれとは反對でせうね。私の見てゐる所では却つて初めの間は人はお前を大變怖いものゝ樣に思つて居りま

す、お前は何だか人を輕蔑する樣な顔付をしてゐるものですから、お前の友達になるのは一寸では六づかしいとでも思つてゐるのでせうよ、けれども暫らく交際つて見てお前の心を知つてくると、誰れでもお前の心意氣に感じて、遂には全く崇める樣になります。もし誰れかゞお前を疎んずる樣に見えるならば、それは却つてお前を愛し、又成るだけお前に愛せられやうと思ふからの事で、決してお前の考へてゐる樣なのではありません。誰れだつたか恁んな事を言ひましたよ。お前と親しくするのは實は望む所だけれども、少しでも缺點を見付けられると、永く交際して貰ふ事が能きぬから、殊更にたまに訪問して日常の挨拶を述べる位に止めて置くのだと。ですから、さう心配しなくてもいゝでせう云々



素より夫人の手紙は初めから手紙文學を起さうとか、書簡集を出版さうとか云ふ樣な積りで書いたものではない。自分の娘に與へる爲に筆を執つたものであるから、世間に見せる考などは勿論あつたものではない。たゞ母として思つた儘感じた儘を語り出したに過ぎないのである。而かも其の言ふ所は頗る流暢で、優美で、文はスラ〳〵として水の流れる樣に行つてゐる。故らに飾らうとした跡もなく、知らずして名文を成して居る。そして吾々が手紙を書く樣に少しも材料に困ると云ふ樣な所が見えない。
左に尚ほ一二の手紙を譯出して夫人の手紙の書振を諸君に紹介する。

娘の良人ダ、アリ
ヰナン伯に送りし手紙

實際私はいゝ娘を貴下に差上げたではありませんか。あの娘よりも操の正しい者はほんとに何處にもありませんよ。貴下を人一倍大切にもしますし、又心から敬つても居り、そして一生貴下と苦樂を倶にする事を願つて居ります、全く忠實で御座いますよ。自分の子を恁んなに褒めるのは、何だか可笑しう御座いますが、私はたゞ娘の素行を見て人々が感心なさるから、自分も感心する迄のことで、他の人々よりも能く娘を見て居るから、世評に就ての感じが、或は强いかも知れませぬが、決して親だから褒めると云ふのではありません。素より恁んなに讃辭を並べましても、私は娘は總ての點が好いとは申しません。けれ共彼れに對する世間の評判は非常に宜いと云ふ事と、又世間が彼れを褒めるのは唯褒めるのではないと云ふ事丈けは御承知を願ひます。世間の人の目は却々爭はれないものだと云ふのが私の持論です、そして娘は世間の評判に就て定めし滿足してゐる事と思ひます。

娘は貴下の御健康に就て大層心配して居りましたが今度御全快遊されたと云ふ事を聞いて非常に喜んで居ります。と共に私も貴下に對し、又娘に對する愛の爲に、深く御祝ひ申します。若し貴下に此の上にまた何か御不快な事が御有りなさるとすれば、それは娘が只今お產の爲に私の許に來てゐると云ふ事でせうが、實は彼女も此處に止められてゐる事に就て毎日ブツ〳〵小言を言つて居ります。そして折々眞面目な顏をして貴下と離れてゐるのは實際辛ひ思ひだと申すんで御座いますよ。今は私が娘を貴下と二百里も引離して置いて獨りで樂んで居る樣に思し召すかも知れませんが、決して左樣ぢやありません。やがて娘が分娩したら貴下は必ず今の私の處置を嬉しく思はれるに定まつて居ます。產後娘の身體を元の通りに復へすと云ふ事も却々世話が焼けますし、又娘の評判の爲にも、私の側に置いて慣れた生活をさせて置くのが最も安全で御座います。そしてお化粧をして彼方此方歩き廻らうとしても左樣なる迄には分娩後確に一ヶ年はかゝります。それ程迄に今は柔順しくなつて居りますから、どうぞ

御安心下さいまし、私の言ふ事が實際である事は、此家に居られるグリヤアン家の人々は皆證明致します。只今私は近き將來に貴下の御希望に應ずる結果を見る事ができると思ふて終日喜んで暮して居ります。尚ほ娘の權利を侵してはならぬと思ひますから、彼女の消息は茲に申上げません。

巴里を去りし
娘に送りし手紙

お前が巴里を去つてからは、私はほんとに淋しい身の上になりました。今はお前の手紙の來るのを唯一の樂しみにして待つてゐるけれども、お前を長い間側に置いて樂しい月日を送つて居た事を考へると、過ぎし日が懐かしくて、時々泣く樣な事がありますよ。それにつけても一寸申述べたい事があります。世間には、私があまりお前を可愛がり過ぎたからお前は却つて私を五月蝿がつて居たと言ふ人もあるし、或は私がお前の性質を知らうとして色々な事をして見たので、お前は非常に其れを厭ふて居たと云ふ人もあるが、お前はほんとにそんなに思ふて居つたでせうか。それは何方でもいゝけれ共、兎も角も私は決してお前に其んな苦みをさせる積りではなかつたのですから、どうか惡しからず思つて下さい



尤も私は何かにつけて自分の性癖を出したかも知れません、それは白狀します。又私は實際お前が可愛くてしようが無かつたものですから、能きる丈け自分の側に置いて見て居るのを樂しみにして居りましたが、其樣云ふ事がお前の重荷にならうとは夢にも思ひませんでしたよ。兎に角私はお前を非常に賴りにして居たので、今度お前に居なくなられた爲にどれ丈け辛ひ思ひをしてゐるか知れません。神樣はほんとに酷い事をなさるが、之れも御試練の爲でせうね。お前の言ふ樣だと、恁う云ふ場合に心を確と保つて行くには世に珍らしい操行の人でなければならぬと云ふ事ですが、成程それに違ひはありません。私はどうかして之を實行します。

私は此頃友達と往復してる間にお前の話が出ると實に嬉しくて堪らぬけれ共、又何だか妙な感じがして知らず識らず涙が溢れるので、どうか人の居ない處で自由に泣いて見たいと云ふ樣な氣がしますよ。

時に私は恁う云ふ事を耳にしました。伯爵はエキスへ行く途中で賭博をして居られたとか云ふ話ですが、それを聞いて私は身の毛がよだつ樣な思ひをしましたよ。マアあきれた人ですね。よもや其んな事はあるまいと思ふけれ共、尙ほお前は十分氣を附けなければなりませんよ。伯爵はお前を可愛がつて居られるから、お前の言ふ事ならば乾度お聽きになるでせうから。

ポリヌは達者でせうね。お前が何にも言つて寄越さないのを見ると多分無事で居るのでせう。よく可愛がつてお遣りよ。

お前の變化ある樹木に就ての言葉は、私は全く其樣だと思ひます。變化のない樹木は何となく淋しい樣な氣がするもので、年中翠をこめて變化の無いよりも時時新たな綠色を見せて變化のある方が何れ丈け好いか知れません。コルビチルリは變化なくして完全なものは唯神のみで、他の變化なきものは總て不完全のものであるとか言つて居ります。左樣なら。……扨て何時お前に逢ふ事が能きるやら、何しろ手紙を寄越して下さい。



手紙の小説

馬場孤蝶

上

何か手紙に關することを書いて呉れといふ御註文ではあるが、小生は、手紙を書くことが下手で、從つて嫌で、何處へ手紙を遣る場合でも、唯、拜啓とか、拜復とか書いた後へ持つて行つて、ブッキラボウに用事ばかりを手短に書くといふ、まことに味氣も素氣も無い行り方であるのだから、手紙といふものは、何う書いたら宜からうとか、何ういふやうな手紙が趣味があるとかいふやうな原則若くは教訓に類することは、到底書き得無い。で、致方が無いから、例の通り、外國の小説のうちの手紙で出來て居る小説のお話で御免を蒙むることに爲る。

始終外國のことばかり云ふ男だが、一體それでも、日本人の氣かと問かれる方があるかも知れぬが、小生自身の方は、日本人でも、で無くつても、何方でも構は無いけれども、日本で生れて、兩親とも日本人であるのだから、日本人といふことに爲つて居る譯であるだから、諸君の御都合次第で、外國人になつても宜し日本人で居ても、何方でも宜いのであるが、考へて見ると、小生が此際外國人だと自分から言つては、諸君の方で心持を惡るくせらるゝことだと思ふので、こゝでは、確に日本人だと申しあげて置く。が、併し、さうなると、少しは日本のことも知つて居無いと工合の惡るいことになる。其處で止を得ず、友人のことを擔ぎ出して、責を塞さぐ。

島崎藤村君、森田草平君、與謝野寛君、平田禿木君などは、手紙の極く面白いのを書かれるが、就中、森田君の手紙は、機智の結塊であり。平田君の手紙は、

何時も、渾然たる名文である。所で、故人では、川上眉山君も手紙が旨かつたが、齋藤緑雨君のは、何れも此れも、端書に至るまで、皆、細心の作品であつた。君は、例の機智が面白いことを思ひ付くと、その警句を中心にして、友に用事の手紙を寄せるといふやうな處もあつたのであるから、同じ警句をそれ〴〵異つた用事の間へ書きこんだ手紙を貰らつた人が同時に幾人もあるかも知れぬ。こゝに一例を擧げる。これは、小生が齋藤君から「みだれ箱」を貰らつたので、その禮狀のなかに「高著御恵投云々」と書き出した末に「みだれ箱」のなかの「靑眼白頭」にある「案ずるに筆は一本なり箸は二本なり衆寡敵せずといふべし」といふのを引いて「君の筆は強いから、箸二本と健闘を續け得られようが、僕の筆の如きは極く弱いから、箸の爲めに全く征服されて了つて居る」と書いて遣つた返書である。

「高著」御禮にて痛入り候御承知の通り首の廻らぬ身は筆も廻らず箸も廻らず斯うなると目もあまり廻らぬものに候御笑下さるべく候

御依囑の件は小生の「箱」の景氣を見定めて打出さんと存居り候わけに候いつぞや申上候如く小生方迄御送附置下されたく存候

秋ゝ（秋ポッと御よみの事）子は先日小生よりたよりいたし候處其返事に近來は農業熱心云々依て小生はこれを獨悦的農夫と稱へて洪水見舞のハガキを出し置申候人の○には喙を容る可らず無論傍觀の方御得策と存候すてゝおくのも不親切との仰は御尤には候へども先方から見ればそれが親切かも知れず候

昨夜フト例の彌次馬歌をやり申候

　笛の音のすみれの岡の薄月夜
　　誰が子籠を白き駒やる

外に二つ澁谷大人へ點を乞ひに遣はし候コンナ事を申居り候うちに晦日は容赦なく參り候餘は御目にかかりてと申すものゝ着のみ着たまゝ外へは當分出られず候

返す〴〵も岩崎を伯父さんに持たざる事七生迄の恨

に候ればつかりに市長にもなれず候

二十六日

緑雨

これは三十六年五月二十六日の手紙である。次に、手紙の面白かつたのは、故樋口一葉君であつた。これも一例を示めさう。

花にばかりと存じたるに雪にも御うかれ心とや春野の蝶はお心多きものよと驚かれ〳〵天知さま秋骨さまわけては禿木さま御額の皺が見ゆるやうにてをかしく候中にも御禮申上げたきは柳の糸のむすぼれ解けぬかとの御疑 女子に片戀はなきものと仰せられし君様の御心



にさてはそれ程なさけあるものと御覧じつるか眞實眞にお嬉しく候言ひ解かん折はおのづから候はんなみの濡衣と申さんも古ければ

ひたすらにいとひはてじ名取川
無き名も戀のうちにざりける

野暮は禁物とや有り難く御受申しあげ置候さてそのあたりの天機ども少しは御もらし相成るべき筈人をのろはゝとやら申候御うかれ心のもと末それこそはうかゞひどころに御座候

流れの身でも柳は柳のあたり思なしかおふみさまの

面影ちらつき申候近きに是非〳〵御夢がたり御聞かせ下され度候物つゝみは重罪に當る由さる法官の話に御座候

三月十七日（二十八年）　夏　子

先づ、大抵これで、小生が日本人たることは、諸君の御滿足の爲に、可成に證明し得られたと極めて置て以下は、いよ〳〵外國小說のお話に取り掛かる。

下

全篇手紙ばかりで出來て居る長篇小說では、ドストエフスキイの『貧人』と云ふのがある。これは、ド氏の處女作で、この作のお蔭で、當時文壇の北斗とも云ふべき人であつた、批評家ビエリンスキイの知遇を得るに至つたといふ有名な作品である。これは、四十歲を餘程越した或官省の屬官の獨身な男と、その遠緣の從妹に當るといふ二十歲そこ〳〵位の若い女——孤兒で、散々苦勞を爲拔いた上句に、小さい間を借りて賃仕事を爲て暮らして居るといふ女との間に、遣り取りされた手紙で以つて、兩人の性格、境遇、事件の發展が明になるやうに爲てある。男は、餘り才氣は無く、長い間、何の思ひ出も無い淋しい生活を爲て來たのであるが、フト今の若い女に邂逅つてからは、滿目の砂地の上で美くしい花を見つけたやうな氣が爲て、次第にその方へ引きつけられはするもの〻、マサカ好い齡を爲て、戀だとは言ひ得やうは無く、唯親族の懷かしさからだと云つて、いろ〳〵世話も爲、訪ひ尋もするのであつたが、若い女の氣を慰めやうと思ふのであるから、隨分ともに無駄な物なども買つて遣ることもあるので、金の工面も惡るくはなるし、打明けられぬ戀の煩悶と云ふのもあるので、ツイ酒を飮み出す。それで、ます〳〵懷の都合は惡るくなつて、下宿屋も部室もグッと下等な所へ移つて了まう。手紙は、そこから出すのが一番はじめになつて居て、次を追つて、幾つもの手紙のなかで、その下宿屋が居る不幸なる貧人の生活をド氏得意の筆で描寫してある。女は元より、男の胸のうちに隱されて居る戀愛に心づかうやうは無く何時までもその男の世話に爲つて居る譯には行かぬと

思つたので、幸ひ好い嫁入り先があると云ふので、その方へ行つたのであるが、所がそれが飛んだ間違で、その夫になつた男は甚い惡るい奴で、とう〳〵その男に伴れられて、何處へか行つて了うことを書いた女の手紙で、この作は終はつて居る。全篇悉く弱きもの、落魄せるものに對する憐愍の情を以て書いた作品であつて、讀んで行くうちには、時に痛いやうな涙が眼に浮ぶことが少く無い。英譯は、『プーア、フオーク』といふので、千八百九十四年の、倫敦のジオン、レエンとボストンのロバアツ、ブラザアスとの共版である。代價は確か一圓七拾五錢だと思ふ。



所で、斯う云ふ手紙ばかりで書く作品が自然であらうか何うかと云ふ疑問は、必らず讀者の胸中に起ることゝ思はれるが、之れは勿論不自然である。双方一向顏を合はさぬ譯では無いのであるから、當人同士の間では、手紙に書かずとも宜いことが澤山あるのであるが、手紙だけを讀者に見せて全體のことを解からせやうとするのは、實際は書かれぬ手紙を拵しらへて出すより外に爲方は無い。この點では何うしても不自然だと云ふ評は免がれ得られ無い、けれども當人の考を漏なく云はせて見るのには、手紙だと其處が自由に行くのである。要するに、藝術上の技巧では、虛實の間

の調和が必要であるのであるから根本に於て人生の眞に觸れゝば、他の些末の點の不自然は、讀者は忘れて讀み終るものである。ド氏の『貧人』をわれ〳〵が讀む際のは、不自然と云ふ感は殆ど起ら無い。『貧人』の組立が不自然だとすれば、ド氏がさういふ不自然な技巧に訴へて、尚且十分自然な感興を讀者の胸裡に喚び起すその藝術的技倆にわれ〳〵はます〳〵敬服せざるを得まいでは無いか。

それから、次の、幾つもの別々の手紙を集めたもの即ち、一つの手紙で一篇づゝの短篇小説を書いて居るのが、佛國現代作家マルセル、プレボウの『女の手紙』『續 女の手紙』『續々 女の手紙』の三卷である。作家プレボウは、最も深く女性の心理に通じた人だと聞えて居るが、この三卷の『女の手紙』には、女のさまざまな戀の姿を寫し、輕妙なるあり、沈痛なるあり、詩趣豐かなるあり、情味深きあり、笑趣に富めるあり縱横に到らざる所無き才筆を揮るつたものである。就中『新しき春』の沈痛なる『レ、リヲ』の哀切なるは推稱に餘あるのではあるが、こゝには『女の手紙』のなかゝら先づ『敎示』の一篇を擧げる。

これは、伯爵某から結婚の申込を受けた何がしの令孃が、その伯爵に馴染める女優の許へ、伯爵の性行を問ひ合はせた手紙と、その女優の返事とで出來て居る。令孃からは、これ〳〵の伯爵から妻にならぬかといふ申込を受けたが、決答を與へるのに先だつて、是非確めて置き度いことがあるので、常々、伯爵の話から推して、伯爵の性行に善く通じて居らるゝ筈に思はるゝ貴孃に、甚だ唐突ではあるが折入つて伺ふ。第一の問題は、伯爵は吝嗇な人では無いか、何うか、といふにある。自分の友達で、夫のシワイ爲に苦しんで居る人は少く無いのであるから、先づこの點を確め度い。第二には、伯爵は嫉妬深い人では無いか、何うか。元より結婚後、自分に情夫でも出來た場合だつたら、爲方が無いが、左樣な事の一切有りもせぬのに、矢鱈にヤキ立てられては堪まつたものではあるまいから、これを伺つて置き度い。第三には、伯爵は女に對して情

合の深い人であるや否や。といふのを確め度い。と云ふ風な手紙を遣る。すると、女優からは、私のやうな賤しい家業の者にお手紙を下されたのはまことに難有いことで、厚く御禮を申し上げるが、併し、お尋ねのことは、私どもにお聞になつた所で決して解かることでは無い。全く見當違のお尋ねである。私どもとお客さんとの關係は一種全く別なものであつて、お客が私どもには何うであると云つて、それを以つて、そのお客のお素人方に對する場合を律し



やうとするのは、まことに飛んだ筋違である。お客が私どもに對する場合は、金錢が第一の問題である。即ち、何某はこれ〳〵の金圓を何ケ月間出すに依り何娘は、何某氏の意に何ケ月間應じて居やうと云ふ單なる契約に過ぎ無い。されば、若し金錢が出無くなれば、その契約は破毀されたもので、その日から、双方全くの他人となる譯であるであつて見れば、私どもに對してお客が何れ程氣前が善くつても、奧樣に對して、氣前が同じやうに善いか何うか

解からぬばかしで無く、私どもには、隨分氣前をお見せになるお客さまが、反つて、奥樣にはお話にならぬ程シワイことは、得て世間には有り勝なことである。で、私のお答は一向お當になさるべきものでは無いが私に對しては、伯爵は氣前を善くしてくださるのは事實である。第二のお問に就ても、第一のお尋ねと同じで、誰が、私どもを生娘だと思つて、おかゝり合ひなさる方があらうぞ。私どものやうな者を何とか思し召してくださる方は、何うせ浮世稼業の振り合は萬々御承知の上である。だから、お客は私どもに對しておヤキなさらぬのが正道で、おヤキなさる方が間違。伯爵が、私に對してはおヤキなさらぬと云つた所で、貴孃が奥樣にお爲りなされた曉に何うだかと云ふことは、何うにも推しやうの無いことでは無いか。それから、第三の點も同じく、私に對して伯爵が何うであると申した所で、それは伯爵對貴孃の場合には、一向當て箝まらぬ譯である。で、お問ひ合はせのことは、皆、見當違の所へ、お問ひ合はせになつたのであるから、私のお答は、何のお役にも立た無い譯ではあるが、若し貴孃が、手つ取り早く、伯爵と結婚したら何うだらうかとお尋ねであつたら、私は、これには直ぐ確なお答が出來る。まことに結構な旦那樣だ、是非結婚遊ばせと申しあげる。貴孃の仰つしやるやうなソツの無い旦那樣と云ふのは、何時まで探がしても、目つかりやうは無い。そんな人は、土臺世の中には無いからであるといふ返書を出して居る。

今一つ、『軍曹』といふのを擧げる。これも又女優の手紙である。これは『繽紛女の手紙』のなかにあると覺えて居る。その大略は次の如くである。

度々お手紙を頂いたが、この前のお手紙では、何月何日にこれ〳〵の場所に胸へ赤い花を着けて坐つて居るから見て呉れと仰しやつてあつたので、その日には、舞臺から、その場所の方を見ると、若い奇麗な軍曹さんが胸に赤い花を着けてお居でゝあつた。それがお手紙の主の貴下だらうとは、直ぐに思つたが、餘所へ氣を取られるのは、舞臺の上では禁物であるので、

それッ切り、貴下の方は見ずに藝を終はつた。お手紙の趣では、貴下は、私の藝や姿が甚くお氣に入つたので、是非宅へ出入りを爲るやうな許を得度い、決して無理なことなどは云はぬから、時時、一時間でも宜いから、私の傍に居ることの許を得度いとおつしやるのであるが、一體、斯う云ふ類の手紙を方々から頂くことは、私には、少許も珍づらしいことでは無いから、その都度、一々お返事は爲ぬことに爲て居るのであるが、貴下のだけは、全く本氣のお手紙だと思ふので、かうお返事をあげる譯である。しかも、私は、本當のことを書いてお返事を爲る。全體、私どもに、くださるなら、此樣なお手紙は何の役にも立た無いものだ。私どもへのお手紙なら、此樣な長文句は、全く餘計である。先づ、なかに千法の札の三枚も入れてあれば、それが、文句より何より善く口を听く。手紙の文言はホンの二三行、何某は、某孃と共に眠らんことを求むと云ふので澤山である。私どもには、眞正の戀などは全く厄介物だ。その上に、貴下だから申し上げるが、私は、舞臺で御覧になるやうな若い女では無い。貴下とは、丁度、母子位齡が違つて居る。私のやうな



ものゝ相手には、ズッと齢を加つた銀行家さんか何かが丁度宜いのであつて、到底、若い方の熱烈な本氣な戀のお相手は出來無い。私は、前には、確に奇麗だつたといふ自覺があるから、今は醜くなつたと云つた所で、少しも殘念では無いから、云ふが、私は、最早醜くなつて居る。貴下にこの醜い姿を見られるのは、嫌なことであるし、而も、貴下のお心次第に私がなつた後で、私の顏の皺の幾筋かに、貴下がお氣が付くのであつたら、尚更私には堪へられ無いことである。だから、宅へお出のことは、おことはり申して置く。が、お手紙には、若し私が貴下のお求に應じ無ければ、私が飛でも無い迷惑を爲るやうなことが出來るかも知れぬと云ふやうなことが書いてあるが、これは、貴下が、私に刎ね付けられゝば、その面當に自殺でも爲ると云ふ意味らしく思はるゝが、そんな短氣な馬鹿氣たことは爲るものでは無い。私は、こゝに封じ込んで、私の十五年程前の寫眞を送くつてあげる。これは私は姿が、まだ私の戀人の眼にさへ美くしいと見えた時分に取つた寫眞である。だから、貴下は、これを見て、舞臺で見るあの女優は、斯う云ふ素顏の女だと思つて居てくださ。れば宜いのである。美くしい〳〵と思つて居たに傍へ寄つて見れば斯樣な女かと失望なさるより、この方が、餘程宜いでは無いか。一體なら、人氣稼業の私が、見ず知らずの貴下に、此樣な打明けたことは云ふべき筈では無いのであるが、實は、私には、貴下と丁度同じ年頃な息子があつて、それが丁度貴下のやうに遠方の田舍の聯隊に入いつて居るので、貴下のお手紙を讀むと直ぐ、自分の息子も、何うかした動機で、田舍廻りの女優か何かに打ち込んで、協はぬ戀にヒョンなことにでもなりはせぬかと、心配で堪まら無くなつたので、貴下のお手紙には、まるで母の心でお返事を爲た積で居る。さア、おッ母さんの接吻を受けるやうに、貴下の頬をお出しなさい。

と、云ふ風で、この手紙は終はつて居る。尚、短篇では、ツウルゲエチフの「消息」とか、ドデエの「美術家の妻」のなかにある「女の文殼」「暴行」とかいふのが面白い。

但し、並の小說のなかへ、篇中の人物の手紙を挾むことは、隨分例の多いことであるが、これは、さう云ふ人物の心理解剖などの手段としては、都合の宜いものであるし、ある場合には、いかにも自然な印象を讀者に與へることの出來るものゝやうに思はれる。



手紙の書き方について

三宅花圃

私はすべて何事によらず規則を設けるといふ事が嫌いの方で御座いまして、從つて手紙の書き方などに就ても是非何うなければならないと申すやうな考はないので御座いますが、それでも氣づいた事を二つ三つ御話して見ることにいたしませう。

○手紙と文章

手紙はつまり口でいふべき事を紙にうつして先方へ通ずるまでの事で御座いますから、其心持でわかりやすく、順序正しくさへ書けば、それで立派なものが出來る譯で御座います。が斯う一口に申せば譯は御座いませんやうなものゝさて手紙を巧く書くといふ人は至つて少いもので御座います、書簡文範などにもいろいろ御座いますが、一葉の通俗書簡文などはさすがによく出來て居ります。申すまでもなく文章の上手な人には自ら手紙も面白く書けるので御座いますが、一葉のなどには和歌のお蔭が餘程あると思つて居ります。申せば我が田に水を引くやうではありますけれども、實際和歌の心得ある人の手紙は語簡でも意味が深くいひ廻しなだらかで味が多う御座います。口語體の手紙も巧みに書きますと情が見えてよいもので御座いますけれど、何うも冗漫に流れ易いもので御座います。そこへ參りますと候文の方は餘程簡單で意を盡されるので御座います。それに口語文は親しげにはなりますけれども、何となく品がない感じがいたしますもので、長上への手紙や、表向の書簡などには何うも似合はしくないやうに思はれます。

○手紙のはじめとをはり

手紙の書き起しはすべてわざとらしからず何となくあり度いと思ひます、山陽の手紙に（誰れへ宛てたものであつたかは忘れましたが）さても／＼御無沙汰いたし候と書き出してあつたのを記憶いたして居りますが、手紙の書き出しは斯ういふ風にあり度いと申すので御座います。久しく御無沙汰をしたといふ心持が、いかにも自然によくあらはれて居るでは御座いませんか。それを御無沙汰の御詫をするとて。種々事情をとり並べては、長々と辯解をいふて來る人がありますがあんなのは却つてわざとらしくて嬉しくないもので御座います。前書に時候の挨拶を述べ、景色などをうつし出でることも極自然にあり度いもので御座います。まづ今日此頃私共から上げる手紙などならば、軒の櫻も散りはてゝ躑躅色濃く咲きいで候とか何とか有りの儘をうつしいでゝこそ、先方でも成程あゝだらう斯うだらうと、そゞろ實景がしのばれて懐しく思はれるといふものです。なほ手紙の終りにたゞ月日を記すばかりではなく、春雨ふる夜とか、雲なくあした、とか其折の實景實狀を書き添へますことは、まことに床しく好ましいもので御座います。

○なほ／＼書のこと

なほ／＼書、返し書と申す事も殊更らしくてはいけませんけれども、あつて惡くないもので御座います。本文に御身御大切にとありましても、またかへす／＼御養生遊しなどゝありますと、いかにも念が入つたやうで、嬉しい感じがいたします。昔はかへし書といふものは必ず書かねばならぬもの〻やうにして居りましたもので、今日でも徳川家などの老女でもつとめて居る人になりますと、なほ／＼書を必ずと聞書にいたしまして御終にいもとゝめて御座います、一體このいもといふことは進物などにもよく書かれるので御座いますがこれは、何ういふ意味であるかを御存知ない方が多いやうですから、一寸それに就いて御話いたして置きませう。これは以上といふことなので御座います。私しがまだ幼い時分和文の先生にこの意味を伺ひました

ところ、それは芋のやうなつまらぬものといふ意味なのだと教へて頂いた事が御座いますが、よく調べて見ますと確に以上といふ事で御座います、つまり進物の目錄に一何々、一何々と認めて以上と書く處から來たもので御座います。狀袋の封じ目に〆と書くのも、しめるといふ意味だといふ人がありますが、實は封といふ字の極略したものらしう御座います。昔の人の書いたのを見ますと、皆〆といふ風で、成程封の略字だらうと頷かれます。

○假名違ひの滑稽

女の手紙に難有とか可申とか被存とか漢文がゝつた書き方をするのをやかましくいふ人もあるやうですが私は遣ひなれて居るものだからかまはないと思ひます。しかし不取敢を不敢取と書くが如きはもとより好ましくありません。氣をつけてほしいのは假名を違はぬやうにとの事で御座います。假名が違つた爲めに種種の間違や滑稽を生ずるとは珍らしくありません。どうぞをどふぞと書く人は隨分多う御座いますが、恰度私の父が佛蘭西に居りました頃、さる外交官の夫人から手紙が參りまして、それに「御懷しさに堪へかね候につけても果なき身を口惜しう存候とふぞ〳〵……」とありましたので、飛ぶのかと思つて大笑ひをした事があると申ます。もし正しくどうぞとさへ書いてあれば、假令濁が違ひましたとても直ぐ何うぞと讀めるのですけれど、ふとなつて居ります上に前に果といふ字などがありますから、成程飛ぶぞ〳〵かと思はれるので御座います。それから候へどもを候得共と書くことは殆と普通のやうになつて居りますけれども、これらも正しくあり度いもので御座います。

○手紙を美しく書く法

手紙の字はもとより美しくあり度う御座います。字が美しければ自然人柄がゆかしいやうに推しはかられ文句も一層ひき立つもので御座います、尤も字の上手下手は天性にもよる事ですけれど、それでも習へば一

通りは誰れにでも書けるもので御座います。昔の婦人は學問といへば手習を第一とした丈けありまして字が上手で手紙もなか／＼見事で御座いますが、近頃は隨分物の出來る方に字のあまりお上手でないのがありまして、心おとりのせられる事が御座います。それもまた謹んで丈けも書けばよろしいのですけれど、亂筆で書きなぐるといふ風なのは、實に好ましく御座いません。手紙といふものは字がさまで下手ではなくとも墨つき字くばりなどの加減によりましては隨分見ばえのするもので御座います。天地前後のあきなどは普通でよろしう御座いますが、行の上に字が並ばないやうに即ち初めの行が字で初まつて居るならば次の行は假名で初めるといふ風に氣をつけることは必要で御座います。また一行おきに細目にかくやうにいたせば、假令行の首に字が揃つてもさまで見難くならないものですが、これらもすべて自然でなければいけませぬ。

○手紙のまき方

終りに手紙の卷き方を首の方からする人と終りの方から卷く人とありますが、昔は封筒をつかひませんでしたから首の方から卷いて上に名を出す必要があつたのです。私共は慣習で今でも矢張り首から卷いて居りますが、封筒に入れて宛名を上に記しますには、必ずしもそれには及ばない事で御座います。却つて終の方から卷きました方が見る順もよくて便利な譯で御座います。見る方が便利と申せば葉書で御座いますが、自方の名前は成るべく本文即ち裏の方へ書くやうにすると宜しう御座います。それは案内狀の返事などであれば猶のことでありますが、澤山の葉書を見る時表を返さずに、本文から續いて其人の名がわかるといふ事は少からず手數が省けるもので御座います。

いたづらによもぎが露と身をなして
消なば後の名こそ惜けれ
慈鎮和尚



葉ざくら

清見潟にて　侶松女史

何か通信せよとの申越にて候へ共、近頃感興多き問題にも接し不申、尤も、過日一寸所要ありて上京致し候へ共、單純なる田園生活に慣れたるものが急に複雜なる社交界に入りては、恰も幽冥界より、現實界に至りたるやのおもひ有之、其狀況の如何にも懸隔せるに驚ろきまごつくのみにて、早々立ちかへり、何等御報知可申上程の事も無之まゝ、已を得ず、近來友人知己よし集りまし、自分がいさゝか興味を覺え候ものを御目にかけ可申、これにて、今度はおゆるし下され度候。…………………」

その一　新婚者より

花の盛りもいつしか過ぎ去りて、世は葉ざくらの○○○。きのふ今日、如何御暮し被遊候や、私共事、此度療養かたがた、新婚旅行を企て、過日來扇が浦かなめ館に宿り居り、かりそめの草枕に、樂しき夢路をたどり居り候、ちと御來遊ありては如何。

薄墨に、かく玉章と、見し雁に
　扇が浦の、たよりつてばや。
春雨と、ねやにきゝしは、松風と
　濤と語らふ、聲にぞありける。
如何にまた、亂れよとてか、蜑の子が
　けづらぬ髮に、春風ぞふく。

御一笑被下度候かしこ」

新婚──旅行にもまして、如何に興多くおはしますらむと、おもひやるだにゆかしくそんじ上候。

その二　新主人

過日やう〳〵新宅へ引移り申候、御上京の節は、何

時にても御宿可仕候。

　世の塵を、よそに拂ひて、行末の
　　千代をこめたる、宿の松風。

スキートホームは甘きか苦きか、試に、御想像御批判下され度候。匆々。

　千代かけて幸多かれとのみ切に〳〵祈り上まゐらせ候。

その三　夢の人

……私は、三四日以來、三十九度以上の熱で、終日大うなり、併し、今日は少しよろしく候まゝ、寢言を書きつけて、御目にかけます。

○み空の星に憧るゝ。
花も遂には塵にかへる。
不滅の光明憬きながら。
人も遂には死の國にゆく」

○露に涙に惱む身に。
　永劫の休みを祈るとも。
　花や命や脆くして。
　　あゝ行く春の恨み盡きじな」

○熱ゆゑに、見る幻の、惱みには、
　夢も亂れて、春暮れんとす。

○人知れず、秘めし戀故、ゆめにのみ、
　散ればかつ咲く、まぼろしの花。」

いかに、空想の涙を持つ病詩人の幸なる事よ！……………そして、今度は少し、不風流なのも御目にかけませうか。

その四　笑ひ子

淸見潟の浪人様にも、次第に取る年は爭はれぬものと見え、此の間は、二度までも、同じゑはがきを御遣しにて、一同大笑ひ致し候。かくぼけ果てゝ世にながらへ候らはん事如何にも笑止の至り、極樂にても、もはや、蓮の半座に黴の生じや致し候はむ、一日も早く御出立ありては如何。ナニ、さう易々と御淨土へは參られませんテ？、そこがそれ、易行の御安心の御功德ではありませんか。……御申越の物は、此世御滯在中、必ず御送り可申上候まゝ、御安心あり度候。

例の如く、大に近來はぼけまして御手數さま！。

その五　ゆり郎

此頃は、お惡いのですツてね、御食慾が減つたとは、何しろ御心細い事です。變り易い氣候ですから、御用心遊ばせ。……私の家では、一昨日、○○中將が居らしやつた時、お靴をおどろさんがとつて行つたいとふ騷動、交番に云つてやつたら、巡査は當時の事情よりも、靴の價値ばかり考へて居て、なか／＼ゆつたりしたもの、けれども、中將といふ位置と、古い靴のねだんとを結び付けるには、巡査にはなか／＼骨が折れるらしいので、とう／＼一時間ばかりかゝりましたのよ。……なんでしやう、私とした事が、巡査の事なんてお話して、……しかし、一寸面白う御座いましたワ……オホ……」

惡御前と申すものは、妙な事を面白いと思召すものですナア。

その六　誠意生

御病中、御女中代りにては、さぞ御困りならむ、併し、あの色の黑い、インデヤン的な妙な女中が、ばん茶も出ばなの、目出度山の神に成り終ふせたと聞きては、聊か奇蹟の感有之候、乍去、小生は誠心誠意、忠實なりし彼女の爲に、將來の幸福を祈り居り候旨、御傳へ被下度候。頓首。

忠實なるインデヤンを失ひて、受し忠實なるネグローを得申候まゝ、御安心あり度候、くだらないのはもう止して、今度は、少し眞面目なのに致しましようか。

その七　一日道人

……私は昨年の夏より、今日一日を聖く美しく暮さむ、一言の端、一行の末に、全精神を注がん事を決してよりは、信仰上に一變化を生じ、安心の程もさだまりたる心地致し候、聖なる一日の生活が、之れ永劫の生命に候らはずや、……法律屋は、私の趣味には適せず、早く規定の學科を了りたきものと、日夜それのみ考へ居り候、乍末御健在を祈る……」

一日でも、一時間でも、誠に結構なおむかけです。

その八　現實の人

……げに我等は靈の人に候。されど、また現實の人、この世の人、肉の人に御座候。しかも、靈の力と祝福とを享け樂むは、たゞこの實在の生命に於てなし得べきことに候らはずや。まこと、靈の世界には、愛の別れはなからむ、別れは唯この實在の人世の事に候。ああ、我等は、生れたるが故に、實在の生命を得たるが故に、離別を悲しまざるを得ざるべきか、我が須ひは實にこれに候。人世は果して苦痛なるべきか、然らばこの苦みを解脫すべきにはいかにかすべき、……花散る所、青葉の若く萎る所、げにや、人行く所、物思ふ時、「惑は永に、恨は永に」盡くる折さへ無之候。……まことに人世の半面は涙と悲みに有之候。今に於て、我は唯、我涙の一滴を解し給ふ大姉あるを、天に謝するのみに御座候。……不盡」

かゝる現實の苦に囚はる人にも、やがては、光明無量の世を自覺せしめ給ふ靈の力あるを、私は信じて疑はず候。」

その九　　澤英山人

この休みには、ロンドンの貧民窟に這入り込み、社會事業の實際を觀察して、一昨日學校へかへりました。貧民窟よりかへると、粗末なる下宿も、丸で天國の樣です。近頃、私も大に見識を開きましたぞ。……此繪はがきは、現代英國の首相、アスキース氏の肖像です、ロンドンの東部の、貧民の店から買つたものです。」

御健在を祝すー。そして次のものも、やはり外國から來たんですよ。

その十　　眞情生

外國に來て居る者の內で、話し相手のないのには實に閉口、といふて、自分一人がエラガル譯でもありませんが、向ふで相手にしてくれないのかも知れません。隨分、色々の會合にも出ますが、唯馬鹿騒ぎをして吞むといふ丈で、眞の友達は一人も出來ません、日本からも手紙は澤山參りますが、手紙などは手ぬるい、詞などは聞だるい、唯逢つて見る丈の間に、始めて眞の情が燃えるとおもひます、理窟から云つたら、文字も、詞も、姿も、顏も、聲も、皆或るものゝ記號に過ぎな

いのでしようが、最も直截に、刻下に、魂と魂とが、面と向ひ合ふ様に感せしめるのは、どうしても、逢ふに在りとおもはれます、それにつけても、國許の老親共が、どうか、私のかへる迄、無事で在つてくれゝばよいがとおもひます、……」

御老親をおもひ給ふの情、拜察に餘り有之候。

その十一　　野　雪　生

清見潟の三日の逍遥は、唯空の雲が美しかつたと語る外、云ふべく私は何物をも持たぬので在る、新橋へ着くと、丸で砂塵の畑！　折角旅行で清めた肺臓に、こんなごみを入れるのかと、情なくおもつて、慨歎するのも、彼のローマンチツクなる性情故に候はんか、

○潮の音は、歌ある君に、まかせおきて、
　空とぶ雲に、我はゆめみむ。

○月はおぼろ、おもひはけぶる、春の夜に、
　夢路一つの、魂やかよはむ。

黒しい御禮状はいづれ後から……」

御歌美しく拜見致し候。

その十二　　年の子

雑誌御送り下され、難有拜見致しました、ゆめ子さんは、同病同憐の御方とおもひます。我々は、今迄自我をあてにして、度々やりそこねましたといふ事が、解つたのも、御年の加減と、をかしくおもはれます。

○戀よ名よ、富よ位よ、さえつらふ、
　うるはしき頬よ、つひに得ざりき。

○ほゝゑめと、いつしかかへる、さびしさに、
　あゝつめたきに、一人の我に。

○なげいれの、一重の椿、白椿、
　藪のこかげに、咲きにしつばき。」

さても皆さんの御歌の御上手におはしまし候事よ、併しあんまり長くなりますから今度はこれでおしまいに致しますあなかしこ」



折々の手紙

與謝野晶子

▲尼にならむと云ふ友に▼

先頃の御文悲しく悲しく承り候、私よりも年下の御前樣、振袖着給ひしはまだ昨日今日のことゝ思はれ申し候を、世はかばかりに轉變いたすものに候や、墨染の衣にたちかへましとの御思ひ立、ことごとく御無理ならぬ御ことゝ存じまゐらせ候。親におくれ候悲しみは悲しみの中に大きなる理のふくまれ居り候てしかすかに思ひのどむる日もあり候はむなれど、偕老をちぎり給ひし君の、半年とも云ひもはてぬ月日のうちに果敢なうなり給ひし後の御前樣の、常にわづらひがちに居給ふも、またこの度尼にならむと御云ひ遊ばされ候も皆ことわりの御ことゝ存じまゐらせ候。尼になりて後病の輕くなるためしもあり候、私はつねに御前樣の御身弱きを憂ひ候ため、さもあらばなどゝも思ひ申すことに候。さ候へどなほよく〳〵御思案遊ばさるべく候。御母上、圓頂の人を見て今日君を悲しみ給ふに勝る悲しみを覺え給ふまじきや。なほ尼になりて後も戀しき海の潮の音きゝたければ、鎌倉の尼寺にしかるべき師のあらぬかを尋ね見よとの御言葉に候へどこれは、御前樣の空想が云はせ候ことゝ思ひ申候世を思ひ捨てし人に戀しき海の音もある筈なし、戀しとは煩惱のまだし斷ちがたき人の言葉に候。それよりも御國に近き西の京のさるべき方へ御入寺遊ばしては如何にや、彼處には知る人も少なからず候へば、善き師を求め搜し候ことも難かるまじく存じ申し候、私の知れるかぎりにては詩仙堂の尼君などいとよき人にていまし候。さても御前樣の戒受け給ふ日、私もこゝに

て髪切らばや、これは人生の切實なる悲しみにふれてなど云ふことにては候はず、久しき間腦の惡しく候て家にありてはふり下げ髪の羞しきに唯外出時の二三本の針にて留め候それすら苦しきを萬のこと思ひ捨てしさまに一尺ばかりに裾切らばや、つねは白衣鼠の衣などまとひ候も清々し、昔讀みしものゝ中にあり候ひし、公任の卿の北の方の、病ゆゑ尼になり給へるを。

さしのぞき給へば尼君、清げなる三尺の几帳身にそへて羞げに居給へり。



とあり候ひしが、さばかりの変りにて妹脊の中を終へむも清かりなむなど思ふ心に候、この程浪速の家にありし頃の日記見出で候に、貴女様の御名のみ多くかゝれあり候、戀しきは昔に候かな、あなかしこ。

▲その人よりかへし▼

げに〳〵戀しきは昔に候。戀しき昔よと妹は今泣き居り候。わが姉上、髪切り捨てむとのたまふは何故の御ことにや。妹をあはれと思ひ給ふ御心よりことなげに云ひ給ふや、姉上には愛子の二人の捨て

がたきものもおはすに候はずや。ゆめにもさることは思し立つまじきことに候。詩仙堂の尼君は私もよく存じ居り申し候。かの御方の御弟子となるをえばまたなき幸ひと思ひ申し候親なる人も、病がちにかつは涙の中に沈める人を目のあたり見候はむよりは、法の光のそふべきわが世の曉をよろこび申すべく候。御腦病み給ふこと承りてうれはしく候。惜しからぬ命にかはるものに候はゝ御健康を昔にかへし候ものを、かしこ

▲田舎の妹より▼

五月雨詫びしき期に入り申し候。昨日よりははなれの一棟戸あけず、傘もよきは皆藏へしまひ、ぼろ〳〵の破れ傘さして下女下男は外へ出で申し候。貴女樣御產後の御身體ひきつゝきよろしく候や、幼き人はよく泣き候や、私は病院をいで候ひし後もまたしても床につきがちに候。四年前の產の後のわづらひのかばかりまでつきまつはるかと苦しがり居り候、それにつきをかしきことの候。この間も例の大垣の病院へ診察を乞ひにまゐり候ひしに、田舎ののんきさは、夕方の七時ごろならでは院長の歸らずと申され候。その時はまだ朝のことゝて一度歸宅いたさねばならぬことになり申し候、さ候へど私は病に惡しければとて車に乘ることを禁ぜられ居り候身の、五十町あまりのわが村までなほ三度のゆきかへりかなふべくもなく候へば、つひになきことながら花子も連れ居り候ことゝて一日を大垣の町にて遊びくらさむと思ひ申し、迎ひの者の來たらむ時のことづてなど受付に賴み候て、それより大垣一の信夫湯と云ふに入り、花子の寫眞とらせなどし候へどまだ〳〵晝にもなり候はず、芝居を見むとまゐり候に、京都の新派役者とやらの己が罪をいたし居り候にあひ、やう〳〵三幕をしのびて見物いたし、なほ三時頃にて候へば公園を廻り、吳服小間物の買物をすませ候て、さて病院にまゐりて院長の診察を受け終りしは八時頃に候、病院にて提灯を借り候て、花子の手を引き歸りまゐり候みちに大垣より一町ばかりこしと思ひ候うしろより、奧樣にてはなきかと申し候は下男の

嘉代治に候。使にやとひ候に、何として貴女様とお孃様を捜しになりと申し候。捜しにとはと私の不思議がり候に、御歸りのおそきにもしや不時の御災難の何れかの御身に起りしにてはなきかと旦那様も御隠居様もおぼつかながり給ふなり、大垣へ三度まゐりしと申すのにて候、病院にてはあやにく頼み置きし受付の人の居らざりしに候とよ。嘉代治自身の考へとしては東京の姉上の御産を、御見舞に不意に上京せしものならむ、東京へ行くならば土産ものを買ふ筈なりとて停車場の前の菓子屋へ私の來ぬかを尋ねに行きしよし



に候。わが村へ入り候ひしに一人の大男わが前に一さんに駈けまゐり候ひしが、それは嘉代治の弟の爲治にて、街道に提灯のあかり見えたらば知らせよと、母なる人の申つけに見張り居りしに候、爲治は私らの家へ入し時はまだものも云へぬ始末にて、下女たちばかりにて水など飲ませ居り候ひき、いつもながら田舎には喜劇の材料の多きことに候

いちど今少し大きくならば御送りいたすべく候。兄上によろしく御傳へ下されたく候、かしこ。

▲姉よりかへし▼

御文うれしく存じ申し候。その夜の騷ぎ目に見え候やうにて、思はずほゝゑまれ候ひき、嘉代治、爲治は上手の役者のやうに目の前に浮び出で申し候。この度の子もよく泣き申し候。靜子も泣き候。二人の世話を手づからいたし候ことゝて、夜のねむく候ことをかしきほどに候。昔も亡き母上、私と御前樣と續きて生れしほど、前の夜のつかれに背の添乳にわれ知らずうとうと眠るをつねとせしが、祖母君の佛壇の前へ夜の勤行に來給ひて、それ見らるゝが死ぬばかりつらかりしと御話しなされしことのありしを思ひ出でられ候て今さらに親の恩の忘れがたきを感じ申し候。この度の家、二階二間のみは明るく候へど、下に四間あり候が何時もうすぐらく候。ことさらこの頃は行きあるく人顔もようは見えわかず、黄泉の洞にあるこゝちもいたし候。さは申し候へど、あたりの靜けさは郊外にありし日にもまさり、前の道に車の見え候は、向ひの家の主人の君朝に出で夕に歸り給ふそればかりに候。人は皆ニコライの鐘いかばかりかまびすからむと申し候へど、あかつき闇にある時、夕ぐれ一人の時など、涙さへしばしば落して私はこの鐘の音にきゝほれ申し候。また大雨の中に、月の夜に圓き高き聖ニコライの屋根を見候ては巨人に親しむこゝちもいたされ候。庭は前と後に二坪ばかりづゝのがあり候へど、日當りわろく候へば、先頃まきしコスモスも芽のみ出しておほくはしほれ終り候。この秋この花見ずてあらむと思ひ候はさびしきことにて候。大垣にてとらせ給ひし花子さんの寫眞見たく候まゝ御送り下されたく候、皆樣に御ことづてよろしくねがひ上げまゐらせ候。かしこ。

▲乳母より▼

福松こと御實家にまゐり候て、いただきまゐりし貴女樣の御文、くりかへし、くりかへしうれしく拜しまゐらせ候。氣候の惡しき折から御すこやかに入らせられ候こそ何よりのよろこびに承り候、乳兄弟など

と恐れおほきこと仰せられ候ひし傳太は、この頃顔を眞黒にしてはたらき居り候。うれしく思ひ候ことはこの者も千代も親の手助けの少しづゝ出來まゐることに候。昔のまゝかと御尋ね遊ばされし彌三郎の池は、昨年樋の口の普請ありてのち思はぬ水の道のつき候て四郎右衛門の畑をぬけて、かねの家を後を通り、九郎右衛門様の蜜柑畑をちよろ〳〵と流れ居り候。九郎右衛門様にてはこの水を引きて鼈を飼ふ御もくろみにてこのほどより小作のものまゐりて池の工事をいたし居り候。福松もお手傳ひに上り居り候。近村には昔より鼈飼ふ池のあり候よしに候へど、この村にては初めてのことに候へばめづらしく存じ候まゝその池の作りやう申し上ぐべく候。まづ池の底をわたり五寸ばかりの石ころにて堅くかため候、これは鼈と申すものは底へもぐるものに候へば、池へ逃げぬ用意にて、その上へは細かき砂利を一尺ほども積むにて候。また池の廻りに白き砂しきて砂山の小さきをあまた作り候は鼈の子産む處に候よし。鼈飼ひ候はなか〳〵利得おほきことのよしに候。かねの家の傳太は、牛を飼ひ候が上手と云ふ評判をとり候て、一年二年ほど預りくれと申さるゝ人おほく候。不思議にも牛は皆肥えふとりて舊の主にかへり行き候。仰せのごとく貴女様の御供して、年に二三度この村へ歸りまゐりし時の樂しく候ひしことは唯今言葉にてつくしがたく候。奥様の召し古しの小紋縮緬を頂戴して着て歸り候ひしに皆の驚き候ひしこと、御五つのときの被布に羽衣の繪模様染め給ひしを、村人のわれも〳〵と毎日拜見にまゐりしことなど忘れがたく候。御細工ものかず〳〵下され候ひし御禮のことばを申しおくれ候。信玄袋一つは九郎右衛門様の奥様、たつて御のぞみ遊ばされ候まゝさし上げ候。まことにいろ〳〵重寶なる品かたじけなく存じまゐらせ候。貴女様御氣に入りし縞の候時、はし少しとりて御送り下されたく、見本にしてふし立ちしものに候べけれど銘仙を織りてさし上げたく存じ申し候。先は御返事まで。



養家にある妹へ

金子薫園

○

若葉蔭懐かしき頃と相成候。田舍にては此感じ殊に切なるべしと覺え候。此程の書面に、風邪氣にて臥床し居られ候ふやに聞き及び候うてより、おとづれふつに絶え候ふまゝ、持病など引き起して、どつと枕に就き居候ふにはあらずやなど、思はわろき方をのみ辿れるに候。その節、夕ぐれになり候はゞ、涙とめどもなく出でゝ、そゞろの物悲しさおさへむ方なきやう認めありしが、さやうに心弱くては困り候。まことの子もかく迄にはとばかり慈み給へる父君母君に何の心置くべきふしもこれなかるべく、多くの召仕へより敬ひかしづかれ候ふ身の、何の悲觀にも候ふぞやと、心などはれ候ふものから、小さき胸一つに包みかねたる憂きことも有之候はゞ、隱さず打ち明けらるゝよう念じ居候。しかし人はこれにて足れりと申す際に相成候ふこと無之、心の望みは、それよりそれと果てしなきが常に候。大きなる志を抱ける男子ならばいざ、なべての女はその境遇に安んずると云ふ事それが肝要に候。あきらめると云ふ事が大切に候。何不足なき境遇にありながら、それを悲しきものに觀じて、樂しからぬ日を送り候はむは、あさましく候ふべし。この義よく〳〵御考へなされたく候。この春はものに滯り候うて、はればれしく外出もえせず、僅かに濠端線の電車にて、彼の堤一帶の花を一瞥したるに過ぎず候。例の荒川堤に櫻草をめでゝ、心のどかに春の日を消し候ひけむ、そのかみの事ども、そなたも想ひ出づべく候はむ。小さ

き花瓶に挿して色なくなりはて候はむまで、愛でたりしそなたはまだ幼かりしかな。軒の柏の瑞葉あそ〳〵と日に照りはえたるを眺めて、この感ことに深く候。近きころの起きふしのさま詳しうお知らせ下されたく候、末ながら母君御持病のリユーマチスはいかゞに在し候ふや、いつも今頃の氣候には御惱在し候ふやう存じ候。御大事にと御傳へなされたく候。



○

御母君樣光寺詣でを思し立てられ、近日中隨行上京せらるべしとの事、嬉しく候。久し振りにて御母君にも見え、又そなたにも會ひ候はむこと近頃になきはれ〳〵しき心地を先づ覺え申候。入京の日さだまり候はゞ、一兩日前に御知らせ下されたく候。その日

は一日空けて待ち申すべく候へば。文のはしに添へられたる歌ども、敍情なるがさはに相成候ふやう覺え候。なき母君を戀ひわびたるやうなるが多きは、情のおもむく所とゞむべくもあらず候へど、かくては、今の母君に對し水臭く候ふべし。われと念じて、まじり心なく孝養をつくされむこそ、苔の下なる御心にも適ひ候ふべけれ。「ある時は死なむともしぬなき母にあはゞやとするひとへ心に」などいふ如き極端なる歌は、ゆめ詠むまじきに候。ものに書きつけおき候うて、それが萬に一、母君の眼に觸れ給ふことあらば、いかゞせらるゝと思ふや、それよりもさやうなる心わすれても出さゞるようにせらるべく候。先便にも申し置き候ひしが如く、人は殊に女子はその境遇に安んずるといふ事が肝要に候。自己の境遇に滿足すること能はず候うて、常に心の動搖を感じ候ふ人ほど憐れなるは無く候。あの氣立よく佛樣のやうなる父母の君の膝下に居て、何不足なき幸の日を送りながら、さやうに感ずること能はざる樣子見え候ふは、心得がたく候。それは我儘と云ふ者に候。我を折りて、まめ〳〵しく仕へねばならず候。さはれ何か思ひあまり候ふこと有之候はゞ、隔し立てなく、御打ち明け下さるべく候。言ひたき事は言つて了へば、それで胸のすくものに候。言はずに取つて置きをして、ひとりくよ〳〵思ふは、言ふべき相手なき人にかぎり候ふべし。そなたに取りては、たゞ一人の兄、少しは世の中の事も分り居り候ふ筈、何にても打ち明けらるべく候。うせ給ひし母君とも姉君とも思ひて、こま〴〵と御話し下されたく候。

○

善光寺詣では、父君さまの御病氣の爲め、中止せられ候ふとか、殘念なる事に候。入京の日取のしらせと思ひし文は、よしなき便りにて候ひしかな。さるにても、御病氣とは心痛の至りに候。田舍の事とて、よき醫師のなきが安からず候へども、さしたる御事にも可無之候へば、遠からず御平癒あるべしと存じ候。父君の枕邊にて詠まれたる歌、げにもと首肯かれ候ふが多

く候。中にも『すや〳〵と眠り給へり御病なきが如くも見えまつるかな』と『朝の雨槻の若葉に霽れそめて明るうなりぬこの病室は』とが、すら〳〵と景色心持をあらはしえて、御身のほとりのさま、さやかに目に浮び申し候ふかな。巧を弄し、奇を求め候ふ歌のまことの色とにほひとを缺き候うて、誦むに心苦しきやうなるを忌み候ふは、さることながら、あまりにあらはに、たゞ言めきたるは好ましからず候



情の自然をたつとぶと云ふは、何にても心に思へる事を、ぶちまけてのみ言ふ謂にはあらず、そこに歌に入るべき事柄と、然らざるべき事柄との吟味を要することと論なく候この差別をさとらずして、たゞ歌へばよきやうに念ひ候ふは心得違ひに候『眞』を歌ふと云ふ事は、結構に候へども、中に含まれたるゆかしみ無之候ふては、讀んで、たゞに乾きたる、潤ひのなき事象をのみ感じ申すべく、窮屈この上なかるべ

く候。女性の歌には、この潤ひといふもの、肝心に候。砂を噛むが如きもの、足駄にて乾きたる土を踏むが如きもの、誦むに堪へらるべしと思ひ候ふや。斯く言ひては御身への小言のやうに當れど、さにあらず、初心者を誤らぬようにしたき、歌がたりの一節とも誦み味はれたく候。

ほとゝぎすの聲かしましきまでに候ふよし、「裏山の夕月ごろのたど〳〵しさに、背戸に立ちて聽きたらむにはと思ひしは、こゝに貰はれ來し五年前の春に候ひしぞかし」とあるは、いと切に感じ申候。都わたりにては、想へもえざる事に候。この程、溜池なる三會堂に繪の會を觀てのかへさ、山王臺に登るとて、もの古りたる木々の、若葉影小暗き坂道に、それぞと思ふ一聲を聽き候ふてだに、吟懷とみに開け候ふやう覺え候ひしが。あくまでも聽き候ふて、痛切なる響の感せずまで相成候はゞと、耳を塞ぎて聽かじとせし快さを想ひ浮べ候ひしかな。そは餘りに物のほのかなるより起りたる一時の反感に過ぎざるべく候はむ。御身が「背戸に立ちて云々」と待ち設けしほのかなる情も、耳もとに喧しきまでなる現實の壓迫には、絶對にほとゝぎすを厭ふ一種の反感の伴ふを、とゞめあへざらしめ候はむ。場處によりて、ほとゝぎすに對する二人の反感の異れるは、可笑しきことに候はずや。

只今丁度或書き物の一部を書き上げし所にて、心いさゝか餘裕を覺え候ふ時とて、父君の御病中をもかへりみで、長々と、よしなき事書きつゞけ候ふなど、さるかたに御讀み下しなされたく候。

御見舞までに朝鮮飴一折小包便にて差出し候まゝ、御藥のあとの口直しなどに適宜さし上げられたく候。

○

躑躅の朱の色したる一輪、いと大きやかなるを、押花にして御送り下され、御地の春のなどり、いとゆかしく覺え候ひぬ。父君はや御本復の趣、そなたの看護のかひ〳〵しかりしも、御快期を早め給ひたる一因と此一段明るきこゝちして讀み覺へ候ひしが、中程よ

りうす暗き氣はひの身に迫りくるやう覺え候。夜な夜な不眠の症にかゝり、今朝鏡に對ひて、頰の落ちたるが、しるしなど、哀しき事のみ書きつゞけられ候ふには、ひたと胸とざゝるゝやうにて、すぐにも逢つてその仔細くはしく聞かまほしく候ふものから、さしあたり急ぎの書き物に制せられて、しばしが程は動きも取れず候ふが、先便にてこま／＼注意し置き候ふ如く何なりとて打ち明けらるゝやうせられたく、心一つに疊みて、くよ／＼物をおもふばかり、おろかしき事は無かるべく候。仔細わからず候ふては、慰むべきよすがも無之候ふまゝ、折返し詳しき御手紙待入候。

○

何かと思ひ候ひしに、母君との折合わるきよし、爲さぬ中の悲しさには、いさゝけき事が、その起因と相成り候ひしなるべく、誤解に誤解が重なりて、結ばれ解けぬに至りし事と覺え候。しかし誤解とけ候はゞ、何事もこれなかるべく、近日中私何も知らぬ體にて出向き候ふて、それとなく母君の御心解くるよう御話申すべければ、心安う念ひ居られたく候。善光寺詣での中止相成候ふは、父君の御病氣の故のみにも無之候ふよし、家内に水さす者ありて、仲惡く相成候ふより工夫し居候ふため、困り候ふよし、これは、なべての家に有りがちの事に有之、取り立てゝ申すべき程の問題にも無之候。何事も近きうち私出向き候うて取決むべく候まゝ御案じなさるまじく候。もと／＼そなたを先方へつかはし候ふは、强ひてとの母君の御頼みに有之たゞ一人の同胞を他家へ出し候ふこと、心苦しき極に候ひしを、のつぴきさせぬ義理合にて、進まぬながら差出したる次第、先方の出やうによりては、すぐにもそなたを引取り、連れかへる覺悟にて參るべく候まゝ心づよく思ひ居られたく候。事件の眞相も大方は推しはかられ申し候ふまゝ、たゞ先方の出かた一つにて事を定むべく候。參るべき日は其二三日前に御知らせ申すべく候。人は運命に依つて支配せらるべきものに候へども、それは事と品とにより候。ことわりなき運命に從ふべきいはれは無之候。この文とゞき候うて讀まれ候はゞ、久しうとざゝれし胸のおもひも、いさゝかは相開き候ふべしと、覺え居候。若葉の夜の雨は更けゆくまゝに靜けさを加へ候ふやうに候。君よ、この夜は心安く寢ねよと筆をとゞめ候ひぬ。



余の手紙

大町桂月

一　金を乞へる友へ

同病相憐む、同貧相助けたきは、山々に候へども御承知の、〇〇氏へ返すべき金、終に今年中は出來ず諸拂も奇麗には、すまされず、醫者は、藥代のみやりて、診察料は正月に延ばし、家賃も待つて貰ひ、十五圓の拂の處は、十圓にし、若しくは五圓にし、餅だけはつきて、正月を迎へ申候。今年のみにあらず、例年この通り也。貴兄も忍び難きを忍ばれたら、小生の例にならひて、年は越さるべし。商人どいふものは少しでも、金の顔を見せさへすれば、あまり、やかましきことは言はぬものに候。下宿ずまひの書生が、小説かきて、人生に觸れるなどゝ申しても、それは、ほんのうはつらの事、子供多くもちて、貧して後、始めて人生に觸れるべし。而して清貧の中に樂天地を得るに至りて、始めて、達人たるを得べし。これ富者より見れば、負惜みなるべし。されど、お互にありては眞理なりなどゝ、釋迦に説法は、よい加減に切りあぐ時に先達の御敗北(碁の事)の名譽恢復の爲め、明春、捲土重來の勇氣なきや、否や。

二　酒匂なる長男へ

まい〳〵手紙くれて、うれしい。伊澤先生が二十日まで居るがよからうとの御手紙故、そのつもりにて大に勉强すべし。十五六日ごろ一寸行くかも知れぬが、二十日には必ず迎ひにゆく。みやげものは、その時ゆ

ツくり買ひてよかるべし。
先生よりの御手紙に「決して父の言語を眞似してはならぬ」といふことを、御前にちかはせるとの事故、お前も、そのつもりにて、先生の言はることを、うけたまはるべし。この父の吃音の眞似させたく無きは言ふまでも無し。その外、缺點もあり、惡癖もあり。世上、どんな人でも、長所と短所とあるものなり。然るに、人は、他人の短所には氣がつき易けれど、他人の長所には氣がつきにくきものなり。この父の短所多けれども、男らしいといふ



氣象は、大にもつて居るなり。これは、お前が年長ずるにつれて分つてくる。文章も決して人後にをちぬなり。この二點は、大に眞似して可也。
餓ゑては食をえらばずと、古の人が云へりお前は肴が嫌ひなるが餓ゑたら、必食へる。嫌ひでも、食つて居れば、終には好きになる何かのかんづめでも送ることは、わけも無いが、それでは、却つてお前の爲めにならぬ。長じて兵隊に出たり、旅行し

たり人の家に行きたり、その他、いろ〳〵の時にこまる人は食物にすき嫌ひあるが如く萬事氣隨氣まゝになり易し。氣隨きまゝでは、世は渡られぬ。何事もしんぼうが大切也。この儀、よく〳〵心に銘ずべし。今日、父も母も、せわしくて、郵便局へゆけぬから、爲替は明あたりおくる。

三　巖谷小波へ

今日、お伽祭のお伽芝居へ御招待に預り、難有存申候。お伽芝居は、唯、其名を聞く。どんなものか一度は見ておかむと存じ候處、幸に御招待に預り子供多勢つれて參り、始めて見物仕候。今日の芝居の三種、配合甚だ好し。まづ、第一の兄弟星は、在來の普通の芝居をやゝ子供らしくしたるもの、第二の鬼だましは、成程、これがお伽芝居かと、感服仕候第三の桃太郎銅像除幕式は、面白き思付にて、いとゞ賑か也。貴兄の挨拶は輕妙だ、踊りも上手だなど〻、非常の好評を耳にいたし候。「巖谷君萬歲」と覺えず申上げたくなり申候。

貴兄既にお伽文學を物にし、又お伽芝居をも物にす藝術上に、我國前古無比の別天地を開く。奇觀と申すべき哉。

茲に謹んで今日の御禮申すと共に、二十年來の舊友として、貴兄がお伽文學に於ける御成功を祝し、兼ねてお伽芝居の御成功を祝し申候。

今日、貴兄の脚本を手にし、且つ讀み、且つ見物し第一劇、第二劇とも、子供の活動を見るたびに、何となく涙があふれ出で〻、とゞめ難く候ひき。鬼だましの二兒が「鬼さんござれ」と手をうちはやす處の如きは、貴兄の文には之なく、又文にすべからざる所、又文にしても引立たぬ處、芝居にして、始めて當意即妙一種の滑稽の妙を感じ覺えず拍手大笑仕候。いろいろ批評いたしたき事も有之候へども、今夜は、取敢へず、先づ感謝の意を表するにとゞめ申候。

何卒御令閨樣へよろしく御傳言願上候。

四　禁酒を勸めたる岡野松藏へ

拜復、本月九日の日付、讀賣新聞社氣付の御手紙、今日始めて手に入り、難有拜讀仕候。この間、相さること十八日、東西兩京、わづか十數時間にて、旅行の出來る文明の世の中に、如何なる故にや、かくまでも御手紙を遲延させ申候。取りあへず、玆に御返事申上候。

小生が讀賣新聞へ出したる「多摩河口」を御讀みになりて、小生の病弱は、飲酒にもとづくならむとて、同情溫き、懇篤なる御敎訓下され、身にしみて、難有く存申候。謹んで御禮申上候。

小生の伯父をよく御記憶になり居りて、小生が毎朝通氣ありて、爲めに頭痛を治せりと云へるは、腸の病的となれる徵候なりとの御言葉は、げに的確、一言も申しあぐるやうも無之候。貴殿も酒を嗜なまれしが、終に其非を悟りて、禁酒會員となりて、斷然酒を斷たれし由、御友人の方々が、「禁酒會に入るは、薄志弱行」なりと嘲るは「君等は、その禁酒會員にもなれざるにあらずや」とをりかへされしとは、實に痛快に存申候。

早速、貴諭に從ひて、禁酒して、その旨を貴殿に御知らせ申し上ぐるが、理の當然とは萬々承知致し候へども、一寸入りて、また出るやうにては、相すまず、いよ／＼禁酒が出來ると確信が出來るまでは、おいそれと、うかとは申上げられず今日の處は、見ず知らずの人樣より、思ひがけなき、同情あつき御敎訓をうけたまはりて、身にしみて、うれしう候との事だけを御返答申上候。

元來、小生は、意志の人にあらず、理性の人にあらず、情にもろきものに候。從つて、理性に訴へて、其非を知るも物事によりては、惰性の致す所、一刀兩斷の事が出來ぬが、一大缺點に候。從來多くの酒場に出入いたし、飲酒家について、いろ／＼研究もいたし候同じ飲酒と申しても、いろ／＼の癖有之、人は平生は自から矯め居り候ふが、熱醉したる時に、その本性もあらはし申候。怒り上戶、泣き上戶、笑ひ上戶、いろ／＼有之、狂ふ人多けれども、狂はぬ人も有之、節

酒の出來ぬ人多けれども、出來る人も有之、小生は元來所謂お目出度き人間、酒のみでも、矢張りお目出度く、醉へばとて、怒ることなく、泣くことなく、笑ひ上戸にもならず、少し元氣になり、にや〳〵と、おめでたく、終に眠り申候。言はゞ眠上戸とでも申すべきにや。それも、しんから酒が好きと申すでも無く酒のよしあしも、よくは、わからず。唯醉うて亂れざるを得意といたし候ひしが、病弱となるにつれて、身體心と伴はず、五六合以上に及ばゞ、ぐにやりといたすと有之候。獨酌なら、三四合以上(普通二合)は飲めず。それで、讀書作文にも差支なく候。酒客に接しては情のもろきの致す所、又氣のはづむの致す所、思はず飲み過す癖有之、爲めに二日醉もいたし候。それ故止むを得ざる場合の外は、成るべく酒場に出でぬやうに致居候。これ、小生にありては、一種の姑息なる禁酒法に候。ともかくも、十數年來、病弱となり居れる身體を恢復することが、小生の身體上の一大急務に候。禁酒も消極的の衛法に相違無之候へども、草鞋ばきの旅行いたすが、小生にとりては、積極的の衛法に候。世には、「酒は憂の玉箒なり」とて、酒のみて、陽氣になり、元氣になるを喜ぶ人も多く候ふが、小生は斷じて取らず。飲んでも面白く、飲まずとも又面白きだけの修養は、自から致申候。青年時代には、一升内外の酒をぐつと一息に飲みて、而かも心の亂れざるを自慢したることもある馬鹿者に候。父方の血統には、酒好きは無し。外祖父が大酒家にて短命、その子の二男子、即ち外叔父も大酒、母も量は少なけれども、酒好き也。一番上の兄も、量は少なけれども、酒好きなりしが、これも短命、父は酒は好まざりしが、四十九歳にて、世を去り、次ぎの兄も小量にて、格別酒好きにはあらざりしが四十二歳にて病死いたし候。いろいろ人の生死を考ふるに、壽命は必ずしも、飲酒の如何には關せざるやうに覺え申候。酒のまぬ人、若くは、衛生の說を生嚙りにしたる人は、一概に、アルコールは害あり、飲酒家は醉うて狂ふものと、思へども醉うて狂はぬ人も少なからず、身體の健康如何により

て、アルコールもさまで害は無しとの考、頭に固着いたし居申候、御厚情に甘へて下らぬ事書きつらね申候いづれ確信の出來たる上にて、きつばりしたる御答申して御厚情に酬い申すべく候

五　親戚の人へ

拜復、甲氏の手紙にてはまるで貴兄が甲氏に借金を頼みたるやう也。自分の事を他人の事のやうに思へる也。御立腹、御尤も也。もと〳〵、彼の無盡は、甲氏と乙氏との爲めに起りたる也。小生は甲乙二氏の爲めに、自から加はるのみならず。保證人となり、更に今一人との事故



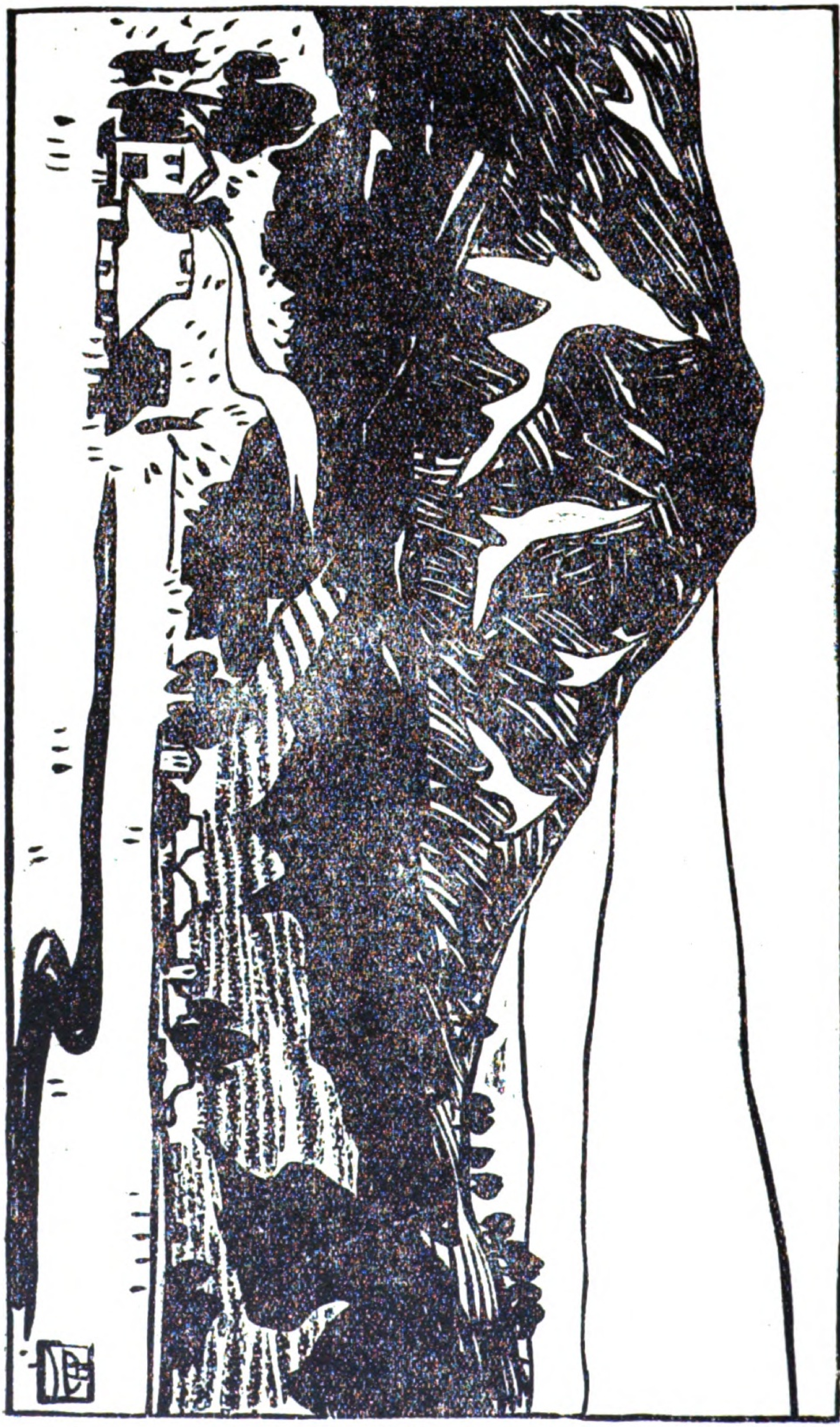
貴兄にお頼み申したり、外面は保證人が二人あれども實際は、小生一人が保證人に候。小生は保證人となり候ふもの丶、御承知の如く、世才皆無にして疎懶の男一切、乙氏にまかしおき候處終に無盡は期滿ちたるが天氏と地氏とは、全く取れぬやうな都合になりたり。地氏は人氏と相合して、一つになり居りたる由にて、それも、地氏より人氏へ頼みたれば、地氏が人氏に對して、義理が立たず、地氏の老母は小生の伯母、小生の爲めに、人氏の受け取る分を立てかへくれたり。それで、地氏の

方は、一先づ解決つき候ひしかど、小生は、そのまゝにては、すまされず。地氏は今、金には困らず候へども、小生の伯母がその小遣の溜りたる中より立替へて與れたる次第に候へば、成るべく早く小生より返却せざるべからず殊に伯母は年既に八十、いつ、どういふ變があるかも知れず。必ず生前にと心せかれ申候。

地氏の方はこれで御心配をかくること無之候へども天氏は、小生よりも甲氏が關係ふかく候ふが、保證人を楯にたび〳〵小生への催促、終に貴兄までに御心配をかくるやうに及び候段、恐縮千萬に候。乙氏は、今困窮甚し。乙氏の分は、小生が引うけ申すべく候。甲氏は、自分の負擔の分だけは出してもらひたく候。然るに、あのやうな甲氏の手紙にては、全く自家の責任を無視したるわけ也。小生よりも手紙出して、其無責任を責むべく候。

天氏の方にては、甲氏は、だめ也、小生も埒あかずそれで、保證人の名を楯に取りて、貴兄に催促に及びたるべけれど、實際の保證人は小生也。何卒、小生がいよ〳〵金が出來ぬと申し上ぐるまでは、しばし、目をつぶりて、小生におまかせおき下されたく願上候著述が出來上り候へば、直に解決をつけ申すべく、ただ著述の事は、心は、せき候へども、無責任なことは書かれず、それ故、おくれにおくれ、そのうちに、いろ〳〵費用かさみ候へども、空なる事にはあらず。甲氏も一時に出金は、むつかしからむ。されど、あの手紙のやうに知らぬ顏で、すまされた義理にはあらず。毎月少しづゝでも出すやうに、小生よりも、申しやるべく候。一方の天氏は、今や、全軍を以て、貴兄を突貫す。その鋒、さき當り難し。白氏は、天氏と親しく、また小生等の事情を知り居るべく候へば、白氏に賴みて天氏に今しばし待つてくれるやうに、掛合ひて貰ひては如何に候ふや。

まことに、いつも御心配のみ相掛けて申譯なく候ふが、無盡の件は、小生にて、保證人たるの責任を果すべく候間、左樣御承知願上候。



花の趣味

玉井紅葩

花に對する美感、これを詩人にたづねたら何と答へるだらう。

美しき人を見ては花のやうだと言ひ、麗しき衣裳を見ては花の樣だと言ふ、又義あり情ある武士を評しては花も、實もある大將だと言ひ。軍人が戰場に討死するを花の散るに例へたるを始めとして其外美はしい、勇ましい、情深い事など、總べて美なる狀態を花に例へて居るではないか。花の總べては美である、花は宇宙の大藝術家たる神が造つたものである……故に花は大宇宙の大美術品である、花の美は有限と無限との融合である、なぜならば無限なる神の精神が有限なる吾等の感覺に權化せられたからである。花の美は深奧にして而かも盡すことが出來ない、なぜならば神が花に現はした美の精神は無限であるからである、されば春の司は花である、地上に於ける美の總理は亦花である、梅と言ふ勿れ、櫻と言ふ勿れ、心なく踐みにじらるゝ、道側の名もなき花も猶又神の祭壇を飾り、オリムピヤの勇士の冠を飾るに餘りあるのである。

◎偉大なる美的勢力

春雨蕭々として、天地の塵を清め、春色駘蕩として、



人の心を醉はしむる時、彼女が此の天稟の美を發揮するを見たならば、何人もこの擾々たる世間を超越し、功利や禍福を忘れて恍惚として甘醉するではないか、彼女は人間に繫縛を脫せしむる力がある、彼女は人間に悲痛を忘れしむる力がある、そして彼女は吾等を高遠なる觀念界に逍遙させる力がある、美人は其髮を飾るにリボンがある、簪がある、造花は此の地上を飾る爲めにリボンとして簪としてこの花をつくつたのである、美人は其身を飾るに襠がある、地球はその表面を飾る襠として花を持つてゐるのである。

今や暮月楊柳に烟るの好節、天地は花に醉ふて居る、人も亦彼女に笑ひ、彼女に泣き、彼女に狂ふて居るではないか、是に於て何人も彼女の美的勢力の偉大な事を思はぬものがあらう。而して彼女は單に其形態と其色彩との美を有つのみではなくて更に床しい懷かしい物語を持つて居るのみである。

◎薔　薇

昔ヴーナスといふ美の女神が、地中海より生まれて來た時希臘の側なるローズ島に薔薇の花瓣を降らせつゝ生れたといふ話がある、又彼の人類の大祖と言はれる、アダムとイバがエデンの花園に逍遙して居た時、イバが其自分の側に咲き匂ふて居る薔薇の一輪を採つて唇にあてゝ香を嗅いだ、ところが、其時イバの唇の紅い色が移つて、それから赤い薔薇が

出來たといふ話もある。古來西洋には薔薇に關する話は澤山あるが、彼の「薔薇の下に」といふ語源の如きは、實に面白き由來である、例のヴイーナス女神の子、キユピトといふ戀の神が、其母ヴイーナス女神に關する情話を、他の神々に打ち明かされん事を恐れて、エヂプトのハルポクチーズといふ沈默の神に薔薇を捧げた事から起つたので「薔薇の下に」と言へば即ち沈默を守る事であるといふ話である。

◎虞美人艸

又支那に於ける虞美人草の物語なども實に面白い、彼の有名なる拔山蓋世の英雄項羽が、漢の高祖と戰つて利あらず、遂に垓下といふ處まで攻め寄せられ、勝算盡き、如何とも爲し難く、其妻虞美人に名殘を惜しみ、虞耶虞耶汝如何せんと別れの限りを悲んだが、虞姬は遂に劍に伏して死し、項羽は烏江といふ處で討死した、然るに其後虞姬の遺骸を埋めた塚の上に、あやしい草が生ひ出てゝ、美はしい花が咲いたから、時人哀れがつて虞美人草と名づけたのである。此草に向つて、唐人の作つた舊曲を歌ふと、其拍子に合はせて、草の葉が舞ひをするといふ話が傳はつて居る、其他桃李の花、牡丹の花、我が國に於ける櫻の花、梅の花、菊の花の如きは、幾多の佳談を傳へ、幾多絕唱の詩歌を持つて居るか知れない、斯の如く彼女は神話として傳說として、詩觀上重大な位置を占めて



居る、されば彼女が現實の美と共に此等の佳談を瞑想する時に當つては、我等の靈妙なる情緒、我等の高尙なる美の理想と絃々相摩するを覺ゆる、此の場合に於ては到底論理的了解や意欲などの對象ではない、唯審美的瞑想に訴ふるより外にない、彼女に對する詩歌は即ち此の審美的瞑想の響である、聲である。

◎櫻

櫻は木花咲耶姬の權化してから此のかた、東海の仙鄕皆之れを以て埋まり、花よりあくる三吉野の、春の曙見渡せば、唐人も高麗人も大和心になりぬべき、膨脹的の歷史を作り、櫻が軍人、軍人が櫻といふまでとなつた、若しそれ李白が年々歲々花相似、歲々年々人不同と言つた其人同しからざる今日より花色相似たる昔を偲んだならば龍頭鷁首の船に詩歌管絃の宴を催し櫻かざして遊びけん大宮人の歡樂より、志賀の浦は荒れて斷雪飄り、奈良の都は古りて紅華群るの史談、夜嵐や大閤樣の櫻狩といふ恐ろしき聚樂殿の花見の宴、舉げ來れば到底其際限なきに驚かざるを得ない、なにがしが「乞食らが着すてし野邊のくちむしろくちめさへより咲くすみれかな」と歌ひたる、優しき彼女、白居易が、松樹千年終是朽、槿花一日自爲榮と言ひたる知足の、彼女何れの方面に於ても、之れ一大歷史一大詩篇にあらざるはなしである。

「卒業生への注文」に答へまゐらす文

秋　雨

さらば、靜かに山よ、水よ、また歸り來む春の日には昔し乍らのなつかしき姿して山よ、水よと、かへり見がちの心の駒に鞭うつて、別離の涙を夕霞にかへしつゝ鄕關を出しより、幾年の研鑽、漸く土臺の石を得し今日、校長の君よりは双つなき證の書を賜はり、十四年間の經驗――女子敎育の古狸と自稱したまふ靑柳先生よりも重々六箇條の有難き訓戒めきたる注文を授かりしわれ等は、散りゆく花の窓の夕に、有情無情を一時に感じて出もならず入りもならぬ涙を睫にまごつかせ居り候。

▲さらぬだに情けなや、三從の敎といふ鐵の繩に身心をしばりつけられ居りし過去の女性を描き居たまふ御頭腦には、成程當今の女性にもの足らぬ所も夥しくおはす可し、注文もおはす可し、さり乍ら、「金」と「時」とは默々のうちに來り、また默々のうちに去るものに候。卒業生もこれと同じく、何時か來り、何時か歸りゆくものに候。さすればあとは、唐か、日本か、埴生の小舍か、玉の床か、何れ、命と、運との大御手に自由にせられて散々になつて仕舞ふものに候。此時にあたり、誰れか舊師を慕はざる可き。何人かきのふの友のなつかしからざる可き。勿體なけれど親にもまして賴母敷おもふものに候。それ程迄に思ふ卒業生が途中男の先生に遭過た時にお辭儀一とつせぬといふわけは萬々無き筈に候。もしあれば、それは人で無しの沒常識か、いけすかない事を常に胸にたゝみ居る女に候可し、以ての外の奴とお罵り遊ばすに、私とても贊成いたし候。

然れども先生の標準とせられし所は女學校卒業程度のものらしく拝見いたし候其點よりして、果して男子の先生にお辭儀をせぬもの多しと仰せらるゝならば、翻つてそこに何等かの原因がありしなる可くと存じ

候德の存する所、禮なきはなし、果の成る所、根なきはなし、若し先生にして眞に、敎員根生もなく、切賣主義も捨てゝ、誠心誠意、只是後進の敎育に努めたまひしものならば、德は電の如し、誰れか感せぬといふことの候可き。しかるにもし一點の私心を挾むあらんか、合す可き意氣は忽ちにして相背き候、意氣なき人生は無價値に候。われ等生徒たりしものゝ在校中最も物足らず感せしは此點に候ひし。さればいかに叱られても、突き落されても、心底より受けし誠は永久忘れ得可くもあらぬものに候、さりとて他の恩を思はぬにはもとよりあらず候、師は師として、禮は禮として、恩は恩として、義は義として何處迄も立て行くが本分に候。何もお辭儀がして貰ひ度しなど仰せられずとも、心あるものならば心得居ることに候。殊に見すぼらしき容姿をしてテクテク歩きをなさる方ほど貴とう見上げ參らせ候、チックや金づくめでにやけ給ふ敎員がたなぞ金氣臭くて文久二つなげるのもいやに候へば、羊羹色の紋附可なり、一足五錢の冷めし草履笄とし、即ち師その人にお辭儀するにはあらずして、その人格を崇敬するといふ形式を發表するに外ならず候。苟にも男一匹と力みたまふ方が、お辭儀一とつせられざりしに悲觀して猫の子を飼ふ方が益などゝは御笑談だとは思ひ乍ら、あまりにきゝづらき御言葉かと存じ候、さり乍ら先生お一人が、さ思ひたまふ斗りにはあるまじければ、所詮は訓へらるゝものゝ方が泣寢入と諦らめ居り候。これ「第一」に對するお答の一つ。

▲人生婦人の身となる勿れ、一生の苦樂他人に出るなど〻賴みもせぬ欽うたれこゝより、近く此頃迄……といはず今もなほ、女自らも、男子より一段すぐれたるが如くおもひ居候ひしものが、近來に至り少しく女といふもの〻使命を自覺しきたりしものが、仰の如く「女も亦人間なり」といふやうになり來り候ひしにて、「人間ならば人間として務む可き道を學び行ひ度し」といふ殊勝なる心懸けより、女學校以上、なほ最高の學府にも入り度しといふものが增加し來りしに考へ、私はまことに此上もなき結構なることゝ存じ、われもまた出來得可くんば、今一歩進みて女子大學になりと入學し度しと思ひ居る位に候しかるに先生は其「も亦」が癪に障ると仰られ候、而してそれがために女の美點が失なつてしまふと仰せられ候に至つては、如何なる御觀察に根底を置かせたまふやら、ちとうけとりがたきことゝ存候。と申すは、眞に「女も亦人間なり」

との自覺ある人ならば、何しに人權論など振りまわし候可き、つまり己れを知らざるよりして、無邪氣なる自我主義を出して憚らざるものならむと存候。封建時代に於ける女の如く、日本主義に律せられたる男子に對つてはなるほど只ハイ〳〵と一も二も吾夫樣で溫順貞淑に見たしやも知れねど、如何して當今の男子の相場は、ズルキ事はかり知る可からざる程なれば、女なりとて地上の天使では濟して居られざる可し。犧牲獻身の精神が缺け、夫に對して稱衛くなど彩しなど仰せられ候はそれ丈け男子に隙が多くなり來りしには候はずや。人の發展し繁榮しゆくを見ては誰れも羨やましきものに候、殊に功名心に狃れる男子にありては、腸の元氣銷沈して居るものならざる限りウンと奮起せずには居られざることゝ存候。それを女子の少しく頭を擡げんとすれば、さながら男子の領地に侵略せらるゝが如く心得召されて、力づくで勝負せんなどゝは餘りに卑怯なるなされかたとむしろあはれと覺え候。それよりも女が侵略しさうだと思召されなば、なほそれ以上になりて公明正大なる壓制もなされたる方いかにめざましく候事、しかし細君に財產の多寡を知らせ、蟇口の底を見られたくなき男子方にありては、とてもそれ丈けの氣慨は出でざるやもしれず候。とはいへこれは男子の方のよきように遊ばさるゝ事なれば、牝鷄旦すまじく候。

とにかく人權論を擔ぎ出す事の出來ぬよう「女も亦人間である」と自覺せねばならぬことゝむしろ私は御訓戒の言葉を幸に拜借して、女の覺醒をうながし度きものと存するや切に候、からみ付く蔦葛も松の願む可きを思へばこそ、常盤のみどり色かわらぬを可愛ゆしと思へばこそ、求めて何を松にさかうひ申す可きもこれ「第二」の注文に對するお答の一つ。

▲世にこれほどの趣味と實益あらしむるものはなかる可く候。世の義にあらず庖厨のことのそれに候。壹番鷄に眼を覺まし、二番鷄に臥床を拔けて、とりあへず共用鍵を握り水道端に立てば、未だあけ切らぬ曉天の星影水に住む心地よさ、かくして良人が朝戸出の味噌汁を立つる妻の心根を察すれば、轉た詩趣に富める一篇の文章を讀むが如く感ぜざるを得ず候。さり乍らこれは中以下の家庭に多く見らるゝ現象にして、少しく下婢など多く使ふ家にては、よし朝起きは人並に出來候ても、まさかお鍋が持てる杓子を奪ひとりて加減見るほどの不作法は許されず、さりとてお化粧に暇どりては、下への手前よろしからずと、つひうめあはせの新聞雜誌といふ段取り、朝の仕事としてはこれなどはまだ上々の部とや申す可し。かゝる樣なれば、決して流し元に立つのがおきらひといふ譯にてはなく、また優等な人種になつた氣位といふ譯にてもおはさゝる

可けれど名にし負ふ御身分といふ事もあるなれば、さう／＼無理には申されまじく、少しは境遇といふ事も察してあげねばならずと存じ候。もし心懸のあるお方ならば、まさかの時の御覺悟も胸一とつには藏めておはす可し、文藝中毒になやまさるゝような女ならば、流し元に立ちても八の字が額より消ゆることはあるまじく候要は流し元に立つ趣味のある所を會得せよと御訓戒たまはらば此上の有りがたさなしと今更ら思ひ立ち申し候。まことに不躾なる申條乍ら女は高等下女とならざる限り、味噌漉にも親しみ、糟糠にも緣近くせざる可からざる事に候へども、さりとて年中仰ぎ見るは天窓の開閉と、青筋の立つた人の顔といふようには全く可愛想に候、ある時は立ち昇る竈の烟の末を思ひある時は一家そろうて公園の散策、かくてこそ身心の愉快幸福を得らるゝものと存じ候へ、と共に流し元に立たずばまぎれぬ樣な病菌を誰れもがもらさゞるようお互に打ち明けゆくが大切とこそ。これ「第三」の注文に對するお答の一とつ。

▲成程下手な獨身論など振りまはして味も甘味もなき老孃顏になられても傍の見る目いたはしきものに候へど、結婚は一生に一度よりなきことなり、愼重の上にも愼重を要するは申す迄もなき定り文句に候。それがために擇り好みをするは無理もなき、またあたり前のことゝ思はれ候父兄の推薦、保護者の承諾、もとよりその厚意に對しては熟考を要する事なれど、經驗のある人となき人との頭はすでに一世紀ほどの相違あるもの注意は與へても當人の信ずる處には、他人の一歩も入る事あたはざるものと思はれ候。啻に此世のみの間ならず、二世も三世もの契ひに候、これなら手鍋さげても厭ひはせぬと迄思ふ人ならずば、到底圓滿なる結果は得られまじく、隔れたる婦人——極端にいへば——となる可き譯に候へば。かくの如くにして、そのうへのがれぬ破目とならばその時は命なり、天なり、到底人間の如何ともす可からざる運とあきらむるに潔よかる可き事と存候。こゝに於て、それの判斷がつく程の確固たる意志が必要となり來るのに候。しかるに悲しい哉、當時の結婚は、徒らに形式に拘泥するにあらずんば、「いやだつたら歸つて來るさ」主義の淡泊過ぎたるものに傾き、父兄すでにかくの如くなれば、當人も自ら不安でたまらず、「ちやあもうどうでもおよろしいように」、とか何とか若いものゝ氣早さ、それで思ふ壺の人ならば幸、然らずんば二度となき關を徒らに泣いて過されればならぬ身となることに候、寔に寒心の至りと存じ候。

但し此の問題は人により、境遇により、時により、要するに緣のもの

なれば、強いて早く結婚せよと勧むるにもあたるまじく、また、女は、男ほど墮落し易きものならねば、落ち着いて、永遠の修養法を講じ、眞に己れの將來を考慮する事が最大得策と存候。これ「第四」の注文に對するお答の一とつ。

▲出來得るかぎり多くの種々の人に接するは修養上の秘訣、仰せのごとく其人の徳あることを披瀝するものに候。一家の主婦たるものが此の鍵の手を自在に使用するを得ば、社會の波を漕ぎまわり得る立派な梃子に候。然るに多くの主婦が最も困るのは此來客に對する應接に候。迎へんとの笑顏は持ちながら、能ふかぎりのおもみなしにして差しあげ度き乍ら、若いもの丶かなしさ、話柄少なく、嬌羞多く、下らぬ話しは馬鹿らしく、とはいへ、女の賢しらだつた話しに耳もあてられぬといふ工合に思ひ迷ふうちに、氣の早い人は、「君の細君は內氣ものだな」とか、影にまはつては「あのお孃樣は口なしの花だ」とか勝手な名稱を附せらる丶に至るものに候。

翻つて今度は來客の方に望む所は、從來のならはしとして、不意に他家を訪問することのそれに候。無論火急なる出來事、しからずとも、要務には時を擇ぶ事は言ふ可くして行はれざる事に候得共、秘密を要する用談の場合の外は豫め少くとも前々日位迄には一應の安否を尋ね置く可きものと存じ候、またこれが禮儀と存候。さすれば參上する方にても留守の失望に遭遇する事もなく、迎える方の心組もちがひ候。偶々不意に訪問することのよき時、せらる丶方のうれしきことも候へど、それがために其人々の一日の計畫を亂すことも度重なりては氣の毒なる事と存じ候。殊に新婚の家庭などを訪問するは餘程の注意を要する事西洋などにては八釜しき由、日本人の磊落餘つて、「極り切つた八寸膳も珍らしくない、○○君の所に行つて一とつ御手並食つてやらうぢやないか」なんどの手合連にドヤドヤと參られては一層有難迷惑の甚だしきもの、何もそれ位でビクシャクするような意氣地なきことはあらぬにしても瞬の時はたしかに一時ことならずには居られず候。この無邪氣なる「第五」の注文に對するこれがお答の一つ。

▲眞に一家なして和氣靄然の空氣とならしめんとならば此の滑稽の趣味が最も大切なることゝ存候。これには先生の御訓戒身にしみて同感申上る次第、再びその必要を喃々するは愚と存候。餘りこちらではおもしろをかしく解決したしと思ふことも一向先方に通さず、其間に種々の辯解が要り返りて面倒千萬なる絆となり、甚だ恥をかくこと間々これあり候、所謂、粋と、不粋の分れ目にや候可き。かのお伽噺の開祖小波先生などは、もとより天眞の能がおはしたるに相違けれど、お交際申しても矢張りあゝした無邪氣なおもしろい方なる可くと存候、凡ての女にも少しあの意氣樣が這入らば、定めし家庭に新らしき味が出て來ることゝ主張して止まず候。殊に久しく學校生活をなせしものなどは此點に大に努む可き事と存候、これ最後の注文に對するお答への一とつ。

以上にて先生より御注文には一と通りお答へいたした積りに候。

言、誠に不遜のきわみ「さういふ女の奴どもが居るから與へた訓戒だ」との御仰せもある可く候へど、天來の惡筆、徒らに修飾の美句をしらず、加ふるに籠より出たてのヒヨ〱が餘りに出すぎたる口返答との重重のお叱りも萬々承知のうへのいたしかた、殊には私し先生に一面の識をたまはりし身でもなく「隨分皮肉らしき筆づかひをなされる人、位より存せざりし次第なれば、天眞より流露したる答辭に候。

こゝに、常より思ひ設けしポイントに對つて御綿密なる問題を提供し戴だきし事を謝すると共に、尚今後の御盡力、かつは鋭き御觀察の永久に健康におはしませと祈りて止まず候　可祝。



讀者文藝 懸賞募集（〆切六月十五日）

▲婦人盛裝の寫眞（結婚前後）

▲大家族の集合寫眞

▲婦人會婦人團體集合寫眞

▲才媛筆蹟

▲家庭重寶日用百事便

▲食卓日記

▲各地風俗の變遷

▲笑話▲短文▲和歌

▲令孃倶樂部（投稿隨意）

投稿規則◎笑話、和歌、短文、令孃倶樂部、百事便は端書に限る但し一枚の端書に二種以上は採用せず◎筆蹟は口輪の寸法に依る◎名宛は博文館内「女學世界」とし原稿に其種類を明記する事

▲賞品

△寫眞は甲參圓、乙貳圓、丙壹圓

△食卓日記、筆蹟は甲貳圓、乙壹圓、丙五拾錢

△和歌、短文、笑話、百事便、令孃倶樂部甲壹圓、乙七拾錢、丙五拾錢、秀逸參拾錢

△風俗の記事特七圓甲五圓乙參圓

每月一日發行

定價表

一册（紙數二百八頁）…金二十錢

四册（三ヶ月分）……前金七十五錢

八册（半ヶ年分）……前金一圓四十五錢

十六册（一ヶ年分）……前金二圓八十錢

内｛定刊數……十二册　増刊四回…一、五、九、十一月價格同一

郵税　一册　二錢

廣告料

廿四字詰	特等	一等	二等	三等
一行	……	……	……	五十錢
四半頁	……	……	十圓	七圓五十錢
半頁（卅二行）	……	廿三圓	十九圓	十四圓
一頁（六十四行）	五十五圓	四十五圓	三十八圓	二十八圓

▲等級の位置〆切日等御照會次第御報可致候

注文略規

●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず

●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す

●郵券代用は一割增にて五厘一錢の切手に限る

●總目錄御入用の方は二錢券相添申込あれ

明治四十二年五月十五日發行 第九卷第七號

編輯兼發行人　松原岩五郎

印刷人　山田英二

印刷所　東京市小石川區久堅町百八番地　博文館印刷所

發行所　東京日本橋區本町三丁目　博文館

電話　三千百三十八番　本局　二千六百二十番　三千二百二十九番

太平洋 第八卷第十號 增刊

既成發行

發明界の四十七士

◎國家の文運に最も多く貢獻したる發明家四十七人を當局者專門學者等に相談の上嚴格に選出し◎その人物、性行、逸話、發明品その物を詳細に論評す◎之れ實に明治發明史唯一の側面觀なり

△玉村勇介君の鑛山用索道運搬用自動車、△大野正君の發明、△安中孫次郎君の電氣機械、△高戸彦松君の織物機械△鈴木藤三郎君の諸機械、△山田伊三郎君の輕氣球、△岸敬次郎君のモータル△御木本幸吉君の養殖眞珠、△眞崎照鄕君の製麵機△高峰讓吉君のタカヂヤスターゼ、△仁科遠平君の保溫劑と防火劑、△屋井先藏君の乾電池△廣瀨君の卷烟草機械、△山口龜太郎君の絣製造機、△深川文十君の螺旋推進機、△中村隆三君の編網機、△飯田新七君の織物機械、△新田長次郎君の調帶、△茂木重次郎君のペエント△伏田清三郎君の石油發動機、△石川文次郎君の鳴海絞、△渡邊君の測量機械、△御法川直三郎君の生糸機械、△須藤式の精米機、△松居元右衛門君の織物機械△萬木九兵君の義手義足△豐田佐吉君の織物機械、△淺野新八君の織物機械、△寺島昇君の素簾編機、△志賀泰山君の木材防腐劑、△山葉寅楠君の音樂器、△坂根精一君の絹糸紡績機△池谷君の鑄鐵機械△國武喜次郎君の久留米絣織機、△中原作太郎君の乾燥器、△欄木松次郎君の時計ゼンマイ及びペン、△二階堂篤彌君の羽二重織機△磯崎高三郎君の花莚△名和靖君の昆虫に關するもの、△宮崎林三郎君の縄絢機、△河合林三郎君の板硝子、△井口博士のポンプ、△高橋新作君のヨット△白峰君の軍器鐵舟、△齋藤外市君の織機、△宮原次郎君の汽罐、△鳥潟右一君の無線電信檢波機、（順序不同）

◎聖代の一恨事庶幾くば補ふに足らん◎奇癖奇行を有する發明家の面目誌面に躍如たるべし

洋裝四六二倍判紙數百十餘頁　正價拾貳錢　郵稅四錢

東京 博文館 本町

女（後付の一）

●家庭の讀物●

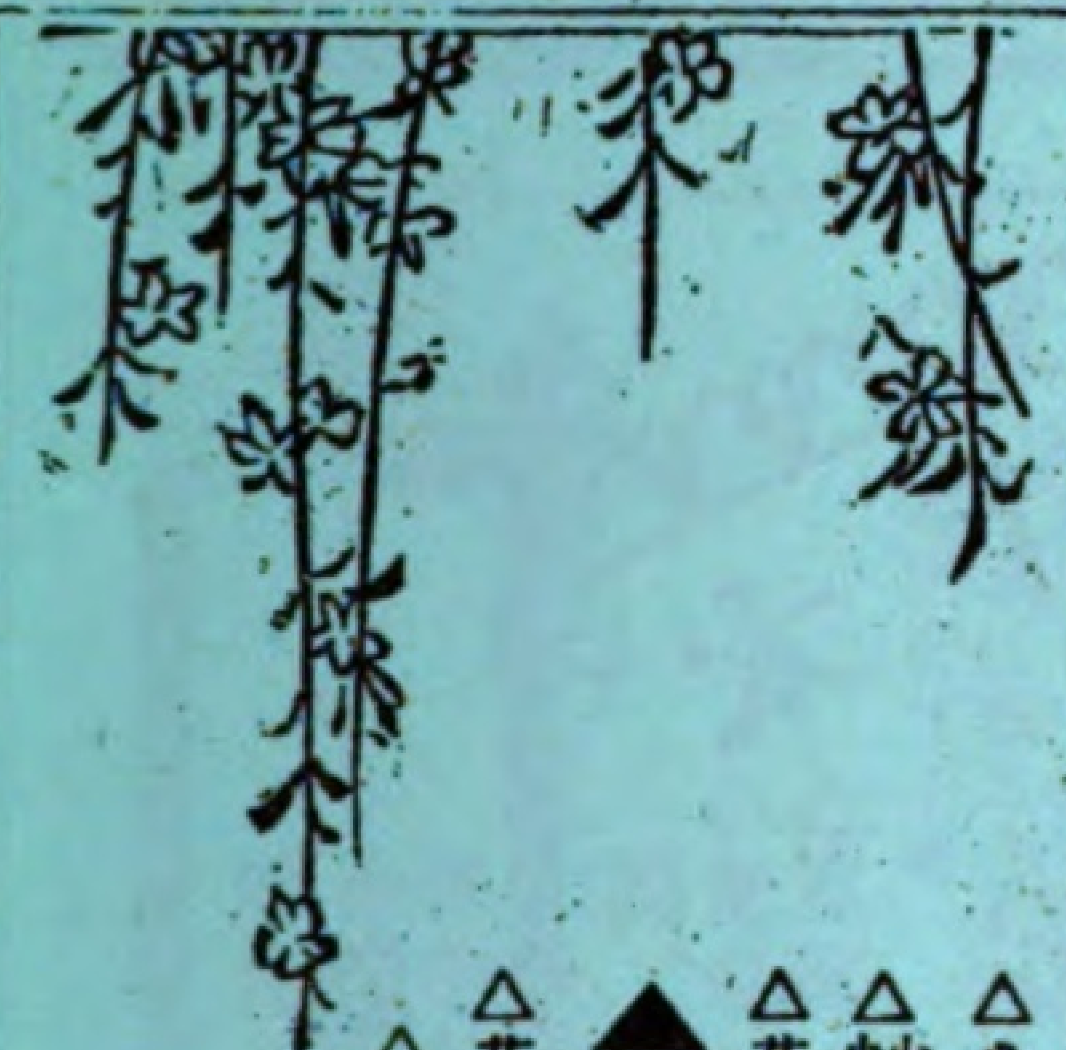
松の卷



洋裝菊判 百廿八頁
正價金拾錢郵稅一錢

▲少女對話 お留守番……巖谷小波作
△少女小說 肖像畫……久保田金僊畫
△少女小說 面會
△入學準備……
△松の操
△リボンの美
△少女笑話……
△かるた會……
△かるたに勝つ法
△少女スケッチ
△少女催眠術……
△松の學問………
△梅と竹………
△少女の樂み……

櫻の卷



洋裝菊判 百廿八頁
正價金拾錢郵稅一錢

△さくら物語△花園物語△少女小說お手紙
△少女小說苦學生△少女小說金の腕輪△少女小說お見舞
△花日記△草花の採集
▲少女對話 そら病……巖谷小波作 鏑木清方畫
△お伽小說花おとめ△お伽小說兎のお禮△新入學の記
△學校だより△少女學修法△國文學の話
△少女かゞみ△少女のなさけ

東京 博文館

新綠號

洋裝菊判本文二百四十頁
石版數度刷水彩畫二葉
寫眞版口畫六頁
正價金廿錢郵稅二錢

一、古今文學の新研究
萬葉集、源氏物語、枕草紙、西鶴、ゴンクール、フロオベル、イブセン、ツルゲーネフ、ゴーリキイ、チエーホフ、モウパツサン、ズーデルマン、其の他の諸家に對する諸文士の新印象錄也
一、名家の文話詩話
一、記者の文章講話
一、諸家の小品十篇
一、讀者の應募小品十數篇

博文館

女（後付の二）

太陽 第拾五卷 第七號 定期增刊

新法令 附 第廿五回帝國議會史

洋装四六倍判 紙數二百六十頁

定價金三十錢郵税八錢(本號に限り)

我邦議會ありて以來、茲に二拾有五回の開會を見るに至れるも、閑散無爲、平凡の極を行きつゝ、無事に其會期を終了せるもの、今次二拾五議會の如きは蓋し稀なり矣、併し其成果たる法律諸案の制定通過せられたるものは相應に多し、就中、種痘法、軌道の抵當に關する法律、耕地整理法改正法、産業組合法中改正法、立木に關する法律、裁判所、臺灣總督府法院、統監府法務院及理事廳の判決の執行に關する法律、特許、意匠、商標、實用新案諸法律の改正の如き、又度量衡法中改正法律の如きは其最なるものなり、今此等諸法律と共に昨夏『新法令』發刊後既往一年間に發布せられたる重要諸法規を編纂し、茲に又新『新法令』を發行す、勅令に省令に訓令告示の小なるものに至るまで、其重要なるものは皆捃摭採録を怠らざる所なり、殊に皇室令として公布せられたる登極令、攝政令、立儲令の如きは、帝國々民の必ず精讀すべきもの、皆收めて此中に在り、加ふるに『第二十五回帝國議會史』は、例によりて快筆妙文、縦に横に、帝國議會の行動を評して擒縱自在、讀去り讀來りて興味津々、政治財政に注意し、法の庇護に賴らんとするものは、座右一本を缺くべからざるなり。

五月十五日發刊

東京 **博文館**

米國藥化學士
藥劑師　川崎近雄君著



全一冊洋裝四六判紙數八〇頁
●正價金拾貳錢　郵稅貳錢

（第四版）

夏の夕一家團欒の食卓に研究に依て得たる自製の清涼飲料劑を上さば知何に家庭の趣味を深からしめん。又炎暑灼くが如き日來客に接したるの時先づ一盞の清涼飲料を饗すれば如何に主婦の品位と注意の周到なるかを顯はさん。本書は久しく米國藥舗にありて清涼飲料劑製法に經驗を有し亦前に京都醫科大學醫院藥局にありて助手を拜命し製劑上に就きて多年の研究を積みたる川崎近雄君が家庭及製造業者の爲め新鮮美味なる清涼飲料劑を經便實用的に製する方法を簡明に記述したるものにして。家庭に於ては主婦の眞友又營業者には好指針たる様編述したる者なれば。趣味と實益と衞生とを兼れたる無二の良書は本書を措て他にあらざるなり。

東京　博文館　本町

跡見花蹊女史題詠
東京女子美術學校卒業　鈴木松子女史著

家庭實用　新式美術造花

全一冊洋裝菊判　正價五十五錢
石版着色美製本　郵稅六錢

本書の目的と特色

●本書の目的は家庭用、學校參考用或は獨學者の爲め拵へたもので內容豐富說明懇篤婦女幼童にも極めて了解し易く最も恰好の良書である●本書の特色は從來の造花書と大に其選を異にし植物學を基礎として著者多年の研究を著はしたるものゆゑ正確にして且最も進歩せる造花を拵へるに適します●本書は從來最も閑却せられた枝組又は葉の製へ方に最も注意し精密なる挿圖數百を揭げ丁寧に項目を分ちあれば頗る見出すに便利である●本書は通常の造花書と異り單に方法を示すに止めず何故に斯くするかの際どい理由を詳說してあります



◁發賣元　東京日本橋本町三丁目　博文館▷

女（後付の四）

（後付の五）

家庭整理の指導

當代第一流の女子教育家編著



家庭百科全書

全部五十册

每月一回發行

和裝頗美本 ◉紙數各三百頁 ◉石版彩色口繪一葉 挿畫十數箇

▲定價一册金四拾五錢――郵稅八錢

近時婦人教育の普及するや、女流の才學は一般に著しく進みたりと雖も、尙ほ之を日常家庭の上に施こすに臨み、輙もすれば實際に適せざるを憾むこと多し。是れ學校に在るの日には概れ理想の學修に止まるが故に、實際の應用に臨み、或ひは學ぶ所高尚に過ぐるか、然らざれば未だ十分ならざるの憾ある所以なり。若しも家庭に教師ありて一々實際の問題に就て指導せんには、世の良妻賢母は言ふも更なり、未だ在學中の女流學生達の爲にも如何に裨益の多かるべきかは、敢て多言を須ゐざることながら、人ごとに家庭に教師を聘するが如きは、得て望むべからず。是に於て本書は最良なる家庭教師たる目的を以て編述發行し、敢て婦人教育の缺點を補はんと欲するなり。

第一編 **新家庭訓** 三輪田高等女學校長 三輪田眞佐子女史著

第二編 **四季料理** 宮中臣民兩流料理師範 大日本割烹學會々長 石井泰次郎君著

第三編 **裁縫指南** 女子高等師範學校教授 喜多見佐喜子女史著

第四編 **和洋菓子製法** 東京治庖會講師 龜井まき子女史著

第八編 **簡易治療法** 新潟縣高田高等女學校教諭 藤井靜子女史著

第九編 **禮式と作法** 女子高等師範學校教授 佐方鎭子女史著

第十編 **惣菜料理** 赤堀吉松君 赤堀峰吉君 赤堀菊子女史 共著

第十一編 **編物指南** 女子技藝實踐學校編物科主任 三木とみ子女史著

▶販賣用電話 本局二六二〇◀ ▶發兌元 東京日本橋區

女（後付の六）

婦女必讀の大全書

第五編 茶道と香道
水原翠香女史著

第六編 諸流生花指南
琴松園文雅君
松幸齋坤常君 共著

第七編 育兒の務
醫學士 田村貞策君
朝夷孤舟君 共著

第十二編 婦人の生理と衛生
青山學院教授 牧野淸子女史著

第十三編 教育お伽噺
少年世界記者 木村小舟君著

第十四編 女德の養成
前田長太君著

第十五編 家屋と庭園
內山正如君著

第十六編 魚鳥家畜の飼養
農業世界記者 鹿野化骨君著

第十七編 女子作文法
遠藤ふみ子女史
松崎ふく子女史 共著

○第壹章 思想○第二章 思想の整頓排列○第三章 口語文○第四章 口語と文語○第五章 文章○第六章 文の榜練(其一)○第七章 文の練練(其二)○第八章 文の種類○第九章 普通文○第十章 書簡文●名家文例●附錄＝形容語○同訓の文字

第十八編 子女の教養
私立高等女學校長 棚橋絢子女史著

●胎教●哺育●泣く子の取扱ひ法●溺愛●二程の母●子女の質問●秩序を守る性習●子女の懲罰●子女の理想●玩具の選擇●子女と虛言●命令と服從●親の不行儀●夏期休暇●間食の利害●子女に教訓としての話說●物のあはれ●詰問攻の害●子女と遊戲●臆病なる子女●成田喜起の母●繼母としての子女の教養●魏芒慈●子女と名譽心●家事と少女●慈善的保護を受けたる少女●小學校時代の家庭教育●母親の偏愛●從順の美德●熱誠なる習慣●子女に時間を貴重がらせよ●禮節の修養●傲慢心を募らす親●淸水太郎左衛門が母●子女と讀書●子女と卑怯●活動の眞●子女に錢を與へる親●告げ口●留守宅の母親●眞心の養成●子女の交際●名和が約束の松●少女と奢侈●褓姆と僕婢●趣味ある子女●子女と貯蓄心●子女と宗教心●自他の區別を明白にせよ●子女の病氣と親の心得●物言はぬ動物の取り扱ひ●小學校卒業後の教育●安詳恭敬●家庭童話二十題

本町三丁目 **博文館** 振替貯金口座 東京二四〇番

女(後付の七)

少年世界第拾五巻第七號増刊（五月十五日發行）

野外の趣味

全一冊洋装菊判 紙數百三十六頁 口繪美麗如例

正價金十錢 郵税一錢五厘

花は散つて青葉は茂つた、野外に於ける學問と娯樂とは、今が最適の時機である、植物界を見渡しても、動物界を通覽しても、活潑に生々して居る、さう云ふ野外に出て、自然の研究を試みたり、身體の修練をするに便利を與へやうとして現はれたのが、即ち此一巻である、されば日本國の少年諸君は、何人も之を備へなければならぬ、

◎表紙 綠蔭釣魚……橋本邦助

◎口繪 植物採集……尾竹々坡

◎寫眞 郊外のいろく 八頁

◎挿畫 野外百景（懸賞應募）……少年諸君

▲郊外の趣味▲自然の教訓▲野外植物▲野外動物▲鑛物界▲採集日記以下數項……さゝなみ作

◎お伽詩篇 加藤清正……武内桂舟畫

◎懸賞 和歌俳句……少年諸君

▲野外と體育▲ベースボール▲新奇なる釣魚▲寫生畫一斑▲野外遊戲十種以下數項



東京 博文館

女（後付の八）

澤田順次郎君著

雌雄進化論

全一册

破天荒の快著は來れり。其齎らす所何？是れ著者特得の筆に成れる雌雄淘汰の解說にして、動物界に於ける雌雄の起源、發達、關係を嚴密に生物學上幷に哲學上より論究したる本書の如きは、恐らく他に比類なかるべし、雌雄淘汰は動物の進化に大なる關係ありて凡そ「兩性に關する問題」の基礎たること言を俟たず。曩に發表したる「兩性の秘密」一名「人類性別學」は此の點に於て夙に其意を漏らしたれども、該書は人類を主とせるものたるにより、詳論の餘地なかりき。故に男女の差異及び關係を根本的に說明せんと欲せば勢ひ動物界に亘りて一般動物に於ける雌雄形質の原因に溯及せざるべからず。これ「兩性の秘密」に次て本著ある所以也。世の博物學、哲學、社會學、教育學等を研究せんと欲する人は是非共一本を備へざるべからず。……

洋裝菊判上製
紙數百八十二頁
寫眞版精密木版圖挿入
正價四拾五錢
郵稅六錢

新渡戸農學博士
石川理學博士序
澤田順次郎君著

自然界に於ける

兩性の秘密

一名 人類性別學

全一册

洋裝菊判頗美本
紙數三百九十頁
正價金六十五錢
郵稅八錢

曩に「男女の研究」を著して社會の大歡迎を受け、次で「婦人論」「最新學說女子教育論」「人生之活路」「生物學と理想界」等を公にして、何れも喝采を博したる著者は今や積年の蘊蓄を傾注して玆に本書を成すに至れり。是れ男女の神秘を闡明して兩性に關する千古の疑團を氷解せるもの其内容の一斑を擧ぐれば、ルーにて男女兩性の異なる原因之に關する研究法を首とし男女は裁判上如何に其取扱を異にすべきか醫師は男女によりて其治療法を異にするの必要なきか其他美術、教育、文藝、特に今の自然主義を論ぜんとする者等には缺くべからざる本邦唯一の新科學書なり。世の學生は勿論、文藝、法律、教育、醫術に從事するもの其他苟くも人事の問題に趣味を有するものは是非共一本を座右に備へざるべからざる快著なり

販賣用電話 本局二六二〇番

東京 博文館 本町

振替貯金口座 東京二四〇番

女學世界
(毎月一回一日發行)
(明治四十二年五月十五日印刷發行)第九卷(増刊 驚ろく手紙)第七號(明治卅三年十二月廿五日第三種郵便物認可)



(定價金貳拾錢●郵税貳錢)